
バカと破壊者と召喚獣

おだべば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと破壊者と召喚獣

【Nコード】

N4395R

【作者名】

おだべば

【あらすじ】

かつて、様々な世界を破壊した人物の名はアルフ・フォード。別名、世界の破壊者（決してデイケイドではありません）。その力は誰も知らず、異能力を使う超残酷な男である。だが、その破壊者は処刑される事に……。だがそいつは魂だけが残ってしまった。そして現代、魂の塊だけになった破壊者は文月学園に転校する少年、千藤一騎に取り付く事に……。そして彼らが繰り広げる学園生活とは……？

命懸けで色々な人々とパニック（！？）を引き起こす青春エクスプ

ローション学園ラブコメ!!

第一問 プロローグ 世界の破壊者の企み（？）（前書き）

初めての方は始めまして。感想などでお世話になっている方はこんにちわ。おだべばと申します。さて、初めてのバカテスの二次創作作品の投稿ですがまだ緊張感が高ぶるばかりです。でも僕は出来るだけまじめに作品の執筆に取り組む人なのでひとまずは暖かい目でこの作品を読んで下さい。それでは、始めます。

第一問 プロローグ 世界の破壊者の企み(?)

昔の出来事

「今からこの世界を破壊する!!」

「出たぞ、世界の破壊者だ!!」

「俺達は奴に殺されるのか……」

「五月蠅いぞ、愚かな人間ふぜいどもめ! 俺を馬鹿にするとは良い度胸しているな」

「誰がお前なんか……!」

「こちらにも時間というものがあるんだ。さっさと俺に消される!!」

「うわああああ!!」

今から数百年前、人々はある男に支配される日々が続いていた。

男の名前はアルフ・フォード。別名、世界の破壊者。

彼は数々の世界を滅ぼし、人類の何割かの人口を消滅させる力を持ち、その能力に関しては一切明かされていないことから色々な意味で謎多き人物である。

「ふん、この世界もたいした事はなかったようだな。正直暴れ足りないな」

だが、その世界の破壊者にも終止符が訪れる事に……。

ある国の時計台前

「これから、世界の破壊者を処刑する」

「やめろ！ まだ俺はやるべき事があるんだ！」

「黙れ、さまざまな世界を破壊し地球を我が物にしようと企む悪党め！！」

アルフはある国を破壊しようと計画を実行したが、国の大統領に取り押さえられ無条件で処刑を開始される。

「待て、もう破壊はしないし罪を償うから俺を解放してくれ！

何もおこなわな——」

「問答無用だ、もうお前にはここで死んで貰うぞ。やれ」

「おい待て！ まだ最後まで言い終えていないぞ！ だから、ぐああああああ！！！」

ブシュユツ！！（体を切り裂かれて大量の血痕が飛び出す音）

「あ……。（ボタン）」

こうして世界の破壊者、アルフ・フォードは処刑された。だが……、

現代

「くそ、あの時は何とか魂だけは維持出来た。俺の力を知らずに奴らは俺の体を消したとは、なんと愚かだ。それにしても、ここは何処だ……？」

世界の破壊者はあの時、死んではいなかった……。魂だけを残し、肉体を完全に失っただけである。なので今は魂の塊だけの状態になっているのだ。

「何だ、ここは。文月学園？ 聞いた事がないな。今はそんな事より、新たな体を探さなければならぬな」

そう呟きながら探していると、

「？ 良い体を発見したようだ」

アルフが目にしたのは、とある男子生徒だった。

「とても興味深い体だな、よし、今日から俺はあの体に取り込むとするか」

アルフは早速その体に取り込んだ。しかし、その男子生徒は何も気づかない。

（よし、これで俺は人間の体を再び手にした。これで自由になれた）

アルフは、頭の中で満足する。

「あなたは今日からこの学園の生徒です」

所変わって文月学園の職員室。男子生徒は先生から説明を聞いていた。

「わかりました」

男子生徒が納得する。

「ここにあなたの名前とどの学校から来たのか記入して下さい」

先生から紙と鉛筆を渡される。そしてその紙に名前と学校名を記入する。

『名前 千藤 一騎

私立武蔵野高等学校から転校

』

「書き終わりました」

「はい、どうも」

そして、紙を返す。

「千藤一騎君ですね。あなたが所属するクラスは、Fクラスです」

彼の名は千藤一騎。私立武蔵野高等学校からの転校生である。

「では、教室に案内しますので、ついてきて下さい」

「はい」

その様子を彼の頭の中から窺ったのは世界の破壊者であるアルフだった。

（なるほど、今の世の中は学校と言う所があるみたいだな。だが、今ここで破壊したら分が悪い。ひとまずは様子を見るしかなさそうだな）

Fクラスの教室前

「……………」

一騎が突然黙り込む。

「千藤君、どうしましたか？」

「……………あの……………ここって本当に教室ですか……………」

そして先生が一騎を諭す。

「そうですね。これはこの学園に取って当たり前な事ですから」

「……………ええええええ……………」

そして先生の一言で一騎はミイラ状態になったかのような表情になる。

なぜ一騎が驚いているのかと言うと……………、

「教室の中を見てみた方がいいですよ」

「……はい。……畳、椅子は座布団、それに机は卓袱台……
もう絶望的です……」

この教室の設備だった。無論、普通ならばこの決まりは何処の学校を周ってもあるはずがない……。

「とりあえずは自己紹介の準備をした方がいいですよ」
「はい……」

その光景を見たアルフは……、

（何だ！この建物は！ 随分と田舎臭い場所じゃないか！！
……まあいい、ここで俺はこいつの体を利用して世界を再び破壊するのだから……）

同じく設備の事で呆れ果てたが、再び世界を破壊しようと企んでいた。

そして今、取り付かれているのに気づいていない千藤一騎と取り付いた世界の破壊者、アルフ・フォードの学園生活が始まるうっていた。

そう、これは1人の少年と魂だけの世界の破壊者が繰り広げる、非日常的な学園の物語である……。

第一問 プロローグ 世界の破壊者の企み（？）（後書き）

これで一話目は終わりです。いかがでしたでしょうか？まだ半人前の僕ですがこれからも頑張っていきますので今後とも宜しくお願い致します。

第二問 プロローグ2 少年と少女の判断（前書き）

今回は少し原作の話を触れていきたいので本編はまた次回に回しますのでもう少々お待ち下さい。

第二問 プロローグ2 少年と少女の判断

文月学園振り分け試験当日

「それでは、クラス振り分け試験始め!!」

監督の先生の指示に合わせ、生徒達は一斉に試験を開始する。
そして1人の少年も受けていた。

(「三権分立」は「司法」と「立法」ともう一つは何で成り立つ
か・・・)

これなら簡単だ・・・二つまでは絞れる!!)

少年は選択肢を頭の中で絞り出す。

(「憲法」か「漢方」のどっちかだったはず!! 難しいと噂の振り
分け試験だけど

この程度の問題なら十問に一問は解ける!! でも二十点は堅い
な・・・)

試験開始から数十分辺りでトラブルが発生する。

「・・・はあ、はあ・・・」

「・・・?」

少年はとある少女に目を窺う。

「・・・はあ、はあ・・・! (フラッ)」

そして少女の容態は悪化してしまう事に……、

「……………!!!(ボタンッ!!)」

「姫路さん!!」

少年は立ち上がり少女の元へ歩きだす。

「大丈夫、姫路さん？」

「吉井!!試験中だぞ、席に着けっ!!」

「でも姫路さんが……」

先生に注意されても少年は座ろうとしない。

「姫路……体調が悪いなら保健室に行くか？」

ただし途中退席したら「無得点」となるがそれでいいかね？」

「ちよつと先生!!具合が悪くて退席させるなんて、それは酷いじゃないですか!!」

少年が必死で少女の事を庇う。

「だが姫路は体調が悪化しているんだ!」

「それは仕方がないじゃないですか。だって――」

(……………吉井……………君……………)

少女はまさに気絶寸前である。

「いいから座れ!で、どうするんだ姫路？」

「なっ、先生!!」

「……………た、退席します……………」

少女は退席してしまった……………。

そして時は流れ……………

彼らがこの文月学園に入学してから二度目の春が訪れた。

校舎に並ぶのは新入生達を迎えるための桜が舞い散る様子が浮か
び上がる。

そう、ここでまた新たな一年が始まるうとしていた。

「はあ、はあ、はあ、はあ（タッタッタッタ）」

そしてその道を走る少年がいた。

「遅いぞ吉井、遅刻だぞ」

「げっ……………て……………て……………西……………」

「今『鉄人』と言わなかったか？」

「ははっ気のせいですよ」

「それとちゃんと西村先生と言えないのか？」

「す、すいません」

少年の名は、吉井明久。この文月学園の生徒である。そして今年

から二年生にもなるのだ。

そして明久と話している先生は、鉄人———もとい西村宗一
教諭である。

「まあいい・・・ほら受け取れ。お前で最後だ」

「あ、クラス分けの・・・どーもです」

そして鉄人は明久に振り分け試験の結果の封筒を渡す。封筒には
『吉井明久』と書かれている。

「一応言っておくが、頭の良い奴はAクラスで悪い奴はFクラス
だぞ」

「やだなあ僕がそんな事間違えると思ってるんです？」

鉄人が明久に諭す。明久は気楽な表情で返答する。

「それにしても何で掲示板とかに張り出さないんです？」

さらに明久が質問する。

「普通はそうするんだけど・・・ウチは世界的にも注目されて
いる試験校つてのもあって

これも試験の一環ってワケだ。そして今日からその結果でそれ
ぞれのクラスに所属だ」

「はーい!!」

鉄人の言葉で明久は納得する。

（試験の手ごたえはあったしCかDあたりかな）

明久は少し嬉しそうな仕草を取る。そしてさらに鉄人は話を続ける。

「吉井、今だから言うがな。俺はお前を去年一年見て『もしかするとコイツはバカなんじゃないか』

と疑いを抱いていた」

「それは大いなる間違いですね。今に『節穴』ってあだ名にされますよ」

「ああ、だが試験の結果を見て先生は自分の間違いに気が付いたよ」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

鉄人がそう言っていると明久も喜ぶ。

「すまなかつたな吉井。お前を疑うなんて俺はバカだったよ」

「そうですね」

「喜べ吉井。お前への疑いはなくなった」

「はい!!」

そう言いながら封筒と開封する明久。

「お前は、疑いの余地のない正真正銘のバカだ」

その一言で明久は疑問視を浮かべる。

『吉井明久

Fクラス

すごく頑張りました』

「吉井、つまりお前は大バカだ」

最後の鉄人の言葉で明久は絶望した。

そしてその様子を見ていたのは・・・、

（なるほど、こういう人間がいるのか。現代もなかなかの物じゃないか）

魂の塊だけの世界の破壊者、アルフ・フォードだった。

そう、これは千藤一騎がここに来るまでの出来事である。

第三問 試召戦争編 序章？ 新しい学校生活

「何だよFクラスって。最下位クラスじゃないか」

先程鉄人から結果を言われがっかりとした言い方で呟く明久。

「振り分け試験は自身があっただけだなあ・・・」

さらにそう呟き廊下を歩いているとある教室に目を窺った。

「・・・なっ何だこのばかでかい教室は・・・」

そしてその教室の大きさに明久は思わず戦く。教室からは教師らしき人の話声が聞こえてくる。

「皆さん進級おめでとうございます。私はこの二年A組の担任高橋洋子です。」

宜しく願います」

そう、この教室は上位クラスであるAクラスの教室だ。

そしてこのAクラスの担任は、学年主任の高橋洋子主任である。

「何てデカさのプラズマディスプレイなんだ、贅沢な!!」

明久がプラズマディスプレイに驚く。しかし驚くのはそれだけではなかった。

「さらにはシステムデスクにリクライニングシート、ノートパソコン支給か。

・・・あっ！フリードリンクコーナーも！お菓子も食べ放題だ、いいなあ、食べたいなっ！！」

そんな事は気にせず高橋主任の話は続いている。

「以上で基本的な設備の確認は終わりですが、その他の施設に不備のある人はいますか？

教材資料は元より冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給します。他に必要なものがあれば遠慮などせず何でも申し出て下さい」

「く、何て贅沢なクラスだ。ほかの所なんて滅多にないのに・・・

明久がさらに羨ましがる。

「では、始めにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん、前に来て下さい」

「・・・・・・・・はい」

高橋主任が促すとその女子生徒は前に出る。

「・・・・・・・・霧島翔子です。宜しくお願いします」

彼女の名は霧島翔子。文月学園で学年主席の座を持っている実力のある女の子だ。

「あれが有名な霧島さんか・・・。

美人なのに誰とも付き合わないせいで女の子が好きだって噂だ
けど・・・。」

明久は翔子を見て落ち着いた常態になる。

「Aクラスの皆さん、これから一年間霧島さんを代表に協力し合
い研鑽を積んで下さい」

高橋主任の話が続いてる時、明久はある事を思い出した。

「そうだ！自分のクラスに行かないと！！」

明久は大慌てで自分の教室へと向かう。

「これから始まる『戦争』でどこにも負けないように・・・。」

- - - Fクラス前 - - -
- - - - -

「・・・・・・・・・・（ドサッ（バッグを落とす音））」

明久が突然啞然する。

（周りはまだ気にしない。でも初日から遅刻してしまった・・・。
・。なにしろFクラスだ。

変な奴らがいたらどうしよう・・・。）

そして不安な表情まで出てくる。

「いやいやこれから一年一緒に過ごす仲間なんだし、多分心配してくれてるよな僕の事。

よし、大丈夫！明るく入ろう」

だが明久はその程度で落ち込む男ではない。

「すいません、ちょっと遅れちゃいました」

明久が賑やかな表情で教室へと入る。が・・・、

「早く座れ！！この蛆虫野郎！！！！」

（台無しだ！！）

とある男子生徒に罵倒される。

「って雄二、何やってんの？」

「先生が遅れるらしいから代わりに教壇に上がってみた」

明久の質問に答えたのは、明久の悪友の坂本雄二である。

「先生の代わりつて雄二が？何で？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？それじゃあ・・・」

「ああ、俺がFクラス代表だ」

雄二が教壇に上がっている理由はこのクラスの代表だからである。

「これでこのクラス全員が俺の兵隊だな！」

（つまり雄二を説得すればクラスを動かせるってワケだ）

2人が会話している最中に担任の先生が来た。

「えーっとちょっと通してもらえますかね？それと席についても
らえますか？HRを始めますので」

「席ですか」

明久が後ろを振り向くと、

「畳、座布団、卓袱台、これがFクラスの教室！？」

「今気付いたのかよ・・・」

明久はこの教室の設備に驚いた。

「くそ、格差社会と言う奴か・・・！」

「吉井君、早く席について下さい」

「・・・はい。僕の席は何処ですか？」

「好きな所にどうぞ」

「席も決まってるじゃないの!？」

明久は適当な席へと座る。

「えーおはようございます。二年F組担任の……」

「……福原慎です。よろしくお願いします」

（チョークすら用意されてないのか）

「まずは設備の確認をします。卓袱台、座布団、えー……不備があれば申し出て下さい。

必要なものがあれば極力自分で調達するようにして下さい」

福原教諭が簡単に説明する。

（何このAクラスとの雲泥の差……）

「?先生、僕の座布団殆ど綿がはついていないですけど」
「我慢して下さい」

明久がそう尋ねると福原教諭は即答する。

ヒュユユ……（隙間風の音）

「先生、隙間風が寒いんですけど」

「ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう。
でも今は我慢して下さい」

バキッ!!（卓袱台の脚が折れた音）

「先生、卓袱台の脚が折れたんですけど」

「木工用ボンドが支給されますので自分で直して下さい」

福原教諭の最後の言葉で、（ここつて本当に教室？）と明久が頭の中で絶望する。

「自己紹介の前にこのクラスに転校生が来ました。それでは入って来て下さい」

福原教諭が促す。

「えーつと……、お、俺は千藤一騎です。私立武蔵野高校から来ました。」

これから一年間宜しくお願いします……」

（もしかして、一騎……？）

明久はある事で驚いた。

「先生、俺の席は、うつ！！」

しゅうつうつ……（魂が入れ替わる音）

「大丈夫ですか……？」

一騎は突然人格が入れ替わった状態になる。

「ふん、ようやく人格の入れ替わりが成功したな。これで俺は本当に自由を手に入れた」

今の人格は、世界の破壊者であるアルフ・フォードだった。

「？随分と暑苦しいような男ばかりだな。まあそんな事はどうでもいい。」

それで、ここで何をやっている？」

アルフはほかの生徒達を諭す。

「あの・・・千藤君ですよね・・・？」

アルフが喋っている最中に福原教諭が尋ねる。

「ああこの体の名か、俺にとってはとても興味深い人間だからな」

アルフがそう言うとか何か異変に気付いた。

「ちっ、もう時間切れか。あと少しこの場に出たい所だが時間が限られているみたいだな。」

どうせまたここに出られるんだ、次の機会でまた調べるとするか」

しゅうつうつ・・・（魂が入れ替わる音）

「はっ！？俺は・・・」

「千藤君、大丈夫ですか？」

再び福原教諭が尋ねる。

「はい・・・大丈夫です」

（突然俺の魂から別の魂へと替わったような感覚が・・・）

一騎はすぐに席へつく。そして明久は一騎に話かけた。

「久しぶりだね、一騎」

「？もしかして明久なのか？」

「知り合いなのかお前ら？」

雄二が質問する。

「そうだよ、一騎とは小学生からの友達だよ。まあ中学に入ってから別々の学校だったけど」

明久が補足説明する。そう、明久と一騎は小学生からの親友である。

「それにしても、本当に酷い教室だよな。ここで一年過ごすのか。不潔だな」

明久は、一騎が席につく際に先生から受け取った木工用ボンドを受け取りそれを使って

卓袱台の脚を直しながらそう呟く。

「文句があるなら振り分け試験で良い点を取っとけよ」

雄二が返答する。無論、それも無理はない。

「まあそつだよな、雄二の言う通だよ」

明久は頷きながら卓袱台の脚を修復し終わる。

「では改めて自己紹介でも始めましょうか。そうですね、廊下側の人からお願いします」

福原教諭が自己紹介を進行させる。そして廊下側から順番に始まる。

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。今年一年宜しく頼むぞい」

一人目が終わると一騎は、

「へえ、変わった名前の人がいるんだ。それは珍しいな」

一人目の生徒の名前に羨ましがる。

「・・・・・・土屋康太」

「相変わらず口数が少ないなあ。そういえばこのクラス男多いな」

明久は二人目の生徒の紹介の後でそのような言葉を呟いた。

（学力最低クラスともなると女子はいないのかな）

明久がそうやって思っていると、

「・・・・・・です。ドイツ育ちで日本語は読み書きが苦手です」

「おお、女子の声だ！」

明久のテンションが上がる。

「この声、どこかで聞いた事があるような・・・」

一騎はこの声の主に聞き覚えがあるようだ。

「趣味は吉井明久を殴る事です」

「誰ッ!？」

「なぜ明久を!？」

明久はその女子生徒の発言に驚き、一騎も同じく驚いた。

（恐ろしくピンポイントかつ危険な趣味を持つ奴は!）

そして自己紹介を終え、自慢のポニーテールを振らせ明久の元へ近づく。

「はろはろー、ウチもFクラスよ。吉井、今年も宜しくね」

「何だ島田さんか。そうか、やっぱり島田さんはFクラスだよね!」

明久がそう言うと、

「ウチがバカとでも言いたいのか!？」

「痛い痛い、胸が無くて耳が肋骨でぐりぐりと擦れてすごく痛い!」

バキッ!!（最後に一発の拳をぶつける音）

「ぐあ・・・」

制裁が下された。

「ウチは帰国子女だから出題の日本語が読めないだけなのよ」

彼女の名は島田美波。去年、この文月学園へと入学したがそれと同時に日本へと戻ってきた事もあって帰国子女となっている。

「もしかして、美波なの？」

一騎が驚いているような表情で尋ねる。

「その声は、一騎なの？」

美波も同じく驚いた表情で尋ねる。

「え？一騎と島田さんって・・・」

「明久は知らないんだっけ？俺と美波は小さい頃からの幼馴染だって」

一騎がそう言つと「どういう事？」と明久が尋ねる。

「実は俺、小さい頃家族でドイツに行ったんだ。そこで最初の出来た友達なんだよ」

「バカ、そんな恥ずかしい事言わないでよ一騎！」

一瞬美波の頬が赤くなる。

「相変わらず賑やかじゃのう」

そこへ最初に自己紹介を終えた生徒が来た。

「？秀吉」

明久が尋ねる。

「ワシもFクラスじゃ。宜しく頼むぞ」
「こちらこそ宜しく」

彼の名は木下秀吉。明久の親友であり、演劇部のホープでもある生徒だ。

「おい明久、そろそろお前の出番だぞ」

（はっ もう僕の番か）

雄二が明久を促す。

（こういうのは出だしが肝心……。気さくで明るいい好青年な所をアピールしよう！）

「えーっと吉井明久です。気軽に『ダーリン』と呼んで下さいね」
「……ダアアーリィーン！！」「……」

明久がそう言うとはかの男子生徒達は一斉に叫んだ。

（ふ……不愉快すぎる……）

「……とにかくあれは忘れて下さい、これから一年宜しくお願ひします……」

まあ不愉快な場面も悪くはない。

「吉井、何て変な事を言うのよ……」

美波が呆れた状態で話かける。

「別にいいじゃないか、それに島田さんだったらハニーって言われる程ではないし

あとは島田さんのようにかさつで乱暴で怖くて胸がなくて背骨の間接が激しいほどの痛みが

ああああああ!!」

明久は今間接がヤバイ状態に陥っていた。そこへ……、

「あの……（はあ、はあ）遅れてすいま……せん（はあ、はあ）」

とある生徒がFクラスへと入ってきた。

第四問 序章？ 天才な少女の今

「あの・・・遅れてすいま・・・せん」

一瞬、クラス全員の視線は彼女に移した。

「丁度自己紹介している所なのであなたお願いします」

福原教諭が自己紹介をさせようと促す。

「はッ、はい！」

少女はやや緊張気味な返事をする。

「あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・」

今にも微妙に焦っている少女の名は姫路瑞希。どうやら彼女もこのクラスに所属のようだ。

「はいっ！質問です！」

周りの男子生徒の1人が質問する。

「あっはっはい、なんですか!？」

瑞希も反応に追いつかずびっくりする。

「えーと、なんでここにいますか？」

男子生徒の質問を聞き、

「姫路って入学最初のテストで学年二位だろ？」

「それにいつも上位一桁以内じゃないか・・・あと可愛い」

周りの男子生徒達はひそひそと会話をしてしまう。

「そ、その・・・試験の最中高熱を出してしまいまして・・・。
それとさっきは保健室

に行っていたので遅くなってしまって・・・」

瑞希は少し反省するかのような理由を呟く。そう、瑞希は試験の時に途中退席してしまったので

試験の得点は全て0点扱いになってしまったのだ。

「ああなるほど俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに・・・」

「ああ化学だろ？アレは難しかった」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いてそれどころじゃなくなてな・・・」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくてさあ」

「今年一番の大嘘をありがとう」

（これは想像以上にバカだらけだ・・・）

明久が啞然する。

閑話休題

「でッでは一年間よろしくお願いします!」

瑞希は再度お辞儀しながら挨拶する。

「姫路さんやっぱり可愛いなあ・・・」

瑞希が終えると明久は和んでいる状態になっていた。

「きッ緊張しました・・・」

(近!?これは話しかけるチャンス!!ここからドラマは始まり、
やがて僕らは結ばれる

そうこの一言は僕の幸せな未来への第一歩!)

明久は下らない妄想を始める。そして、

「あの、姫「姫路」」

雄二に先手を取られる。

(酷い!!!せつかく僕の人生計画『クラスメイトから結婚まで』
君と出逢えた春)『全654話が

開始2分でエンドロールに!)

再び閑話休題

「はっはい!何ですか?えーっと」

「坂本だ。坂本雄二」

「姫路です」

雄二は瑞希に軽く自己紹介する。そして瑞希も返答する。

「もう体調は大丈夫なのか？」

「あつそれ僕も気になる！」

明久と雄二が質問すると、隣辺りの席にいた一騎も会話に参加する。

「あの・・・もしかして、瑞希だね・・・？」

「よ・・・吉井君！？（ビクッ！）・・・それと、千藤君も・・・！？」

（あれ？僕何かダメだった？）

瑞希が明久と一騎に対し驚く。

「明久がブサイクですまん」

（え？フォローのつもり？全然嬉しくないよ？）

雄二がフォロー（？）をするような一言を言う。

「そ、そんな！目もパツチリしてて顔のラインも細くて綺麗だし・・・」

そのむしろ・・・」

だが瑞希も必死で弁解する。

「まあ悪くはないか・・・そういや明久に興味がある奴がいた気がするな」

「え？誰「そッそれって誰ですかッ!？」」

「ウチも気になるわッ!」

雄二の一言で瑞希と美波は激しく聞きつける。ちなみに美波はまだ明久を固めている最中である。

「確か・・・久保——」

（意外と瑞希と美波は気にするんだ・・・）

一騎は何がどうなっているのかさっぱり分からない様子になっている。

「——利光だったかな」

雄二が最後の言葉を告げる。

久保利光（性別／オス）

「おい明久、さめざめと泣くな」

（もう僕お婿に行けない・・・）

明久がっかりした表情になると瑞希と美波はホっとする。

「あの・・・吉井君」

「何？姫路さん」

瑞希は明久に元気付けようとする言い方で話しかける。

「痛くないんですか？」

「？うわああああ！僕の脊椎が巻くほど経験した事がないばかりに捻じ曲がって

ああああ！これ以上曲がったら、端子長が碎けてしまあああああ
ああ！！」

明久はようやく美波に固められているのに気が付いたようだ。

「はいはいその人達静かに——」

福原教諭が軽く注意をしようと教壇を叩いたが……、

ガラガラガラ……（教壇が崩れていく音）

崩壊してしまった。

「え〜〜〜〜……替えをを用意してきます」

そしてそのまま教室を後にした。

「あはは……」

その光景を見た瑞希は軽く笑う。

（こんな教室で姫路さんはちゃんと勉強できるのかな・・・

やっぱり体調不良で早退でいきなりFクラスなんて酷過ぎる）

やっと開放された明久はまだ瑞希の事を心配してしまう。

「よかったあ、ほかに女子がいて。席特に決まっていなかったから適当に座っていいって」

美波はほかにも女子が入ってきた事に関してうれしい仕草を取り、瑞希に適当に座っていいと促す。

「はい、ありがとうございます」

瑞希は軽くお礼を言う。

「それじゃあ、そこ開いてますか？」

「うん、どうぞ」

瑞希は明久の隣の席を選んだ。ちなみに一騎の席は明久のすぐ前の席である。

「そっか、姫路さんもFクラスなんだ・・・」

明久は再び不安な表情を浮かべる。

「よろしく願いしますね吉井く、ケホッ」

瑞希は明久に挨拶するが咳してしまう。

「まだ体調良くないの？」

「あんまり無茶しないほうがいいと思うよ瑞希」

明久が諭すと一騎も同じくフォローする。

「ええ、少し・・・」

「隙間風の入る教室、薄っぺらい座布団、カビとホコリの舞う古びた畳、

病み上がりにはいい環境じゃないよな」

瑞希の右隣の席にいる雄二が呟く。

「そっか・・・」

一騎も不安な表情を浮かべる。

（あの小娘、結構可愛いじゃないか。俺の女にしてやりたいぐらいだな）

今脳内にいるアルフが興味津々な事を呟く。

だが、一騎はまだアルフが取り付いているのには気付かない。

第五問 序章？ 幼馴染との再会

福原教諭が今教室から出てるため、少しの自由時間を手に入れたFクラスの生徒達。

そこで、一騎が同じクラスの島田美波に話しかけた。

「あのさ美波、こうしてまた再会するのも12年ぶりだね」

「え！？そうだったけ……。ウチ、全然覚えてないわ」

美波は驚いた表情で慌て始めた。

「別に驚かそうとは思ってないけど。でも美波がそういう仕草を取るのとは昔と変わらないね」

「あのー、千藤君と島田さんは幼馴染ですか？」

隣にいた瑞希が2人に尋ねる。

「そうだよ。俺が五歳ぐらいの時に両親と一緒に海外旅行でドイツに行ったんだ。」

それで同じ飛行機に乗ってた美波とその両親と会ったんだ。そこで俺が初めて

友達が出来たのは美波だったんだよ」

一騎は分かりやすいように簡単に説明する。

「でも旅行は3泊4日だったからあつという間にお別れしちゃったけど」

「そ、それ以上恥ずかしい事言わないでよ！」

美波は焦った表情で一騎を叱る。

「ははは、ごめんごめん」

「もう。ま、ここで偶然的に再会したのも何かの縁ね」

「確かにね、ううっ!!」

一騎は突然唸り出す。そう、これはある物の入れ替わりである。

シユユユ・・・（魂が入れ替わる音）

「大丈夫・・・？一騎」

美波が心配そうに話しかける。

「ふん、二度目の入れ替わりに成功した。

それにしても俺の好みになりそうな女がもう1人いるとはな」

現在一騎に取り付いているアルフが再び出てきた。

「一騎・・・？」

美波は一瞬固まる。そしてアルフ（の人格）は美波に近づいた。

「あの巨乳の女も良いが、お前みたいなポニーテールの女も良いな」

アルフは美波の顔を軽く上に上げた。

「一騎、急にどうしたのよ!？」

「ああ、この人間の名か。だが俺の名はアルフ・フォード。世界の破壊者でもあるのだ」

アルフがそう言い張ると「何言ってるの・・・？」と美波は呆れ果てた。

「千藤君・・・、どうしちゃったのですか？」

瑞希が話しかける。

「だから奴の魂は今眠っている。しばらくは俺の物だ。それにその小娘、

随分とでかい胸部だな」

「きや!？」

アルフは瑞希の胸部を鷲掴みする。

「ちよつと!何やってるのよ!！」

美波は瑞希の胸部を鷲掴みしているアルフに回し蹴りをお見舞いした。

「ぐふっ!！」

アルフはその衝撃で一騎の体から離れてしまった。

「何!？奴の体から離されただ!？」

「・・・ううん、っ!!!？」

一騎は意識と取り戻したが魂の塊だけのアルフを見て何かに驚く。

「なんなんだよお前は！？って・・・！！」

一騎の体は瑞希の胸部と鷺掴みしたまま倒れたため、手はそのままである。

「うわあああああ！！何という光景なんだあああああ！！？」

しばらくお待ちください

「はあ・・・はあ・・・このままでは俺は確実に死は確定だった・・・」

一騎はすぐさま瑞希から離れたが今でも嫌な悪寒が漂う。

「ていうかお前誰だよ！勝手に人の体に入って！」

一騎はアルフに話しかける。

「そういう言い方はないだろ。やれやれ、耳が痛くなりそうだ。俺の名はアルフ・フォード。別名、世界の破壊者だ」

「世界の破壊者？何言ってるの？」

一騎は嫌味ったらしい言い方でアルフにそう尋ねた。

「何を言う？俺は正真正銘の破壊者だ。だが今はこの通、魂の塊だけだな」

「そんな架空の話じゃない……。それと今でも信じられないし……」

アルフが揶揄するように答えると美波は納得いかない顔でそう呟いた。

「そうだ。千藤一騎、俺とパートナーにならないか？」

(……は?)

一騎の思考回路が一瞬停止してしまう。

「別にお前を利用するわけではない。ただ、面白そうだから組むと言う事だ」

アルフがそう提案すると一騎は少しだけ考え込んだ。

第六問 序章？ コンビの結成

「俺とパートナーにならないか」

突然アルフがそう提案した。

「はあ？何を言ってるんだお前」

だが一騎は疑問を抱く。

「なぜなりたいかと言うと、俺とお前ならこの学園の有名になれるかもしれないからだ。そして俺とお前で良い成績を取ろうではないか」

「お前が俺の？何かいまいち信用出来ない・・・」

一騎は憎しい態度で呟く。

そしてアルフに胸部を鷲掴みされた瑞希は一騎のブレザーの裾を掴みながら

一騎にこう囁いた。

「・・・千藤君、あの人——いやあの魂の方を信用していいんですか・・・？」

「うーん。あいつが何もやらなければいいけど・・・」

一騎も再び悩みだす。

「それとあんた、さっきは何て事をしてくれたのかしら？」

美波が話しに加わる。その一言を言われたアルフはこう諭し始め

た。

「何をやったって？俺はただあの小娘に興味があったからちよつとした挨拶を

しただけだ。その何が悪い？」

アルフは更に揶揄するかにように語り続ける。

「それと今の行為がいけなかったらあいつも十分に加害者ではないのか？」

「か、一騎をばかにしないでよ！一騎はウチの友——いや、幼馴染だけど・・・、

一騎を嫌がらせる真似をしたらウチが許さないんだからね・・・

！！」

「美波・・・」

美波は必死で一騎を庇う。

「あれ？そういえば明久は何処に・・・？」

一騎はある事を思い出した。

「吉井君なら坂本君と廊下に出ましたけど・・・」

「そうか、一体何を話してるんだろ・・・？」

一騎と瑞希が話会っているとアルフは更に何かを提案した。

「俺はただこの学園の事を学びただけだ。お前もここに来たばかりだろ？」

「まあそうだけど、お前は世界の破壊者だか何だかじゃないのか

「？」

一騎が質問すると「それは昔の話だ」と即答する。

「実は俺は昔の人間だった。だが俺は処刑され、魂だけが残った。そして魂の塊だけになった俺は気が付けば今の時代になってた。もう破壊する力

が無くなった俺は何をすればいいか迷ってたが、偶然にお前が通りかかったから

お前に取り付いて今のようになってしまったのだ」

「随分と胡散臭い説明が混ざっている部分があるかもしれないけどお前の言いたい事

はだいぶんかった」

一騎はアルフの説明に対してこう発言した。

「いいよ、お前とパートナーになっても。但し、

余計な真似をしなければの話だけだな」

「ちよつと一騎！？いいの、そんな変態とコンビ組んでも！？」

美波はこの発言で激しく戦いた。

「俺と組むにあたっての警告だけは言わせて貰う。お前の魂に入れ替わるのは

何か大変な事が起きた時かお前の存在を知らない人がいない時だけだ」

「わかった。約束しよう」

（まあ今まで言った事は全て嘘だ。何れはこいつを利用して再び世界を

破壊するのだから・・・)

一騎が条件を言うとアルフは一騎の体へと戻った。

「お主ら、暇ならばトランプをやらないか」

横にいた木下秀吉がみんなに提案する。

「いいよ、俺丁度暇だったから」

「はい、私もやります」

「ウチも混ぜてもいいかしら？」

一騎と瑞希と美波は秀吉の卓袱台の所へと移動した。

「何やろうかな？」

「ババ抜きの方がいいじゃないでしょうか」

「いや、真剣水着なんてどうかしら」

瑞希と美波はそれぞれやる物と提案する。だが・・・、

「えゝみなさん、前を向いて下さい」

運悪く福原教諭が戻ってきてしまった。

「ちつ、せつかくトランプがやれると思ったのに・・・」

「じゃあ気付かれないようにやらない？」

一騎が悔しがると、美波は小声で尋ねる。

それを聞いた一騎は「そうしよう」と答えた。

第七問 バカとクラスと召喚戦争？（前書き）

本来ならすぐに投稿可能でしたが、執筆中にわけもわからずにペー
ジが
戻り、今まで書いた文章が全て最初からになってしまいましたので
多少
の遅れは勘弁して下さい・・・。

第七問 バカとクラスと召喚戦争？

今の時刻は8時50分に差し掛かる頃、廊下に出てた明久と雄二が戻ってきた。

「須川亮です。趣味は――」

次の生徒が自己紹介を終える。

「坂本君、キミが最後の1人ですよ。クラス代表でしたよね？前に来てください」

福原教諭が促すと「了解」と返事をする雄二。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

そして雄二はこう質問した。

「さて皆に一つ聞きたい。Aクラスは冷暖房完備の上に、座席はリクライニングシート

らしいが・・・――不満はないか？」

「「「大ありじゃああああ！！！」」」

「だろっ？俺だってこの現状は大いに不満だ」

そして男子生徒達はこう発言した。

「幾ら学費が安いからってこの設備はあんまり!」

「Aクラスだって同じ学費だろ!? 改善を要求する!」

そして雄二は宣言する。

「みんな、聞いてくれ。そこでFクラス代表としての提案だが――」

(何を言っただろう・・・)

「俺達Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』をしかけようと思う!」

雄二の発言で周りは驚く。

「何じゃと!？」

「『試験召喚戦争』ってまさか・・・!!」

後ろの席でトランプをしている秀吉と美波も驚いた。

そう、ここ文月学園では『試験召喚戦争』通称『試召戦争』と呼ばれるシステムがある。

生徒は教師立会いの元、科目の成績に応じた攻撃力を持つ召喚獣を召喚することが出来る。

その召喚獣で戦争を行い、上位にクラスに勝利する事でそのクラスと教室の設備を交換することが出来るのである。

「みんな、もう一度言うがこのオンボロ教室に不満はないか？」

「『大ありじゃああああ！！！！』」

再び男子生徒達は叫ぶ。

「だが、試召戦争に勝利さえすれば

Aクラスの豪華な設備を手に入れる事だって出来るんだ！」

雄二の演説はさらに続く。

「我々は最下位だ！学園の底辺だ！誰からも見向きもされないこれ以上下のないクス

の集まりだ！！つまりそれは門を失う事はないことだ！！なら駄目元でやってやろう

じゃないか！！」

雄二が必死で発言するが、

「そんなの勝てるわけないだろ？」

「これ以上設備落とされたらどうなるんだ？」

「姫路さんがいたら何もいらない」

皆が困るのも無理はない。なぜならば文月学園のテストには点数の上限がない。

一時間以内であれば能力次第で好きなだけ問題を解くことができ、それで得た

点数が『召喚獣』の強さになるが、AクラスとFクラスの点数では桁が違い過ぎて

話にならない。Aクラス1人に対しFクラス3人・・・いや、相手によっては

4、5人でもダメなこともある。

「そんな事はない。必ず勝てる、いや俺が勝たせてみせる」

雄二が若干呆れた表情で保障する。

「無理に決まってるじゃん」

「そう言われても何の根拠もないしなあ・・・」

（試験召喚戦争ってそんなに難しい物なのかな・・・）

この状況を聞いている一騎はいまいち理解出来ないようだ。

「根拠ならあるさ。このクラスには勝つことの出来る要素が揃っている」

（え？何それ？聞いてないよ？）

明久は一瞬クエスチョンマークを浮かべる。

「それなら今から説明してやるよ」

雄二が1人目を指名しようとするが、

「おい康太。いつまでも畳に顔付けて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「はッはわッ！？（バツ）」

康太と呼ばれた男子生徒は顔に付いてる畳の跡を隠しながら前に出る。

「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙なる性識者だ」
ムツリーニ

康太という名はそこまで有名ではないが、ムツリーニとなれば話は別だ。

「馬鹿な・・・奴がそうだというのか？」

「見ろ！まだ証拠を隠そうとしているぞ・・・」

「ああムツツリの名に恥じない姿だ・・・」

しかし周りの生徒達は多少戦く。

（手鏡を使う方法しか思いつかない僕とは格が違う）

明久が納得する姿を見た瑞希は一瞬クエスチョンマークを浮かべた。

（何だあいつは。堂々とあんなことをするなんて・・・。あいつ、俺と気が合いそうだな）

一騎の体の中にあるアルフがニヤニヤした言い方で関心する。

「姫路の事はみんなはその実力をよく知っているはずだ」

雄二は次に瑞希を指名する。

「え？わ、私ですか？」

指名された瑞希は一瞬焦る。

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」
「そうだ！俺達には姫路さんがいる！」
「彼女ならAクラスに引けはとらない！」
「ああ彼女さえいれば何もいらなないな」

周りの生徒達がそう言うが、

（誰だ、さつきから姫路さんに熱烈なラブコールを送っている奴は）

明久の場合は瑞希の事になると納得いかない様子になる。

（へえ、瑞希って小学生の頃より更に頭が良いんだ・・・）

一騎も一瞬驚く。

「それに木下秀吉だっている」
「ワシもか？」

次に雄二が指名したのは秀吉である。

「演劇部のホープ！」
「ああ確かアイツ双子の姉が・・・」
「Aクラスの木下優子だっけ？」

男子生徒達のやる気は更に上がる。

「当然俺も全力を尽くす」

次は雄二自身も主張する。

「確かに何かやつてくれそうな奴だな」

「坂本って小学生の頃『神童』とかよばれなかったか？」

（あの人も成績は良い方なのかな）

一騎は雄二にも関心する。

「じゃあ試験は姫路さんと一緒に体調不良だったのか？」

「おいおい、実力はAクラスが2人もいるのかよ！！」

「これはいけるんじゃないか！？」

「よし！やってやろうじゃねーか！！」

男子生徒達がそう叫ぶと雄二は「まだ頼りになる奴はいるぞ」と答える。

「それは島田だ。島田は数学においてはかなりの成績だ」

「まあね。数学はウチの得意科目だから！」

（美波って数学が得意なんだ・・・）

美波が答えると一騎も驚く。

（ふん、暇だな。早くあの小娘をナンパしたい所だ・・・）

「それに吉井明久だっている」

雄二が明久を指名すると周りは一瞬で静まり返った。

（僕の名前はオチ扱いか！というかここで僕の名前を出す必然性

が感じられない!!」)

この光景を見て明久は頭の中で絶叫した。

「誰だよ吉井明久って?」

「それ以前にこのクラスにいたか?」

(もう忘れられてる!?)

「ははは・・・」

一騎も思わず苦笑いしてしまう。

「ホラ!せっかく上がった士気が台無しじゃないか!! だいたい僕は普通の人なんだから

普通の扱いを——」

「・・・・・・」

「って何で僕を睨むのかな?」

明久を睨んだ雄二はこう発言した。

「そうか、知らないのなら教えてやる。こいつの肩書きは、『観察処分者』だ!!」

(観察、処分者・・・!?)

一騎も思わず戦いてしまった。

(ほう、これは面白いな・・・)

第八問 バカとクラスと召喚戦争？

「知らないのなら教えてやる。こいつの肩書きは、『観察処分者』だ！！」

雄二が説明すると、男子生徒達は一斉に驚いた。

「……それってバカの代名詞じゃなかったっけ？」

別の意味で……。

「ちッ違っよ！！ちよっとお茶目で16歳の愛称で……」

明久が焦って言い分けするが、

「そうだ。バカの代名詞だ」

「肯定するなバカ雄二！」

雄二があっさり即答した。

男子生徒達が驚いている中、ここで瑞希が手を上げた。

「何だ、姫路」

「あの、観察処分者ってどういうものなんですか？
あとそれはすごいんですか？」

瑞希がそう質問する。

「ああ、誰にでもなれるわけではない。成績が悪く、学習威力に欠ける問題児に

与えられる特別タイプだ」

雄二が説明すると、一騎も手を上げた。

「観察処分者は何をするの？」

「具体的には教師の雑用係りだな。力仕事とか雑用を特例として物に触れる

ようになった召喚獣でこなすんだ」

（一見使えないように聞こえるがかなりいい物じゃないか）

一騎の体の中にいるアルフが関心する。

「それって凄いですね！試験召喚獣って見た目と違って力持ちらしいですし」

瑞希は輝かした目で明久を見る。

「あはは、そんな大したもんじゃないよ。確かに僕なんか点数でも召喚獣の

力はかなり強いけど」

明久が少し弁解してから話を戻す。

「その時受ける召喚獣の負担の何割かは僕にフィードバックされるんだ。

みんなと同じで教師の監視下でしか喚び出せないし僕にメリックもないしね」

（明久って随分と大変そうだな・・・）

一騎は思わず心配してしまう。

「おいおい・・・じゃあ召喚獣がやられたら本人も相当苦しいって事だろ？」

「だよな・・・それならおいそれ召喚できないヤツが一人いるって事じゃん」

（その通り。だから僕はあまり戦闘に参加したくないんだよね・・・。。）

痛いから）

男子生徒達が噂話をするように会話している光景に明久も同様する。

「気にするな！いてもいなくても大した変わらん雑魚だ」

「まさしくバカの代名詞と呼ばれておるくらいじゃな」

「全く何の役にも立たない人の事よ」

雄二の罵倒に秀吉と美波が会話に加わる。

「ねえ皆、そこは僕をフォローする所だよね？」

「本当にすごいんですね！」

「あああ！花があつて入りたい！」

明久は便乗してしまう。

「とにかくだ！試召戦争に勝利すればこんなオンボロ教室とはおさらばだ。

どうだ皆、やってみないか？」

「「「うおおおおおおお！！！！！！！！」」」

「ならば全員^{ベン}筆を執れ！！出陣の準備だ！」

「「「おおおおー！！！！」」」

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！！」

「「「うおおおおおおおッ！！！！」」」

雄二の号令により、男子生徒達は一斉に叫び声を上げた。
後ろの席で瑞希も軽く右手を上げて「おッおー」と小声で言った。

「まず手始めに1つ上のEクラスを倒す。明久、Fクラス大使としてEクラスに

宣戦布告をして来い」

雄二は明久に宣戦布告の指令を出した。

「え、僕？普通下位勢力の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

明久は不満な言い方で質問する。

「それは映画や小説の中の話だ。
大事な大使に失礼な真似をするわけがないだろ？」
「でも・・・」

そして雄二は明久にこう答えた。

「明久、これはお前にしか出来ない重要な任務なんだ。騙された
と思って

行つて来てくれ」

「本当に？」

「勿論だ、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」

雄二が保障すると明久は、

「うん、わかったよ、それなら僕が使者をやるよ！」

「がんばれよ！」

「お前ならできる！！」

「ああ頼んだぞ」

Fクラスの使者となってEクラスに宣戦布告をする事になった。

数分後

「騙されたよおおお!!」

そこにはボロボロな状態で帰ってきた明久の姿。

「こッ殺されるところだった!!」

アイツら物凄い剣幕で掴みかかってきたぞ!!」

「やはりそうきたか」

「やはりって予想してたのかよ!？」

明久は憎しい言い方で叫ぶ。

「それぐらい予想出来なかったら代表は務まらない」

「少しは悪びれるよ!!」

「そんなことしていたら時間の無駄だ」

(ブチ殺すぞコラ)

悪友を恨むのも無理はない。

「吉井君、大丈夫ですか？」

そこへ瑞希が心配そうな表情で明久に声を掛ける。

「あっうん。大丈夫、殆んどかすり傷だし」

「吉井、本当に大丈夫？」

更に美波も声を掛ける。

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

（島田さんまで・・・心配されるのも悪くないね！）

「良かった・・・まだウチが殴る余地はあるんだ・・・」
「ああ！もうダメ！死にそう！」

明久に悪寒は漂うばかりである。

「そんなことより今からミーティングを行うぞ」

雄二が諭すと先に教室から出てった。

（僕達本当に友達？週に七回ほど気になってたりする）

「あのっ痛かったら言つて下さいね？」

「お主も大変じゃったの」

続いて瑞希と秀吉も教室から出た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ムツツリー二、もう畳の跡なら消えてるよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

明久がそう言うともツツリー二は否定する。

「いや、今更否定されてもバレてるよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「ムツツリー二がHなのもよく知ってるから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

ムツツリー二は必死で対抗するが、

「・・・・・・・・何色だった？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・みずいろ」

即答する。

「ほら吉井、アンタも来るの！」

美波は明久の腕を掴んで立たせる。

「あーはいはい」

「返事は一回！」

「へーい」

明久が呆れた言い方で返事をする、

「・・・・・・・・一度、D a s B r e c h e n . ええと日本語だと・

・
」

美波はドイツ語の文を言い始めた。

「・・・・・・・・・・調教」

そしてそれを答えるムツツリー二。

「そう！調教の必要がありそうね」

「せめて教育とか指導とか言ってくれない？」

「じゃあ中間をとって、Z u h t i g u n g . . . 確か折檻？」

更に文を言い続ける美波。

「……………それはわからない」

「それ、悪化してるよね？」

明久が呟くと美波は一騎の元へ近づいた。

「一騎も行かないの？」

「いや、俺は後から行くよ」

「そうなんだ。さ、早く行きましょう2人とも」

そして明久達も教室から出てった。

「なあアルフ。本当にこの試験召喚戦争というものは勝つのかな」

「さあな。俺にとってはあまり関係ない事だ」

アルフは一時的に一騎の体から出て一騎と会話をする。

「でも俺まだ召喚獣持っていないし、どうしろと……」

「こういう時は俺に任せろ。俺の力であの召喚獣共は全て抹殺可能だ」

「却下。お前が変な真似したら俺が恥を欠いてしまう羽目になる」

一騎がそう答えると「悪かったな」と謝るアルフ。

「よし、そろそろ行くか」

「そうだな」

そして一騎とアルフも教室から出てった。

第九問 バカとクラスと召喚戦争？

一騎達一向は試召戦争のミーティングを行うために学園の屋上へと向かった。

そこで雄二が明久に宣戦布告完了の質問を聞いた。

「明久、宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に関戦予定と告げたけど」

「じゃあ先にお昼ご飯ってことね？」

美波がそう尋ねた。

「そうなるな。明久、今日ぐらいはまともな物を食べるよ？」

「そう思うならパンでも奢って欲しいんだけど」

明久がおねだりすると、

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

「何でおねだりなんかするの？」

瑞希と一騎が尋ねてきた。

「いや・・・一応食べてるよ」

「・・・あれは食べていると言えるのか？」

雄二が変な質問を問いかける。

「何が言いたいのか」

「いやお前の主食って」

そして雄二は一旦言葉を挟んで、

「水と塩だろ？」

と言い張った。

「失礼な！！僕をバカにするにも程がある！きちんと砂糖も食べてるよ！」

明久も必死で弁解するが、

「そッそれは食べてると言いませんよ・・・」

「『舐める』が正解じゃろうな」

瑞希と秀吉が微妙に呆れた言い方でつつ込んだ。
そして一騎以外全員妙に優しい目で明久を見る。別に明久は何も悪い事を

してはいないものの・・・。

「何て可愛そうなんだ明久は・・・」

一騎は泣きそうな表情で明久を励ました。

「まっ飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」
「ッ仕送りが少ないんだよ！」

（自業自得だ・・・）

アルフも若干呆れた表情で呟いた。

「・・・あの・・・」

ここで瑞希が何かを言い出す。

「・・・その、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」
「ゑ？」

瑞希がそう提案すると明久は若干発音がおかしくなっている言い方で返す。

「本当にいいの？塩と砂糖以外のものなんて久しぶりだよ！」
「はい！明後日辺りのお昼で良ければ・・・」
「良かったじゃないか、手作り弁当だぞ？」
「うん！」

瑞希の一言で雄二も励ます。

「・・・ふゝん。姫路さんって随分優しいんだね。
吉井だけに作ってくるなんて」

美波が若干疑う目で睨み付けた。

「あッいえ！その、皆さんにも・・・」

瑞希は焦りながら答える。

「俺達にも？いいのか？」

雄二が質問すると「はい、嫌じゃなければ」と答える瑞希。

「それは楽しみじゃのう」

「……………」

「…………お手並み拝見ね」

「どうもありがとう瑞希」

ほかの4人も嬉しそうな仕草をとった。

「それじゃ、皆に作ってきますね」

瑞希は皆の了解をとった。

「姫路さんって優しいね」

「えッ!? そッそんな……………」

明久の一言で顔が赤くなって一瞬反応に追いつけなくなる瑞希。

「今だから言っけど僕……………」

初めて会う前から君のこと好き——「」

「おい明久、今振られると弁当の話はなくなるぞ?」

「————にしたいと思ってました!」

明久は慌てて誤魔化する。

(フツ失恋回避成功。『君のこと好きです』と言い切る前だからこそ取れる)

空前絶後の回避行動…………流石は僕の判断力だ!)

「・・・明久、それでは欲望をカミングアウトしたただの変態じやぞ」

（恨むぞ僕の判断力・・・）

秀吉がそう伝えると明久は自分の判断力に恨んだ。

「さて、話を戻すぞ。試召戦争についてだ」

ここで雄二が話を戻す。

「あのさ、試召戦争ってどうするの？」

一騎が雄二に質問する。

「あ、そうか。お前はここに転校したばかりか。だったら試召戦争のルール説明の紙を渡す。これでルールを知るんだ」

そして雄二は試召戦争のルール説明の紙を一騎に渡した。

（わざわざルール説明まであるとは、随分と細かいものだ。俺はこんなものに時間をかけて読みたくはない）

アルフはめんどくさがる言い方で呟いた。
そして一騎は、試召戦争のルール説明を読んだ。

第九問 バカとクラスと召喚戦争？（後書き）

ルール説明に関しては次回に回します。

そして次回辺りから本格的に試召戦争ですので楽しみにして下さい。

第十問 バカとクラスと召喚戦争？

文月学園におけるクラス設備の奪取・奪還および召喚戦争のルール

1 原則としてクラス対抗戦とする。各科目担当教師の立会いにより

目は 試験召喚システムが起動し、召喚が可能となる。尚、総合科目は 学年主任の立会いの下でのみ可能。

2 召喚獣は各人1体のみ所有。この召喚獣は、該当科目において最も近い時期に受けたテストの点数に比例した力を持つ。総合科目については各科目最新の点数の和がこれにあたる。

3 召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数の減算され、戦死に至ると0点となり、その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。

4 召喚獣はとどめを刺されて戦死しない限りは、テストを受け直し
て点数を補充することで何度でも回復可能である。

5 相手が召喚獣を喚び出したにもかかわらず召喚を行わなかった場

で補 合は戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補習室にて戦争終了ま
習を受ける。

6 召喚可能範囲は担当教師の半径10メートル程度（個人差あり）。

7 戦闘は召喚獣同士で行うこと。召喚者自身の戦闘参加は反則行為
として処罰の対象となる。

8 戦争の勝敗は、クラス代表の敗北をもつてのみ決定される。
この勝敗に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段
は不問
とする。悪魔でもテストの点数を用いた『戦争』であるとい
う点を
常に意識すること。

試召戦争のルール説明の紙を読み終えた一騎は、雄二に顔を向ける。

「これでだいたいわかったよ」

「そうか。あとは学園長からお前に召喚獣を渡すだけだな」

「よかったね一騎」

雄二と明久は一騎に労いを口にした。

「あッあの！」

「・・・？どうした姫路？」

ここで瑞希が雄二に質問を伺った。

「えっと・・・その、気になってたんですけどお二人は前から試召戦争の事を話し合ってたんですか？」

「確かに」

一騎も同じ反応を取る。

「ああそれはさっき明久が姫路のためにつて」

「それはそうと！！」

明久が慌てて話を中断させた。

「まったくお前は……。それはそうと、もう後には引けないぞ。明久、覚悟はいいな？」

「?.....」

明久は一旦言葉を挟んで、

「ああ、いつでも来い！」

と言い張った。

「明久……」

（ようやく始まるか。俺達の戦いという名の戦いが）

アルフも自信満々の表情でそう呟いた。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。いいかお前ら、ウチのクラスは、最強だ」

更に雄二が自身をもって強調する。

「いいわね、面白そうじゃない！」

「Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」
「.....」

美波達も自信満々な表情を取る。

「が……頑張りますっ」

瑞希も参加可能の意思を告げる。

「・・・そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

そして雄二は紙とペンを出した。

「戦闘の立会いには長谷川先生を使う。丁度、5時限目で
Eクラスに向かう所を確保する」

そして雄二はFクラスとEクラスの通る廊下を書き、数学の長谷川
教諭を確保するルートを書き込む。

「長谷川先生というと、科目は数学？」

「数学ならウチは得意よ」

「その島田の得意な数学を主力にして戦う」

明久が尋ねると美波自信満々の気分で主張する。

「姫路さん、数学は？」

「苦手ではないですけど・・・」

美波が質問すると瑞希はそう答えた。

「じゃあ、姫路さんも一緒に戦えるね！」

そして一緒に戦えると思ったが、

「いいや、だめだ」

雄二が不可能を告げた。

「どうして!？」

明久も驚いてしまう。

「一番最後に受けたテストの得点が、召喚獣の戦闘力になる」

雄二は一騎が読んでいた試召戦争のルール説明の2番目の項目の一部

にまるをつけた。

「俺達が最後に受けたテストは・・・、」

「振り分け試験・・・？」

明久はこの一言を思い出し、瑞希の方へと振り向いた。

「私は途中退席したから0点なんです」

「そうなんだ・・・。だから瑞希もFクラスに・・・」

一騎が心配そうに呟いた。

「でも、試召戦争が開戦したら回復試験を受けることができる。それを受けたら姫路も参加できるさ」

そして雄二は作戦が書いてある紙にメモをした。

「・・・はい」

瑞希が若干心配な表情を見せるが、

「頑張ってくれ」

「・・・・。はい！」

雄二の掛け声で彼女は笑みを浮かべて返事をした。

「・・・・っ！」

屋上のドアからには人の気配を感じる人はいなかった。

——そして、Eクラス戦が始まろうとしていた——

キンコーンカーンコーン・・・

そして、五時間目が始まろうとした時、廊下を歩いている長谷川
教諭

の姿も目撃するFクラス生徒達。そして、

「！！」

「長谷川先生を捕らえたぞー!!」

一人の男子生徒が叫んだ。

ダンッ!!（教卓を叩く音）

「開戦だ!!総員、戦闘開始!!」

「「「おおおおお!!」「」「」

雄二が開戦許可を告げると周りは一斉に行動を開始した。

「全く……。バカのくせに生意気ね」

ダンッ!!（教卓を叩く音）

「全員出撃よ!Fクラスなんかとつちめてやりなさい!!」

「「「おおおおお!!」「」「」

所変わってここはEクラス。代表の中林宏美も開戦を許可する。

そしてそれぞれ前線のメンバーが出撃する。

「島田美波、行きます!!」

「木下秀吉、さんさいいたす!!」

「……………土屋康太、同じく!!」

Fクラスの前線は、美波と秀吉とムツツリー二の3人である。

「承認します!」

そして長谷川教諭は数学の召喚フィールドを展開する。

「試験召喚獣召喚!試験^{サモン}召喚!!」

美波が召喚獣を召喚すると、足元からは幾何学模様のような魔方陣が現れそれからは自分と同じ顔にデフォルメした召喚獣が姿を現した。

そしてその召喚獣に表記しているのは最後に受けた試験の得点と同じ

数値を持った召喚獣の強さが表示されている。ちなみに美波の召喚獣

の装備されているものは、軍服にサーベルである。

「……………試験^{サモン}召喚」

続いてムツツリー二も召喚獣を喚び出した。ムツツリー二の場合
は、

忍者の服装にカメラを装備されている。

「試獣召喚^{サモン}!!」

そして秀吉も召喚獣を喚び出した。秀吉の場合は、長刀を装備の長刀使いである。

「何でワシだけ変身するのじゃ・・・?」

ちなみに秀吉の変身シーンは都合によりカットします。

「来るわよ!」

美波が指示すると、Eクラスの前線メンバー達は召喚獣を喚び出した

範囲に近づくが範囲指定により通ることが不可能である。

「氣よつけて下さい。生身の人間は通れません」

長谷川教諭が忠告する。

「通りたければ倒していくことね!」

美波が挑発をすると、

「三上美子、受けます!試獣召喚^{サモン}!!」

Eクラスの前線メンバーの一人、三上美子が召喚獣を喚び出した。

数学 Eクラス 三上美子 81点

V
S

数学 Fクラス 土屋康太 25点

そしてお互いの点数が表示される。

「っ、こいつ！とどめ！！」

ムツツリー二を戦死させようとするが、

「それはこっちの台詞よ！！」

美波が最初にとどめを刺した。

数学 Eクラス 三上美子 0点

V
S

数学 Fクラス 島田美波 87点

「そんな・・・」

「数学ならEクラスなんかには負けないんだから!」

ドスンッ!! (誰かの足音)

「戦死者は補習室に集合!」

ここで鉄人が姿を現した。

「あれは・・・!」 (美波の一言)

「鉄人!」 (秀吉の一言)

これは試召戦争のルール項目の一つ、戦死した生徒は補習を行う義務を負う

という項目があるのでその担当は鉄人となっている。

「助けてゝ! 鬼の補習はいやゝゝ!!」

そこには無残に鉄人に連れさられる美子の姿が・・・。

「ここを通りたければ、ワシらを倒していくのじゃー!」

秀吉が挑発すると、

「そう？ならそうさせて貰うわ」

Eクラス代表の中林宏美が指示を出す。

———
そのころ一騎は

「確か学園長から召喚獣を受け取ることから始まるんだった」
「とにかくその召喚獣とやらを早く手に入れて教室戻るぞ」

一騎とアルフは学園長から召喚獣を受け取るため、学園長室へと向かった。

（俺の召喚獣ってどんなんだろう）

一騎は一瞬そう考え込んだ。

第十一問 バカとクラスと召喚戦争？

「ここが学園長室か・・・」

一騎は召喚獣を貰いに行くため、学園長室へと辿り着いた。

「早くあの学園長とやらに会いに行くぞ」

一緒について来ているアルフが一騎を諭した。

「じゃあ、入るぞ・・・？」

そして一騎はドアをノックした。

コンコン

「入りなさい」

そして部屋には人の声が聞こえてきた。

「は、はい・・・」

入るように促された一騎はドアノブを回し、入室した。

「こちらにきなさい」

「あの・・・、貴方が学園長ですか・・・？」

一騎が質問を伺うと、

「いや、私は教頭だ。学園長なら用事で席を外している」

この男性は学園長ではなく教頭のようにだ。

「教頭ですか・・・。一つ聞きたいことがあるのですが」
「何だね」

「実は俺、今日ここに転校してきたので・・・」

「名前と何処のクラスに所属しているのか答えなさい」

一騎が答えると教頭が更に質問をする。

「俺は千藤一騎です。クラスはFクラスです」

「そうか。それとほかに言いたいことはあるか？」

「はい。それで俺に召喚獣を渡し貰いたいのですが・・・」

一騎が答えると教頭はこう言い始めた。

「ああそのことだが、既に君がくる前から学園長が調整したのだ。

それと君は成績が良いという話を聞いたからな」

「はい、そうですけど」

そして教頭は一騎に近づき、

「それで学園長は外出する際に置いていった召喚獣がこれだ。
そしてこれが君の召喚獣だ。受け取ってくれ」

召喚獣を渡した。

「あ、ありがとうございます！」

「いいんだ。それにFクラスがEクラスに試召戦争を仕掛けたらしいから丁度良いタイミングだったようだな」

一騎が礼を言うと、教頭も多少の礼をする。

「召喚獣の扱いは今度改めて先生達が教える。実は私も忙しいの
でね」

「今じゃないんですか？」

一騎が尋ねると「そうなのさ」と答える教頭。

「でも基本的な動作なら誰でも出来る」

「どうやって動作するのですか？」

教頭が説明すると一騎が質問を問いかけた。

「まずは召喚獣を喚び出す動作からだ。今科目のフィールドがこ
こにも

広がっているからね。そして召喚をする時に試^{サモン}獣召喚と
言えば召喚獣が出てくる」

「わかりました……。えっと、試^{サモン}獣召喚！」

そして一騎は召喚獣を喚び出した。すると一騎の足元からは幾何
学模様

のような魔方陣が現れ、そこから自分とよく似た顔にデフォルメ
された

召喚獣が姿を現した。

「おおお、これが俺の召喚獣なのか・・・」

一騎は一瞬驚く。そして一騎の召喚獣に装備されているのはいかにも安っぽい

鎧を体に身にまとい、首にはマフラーのようなものがついており、更には誰も

が持っていないような形の剣を装備している。

「何か微妙のようであつこいようで地味かも・・・」

一騎は率直な感想を呟いた。見た目は弱そうな装備だがこれでも学園長は

強い装備に設定しているから何も文句は言えざるを得ないだろう・
・・・。

「すまないな。学園長の多少のミスがあつてね・・・」

教頭が謝罪するが、一騎はまだがっかりな表情に陥っている。

「いえ、別に文句はありませんけど。ただ・・・」

一騎は言葉を挟むが、何も言えなかった。

「そうか。あまり無理はしない方がいい」

教頭は一騎を励ました。

「それで、どうやって召喚獣を戻すのですか？」

「それは召喚フィールドから離れるか、自分で戻すことだ。

そうすれば召喚獣をいつでも換び出す事が可能だ」

（ほう、これであの試召戦争の重要なものが手に入れたなアイツは・・・）

「では、俺はここで失礼します」

「学園長と今度直接会ったら礼を言っただぞ」

教頭がそう答えると「わかりました」と返答する一騎。そして学

園長室

をあとにした。

「よし、これで俺も参加できるぞ」

「あまり手間かけさせるなよ？」

そして一騎とアルフの戦いは本格的に始まるうとしていた。

第十二問 バカとクラスと召喚戦争？

一騎が召喚獣を手に入れた一方、3階の旧校舎でFクラスとEクラスの

試召戦争が行っていた。

「ここを通りたければ、ワシらを倒していくのじゃ！」
「そう？ならそうさせて貰うわ」

秀吉が挑発すると、Eクラス代表の中林宏美は仲間召喚の指示を出した。

「『『^{サモン}試獣召喚！！』』」

そして一斉に召喚獣を喚び出した。

「勝負よ！」

美波の掛け声で再び勝負が開始される。

「ふん」

しかし中林は余裕の表情を見せているか鼻で笑った。

「では、準備が良ければ初めて下さい」

ここは補給室。学年主任の高橋洋子主任は瑞希に点数の補給テストを

やらせていた。

「はい」

瑞希は返事すると筆をもってテストを開始した。

「どういう作戦でいくの？雄二」

そして更に場所を移してFクラス。昼寝をしかけている雄二に明久が

作戦の内容を問いかけた。

「作戦なんかねえ」

「え？」

「力任せのパワーゲームで押し切られた方の教室に敵は流れ込んだ。」

そして代表は倒された方の負けだ」

「まさか押し切られたりはしないよね・・・？」

雄二は簡単な勝敗を述べるなり作戦は一切思いついていないらしい。

そして明久も心配してしまう。

「大変！！押し切られるー！！」

廊下で戦っている美波が叫んだ。

「ええええええ！！！？？？」

「Eクラスの方が成績は上だからな。ストレートにぶつかれば負けるのも

時間の問題だ」

「そんなあああああ！！！」

明久は思わず絶叫してしまう。

「だが向こうも所詮Eクラス。Fクラスとの差は大きくない。

押し切るには時間が掛かる。その時間が勝負の鍵だ」

雄二がまじめに呟いている中、

「うつ、点数・・・」

数学

Eクラス

中林宏美

95点

V
S

数学

Fクラス

島田美波

13点

中林との戦いで美波は数分でピンチに陥ってしまった。

「このままでは戦死じゃ。お主は下がって点数を回復するのじゃ」

ここで秀吉とムツツリーニがサポートする。

「分かったわ」

美波はそう答えると召喚フィールドから離れ、補給室へと向かった。

それと同時に召喚獣も消えた。

「あれ？美波、どうしたの？」

教室へと戻ろうとした一騎と偶然に出会った。

「実はね——」

「そうか。点数が少なくなったんだね」

美波から事情を聞いた一騎は逆に質問を返した。

「俺はさっき召喚獣をやっと手に入れたからそれでどうすればいいか
迷ってて」

「そうなんだ、一騎は召喚獣を貰ったばかりなのね。点数はない
のは」

仕方ないわ」

「そしたら俺も点数を補充しに行くよ」

一騎がそう言うのと「分かったわ」と返事する美波。

「回復試験、受けます!!」

「俺もお願いします!!」

そして場所を移して補給室。美波と一騎は点数を補充するために
回復試験を受けた。

「この試験の点数が、次に召喚獣を出した時の点数になります。
低い点数を取ると返って召喚獣が弱くなる点数になります。
それでもよろしいですか?」

「分かりました」

高橋主任の説明で美波は返事をした。

「科目は何にしますか？」

「数学でお願いします」

美波が数学と答えると、高橋主任は数学の問題用紙と解答用紙を渡した。

「俺も数学でお願いします」

「分かりました」

一騎も数学を選択する。

（少しでもたくさん答えて点数を上げなきゃ）

美波は若干緊張感を高ぶるように問題を解く。

（この点数で俺の召喚獣の強さになるのか……。頑張らないと！）

そして一騎も問題を解いていく。

「……………もう無理！」

そして旧校舎の廊下で更に戦争は続く。

「ムッツリーニ!!」

ピンチの状態に陥ったムッツリーニを秀吉が援護する。

「・・・！戦力的撤退じゃ！」

「この勝負、貰ったわ！」

秀吉達が一時的に撤退すると、中林はほかのFクラスの部隊の一部を薙ぎ払った。

「しまった！」

後退している秀吉とムッツリーニはこの光景に驚いた。

「突撃よ」

そしてEクラスのほぼ全員は、Fクラスへと突入する。

「防衛線が破られたな」

「やばいよ、雄二！」

Fクラスでも大変な自体へと巻き込む予兆に陥ってしまう。

（数式だけなら、日本語が読めなくても解けるから楽勝——
——）

問題を必死で解いている美波が余裕な表情を咬ましていると、

（あああ！漢字が！！）

問題の中に漢字を含んでいる文章問題にてこずいてしまう。

（ここをとばして次の問題に——）

美波がほかの問題へと触れようとするその時、

カリカリカリカリカリ……（鉛筆の音）

「……！！」

美波はその光景に戦ってしまう。

「戦死者は補習室に集合！」

そしてとうとうEクラスの部隊はFクラスへと乗り込んでしまった。

更にはFクラスの一部の部隊も再び戦死してしまう。

「どうしよう雄二!？」

「もう終わりなの?ここまでのような、Fクラス代表さん」

中林が揶揄するかのように聞きつけると、

「おやおや、Eクラス代表が自ら乗り込んでくるとは余裕じゃないか」

雄二も負けずと言わんばかりに対抗するように呟く。

「新学期早々宣戦布告なんて、バカじゃないの?振り分け試験直後なんだから」

クラスの差は点数の差よ。あなた達に勝てると思ってるの?」

「さあ、どうだろうな」

「そっか。それが分からないからFクラスなんだ」

更に中林の挑発は続く。

「ねえ雄二、やっぱり作戦の話じゃ上のクラスに勝てっこないよ」

明久は雄二に耳元で囁く。

「おっと、そういえばひとつだけ作戦を立ててたんだっけ?」

「え?」

雄二はいきなり変な一言を諭した。

「なぜお前をここに置いてるのか分からないのか?」

「・・・そうか」

そして明久は動き出した。

「まさか、そいつは・・・」

「そう、この吉井明久は『観察処分者』だ!」

雄二の一言で周りは一歩下がる。

「明久! お前の本当の力を見せてやれ!!」

「ちえ、しょうがないな。結局僕が最後に活躍するんだね」

そう言った明久は自ら立ち上がり、

「試^{サモン}獣召喚」

召喚獣を喚び出す。

「観察処分者の召喚獣には特殊な能力がある。罰として先生の雑用を手伝わせる」

ために、物体に触ることが出来る」

そして明久の召喚獣は卓袱台を持ち上げた。

「!!」

中林は一瞬戦く。

「そして、」

ガンッ！！（卓袱台が明久の召喚獣の頭に直撃した音）

「召喚獣がつける痛みは、その召喚者もつける」

雄二の説明が終わると、明久の召喚獣とその本人がのた打ち回る光景が写る。

「な、面白いだろ？」

「それだけかよ！」

そして明久は呆れながら怒った。

「いいわ、まずはその雑魚から始末してあげる。試獣召喚！」
試獣召喚！
「そう簡単には負けはしない！いくぞ！！」

中林が召喚獣を喚び出す瞬間に明久の召喚獣が攻撃を開始する。
しかし……、

ズリッ（足が躓く音）

バタッバタッ（躓いた反動で転倒する音）

ガンッ！！（卓袱台の脚に頭をうつ音）

「だあああ！！こんな所に卓袱台つて痛い！！」

召喚獣がぶつかった痛みが明久にフィードバックする。ましてや周りが

呆然とした空気になっていた。

「流石はEクラス代表。なかなかやるじゃないか」

明久はすぐに体制を立て直してからそう言い張った。

「全く役に立たない護衛ね・・・」

中林が呆れる。

もうどうでもいい状況になっているのは気のせいだろうか・・・。

「いいや、十分に役に立ったさ」

閑話休題。

「それじゃ、代表自らあなたに引導を渡してあげるわ」

中林は雄二に勝負を仕掛ける。

「覚悟して。Eクラス代表中林宏美、坂本雄二に――」

中林が最後に言葉を告げようとしたその時、

ガラッ（ドアが開く音）

「待って下さい！」

補充を終えた瑞希が教室へと入ってきた。

「姫路瑞希、受けます！召喚獣召喚、試獣^{サモン}召喚！！」

そして彼女は召喚獣を喚び出した。

「行きます！」

そして瑞希はEクラス部隊を全て抹殺した。

「なんだあの点数は！？」

「Aクラス並の攻撃力？」

「なんでFクラスにそんな生徒が・・・」

周りの部隊は瑞希の点数を見て驚いた。

数学

Fクラス

姫路瑞希

412点

「やっときたか」

「姫路さん！」

雄二と明久が喜んでいると、

「よし、みんなお待ちせー!!」

そして一騎も同じくFクラスへと戻ってきた。

「一騎!!」

「姫路瑞希つてもしかしてあなたは・・・」

中林が言葉を最後まで言おうとした時、

「行くぞ！千藤一騎、受ける！！試験召喚獣、サモン試獣召喚！！」

一騎は召喚獣を換び出した。

「吉井!!」

「島田さん？」

美波も更にこの教室へと戻ってきた。

「姫路さん（この娘）、やっぱりすごいわ!!」

「俺も結構頑張ったけどね・・・」

これは先程の出来事へと遡る。

美波は瑞希と一騎のテストのやり具合を見て、手を動かす余裕はなかった。

そして2人は数秒でテストの問題用紙を尽く終わらせていた。

「流石はAクラス候補だったってだけはあるな」

雄二は関心するように彼女を励ます。

「あれが姫路さんの成績？」

「時間内問題数無制限の文月学園のテストは、答えられれば何点でも取れる」

「それじゃあ、作戦つてのは」

「テストの時間稼ぎだな」

雄二の一言で明久は逆に損した表情になる。

「Fクラスにそんな人がいるなんて聞いてないわよ！」

「それじゃあ行きます！」

「俺も参加していいかな？瑞希」

そして瑞希と一騎は一斉に中林に攻撃を仕掛けた。

「これで終わりだ！！」

「そんな・・・」

2人の点数を合わせるとその数値は800点である。

数学

Fクラス

千藤一騎

388点

&

数学

Fクラス

姫路瑞希

412点

V
S

数学

Eクラス

中林宏美

0点

「やった！勝ったぞ！！」

「一騎も点数すごいわね」

明久が喜んでいる中、美波は一騎を褒めた。

かくしてこの試験召喚戦争は、Fクラスの勝利で幕を閉じた。

第十三問 バカと親友とDクラス戦？

「やったー！凄いよ姫路さん！」

Eクラスに勝って喜ぶ明久は瑞希を褒めた。

「これも姫路さんの力のおかげだよ」

「そんな、ありがとうございます」

そして瑞希は明久に礼を口にした。

「これで僕らはEクラスと教室の設備を交換出来るんだよね。少しだけど、今までより良い環境になるよ」

明久が設備の交換のことを雄二に尋ねるが、

「いいや、設備は交換しない」

雄二はそれを拒否する。

「設備は今までのままだ。良い提案だろ？Eクラス代表さん」
「そんな、どうして・・・」

中林は雄二の提案で少し戸惑うような言い方になる。

「何でだよ雄二！折角勝ったのに・・・」

「俺達の目標は何だ」

「それは・・・Aクラスのシステムデスクだけど・・・」

明久は雄二の一言で自信をなくしたかのように黙り込んでしまう。

「そうだ。俺達はAクラスの豪華なシステムデスクを目標として
いる。」

Eクラスの設備では何もメリットはない」

「別に少し設備を良くしてもいいのに・・・」

一騎も心配してしまう。

「どうした、やけに自信をなくしたかのような言い方は」

「な、お前には関係ないだろ」

アルフは一騎の体から一度出てから語りかけた。

「まあいいさ。何をしようが俺にとっては知ったこっちゃないか
らな」

「あれ？一騎、誰と話してるの？」

明久が尋ねてくる。

「え？明久にはこいつは見えないの？」

一騎は必死で指を指すが、

「どうしたのさ、いきなり変な独り言を言って」

「何か変な物を食ったのか？」

明久はおるか、雄二も尋ねてきた。

「そいつは困るな、俺の事が見えないとは・・・」

「おいアルフ！これは一体・・・」

「生憎だがお前を除けばあの巨乳の女とポニーテールの女しか魂の塊の状態の俺の姿は確認できていない。と言うよりはなぜか女しか

俺の姿を見ることが出来ないようだ」

アルフは簡単な補足説明を口にする。

「だからあの時、俺がここに来る際に女共は俺のことを見て距離を取っていた

と言うのか。普通なら誰も見えないはずなのに・・・」

「そしたら一回俺の体を使って明久達の誤解を解いたらどうなさ」

一騎は仕方なくアルフに提案する。

「懸命な判断だな。男共の誤解を招けばいいのだろ？」

「ああそうさ」

「分かった。ならお前の体を一時的に使わせて貰う」

アルフは一旦一騎の体に戻り、一騎の魂と入れ替わった。

シユユユ・・・（魂が入れ替わる音）

「一騎、どうしたの？」

「そいつなら今眠っている」

「え？一騎・・・？」

明久は思わず固まったような顔になる。

「自己紹介をしよう。俺はアルフ・フォード。
別名、世界の破壊者だ」

「あ！！何であんたがまた出てくるのよ！！」

美波はアルフが出てきたのを見て、突然襲い掛かってきた。

「またお前か。つくづく俺の邪魔をする女だな」

そしてアルフは美波のスカートの裾を容赦なく捲り上げた。

「少しは落ち着くと言う動作を出来ないのか」

「きゃあああああ！！！！」

美波は思わず悲鳴を上げてしまう。

「な、何するのよー！！！！！」

美波は自分のスカートの裾を押さえながらアルフを殴った。

「俺を殴ってもいいのか？こいつも傷つくことになるぞ」

「うるさい！早く一騎から離れなさい！！」

「待った。俺はちゃんとした用事があってこいつの魂と入れ替わったのさ」

アルフは明久の元へ近づいた。

「いいか。俺は悪魔でも魂の塊だけの存在だ。
だから今こいつと魂を入れ替わりながら行動している」

「そんなこと言われても・・・」

しかしアルフが説明しても明久は戸惑ってしまう。

「それで、簡単に纏めると――」

事情を説明中

「うーん。何かいまいち理解出来ないような事情が含んでいる部分がある

と思うが、何となく分かったよ」

「お前、アルフって言ったな。俺は坂本雄二だ」

「僕は吉井明久。よろしく」

「ワシは木下秀吉じゃ」

「・・・・・・土屋康太」

雄二から順番に、自己紹介をしてゆく4人。

「と言う訳だ。俺はそろそろ眠りに付つく」

「あのさ、聞きたいことがあるんだけど」

明久はアルフに一つ質問する。

「・・・・・・何色だった？」

「・・・・・・白と水色の縞々模様だった」

「吉井、何を話しているのかしら・・・？」

そこへ美波が明久に攻撃態勢を取るが、

「いや、違うよ！ただ・・・」

「何言ってるのよ。あいつはウチ自ら成敗を下すから」

ジョークのつもりだったらしい。

「話を戻すぞ。まずはEクラスは落とした。次はDクラスを落とす！」

雄二が次の標的を示したのは、Dクラスである。

「戦後、回復テストが終わり次第、Dクラスに宣戦布告を行う」

「分かった」

「そこでだ、明久」

そして雄二は明久にこう言った。

「お前にしか出来ない役目がある」

数十分後

「何か言っ事は？」

そこには無残な姿の明久が。

「よく騙されるな」

「うきやああああ！！！」

明久は怒りを爆発させた。

翌日、Dクラス戦が開戦された

「それじゃ、作戦通りに行動しろ。お前らの検討を祈る！！！」

「「「「「おおおおおお！！！！！！」」」」」

そして、Dクラス戦は開始された。

第十四回 バカと親友とDクラス戦？

新学期2日目。

Fクラスが次に攻めるのはDクラス。そこで、代表の坂本雄二が作戦の内容を簡潔に述べた。

「今日はDクラスに攻め込む。今回は、それぞれ何部隊かに分かれて行動しろ。それから――」

気が付けばすでに午後一時半頃である。

「よし、開戦だ！作戦通りに行動してくれ！お前らの健闘を祈る！――」

「――おおおおおおお！――」

そして、Dクラス戦が開戦された。

「吉井、一騎！」

ここは明久と美波と一騎の部隊。部隊長は明久になっている。そして美波は明久と一騎に今の戦況を報告した。

「木下達がDクラスの連中と踊り場で交戦状態に入ったわよ！」
「そうなんだ。そしたら援護しなきゃな」

一騎はすぐさま秀吉率いる部隊の護衛する準備に取り掛かった。
一方、明久は突然美波を見つめ始めた。

（改めて見ると背は高く、脚も綺麗なのに、何処か女性として魅力に欠けてる

のは何が足りないんだろ）

「なッ何よ」

明久に見られてる美波は思わず動揺してしまう。

「ああ胸か」

「アンタの指を折るわ……。小指から順に全部綺麗に（こき、ぽき）」

明久が平然と言い張ると美波は攻撃態勢を取った。

「そッそれよりホラ！試召戦争に集中しないと！」

それにびびる明久は慌てて話を逸らした。

ちなみに明久本人はこの部隊の隊長に引き受けた覚えはない。しかし、

美波と一騎と同じ部隊の中戦場に立っている。

今現在、前線にいるのは秀吉率いる先行部隊でそのはるか後方に明久の部隊

がいる。部隊長である以上、明久には部隊を導く義務がある。そして明久は今の状況を聞き取る。

「0点になつた戦死者は補習ううううう!!」

「げっ鉄人!? 嫌だ! 補習室は嫌なんだ!」

「黙れ! 捕虜はこの戦争が終わるまで特別講義だ! 何時間かかるか分からんが

たっぷりと指導してやる!」

「鬼の補習は嫌だ!」

「たっ頼む! 見逃してくれ! あんな拷問は耐えられない!」

「あれは立派な教育だ。終わる頃には趣味が勉強で尊敬する人は

二宮金次郎

といった理想的な生徒に仕立て上げてやるから覚悟しろ!!」

「鬼だ! 誰か助けっ、イヤアアア・・・」

(よし、雰囲気はだいたい分かった・・・)

「島田さん、一騎。中堅部隊全員に通達」

「ん? 何? 作戦? 何て伝えんの?」

「何か思いついたの?」

そして明久はこう告げた。

「総員退避と!」

「この意気地なし！！！！（ズブッ！！）」

殴られた。しかもチョキで……。

「目がツ目があッ！！！」

目潰しされた明久は地面にのた打ち回った。

「目を覚まさない、この馬鹿！！！」

「美波、流石にこれはやりすぎなんじゃ……」

一騎が話しかけるが全く見向きもしないようだ。

「部隊長が臆病風に吹かれてどうするのよ！」

（その覚ますべき目に激痛が！！せめてグーかパーで殴って！）

明久は震えながら号泣する。普通の女の子ならビンタするのが当たり前だろう……。

「いい吉井？ウチらの役割は木下達が戦闘で消耗した点数を補給する
間、前線を維持する事ですよ」

美波は再度、明久に今回の作戦の内容を述べた。

「ウチらが逃げたらアイツら補給出来ないじゃない！」

「言われてみればそうだね」

「一騎もまともに聞いてなかったのね……」

美波は呆れた状態になる。あの時の一騎は居眠りをしていたので
まともに

話を聞いてなかったのである。

「ごめん・・・、僕が間違ってたよ・・・。この戦闘に勝利する
ことだけ

考えよう！」

「ええ！それに個別戦闘は弱いかもしれないけど、多対一で戦えば
大丈夫よ」

「そうだね。よし、やるぞ！」

「その意気よ、吉井！」

明久はようやくやる気を出した。しかし、

「島田、前線部隊が後退を開始したぞ！」

ここで同じ部隊の男子が今の戦況の報告をした。

「総員退避よ」

美波は退避命令を出した。

「吉井、問題ないわね？」

（さっきと言ってる事が全然違うよ？）

明久はこの光景を見て疑問に思っただけである。しかし敢えて、

「よし、逃げよう。僕らには荷が重過ぎた」

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ」

「ねえ・・・、これでいいの・・・？」

場の状況に合わせた。一騎は納得いかない様子で止めようとする。

「ん？」

「横田じゃない。どうしたの？」

そこへほかの部隊の横田が報告しにきた。

「代表より伝令があります！」

どうやら雄二からの伝言のようだ。

「『逃げたらコロス』と」

「全員突撃しろおおおおッ！！！」

その瞬間、明久達は一斉に突撃した。どうやら美波の判断の方が正しかった

ような気がする。一騎は思った。

「明久！！！」

そこへ別の部隊にいる秀吉がやってきた。

「援護に来てくれたんじゃない！」

秀吉は嬉しいのか、いかにも女の子らしい表情を見せた。

「秀吉、いつも可愛い……。大丈夫？」
「……………」

明久の行動で美波と一騎は啞然とした状態になった。

「うむ……。戦死は免れておる。じゃが点数はかなり削られてしまったわい……」

今の状況はかなり点数が消耗した状態のようだ。

「そうなの？召喚獣の様子は？」
「これ以上の戦闘は無理じゃのう」

美波が召喚獣の事を伺うと秀吉は戦闘不可能と告げる。

「じゃあ、早く戻ってテストを受け直さないかね」
「そうしないとすぐにやられてしまうよ」
「そうじゃな……。時間的に――二教科がいい所じゃな」

秀吉はすぐに点数を補充するために補給室へと向かった。

「吉井、試召戦争のルールは覚えてる？」

美波は念のために明久に試召戦争のルールを確認させる。

「その科目の教師がいないと召喚は出来ないからね」
「確か明久は昨日、一步も教室から出てないんだったね」
「それは雄二の作戦で……。でもルールは分かってる！」

そして3人は戦争が行われる新校舎へと向かった。

美波曰く、試召戦争には色々なルールや制約がある。今日のDクラス戦は

学年主任立会いのため、総合科目の召喚獣勝負のはずなのだが・・。

「吉井、一騎、見て!」

「どうしたの? 美波」

「五十嵐先生と布施先生よ!」

「その2人の先生が担当しているのは・・。」

「化学だよ、一騎」

「Dクラスの奴ら、化学教師を引っ張ってきたわね!」

美波が警戒しているのは、化学の担当の教師2人のことである。

「なるほど。立会人を増やして一気に片をつけにきたってワケか」

明久も少し警戒してしまう。

「島田さん、化学に自信は?」

「全くなし。60点台常連よ」

「これはかなりキツイかも・・。」

「じゃあ五十嵐先生達に近付かないように学年主任の所へ行こう!」

「高橋先生ね? 了解!」

そして急いで高橋主任の所へ移動するが、

「そこにいるのは美波お姉さま!! 五十嵐先生、こっちに来て下さい!」

そこへ現れたのか、3人の行く手を阻むのはDクラスの清水美春だった。

「ここは俺が——」

「よし、島田さんここは君に任せた！」

一騎がかわりに戦闘しようとするが、明久は無視して美波に任せようとした。

「ちょ……！普通逆じゃない！？」

『ここは僕に任せて！』とかじゃないの！？」

美波は必死で諭すが、

「そんな台詞、リアルじゃ通用しない……」

「吉井！？このゲス野郎！！」

明久は邪道と化した。

「お姉さま、逃がしません！」

「くッ美春、やるしかないってことね……！！」

そして美波は仕方なく美春と勝負する事になった。

「「サモン試獣召喚ッ！！」」

そして2人が召喚獣を喚び出すと、足元からは幾何学的模様が現れて

そこから自分と似た顔の召喚獣が姿を現した。

「お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を、一日千秋の思いで待っていました・・・」

美春はそのような事を語り始めた。

ちなみに正月と盆の日は忘れていらしい。

「ちょっと！！いい加減ウチの事は諦めてよ！」

「島田さん（美波）、お姉さまって——」

この会話は益々エスカレートしてしまう。

「嫌です！美春のお姉さまはお姉さまだけなんです！」

「来ないでよ！ウチは普通に男が好きなの！」

「嘘です！お姉さまは美春のことを愛しているはずですよ！」

「このわからずや！」

何だか美波が遠いと感じる明久と一騎。

「行きます！お姉さま！」

そして美春の召喚獣は美波の召喚獣に接近して、

「やあッ！！」

攻撃した。しかし呆気なく斬り払いされる。

「くう・・・ッ」

「相手の方が点数高いのに真正面からは不利だ！」

「そんな事言われても細かい動作は出来ないのよっ！」

「ここまでですッ！」

そうこしてる間に美春の召喚獣は美波の召喚獣にもう一発の攻撃を繰り出した。

「きゃ！」

美波の召喚獣は懇親の一撃を食らってしまった。

化学

Dクラス

清水美春

94点

V
S

化学

Fクラス

島田美波

53点

そして窮地に負いつけられた美波の召喚獣に美春の召喚獣は、

「さ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

剣をむけて降伏しろと告げる。

「嫌ッ！補習室は嫌あッ！！」

「補習室？・・・フッ」

美春は補習室という単語である事を思いついた。

「え？美波を連れてどうするつもりなんだ！？」

一騎は美春を呼び止めるが、

「ふふっお姉さま、今ならベッドは空いてますからね」

美春はよだれを垂らしながら美波を一番危険な場所へと連れて行くようにする。

「！！！！（ゾクッ！）」

そして美波が見えた先には・・・、

明久は美波を助けるよちもなく別れの台詞を言い張った。

「邪魔者は殺しますッ！！！」

「明久！！」

美春は明久に攻撃を仕掛けた。

第十五回 バカと親友とDクラス戦？

「邪魔者は殺しますッ！！！」

（このままじゃ僕も召喚獣を出さないといけなくなってしまっけどかと言ってあの娘の召喚獣と戦っても僕が痛いだけだしなあ・

・

明久は攻撃を仕掛けてきた美春に恐れてしまっ。

（とりあえずは距離をとろう）

明久は少し距離をとろうとするが、

「敵前逃亡は・・・わかってるよな？」

後ろには鉄人がいつの間にか待機してた。そして美春の召喚獣は剣を振り出した。

（補習室だけは嫌あああッ！！）

「吉井危ないッ！！試獣^{サモン}召喚ッ！」

「俺も援護する！！」

ここで一騎と須川が明久を助けた。

「島田さんとの戦闘が思いの外、効いてたのか!!」

Fクラス

化学

千藤一騎

115点

&

Fクラス

化学

須川亮

71点

V
S

Dクラス

化学

清水美春

41点

「大丈夫！？明久！」

「うん、何とか大丈夫だよ」

助けられた明久はホッと一息する。

「島田も大丈夫か？」

「助かったわ、須川……。本当にありがとう」

一方、美波は助けられた須川に礼を言った。

「西村先生！！早くこの危険人物を補習室へお願いします！」

美波は鉄人にそう頼んだ。

「おお清水か。たつぷりと勉強漬けにしてやるぞ……」

「美春は諦めませんか！」

このまま無事卒業出来るなんて思わないで下さいね！」

美春はそう言い残して鉄人に補習室へと連れて行かれた。

明久は色々な意味で良い戦いだったと関心した。

「吉井」

「島田さんお疲れ！一度戻って化学のテストを受けてきなよ」

「吉井……」

「さっ須川君、戦争はまだこれからだ」

「吉井ッ！！」

「はひいッ！！」

明久は一瞬びっくりしてしまふ。

「・・・ウチを見捨てたわね？」
「・・・記憶にございません」

美波は明久の肩を鷲掴みするように強く締め付けた。
そしてしばらく沈黙の時間が続いたのだが・・・、

「死になさい、吉井明久！！試^{サモ}獣召——」
「誰か！！島田さんが錯乱した！本陣に連行してくれ！！」

明久は美波が錯乱したと確認をとり、本陣に連行を指示した。

「落ち着け！！吉井隊長は味方だぞ！」

須川が美波を押さえつけるが、

「違うわ！！コイツは敵！ウチの最大の敵なの！」

どうやら明久は美波の妨げと化したようだ。
そしてそれについても否定は出来ないのだろう・・・。

「・・・もう俺にはどう対処すればいいのか分からないな」

一騎は明久に内緒で別のルートをただ独りで進んだ。

「す、須川君。よろしく」
「了解」

「こら放しなさい！！」

明久は動揺するかのように須川に連行させる。

「吉井！絶対許さないからね！！」

「早く連れてって！その禍々しい視線だけで殺されそうだ！」

「ちよつと放し——殺してやるんだからぁ——ッ！！」

そして美波は須川に連行されたのであった。

「さあ皆！秀吉達が補給してる間、前線を維持するんだ！

一歩も進ませないように！！」

「させるな！！一気に攻め落とせ！！」

明久達は前線を出来るだけ維持するために再戦した。

——その頃、一騎は……——

「はぁ……。何か俺にできる事はないかな……」
「全くだ。俺も一暴れしたいのだから」

一騎とアルフは溜め息混じりでそう呟いた。

「？何だろう……。？」

廊下をひたすら回っていると一騎はある物に視線を移した。

「どうかしたか」

「いや、何て言うか……。あれは……」

（気のせいか……）

「んで、結局何があったんだ？」

「いや、何もなかった」

「そうか……」

一騎が答えると、アルフは敵を迎撃する準備を行った。

「俺はこう見えても戦い慣れしている」

「そうか、お前は破壊者なんだよな」

（今のは、Dクラスの人だったのか……？
それともDクラスの代表だったのか……？）

一騎は今でも疑問に思いながら敵の迎撃体制をとった。

「来るぞ……！」

「わかってる！」

「ここで俺とお前の力を見せつけてやるうではないか！」

「そうだな、お前の力をあてにさせて貰うぞアルフ！」

一騎とアルフはDクラスの部隊の迎撃に入った。

第十六問 バカと親友とDクラス戦？

明久には内緒で単独行動をしている一騎とアルフの前に現れたDクラスの部隊が奇襲を仕掛けてきた。

「いたぞ！あいつをブツ倒せ！！」

Dクラス部隊全員が召喚獣を換び出し、一騎に攻撃を仕掛ける。

「よし、アルフ！俺に力を貸せ！」

「分かった。俺のとおっておきの能力を披露してやる」

アルフは一旦一騎から離れ、準備を整える。

「行くぞ！試獣^{サモン}召喚！！」

体制を立てる一騎は自分の召喚獣を換び出す。
そしてアルフは一騎の召喚獣に乗り移った。

「そうさ。これが俺の隠し玉、人間以外の物に取り付く能力だ」
「これでアルフも戦えるな。だけど手加減はしろよ」

一騎が忠告すると「了解」と答えるアルフ。

（っーか隠し玉の事はもっと早く言ってくれよ・・・）

一騎は若干呆れた顔で発言するようにアルフを見つめた。

「さあ来い！勝負だ！！」

「後から後悔するな！みんな、やってしまえ！！」

Dクラス部隊が攻撃を開始する。

「させるか！これでもくらうんだな！」

一騎の召喚獣に取り付いたアルフは、相手の召喚獣を切り裂いた。

「何だ！？なんでこいつの召喚獣も物体に触れることが出来るんだ！？」

Dクラス部隊の1人が驚く。

「何でつて……。アルフ、これはどういう事なんだ？」

「実は俺の能力の1つで霊体のままで物に触れる事が可能なのさ。関係ないがこの学園の召喚獣は物には一切触れる事が出来ないが、

奴の場合は観察処分者という肩書きがあるからほかの人間とは違い

自分の召喚獣で物に触れる事が出来る」

「それは昨日説明されたから分かるけど……」

「おっと、閑話休題だ。俺の能力についての結論は、霊体の状態ならば

あらゆる物に触るのが可能ってわけだ。ちなみによく分からない部分

があれば今度ゆっくり話してやる」

「ああ……。それより戦いに集中しないと！」

一騎は戦争に集中し、除々に敵部隊を殲滅させる。

化学

Fクラス

千藤一騎

109点

多少のダメージで点数が消耗したものの、何とか戦場に立っていた。

「0点になった戦死者は補習ううううう!!!」

「「「いやだあああああ!!!!!!」」」

そしてDクラス部隊の何割かが鉄人にさらわれてゆく姿も確認される。

「ふう……。これでは代表の場所へと進むだけ——」

『お知らせします。船越先生、船越先生、至急Dクラスへ来て下さい』

一騎がDクラスへと向かおうとしたが、突然のアナウンスが入ってきた。

「この声は、確か同じクラスの須川君じゃ・・・？」

一騎はこのアナウンスの続きを聞いた。

『吉井明久君が待っています。生徒と教師の垣根を越えた男と女の大事な話があるそうです——』

アナウンスしている須川が突然変な戯言を発言した。
ちなみに船越女史は数学を担当している。噂によれば婚期を逃しては

ついに生徒に単位を盾に交際を迫るようになったらしい。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

一騎とアルフは2人して無言の状態で頷いた。

『皆！！吉井隊長の死を無駄にするな！』

『絶対に勝つぞーっ！』

『おおッ！！』

遠くからはこんな声援らしき台詞が聞こえてくる。

『須川 ああああああッ！！！！！』

そして明久の叫びの声も。そしてこの日、明久にまた新たに
邪悪な生徒の名前が歴史に名を刻まれた。

「……………先を進むか、アルフ」

「……………そうだな、一騎」

2人は一般ビープルの状態でDクラスへと進んだ。

第十七回 バカと親友とDクラス戦？

一騎が単独行動をしている一方、明久の部隊で戦死者が続出していた。

「工藤信也戦死！！」

「森川が戻ってこない！やられたのか！？」

18人いた明久の部隊の残り5人となった。そろそろ前線と自身（精神的な意味で）の限界だと感じてしまう明久。

「明久！！」

そこで雄二が前線へとやってきた。

「あと少し持ちこたえろッ！！」

「雄二！！」

「援軍だ！！合流される前に吉井達を全滅させる！面倒なことになるぞ！！」

Dクラス部隊が明久達の部隊に攻撃を仕掛ける。

「残り4人！！」

「3人！！」

「どんどん行くぞこれで2人！！」

「次はお前だ、吉井明久！その首級貰った！！」

次は明久に攻撃を仕掛けるDクラス部隊。

（こうなったら、やるしかない！）

そして明久は前に出て、

「負けてたまるかあッ！！試^{サモン}獣召喚！」

召喚獣を換び出す。

「Fクラス中堅部隊隊長吉井明久！貴公の相手をあがッ！！！」

明久が台詞を最後まで喋ろうとするが、相手の召喚獣の攻撃で自分の

召喚獣が受けた痛みが自分にフィードバックしてしまう。

（痛い痛いッ！！何で突っ込んでくる敵の正面に出てくるんだ！？）

「くたばれ吉井！！」

敵の召喚獣が斧を振り回すが、

「そうは……いっくかッ！！」

「なッ！？」

何とか脚払いに成功する。

「ああッ霧島さんのスカートが捲れてるッ！！」

「「「何いッ！？」」」

そして明久はいきなり妙な一言を叫んだ。

「霧島さんのパンツはどこだ!？」

「パンツは誰にも渡さないぞ!!」

しかし効果は抜群のようだ。

そして明久は周りが騒いでいる隙に、

ビュッ（上履きを投げる音）

ガシャアアンッ!!（窓が割れる音）

「なッ何事だ!？」

自分の上履きを投げつけ、廊下の窓を割った。

「うわッ、島田さん!そんな物をどうするんだ!？」

更に明久は消火器を持ち出し、美波に話しかけるかのように驚く。

「うッうわ!何だ!？」

そしてその消火器を放射させる。

「ベッベッ!こりゃ消火器の粉じゃねえか!」

「前が何も見えないぞ!!」

「島田さんッ君はなんて事を!!」

またもや美波に話しかける演技をする明久。

（これで島田さんが犯人だと思ってくれるだろう。これで僕の身も安全だ）

「Fクラスの島田か！なんて卑怯な奴なんだ!!」

「許せねえ!!彼女にしたいくないランキングに載せてやる!!」

「在学中には彼氏が出来ないようにしてやる!!」

「でも男らしくステキ・・・」

骨の――二本では済まされそうもないようだ。

「だあッ!!」

そして明久は使い切った消火器を天井に投げつけた。
当たった天井からは水が放出される。

「待たせたな吉井！Fクラス近藤、行きます!!試^{サモン}獣召喚!!」

ここでFクラスの近藤が援護に入った。

「チエストオオオッ!!」

近藤は召喚獣を喚び、敵を殲滅させる。

「くッここは退くぞ!!遅れるな!!」

ピンチになったDクラス部隊が後退してゆく。

「深追いはするな。明久の部隊を回収したら一旦戻るぞ」

雄二は部隊の回収を命じた。

「無事なようだな明久」

「まあね。ってそういえば一騎はどこにいったんだろう・・・？」

「あいつはすぐに教室に戻ってくるだろ。さあ、とりあえずは戻って部隊を立て直すぞ」

そして明久達は部隊を立て直すため、一旦教室へと戻った。

「ここがDクラスの拠点か・・・」

その頃、一騎は1人でDクラスの教室へとたどり着いた。

「ようやく本丸のお出ましか」

「ここに代表がいるみたいだな」

アルフは近衛部隊がいないか周りの様子を窺う。

「どうやらほかの雑魚はいないようだ」
「そうか、ならそこへ——」

「ここで何をやってるのかな？」

「!？」

2人がDクラスへと攻めようとしたが、教室から人らしき影が現れた。

「誰だ！」

「俺はこのDクラス代表の平賀源二だ」

「代表だと……。ボス自らお出ましとは良い度胸してるよな」

一騎は緊張感を高ぶるように呟く。

「あれ？君1人だけなのか？代表の俺の前に出て」

「五月蠅いぞ、ここで君を倒してこの戦争を終わらせるんだ！」

そして互いに召喚獣を換び出した。

「「サモン試獣召喚——」」

互いの足元からは幾何学模様のようなものが出現し、そこからは自分に似た

顔にデフォルメされた召喚獣が姿を現した。

「よし、勝負だ平賀——」

「こい、一撃で倒してやる！」

（ようやくボスの召喚獣が出たか。こんな奴など俺の敵ではない！）

アルフも闘争心を高ぶるように相手の召喚獣を攻撃する。

「うおおおおお！！」

「はあああああ！！」

ここで一騎VS平賀の戦いが始まった。

第十八回 バカと親友とDクラス戦？

「流石は平賀……。なかなかやるな……。！」

一騎は一人でDクラスの教室へと侵入したが、ここでDクラス代表の

平賀と遭遇して召喚獣勝負を行っていた。

「俺も伊達にDクラスではないんだよ。来い！」

平賀は近衛部隊を呼んだ。

「了解！ 奴を倒します！」

「ちい！ 今俺には誰も援護してくれる人がいないからかなりキツイのに。」

早くも万事休すなのか……。！」

「どうした？ もう終わりか？」

一騎は一度平賀から一步下がった。

「尻尾を巻いて逃げるつもりか」

「それはどうかな？」

そして一騎はアルフにこう指示した。

「アルフ！ 今から俺の言うとおりに攻撃しろ！」

「何だ、こんな時にお前が俺に命令か。んで、どうすればいい？」

「平賀の召喚獣の後ろに回り込むんだ！ それから……。お前の自由

で攻撃をしろ！」

「一見敵にとってはバレバレの行動だが、やってやるよ」
「何独り言を言ってるのかな？もう終わりにしようか！」

アルフは平賀の召喚獣の後ろに回りこんだ。そして、

「がら空きだー！」

「何！？」

懷に飛び込もうとする平賀の召喚獣だが、アルフの攻撃であっけなく

失敗に終わる。そしてこの攻撃により、平賀の点数がかなり消耗した。

化学

Dクラス

平賀源二

39点

V S

化学

Fクラス

千藤一騎

82点

「そんな・・・ッ！ここまで追い込まれるとは・・・！」
「ふん。たいしたことなかったな」

アルフは余裕の表情を見せる。だが・・・、

「いいや。ほかの先生をつれて来い」
「了解！」

後がなくなった平賀は、近衛部隊の1人に別の教師を連れてくるようにと

命令した。

「待てよ！途中で教科を変更するなんてせこいじゃないか！」
「そんなの常識だ。まさかそんな事知らないで
試召戦争に参加しているのか。こんなの誰だって同じさ」

「くそ、何て外道な・・・ッ!!」

平賀の言葉でアルフは更に平賀に牙を向ける。

「待てアルフ。これは丁度良いかもしれない」

「なぜだ？」

一騎は何かを提案した。

「もし、教科変更で俺の得意な教科が出たら逆に好都合だと思う」

「はあ？その何処が良いんだ」

「それは後になったら分かるさ」

一騎の提案でアルフの思考回路が一瞬混乱してしまう。

「連れてきました!」

「ご苦労。化学から古典へと変更して下さい!」

「分かりました」

連れて来たのは古典教師の向井教諭である。

「よし、何とかなりそうだな・・・!」

そして互いの点数が化学から古典へと変更されたその時、

「チャンス!向井先生!Fクラス吉井が・・・」

「Dクラス玉野美紀、試験召喚——」

「なッ!近衛部隊!?!」

後ろから明久が平賀に古典勝負を申し込もうとしたが、近衛部隊

の1人

玉野美紀に勝負を挑まれた。

「明久！来てくれたのか！」

「あれ？一騎もう平賀君と・・・ッ!？」

「残念だったな、船越先生の彼氏くん？」

「だから違うって!!」

明久は先程の須川によるアナウンスでまだ怒ってるようだ。

「さッ玉野さん。テレ屋の彼に祝福を・・・」

「分かりました」

平賀の指示で玉野は攻撃態勢をとる。

「ちくしょうッ!!あと一步でDクラスを僕の手で落とせるのに

!!」

「殆ど俺が戦ったけどな・・・」

一騎は一瞬揶揄された表情になる。

「ぶっ！何を言うかと思えば彼氏くん。幾ら防御が手薄に見えても
Fクラスの間人間が近づいたら流石に近衛部隊が来るに決まってる
だろ？」

「じゃあ何で俺の時はあまり来てなかったんだ!？」

「それは周りの雑魚の退治を任せるためさ」

「何て卑怯な真似だ・・・ッ!!」

アルフは更に平賀に牙を向け出す。

「ま、近衛部隊がいなくてもお前じゃ無理だろうけど」

「それは同感。確かに僕には無理だろうね……。だから――」

明久は一度言葉を挟み、

「姫路さん、よろしくね」

「「は？」」

瑞希にバトンタッチした。それを聞いた平賀と一騎は2人して戦く。

「あ、あの……」

瑞希は平賀の肩を軽く叩く。

「え？あ、姫路さんどうしたの？Aクラスはこっちに通らなかった
と思うけど……」

「いえそうじゃなくて……」

瑞希は体をモジモジと動かしながら答えようとする。

（平賀君、未だに現状が理解出来ないな……。まあ彼女がFク

ラス

だなんて思わないか）

明久は悲しい顔で平賀を見つめる。まあそれも無理はない。

「何で瑞希がここに……？」

しかし一騎は未だに瑞希がここに来た理由が分からない。

「Fクラスの姫路瑞希です・・・えつとよろしくお願いします」

「あ。こちらこそ」

瑞希が辞儀をすると平賀も返答する。

「その・・・平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「はあ・・・どうも」

そして互いに準備が完了する。

「あの、えつと・・・さ、試^{サモン}獣召喚です!」

瑞希は召喚獣を喚び出し、互いの召喚獣に点数表示された。

現代国語
129点

Dクラス

平賀源二

V
S

現代国語
39点

Fクラス

姫路瑞希

3

「え？あッあれ？」

「ゴッごめんなさいッ！！」

瑞希が攻撃を指令し、平賀の点数を0点にした。

この攻撃により、この試召戦争はFクラスの勝利で終戦したのであった。

第十九問 秘密の恋文？

「ごっごめんなさいッ！！」

平賀に現代国語勝負を申し込んだ瑞希は一撃で平賀を戦死させた。

「「「うおおおッ！！」」」

平賀の戦死により、Fクラス一同は大喜びする。

「凄げえよ！！Dクラスに勝てるなんて！」

「やっぱり坂本は凄い奴だったんだな！！」

「坂本万歳！！」

「姫路さん愛してます！」

二度目の勝利でも喜ぶのは大したことではなく、かなり良いことである。

「そんなバカな・・・」

負けた平賀は悔しい気持ちになった。

「あーまあなんだ、そう褒められるとなんつか・・・」

雄二は少し頬を赤めてしまう。

「坂本！！握手してくれ！」

「俺も！」

Fクラス一同は雄二に握手を申し込んだ。

「雄二！」

「ん？明久か」

「僕も雄二と握手を！！！」

突然賑やかな気分になりながら雄二に握手を申し込む明久。だが・
・、

ガシッ（明久の手首を掴む音）

「雄二・・・どうして握手なのに手首を押さえるのかな・・・！」

雄二は明久の手首を押さえる。

「押さえるに・・・決まっているだろうが・・・ッ！フンッ！！！」

そして雄二は明久の右腕ごとを捻じ曲げる。

「ぐあッ！！！」

カッ（包丁が地面に刺さる音）

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言になった2人は包丁を見つめる。

「雄二、皆で何かをやり遂げるって素晴らしいね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「こんな素敵な事だなんて今まで知らな間接が折れるように痛いッー!!」

雄二は更に明久の右腕を捻じ曲げる。それをやられてる明久にかなりの

激痛が通ってくる。

「・・・・今、何をしようとした？」

「もッ勿論、勝利を祝うための握手を手首がもげるほど痛いッ

!」

「おい誰かペンチ持ってきてくれ——」

「すっストップ!! 僕が悪かった!」

明久は自分が行おうとした事が悪いと認め、明久の手首を離す雄二。

恐らく、あの包丁は雄二を抹殺するための道具なのだろう。

「チッ」

明久を解放した雄二はなぜか舌打ちする。

（尋常じゃないほど痛かった・・・・。というかペンチで一体何を・・・・）

「・・・生爪・・・」

そして雄二は妙な一言を呟いた。明久とて二度と逆らうまいだろう・・・。

「まさか姫路さんがFクラスだなんて・・・信じられん」

負けた平賀が何かを否定するような言い方で悔しがる。

「あッそのツさつきはすいません・・・」

平賀の一言で瑞希は思わず謝ってしまう。

「いや謝ることはない。Fクラスを甘く見た俺達が悪いんだ」

しかし平賀自身も謝る。

「ルール通りにクラスを明け渡そう。」

あ、ただ今日はもう遅いから作業は明日でいいか？」

平賀は教室の設備交換を認める。

（なんだが可哀想だな。彼らが次の戦争を起こせるのは3ヶ月後

その間代表の彼はあの教室でクラスの皆に恨まれながら過ごすのか・・・）

それを聞いた明久は寂しそうな顔で平賀を見つめる。

「ねえ、1つ聞きたいんだけど・・・」

「どうした？」

瑞希にとどめを刺されずと固まった状態の一騎がようやく動き、雄二に質問を伺う。

「本当は俺がとどめを刺したかったんだけどあれは作戦の内なの？」

「お前・・・、作戦の内容をよく聞いてなかったのかよ・・・」
「今まで俺がやってきた努力が全て無駄骨になったんだけど・・・」

「自業自得だ。俺は知らん」

一騎の質問の内容に雄二は頷きながら話を終了させる。

「え・・・？ちよつと・・・まだ・・・」

「悪いが設備は交換しない」

完全に一騎を無視して話を戻す雄二。

「え？折角普通の設備が手に入るのに？」

「忘れたのか？俺達の目標は悪魔でもAクラスだろ？」

「じゃあやつぱり最初からAクラスを何で標的にしないのさ？」

雄二の二度目の設備交換拒否で明久は一番の標的の進撃について問いかける。

「少しは自分で考える。だからお前は近所の中学生に『バカなお兄ちゃん』

って呼ばれるんだ」

「なッ！中学生にそんな事言われるわけないだろ！」

明久は思わず顔が赤くなりながら叫ぶ。

「おつとすまない……。近所の小学生だったか」

雄二はにやにやを笑いながら弁解する。

「……まだ園児には言われてないし……」

「まさか……本当に言われたことがあるのか」

明久が答えると雄二は驚きながら明久から距離を取る。

（見ないで！そんな目で僕を見ないで！！）

世の中はそんなに甘くはない。

「とツとにかくだな……。Dクラスの設備には手を出すつもりはない」

「僕達にはありがたいが……。本当にそれでいいのか？」

「勿論条件がある」

「……一応聞かせて貰おうか」

それを聞いた平賀は雄二に条件の内容を伺う。

「そんなに大した事じゃない……。俺が合図したら『ある物』を動かなくして欲しい。それだけだ」

そして雄二はある物を示すべく、一旦移動した。

「Bクラスの室外機か」

「ああ。設備を壊せば教師に睨まれるかもしれないが、
そう悪い取引じゃないだろう？」

「こちらとしては願ってもない提案だがなぜそんなことを？」

「次のBクラス戦には必要なんだな・・・」

Bクラスの室外機に目にした雄二は次のBクラス線において
使用する予定だと考えられる。

「さあ皆！点数の補給テストを行うから今日はゆっくり休んでく
れ！」

雄二はクラス一同に解散をさせた。

「雄二、僕らも帰ろうか」

「そうだな」

「あ、そうだ。よかつたら一騎も一緒に帰らない？」

明久は放置された一騎に話しかける。

「ごめん、俺ちょっと先生に頼まれてる事があるんだ」

「そうなんだ。じゃあまた明日ね」

明久と雄二が帰ろうとした時、

「あッあの、坂本君ッ！」

瑞希が雄二を呼び止めた。

「ん？どうした姫路。俺に何か用か？」

「実は坂本君に聞きたい事があるんです。ちょっといいですか？」
「おうわかった」

雄二は話に乗り、瑞希と共に少し離れた所に移動した。

「ねえ明久、瑞希は一体何を話したいんだろうね」

「確かに、姫路さんあんなに熱心に雄二と話すなんて・・・気になる」

2人が会話する光景を明久と一騎はただ見届けることしか出来なかった。

「・・・？明久？」

一騎は明久の様子を窺う。

（あれ・・・僕忘れられてる！？眼中にない！？畜生！！
それだつたら―――）

明久は何かを発言しそうになるが・・・、

（スカート捲り放題じゃないかッ！！）

何とか抑えた。色々な意味で・・・。

「・・・じゃあ俺はもう行くね・・・」

一騎は静かにこの場から立ち去る。

「まッ元々興味はあつたが、きつかけはコイツ
がそんな相談をしてきたって事だ」

「あのッ吉井君がそんな事言い出した理由って・・・」

「さて？そう言えば振り分け試験で何かあつたみたいだが
バカはバカなりに譲れない物があつたって事だろ？」

一方、雄二と瑞希の会話では明久が振り分け試験の時の事を
言い出した内容を雄二が簡単に話す。

「俺の口から言えるのはこれが限界だと思うが、多分姫路の想像は
間違つてないと思うぞ」

雄二の最後の一言で瑞希は顔を赤くして胸を押さえた。

「さて明久、帰るぞ」

「あッ姫路さんとはもういいの？」

「ああこれで決心も固まっただろうし・・・な？」

「ひやッ！？（ボンッ！）」

再び雄二が質問すると、瑞希の顔が完全に赤くなった。

「ふーんそつか、じゃ姫路さんまたね！」

「あッはい！さようなら！」

そして明久が手を振ると、瑞希はかなり焦りながら挨拶した。

「・・・・・・・・ツ！！」

ダッ！（誰かが通る音）

「・・・・・・・・？」

瑞希は誰かが通った感覚を感じたが、

その主までは見通す事が出来なかった。そして1人でFクラスへと戻った。

「はい、これが貴方の身分証明書と生徒手帳です」
「ありがとうございます」

所変わって職員室。一騎は仕事の前に高橋主任から生徒手帳と自分の身分証明書を受け取る。

「では、俺は頼まれた仕事をやりますのでこれで」
「わかりました。それではまた明日お会いしましょう」

そして一騎は職員室から退室した。

「お前、よくそんな面倒な仕事を受け入れたようだな」
廊下を歩こうとすると、アルフが尋ねて来た。

「まあな、別にそこまで面倒じゃないけど」
「そうか。ならいい」

アルフは一騎の体に戻ると一騎も仕事をする場所へと移動した。

「・・・私自身の決心」

そしてFクラスの教室。瑞希は雄二が言ってたことを思い出し、
鞆から紙と筆を取り出した。

「私の気持ち、ちゃんと届いてくれたらいいな・・・」

瑞希はそう呟き、何かを書き始めた。

第二十問 秘密の恋文？

「さっき坂本君が言った私の想像は間違っていないとは一体どういう事なのかな・・・？」

Fクラスにただ1人だけの瑞希が手紙を書きながら呟く。

「きっと私が吉井君の事を――」

考えながら手紙を書いてると、

「たっだいまー！なーんて・・・」

明久が教室へと戻ってきた。

「よッ吉井君！？」

「あれ？姫路さん？何書いてるの？」

「どどどどっしたんですか！？」

明久が突然教室に来たのを驚き、瑞希は慌てて手紙を隠そうとする。

「あッあの、これはッ！！」

（まるで雄二へのラブレターに使うような便箋と封筒が見えるけど・・・使い道がわからない・・・）

しかし明久には何がなんだかさっぱりわからない物に見える。

「こッこれはですねッ、そのッ！」

今にも焦っている瑞希は事情を話そうと立ち上がる。

「えっと——ふあッ!？」

しかしあまりの緊張で足を滑らせ転倒してしまっ
すると明久に書き掛けの手紙が見えてしまった。

『私はずっとあなたの事を見ていました。あの時、私をかばった
あなたが

ものすごく遅しく見えてその時の時間は今でも覚えています。

そして、

今の私の気持ちをここで伝えたいと思います』

手紙に書かれた内容を明久は見る。そして最後にはこう書かれて
いた。

『あなたの事が好きです』

（まるで、ラブレターみたいな手紙だな。まさか、
教室でラブレターを書く人なんているはずないじゃないか・・・

）

最後の文章で明久は一瞬驚きそうな目になるが、瑞希の元へ近づき
彼女の手を握って立たせる。

「あッあのッその、これは違うんです。あッいえ、違わないんですけど

違うんですッ！」

手紙を見られた瑞希が慌てて弁解する。すると明久は、

「変わった不幸の手紙だね」

不幸の手紙と答えた。

「あッあのそれはそれで凄く困る勘違いですけど・・・」
「そんな事しなくても言ってくれれば」

僕が直接手を下してあげるのに・・・」

「吉井君、これは不幸の手紙じゃないですから！」

瑞希が否定するが、

「嘘だ！！それは不幸の手紙だ！実際に僕は今こんな不幸な気分になつてるじゃないか！！あと、僕が正しい不幸の手紙の書き方を教えてあげるけど・・・」

明久は暴れながら自分が不幸な気分だと謳う。

「吉井君・・・」

すると瑞希は明久の両手を握り、落ち着かせようと話しかける。

「落ち着いて下さい・・・。そんなに暴れると、身体をぶつけて

怪我

をしちゃいますよ？」

瑞希の思わぬ行動に明久は一瞬ドキッとくるが、

「・・・仕方ない。現実を認めよう」

泣きながら現実を認めた。

（こんな敗北感、二日ぶりぐらいだ・・・！！）

「じゃあその手紙相手はウチのクラスの——」
「・・・はい、クラスメイトです」

（これで確定した。間違いない……。相手は雄二だ）

再び泣きだす明久は何かを勘違いしてるのかもしれないだろう。

「そつか……。でもそいつのどこがいいの？確かに外見なんか大した事じゃないし……」

「あッいえ外見じゃなくて……。あッ勿論外見も好きですけど！」

「憎いッ！！あの男が心底憎いッ！」

外見も好きと発言した瑞希に明久は教室の壁を叩きながら叫ぶ。

「そう……。ですか？」

「うん……。外見に自信のない僕には羨ましくて……」

「え？どうしてですか！？とっても格好いいですよ！」

私の友達も騒いでましたし！」

「え？ホント？」

そして明久は瑞希の方へ振り向き、話を聞く。

「よくわからないですけど坂本君と2人でいる姿を見て、『遅い坂本君と』

美少年の吉井君が歩いてると絵になるよね』って……」

「いい友達だね。仲良くしてあげてね」

頷きながら関心する明久。

「『やっぱり吉井君が受けなのかな？』とも……。……？」

「前言撤回。その友達とは距離をおこう……。姫路さんにはまだちょっと早い」

（僕が雄二と・・・？おえ・・・）

しかし今の一言でドン引きしてしまう明久。多分、友達の言う受けという

のはあまり触れてはいけない内容なのだろう・・・。

「そういや、外見もってことは中身もいいの？」

「あッえーっと・・・はい」

「そうだね。肝臓とか頑丈そうだもんね」

「それは身体の中身です」

彼女の言う中身は性格や雰囲気のことである。

「まさかありえないと思うけど・・・そいつの性格が？」

「ありえなくありませんッ!!」

だが明久のありえないという単語で瑞希は思わず叫んでしまう。

（そこまで雄二の事が好きなんて・・・）

「・・・そいつの性格のどこがいいの？」

明久は何とか粘りながら質問を続ける。

「やッ優しいところとか・・・」

（優しい？僕を騙した拳句、EクラスやDクラスにボコらせたり手首が？げそうなほど僕の間接を捻り上げたあの性格が優しいと？）

しかしまだ明久は何かを勘違いしてしまう。

「今から番号を教えるからメモしてね？大丈夫——とっても腕のいい脳外科医だから」

「別に気が変になったわけじゃありませんッ！！」

（そうなのかッ！？そこまでして雄二の方がいいのかッ！！）

明久が今行おうとしたのは恐らく彼女が精神がおかしくなった事を考えて教えようとしたのだろう。

「優しくて明るくていつも楽しそうで……ずっと私の憧れだったんです……」

「そ、そう……？姫路さん、その手紙」

「はッはい」

明久は何事もなかったかのように瑞希にこう激励した。

「良い返事が貰えるといいね」

「はいッ！」

言われた瑞希は手を胸に当て、笑みを浮かべながら返事をした。

「ふう……。やっと仕事が終わったか……」

所変わって3階の旧校舎廊下。仕事を終えた一騎は教室へと戻ろうとした。

「それにしてもお前は結構仕事が出来る奴だな。一体何が卓越しているんだ？」

「さあな。もしかしたら最初からあったのかもな」

アルフと会話をしながら教室に入る一騎。

「ん？2人共何してるの？」

「げっ！？一騎！？」

「千藤君！？」

一騎が教室に戻った事を驚く明久と瑞希。すると一騎は自分の卓
袱台
の下にある鞆を取り出す。

「2人は何してたの？」

「ちよつと明日の補給テストの事で今姫路さんに勉強を教えて貰
ってる

所なんだよ、あはははは！！」

「そうなんだ。俺も教えて貰おうと思ったんだけどなあ」

「一騎は十分に頭良いじゃないか」

「俺にもわからない所はあるんだよ。そうだ」

鞆を背負う一騎はある事を提案した。

「もしよかつたら3人で一緒に帰らないか？」

「ええ！？どうしたんですかッ！？」

「今瑞希の顔が赤くなつたよ」

「ちよつと、千藤君ッ！？」

一騎の提案で顔を隠す瑞希。しかし一騎は何とも思わない表情で本音を発言する。

「ごめん、冗談だよ・・・」

「一騎がこういう事を言うのは昔から変わらないんだね」

「うん、これが癖になっちゃってね・・・」

一騎に揶揄された瑞希は自分の鞆を手に取り筆記用具をしまう。

「確かに、良い提案だと思います・・・」

「そうだね、こうやって僕と姫路さんが一騎と再会するのも久しぶりだもんね」

「よし、それで決まりだな。（ボソッ）それとアルフ、もし万が一瑞希に

手を出したらその場で殺すからな・・・！」

「了解、そうしておいてやるよ。ありがたく思え」

アルフがそう答えると3人は教室から出て帰る事にした。

「それじゃ、俺はここで曲がるから2人共また明日な」

「じゃあね一騎」

「さようなら千藤君」

途中の分かれ道で別れを告げた一騎はアルフに話しかける。

「なあアルフ、今日の試召戦争は結構白熱したな」

「ああそうだな。だが本丸はあの巨乳女にとどめを刺されたけどな」

「余計な事言っつなよ！ただ、次の試召戦争に備えて明日の補給テスト」

「頑張らなきゃな」

「あまり寝すぎるなよ？」

こうして、一騎とアルフのDクラス戦は幕を下ろした。

第二十一問 弁当の悪夢？

「ふああああ・・・」

「やけにあくびを掻いてるが、昨日遅く起きてたじゃないか」

あくびを掻きながら歩く一騎にアルフが話しかける。

「ああ、昨日は徹夜で勉強してたからなあああ・・・」

「遅刻寸前になってはいないものの

どうにかならないかそのあくび・・・」

アルフが忠告してるのにも関わらず一騎はあくびを連発する。

「いいよなお前は、魂の塊の状態で」

教科書を手に取りながらアルフを睨み付ける一騎。なのにアルフは何も見向きもしないで話を逸らす態度をとる。

「それより、そろそろ時間がヤバイと思うのだが」

「マジかよッ！？早く教室に入らないとッ！」

時間を確認した一騎は急いで教室に入ろうとする。が・・・、

「吉井ッ！！（ガッ！！）」

「ぐぶあッ！！！！！」

そこには明久は殴り飛ばす島田美波の姿が。

「しッ島田さん、おはよう・・・」

「おはようじゃないわよッ!!」

（これは一体、どういう事なんだ・・・!?!）

これを目撃した一騎は何も喋る言葉も出なかった。

「アンタ昨日ウチを見捨てただけじゃなく、窓ガラスや消火器を壊したとして器物破損の罪までかぶせたわね・・・!」

そして最後に美波はこう言い放った。

「おかげで彼女にしてくれないランキングが上がったじゃない!!」

（まだ上がる余地があつた事が意外だ）

「——と本来は掴みかかっている所だけど」

（掴む前に殴つたのは何!?!）

すると美波は明久の元へ近づき、

「アンタにはもう充分罰が与えられているようだし許してあげる」

「うん・・・さつきから鼻血が止まらないんだ・・・」

「いやそうじゃなくてね」

最後に何かを伝えようとした。

!

アア！！！！！！！！！！

これを聞いた明久は、全てを失ったかのように絶望したのであった。

キンコンカーンコン・・・

そして四時間目のチャイムが鳴り響く。

「うあーーーー・・・づがれだー！。やっと四教科が終わった・・・

」

テストを受け倒された明久はようやく解放感を得られた。ちなみに船越女史には近所のお兄さん（39歳独身）を紹介したのでこれで明久の貞操は守られたとか。

「うむ、疲れたのう」

すると同じく疲れている秀吉がやって来た。

（これは僕のストライクゾーンと真ん中だよ！男のくせに僕を惑わすなんて！どこぞのポニーテールとは大違いだ！）

明久が喜んでいるのは今の秀吉の髪型がポニーテールの状態だからである。

「なんだろう・・・この可愛さ・・・ッ！」

一騎も思わず心が射抜かれたような気持ちになる。

「よしッ昼飯食いに行くか！」

「あッウチも一緒にいい？」

ここで雄二が昼ごはんを食べに行こうと提案する。

「じゃ僕は贅沢にソルトウォーターでも・・・」

ここでみんなが教室から出ようとした時、

（ちなみに、ソルトウォーター＝塩水である）

「あ、あの皆さん！」

瑞希が呼び止めた。

「どうしたの？瑞希」

「え、えっと・・・おッお昼なんですけど、そのッー昨日の約束の・・・」

「おお、もしか弁当かの？」

「はッはい、迷惑じゃなかったらどうぞ！」

そして瑞希は弁当箱を出した。

「迷惑なもんか！ねッ雄二！」

「ああそうだな。ありがたい」

「寧ろ嬉しいよ」

「そうですか？良かった〜」

喜んでくれた明久達に瑞希は嬉しそうに労う。

（まだ嬉しそう・・・やっぱり優しい女の子の気持ちってよくわからない）

しかし明久には瑞希の嬉しそうな気持ちがわからないようだ。

「むー・・・ッ姫路さんって意外と積極的なね・・・」

（厳しい女の子の気持ちもよくわからない）

更に瑞希を睨む美波の気持ちも理解出来ない明久であった。

「折角のご馳走じゃし、こんな教室ではなく屋上でも行くかのう」
「賛成！」

秀吉の提案により、一騎が賛成する。すると雄二がみんなに何かを伝えようとする。

「だったらお前らは先に行ってくれ」

「ん？雄二はどこか行くの？」

ここで明久が質問を伺う。

「飲み物でも買ってくる。昨日の礼の兼ねてな！」

「あッそれならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

「だったら俺も一緒に行きたいけど」

雄二がそう答えると、美波と一騎も同行する。

（島田さんが気遣いだと！？まさか僕の飲み物に毒を盛るつもりか！？）

しかし明久には悪影響の道しか考えていなかった。

「きちんと俺達の分とっておけよ」

「大丈夫だってば」

そう言い残し、雄二と美波と一騎は教室を後にした。

「僕らも行こうか」

「そうですね」

続いて明久達も教室を後にした。

「しかし島田も大変だな」
「え？」

所変わって廊下の自販機前。雄二が美波に何かを言おうとした。

「気の利く恋敵ライバルがいるとさ」
「言われていればそうかも」
「なッ!？」

雄二が平然と告げると、美波の顔が赤くなった。

「ちょっとよっ！からかわないでよッ！」
「ごめんごめん・・・」

雄二に同情した一騎は美波に謝る。

「ウチだって、やる時はやるんだから・・・」

すると美波は後ろを振り向きながらそう呟いた。

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•

「つッ土屋君!？」

このような悪夢になるといふのはまだ誰も知らない。

第二十二問 弁当の悪夢？

その事件発生は数分前に遡る。

「もうそろそろ屋上だね」

階段を上がっている明久が笑顔をみせながら皆に伝えた。

「そうじゃな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・もうついた」

そして屋上のドアを開け、

「天気が良くてなによりじゃ」

「そうですねー」

秀吉が日差しの良い環境を取れて嬉しそうな仕草をとる。また、同じく

瑞希も同様の反応をとる。そして敷物を敷き、明久達は座り込んだ。

「人もいなくて貸切状態だし、日差しと風が気持ちいいねー」

今日の天気は晴れなので勿論、ポカポカとした青空が見えてくる。そこで瑞希が弁当箱を開けようとする。

「あんまり自信はないんですけど・・・」

瑞希が少し苦笑いをするような言い方でふたを開ける。すると、

「おおッ！！！」

「こッこれは！！！」

3人が見たのは誰もが作りそうな物とは少し違っておかずも含むごく一般的な手作り弁当だった。

「凄いよ姫路さん！！塩と砂糖以外の物が入ってるよ！」

「よッ喜んでもらえて良かったです・・・」

明久の言葉で瑞希の思考回路が一瞬追いつけなくなってしまっが、

「吉井君や皆に栄養をつけてもらおうと思って、張り切っちゃいましたっ」

瑞希はそれ程でもった言った反応で振る舞う。

「姫路は良い嫁さんになりそうじゃのう」

（秀吉もね！！）

すると秀吉が関心しながら瑞希を褒めた。

「ではお先にこの美味しそうなエビフライを・・・」

嬉しそうな明久は最初にエビフライから頼張ろうとするが、

「あッずるいぞムッツリーニッ！！」

ムッツリーニが先に頼張った。すると、

ゴッ！！（ムツツリー二の後頭部が地面に激突した音）

（！？）

この光景を目撃した明久と秀吉は思わず驚いてしまう。

「わわッ土屋君！？」

倒れたムツツリー二に、瑞希が声を掛ける。

「・・・つッ土屋君？」

しかしムツツリー二は何とか立ち上がり、

「・・・（グッ）」

「あッお口に合いましたか？良かったですッ」

美味いと表現するムツツリー二に、無事でホッとする瑞希。

（多分『凄く美味しいぞ』と言ってるんだろうけど、僕にはK O 寸前のボクサーしか見えないよッ！！）

だがムツツリー二の脚はガクガクと震えている。

「皆さん、どんどん食べて下さいね！」

何も感じない瑞希は笑顔でそう言い張る。

（さっきのムツツリー二どう思う？）

（・・・どう考えても演技には見えん）

（だよね、ヤバイよね）

瑞希に気づかれないうちにヒソヒソと会話する明久と秀吉。すると秀吉は明久にこう尋ねてきた。

（明久、お主身体は頑丈か？）

（正直胃袋には自信ないよ。食事の回数が少な過ぎて退化してるから・・・）

明久が自信ないと言った瞬間、

（ならばここはワシに任せてもらおう）

（そッそんな！？危険過ぎるよッ！！）

秀吉が自ら食べようと答える。

（大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋でな、ジャガイモの芽程度なら

食ってもびくともせん）

明久が危険と言うが、秀吉は自分の胃袋の頑丈さを説明する。

（良い子の皆はジャガイモの芽を食るのはやめましょう）

(でッでも!!)

(安心せい・・・ワシの鉄の胃袋を信じて・・・)

2人の口論が勃発している中、

「おう、待たせたな!」

飲み物を買に行った雄二がやって来た。

「へーこりゃ旨そうじゃないか!どれどれ・・・」

「あつ雄二!」

玉子焼き一つを頬張った雄二に明久が止めようとする。すると、

ガッ!! (雄二の顔面が地面に激突する音)

「さッ坂本!」

このタイミングで美波と一騎が戻ってくるが、美波はこの光景に驚いてしまう。

「ちよつとどうしたの!」

「まさか一体何があったのさ!」

（間違いない・・・コイツは本物だ・・・）

地面に倒れながら身体全体を痙攣させる雄二に明久は戦く。

（毒を負ったな？）

（毒じゃなくて姫路さんの実力だよ・・・）

だが雄二は何とか起き上がる。

「あ、足が・・・つつてな・・・」

「そうか・・・、それならいいけど・・・」

すると一騎は焦りながら雄二を支えた。

「ダッシュで階段を昇り降りしたからじゃない？」

「うむ、そうじゃな」

「そうなの？坂本って充分鍛えられてると思うけど・・・」

そこへ美波が心配そうに呟くが、

（余計な事を言い出す前に退場させた方がいいな・・・）

明久と秀吉は恐る恐るとした顔で美波を退場させようとする。

「あつ島田さん、その右手ついてるあたりでさ、

さつき虫潰しちゃったんだよね」

「ええ！？早く言つてよ！！」

明久がそう示すと美波は慌てて右手を上げ出す。まあここに虫は一匹も飛んでいないが。

「ごめんごめん、とにかく手を洗った方がいいよ？」
「そうね・・・ちょっと行って来る・・・」

やがて美波はもう一度廊下に出る羽目になった。

「明久・・・。今のはわざとらしいと思うんだが・・・」
「気にしない、気にしない」

一騎はわざとらしいと感じて明久に声を掛けるが、途中で話を中断させられてしまう。

「島田はなかなか食事に取り付けずにおるのう」
「全くだね」

更には周りが笑顔の状態になるが、一騎ただ1人は疑わしく思えてしまう。

（何だこの光景は・・・）

昼寝を丁度終了したアルフが目を覚まし、この光景に呆れ果てた。

（明久ッ今度はお前が行け！）

（むッ無理だよ！！僕だったらきつと死んじゃう！）

（ワシもさっきまでの決意が鈍ってくるわい・・・）

とうとうこの会話に雄二も介入してしまった。

（雄二がいきなよ！！姫路さんは雄二に食べてもらいたいはずだ

よ！)

(そうかのう？姫路は明久に食べて貰いたそうじゃが)

(そんなことないよ！乙女心がわかってないね！)

(いやわかってないのはどちらかと言うとお前の事だと――)

(ええい、往生際が悪い！！)

「瑞希、俺の分取っていいか？」

「はいどうぞ」

「ありがとう」

この口論が勃発している中、一騎は自分の分のおかずを盛り、飲み物を開けた。すると、

「あッ姫路さんアレはなんだ!？」

「えっ？なんですか？」

明久が空を示すと瑞希は何かを探し出す。その間に、

「おらあッ!！」

「もごあッ!？」

明久は雄二を押さえつけ、弁当を無理やり雄二の口の中へ入れ込み、

「ご飯はよく、噛みましょうッ!！」

次に雄二の頭と顎を無理やり動かした。

「ふう・・・これでよし!！」

「・・・お主存外鬼畜じゃな」

何とか弁当の処理を完了し—安心する明久に、秀吉はなすすべもなかった。

「ごめん、見間違いだったよ」

「あッそうだったんですか」

「お弁当美味しかったよ。ご馳走様」

「うむ、大変良い腕じゃ」

「あれ？もう食べちゃったんですか？」

だが瑞希には美味しかったと告げる2人。

「うん！特に雄二が『美味しい美味しい』って凄い勢いで」

「そうですか、嬉しいですね」

明久の演技（？）で瑞希がとても喜ぶ。

「いやいやこちらこそありがとう。ねッ雄二？」

「う・・・うう・・・あッありがとうな・・・姫路・・・」

そして身体のありとあらゆるものが

崩壊しかけている雄二が瑞希に礼を言った。

「あッそういえば美味しいと言えば駅前に新しい喫茶店が——

「あの洋菓子が評判の店じゃな」

「そんなお店があるんですか？」

更に明久は喫茶店の話題に変える。

「今度、今日のお礼に雄二が奢ってくれてさ」

「つてめ、勝手な事言うなつての！」

（また作つてくるとか言われる前に話を逸らしてみたいけど、
上手くいったみたいだ）

何とか安心してホッとする明久だが、この悪夢はまだ終わらない。

第二十三問 弁当の悪夢？

ここまでで瑞希の弁当を食べ、瀕死したのは2人。しかしこの恐怖はまだ終了してはいないのである。

「あッそうでした」

瑞希は何かを思い出し、もう1つのたっぱを取り出した。

「実はですねー、デザートもあるんですっ」

「」「」「」「」「」

3人の悪寒は更に急上昇させ、恐怖心も高ぶる一方なのである。

「ああッ！姫路さんッアレはなんだッ！？」

「明久ッ！！次は俺でもきつと死ぬ！」

だが雄二にはこればかりは無理だと核心してしまう。

（俺を殺す気かッ！？）

（この任務は雄二にしか出来ない！ここは任せたぜッ）

（馬鹿を言うなッ！！そんな少年漫画みたいな笑顔で言われても
できん！）

（この意気地なしッ！！）

（そこまで言うならお前にやらせてやる！）

（なッ僕をどうする気！？）

（拳をキサマの鳩尾に打ち込んだ後で存分に詰め込んでやる！歯
を食いしばれ！！）

（いやぁーッ！！殺人鬼！）

明久&雄二の争いが勃発し始めようとしたその時、

（・・・ワシが行こう）

（秀吉！？）

秀吉自ら食べようと答えた。

（無茶だよ！死んじゃうよッ！！）

（俺のことは率先して犠牲にしたよな！？）

（大丈夫じゃ。ワシの胃袋はかなりの強度を誇る・・・。せいぜい消化不足程度じゃろう）

「どうかしましたか？」

「あッいや！何でもないよッ！！」

なんて話してる内に瑞希に声を掛けられる。

「あ・・・そしかして・・・」

（バレたか！？）

瑞希は悲しそうな顔で何かを言う様子に明久は弁当の味が不味い事が気づかれたと思ってしまう。だが、

「スプーンじゃないと食べにくいですよねっ。あれれ、一緒に持ってきたのに・・・」

瑞希はスプーンを探しているようだ。

（天ね……。純粹過ぎて色々不安です）

物事が単純な程、誤解してしまう所が多いものなのです。

「どうも教室に忘れてきちゃったみたいです。取ってきますねっ」

そう言い残し、瑞希は屋上を後にした。それと同時に明久と雄二は一安心した。

「さて、この間に頂くとするかの」

「ごめん……。ありがとう」

「……。すまん恩にきる」

「どうしたの？さつきから不安な様子ばかりだけど」

明久達の行動が気になったのか、恐る恐る諭してみる一騎。

「一騎、この弁当は食べてはいけないべきだよ」

「……。はあ？何でだよ？」

「この弁当は、地獄だ……」

雄二は自分の飲み物を飲み干しながらそう呟いた。

「もう盛っちゃったけどな……」

「そうなんだ、一騎はそこまでして死を選ぶのか！」

「いや、死ってなんの話だよ……」

「簡単に結論付けると姫路の弁当は科学兵器と言う事だ」

どんなに説明しても一騎には理解出来なかった。

「本当に死んでしまうのか・・・」

「別に死ぬわけでもあるまいし気にするでない」

「そッそつだね！」

「ああ秀吉！頼んだぞ！！」

秀吉は箸を持ち、デザートを前に立ちはだかる。

「では、頂きます」

そして一気にデザートを食べ込んだ。

「なんじゃ、意外と普通じゃ・・・、ゴばああッ！！」

すると豪快に吐き出した。そしてまた一輪花が散った・・・命と
いう儚い花が。

「・・・雄二」

「・・・なんだ？」

「さつきは無理矢理食べさせてゴメン・・・」

「わかってもらえたならいい」

瀕死した秀吉を見て、明久は雄二に謝った。

「そんなことより、早く食べようかな」

「おい、俺にも分ける」

ここで腹が空いてたのかこの光景が気になり一騎から出てきたのは
かつて世界の破壊者と呼ばれたアルフ・フォードであった。

「何でだよ、これは俺の分だ。お前の分はもうない。それ以前に

お前は魂だけなんだろう？だから食べ物を食べる必要がないはずだろうが」

「寝言をほざくな。俺だってこの状態でも腹は空く。きちんと食い物を」

「食わないと成仏してしまう」

「お前なあ・・・」

一騎は呆れた顔でアルフの分のおがずを仕方なく分けた。

「これでいいだろ」

「すまないな。だがこのままでは食う事ができん。一度お前の体を借りる」

「そうかよ。わかったよ・・・」

そう言いつつ、一騎は一度アルフに自分の体を貸した。

「ふん、ではこの球体っぽい食い物から頼張るとするか」

「この声って、まさかッ!!」

「あんたはあの時の世界の何とかの」

「そうだ、腹ごしらえするために今はこいつの体を使ってる」

アルフはおにぎりを手に持ち、躊躇なく口に頬張った。

「あッ!!それを食べちゃ——」

「何を騒いでる。これ、結構美味いぞ」

「「何iiiiiiii!!??」」

アルフがおにぎりを食べ、平気な状態でいられた姿を見て、明久と雄二

は一緒に驚いた。そして次々とおかずを頼張るアルフに2人は何も話す

言葉もなかった。

「これも美味しいな。あの巨乳女、かなり美味しい飯を振舞ってくれたものだな」

最後に秀吉が食べかけたデザートも一口で平らげた。

「デザート如きで吐き出すとは愚かな人間だな。こいつは一体どうなったら

食い物で吐き出すかが知りたいぐらいだ」

「いや、あんたがどうなったらこの食べ物達を食べるかが知りたいわ!!」

アルフの台詞で雄二は思わず叫んでしまう。

「あ、やばいな。アイツの分まで食ってしまったようだ。まあ俺にとってはそんなの知った事ではない」

この時間で、アルフが瑞希の弁当を平らげたのはもはや伝説としか言い様がなかった明久達であった。一部の例外を除いては……。

第二十四問　そしてBクラス戦へ

「そう言えば坂本、次の目標なんだけど」

明久達の活躍（？）により、無事に昼食を終え弁当箱をしまった後に美波が雄二に何かを尋ねる。

「試召戦争のか？」

「うん、相手はBクラスなの？」

「ああそうだ」

雄二が即答するが、美波は不機嫌そうな顔で腹を空かせてる。

彼女は運悪く、昼飯を食べ損なったからこんな顔になっているのに間違い

ないはずなのだろう。

210

「何も食べてないなら後で俺が何か買ってあげるよ」

「・・・ありがとう、一騎」

（くそ、アルフの奴。勝ってに俺の分まで食いやがって・・・！）

しかし一騎も同じ気持ちである。

「何度も聞いているけど目標はAクラスじゃないの？」

「ほら秀吉、お茶をいっぱい飲んだ方がいいよ・・・」

美波が更に尋ねてる一方、明久は未だに恐怖のどん底から解放されていない

秀吉にお茶を飲ませようと心配している。

「正直に言おう。どんな作戦でもうちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

(!?)

雄二は正直に降伏宣言告げた。これを聞いた明久は、

(雄二らしくない降伏宣言……。無理もないか。Aクラスは格が違う。)

トップ10人は本当にヤバイ……。特に代表の霧島さん……。作戦が

成功しても彼女1人を取り囲んでも返り討ちに遭うだろう……

)

ちょっとした予測を想像してしまう。

「どんな作戦でも代表を倒せない限り勝利はない……」

「それじゃ最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言ってる事が違うじゃないか」

雄二はまじめに答えるが、明久は違うと指摘する。

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

「一騎打ちに？どうやって？」

「Bクラスを使う」

疑問に思った明久が聞きつけると、雄二はBクラスを使うと答え

る。

「下位クラスが負けたら設備はどうなるか知っているな？」

「（ビクッ！）え！？えーと・・・」

明久は一瞬戸惑ってしまいが、

「（ひそひそ・・・）吉井君、下位クラスは負けると設備ランクを一つ落とされるんですよ」

瑞希が変わりに教えてくれた。

「つまりBクラスならCクラスの設備になるってわけだ」

「そうだね、常識だね」

「・・・では、Aクラスが負けた場合は？」

簡単な質問を問いかける雄二。そんな質問に明久は、

「悔しい！」

「ムツツリーニ、ペンチ」

と答えたにも関わらず、雄二はムツツリーニにペンチを用意させた。

「僕を爪切り要らずの身体にする動きがッ!？」

「相手クラスと設備が入れ替わるんですよね？」

「明久は相変わらず性懲りもない発言するね・・・」

一騎は心配をするのか、少し呆れた仕草で呟く。

「そのシステムを利用して交渉する」

「交渉なんぞにに応じてくれるかのう・・・」

（そんな無駄なやり取りするより一気に畳み掛けた方が良いと思うのだがな）

この会話を聞いてるアルフが率直な感想を呟いた。

「Bクラスをやったなら設備入れ替えを盾にAクラスを攻めると交渉する。」

Fクラス設備になるよりAクラスに負けるだけならCクラス設備で済むから

まずうまくいくだろう」

「ふんふん、それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』

って具合にな」

雄二は説明を続けながら紙に交渉方法の説明を書き込む。つまり雄二が行う

事はBクラスが敗北した後のタイミングを見計らい、設備の入れ替えを済ませる

ようにした後にAクラスとの交渉に乗り込むと言った作戦の定かだと予測を

しているのだろう。すると明久は理解したような感じだと思わせつつ、

（なるほど・・・。学年2位のクラスとの戦争後に連戦・・・。何の得

もないAクラスか嫌がるはずだ）

真剣な考え方で後先の事を考えた。

「じゃがそれでも問題はあるじゃろう。一騎打ちよりもAクラスとしては試召戦争

の方は確實じゃからな。それに、そもそも一騎打ちで勝てるのじゃろうか？」

ここで秀吉が一騎打ちの事で不安を抱くような言い方で雄二に質問を伺う。

「こちらに姫路がいることは既に知っているだろう。それに関しては

考えがある……。心配するな」

「それなら信じるけど……」

一騎も若干困った顔で納得する。

「とにかくBクラスをやるぞ！細かい事はその後だ」

「まあ考えがあるならいいけど……」

明久も同様の反応を取ってしまう。

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行って宣戦布告して来い」

「断る。雄二が行けばいいじゃないか」

明久は今度は行かないつもりで雄二に押し付ける。

「やれやれ、それならジャンケンで決めないか？」
「ジャンケン？」

（うーん。問答無用で行かされるよりマシか・・・）

「OK、乗った。それじゃ、ジャンケンに負けた方はBクラスに
宣戦布告を

しに行くって事で良いね？」

「ただのジャンケンじゃつまらないし、心理戦ありで行こう」

雄二が提案すると、

「分かった！それじゃ、僕はグーを出す！」

と答える明久。それに対し雄二は、

「そうか、なら俺は——」

一度言葉を挟みこう告げた。

「お前がグーを出さなかったら、ブチ殺す」

（え”！？ちょッ！！何その心理戦！？）

「行くぞ。ジャンケン・・・」

「わあああッ！！」

明久は慌てる否や諦めてグーを出した。

「それじゃ、行つて来い」

「絶対に嫌だ!!」

どうしても拒否をする明久に雄二はこう告げた。

「EクラスやDクラスの時みたいに殴られるのを心配しているのなら、

今度こそ大丈夫だ。保証する」

（騙されるもんか！そうやってまた酷い役割を押し付けるくせに！！）

「なぜなら、Bクラスは美少年好きが多いらしいから、酷い目に
なんか

遭つたりはしない」

「そつか。それなら確かに大丈夫だね」

明久は一瞬安心したような顔になる。

（これは僕にしか出来ない任務だ。責任重大だぞっ）

しかし・・・、

「でもお前不細工だしな・・・」

雄二は嫌味つたらしい言い方で発言する。

「失礼な!! 365度どこからどう見ても美少年じゃないか」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「みんな嫌いだーッ!」

「とにかく頼んだぞー」

明久は号泣しながら去っていった。

そして、放課後

「・・・言い訳を聞こうか？」

そこにはボロボロの状態で帰ってきた明久の姿が立っていた。

「予想通りだ」

「くきいー！殺すッ！殺し切るッ！！」

雄二の言葉で一瞬で襲い掛かる明久。

「落ち着け」

「ぐふぁッ！！」

しかし呆気なく返り討ちにされてしまう。

「先に帰るぞ。明日も午前中はテストなんだから寝すぎるなよ」

と言に残し、雄二は帰った。

「明久・・・、大丈夫？」

「まあね・・・。もうこんなのこりこりだよ」

傷ついた明久に一騎が心配する。

「とりあえずは今日も一緒に帰らないか？」

「うん、そうするよ」

明久は頷きながら一騎に片を背負ってもらったことにした。

「Fクラス風情が宣戦布告とは笑わせる。一つ問題があるな」

「大丈夫なの恭二？FクラスはEクラスとDクラスを倒したのよ？」

「ふん、友香はFクラスが怖いのか？」

「冗談。幾らFクラスが頑張ったって、私達Cクラスは落とせないわ」

「なら俺達Bクラスはもっと落とせないはずだろ？」

「そうだけど・・・」

「最も勝ち続けてるって事は何かあるはずだ。なら、こつちも正面から」

「ぶつかるような危険は冒さない」

「恭二・・・」

「見てな。俺だってバカじゃない。あいつらに目に物見せてやる・・・」

翌日の午後

「さて皆、総合科目テストご苦労だった。午後はBクラスとの試験戦争
召戦争

に突入するが殺す気は充分か？」

「「「おおおおおおッ！」「」「」

「これより作戦会議を行う！今回の戦争は敵を教室に押し込むことが重要になる。」

その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対負けるわけにはいかない。
そこで、

前線部隊の指揮を姫路にとってもらう」

「がッ頑張ります」

「だが、ここに姫路が単独で乗り込んだら集中攻撃を受けてしま
い、

敵代表までたどり着けないだろう」

「前線部隊の指揮をとるならどうすればいいの？」

「そこで今回は、電撃戦で行く。威力偵察部隊が敵陣に突撃して、
後方を

かく乱。敵防衛線に突破口を開き、そして姫路」

「はい」

「突破口から一気に敵中数を強襲。Bクラス代表の首をとれ！」

「はい」

「力を小出しにしたら勝てねえ。防御を捨てて、攻撃に徹し、一
気に攻めて、

負ける前に勝つ！防御こそが最大の防御だ！！」

「雄二・・・」

「野郎共、きつちり死んで来い！」

「「「うおおおおおおッ！！」「」」

キンコンカンコン・・・

そして、チャイムが鳴り響き、

「よし行つて来い！！目指すはシステムデスクだ！」

Bクラス戦が開戦された。

第二十五問 宿敵と恋文と電撃作戦？

時刻は午後2時15分を刺した頃、雄二は明久に何かを指示した。

「明久、お前に役割を与える」

「え？僕が？」

言われた明久は疑問を抱く。

「ああ、お前がこの作戦の要だ。Fクラスならではの戦法を考えてやる。」

それで、敵をかく乱してくれ」

「分かったよ！」

雄二がそう伝えると、明久はその作戦にのった。

ズザザザ……（ダンボールで移動する音）

「何だ、これは」

バツ（ダンボールを上げる音）

「くうん・・・」

ポン（ダンボールを置く音）

「「^{サモン}試獣召喚！！」」

「やられちゃったよー！！」

ボロボロの姿で帰ってきた明久が叫ぶ。すると雄二は、

「何だ、戻ってきたのか」

と躊躇なく即答した。

「戦死すると思ってたのかよ！5人も補習室送りになっちゃったじゃないかッ！」

メンバーが減った事に雄二は「お前がしっかりしてなかったからそうなったんだ」

と呆れつつ明久を叱る。

「それよりムツツリーニ。敵陣のリスト」

雄二に呼ばれたムツツリーニは、敵陣のメンバーが書かれてる紙を差し出した。

「明久、敵の布陣はどうだった？」

「この髪の毛長い女の子に少し髪の毛短めの女の子にあとこの髪を結んでいる」

女の子が前線にいたよ。ほかに・・・あれ？男子の写真は？」

何かおかしいと気づいた明久はムツツリーニにそう尋ねる。

「・・・・・・・・・・そんな物はない」

「それだと分からなくなると思っけどな・・・」

一騎は男子の写真を撮ってきていない状況で困った顔になる。――

騎の言葉

を聞いた明久は「ムツツリー二は女子の写真しか興味がないんだ
った」と
呟く。

「なるほどな。数学の苦手な奴が多いな」

雄二は敵陣のリストを見ながら頷く。数学が苦手な人が多いと分
かった雄二は

次の作戦の項目を告げた。

「そこで、島田が突撃しろ。数学の長谷川先生も確保してやる。
それと、

Bクラスは文系が多い。迂闊に突入せず、周りの敵が殲滅しか
けた所を

攻め込め」

「了解！任せておいて！」

美波が自信満々に答えるが、

「僕の犠牲は何だったんだよッ！」

明久は自分の犠牲が無駄になったと後悔してしまう。

「須川、特別任務の準備だ」

「・・・了解」

雄二に指示された須川は何かの服装に変装した。

「何だ、この恐怖感は・・・」

一騎は思わず動揺してしまう。

（ま、とりあえずは奴の作戦に乗ってやるか・・・）

一騎の中にいるアルフは怪しいプレッシャーを感じつつ、雄二の
作戦

に乗った。

「いたぞッ！！Bクラスだ！」

「高橋先生を連れてるぞ！！」

作戦が実行され、一気に攻め込むFクラスの前線部隊。しかしBクラス側に

高橋主任を連れてくるようだ。

（Bクラスは文系が多いから理系を主武器に強化したけど総合科目で

一気に方をつけるつもりか！？）

「生かして帰すなッ！！」

攻め込むFクラスの前線部隊にBクラスの前線部隊は迎撃体制をとり、

一気にたたみかよとする。

「くそ、戦力が違い過ぎる・・・」

前線メンバーの予想通り、戦力が違う。ましてや人数が多いため簡単に

迎撃されてしまう。

（なッ！？なんて強さだ！！まさに桁が違うッ！！）

この光景に明久は思わず驚愕してしまう。だが、

「流石、Bクラスってだけはあるね。でも、止めを刺される前にフォローするんだ！！」

何とか勇気を振り絞って指示する。

「おっ遅れ・・・まし・・・た・・・。ごめ・・・んなっさい・・・はぁ」

そこへ、急いだのかかなり疲れ果てている様子の瑞希が援護に入った。

「来たぞ！！姫路瑞希だ！」

瑞希の応戦により、Bクラスの前線部隊の殆どがざわつき始める。

「姫路さん。来たばかりで悪いんだけど・・・」

「はっはい、行つて・・・きますっ（フラッ、フラッ）」

ふらつきながら前に出る瑞希だが、すぐに体制を立て直した。

「Bクラス岩下です。Fクラス姫路さんに数学勝負を申し込みます！！」

「律子っ、私も手伝う！」

Bクラスの前線部隊の2人が瑞希に勝負を挑んだ。

（Bクラスは10人しか来てないのに2人がかりと・・・よほど

警戒

してるんだな・・・。）

「あっFクラス姫路です。宜しくお願いします」

瑞希も挨拶を終え、一斉に召喚獣を喚び出した。

「『『試^{サモン}獣召喚！』』」

すると、足元からはおなじみの幾何学模様が浮かび上がり、そこから自分

とよく似た顔の召喚獣が姿を現した。

「あれ？姫路さんの召喚獣、アクセサリーなんてしてるんだね？」
「あっはい。数学は結構解けたので・・・」

明久が尋ねると、瑞希は明久の方へ振り向き簡単に説明する。

「そッそれって！？」

「私達で勝てるわけじゃないじゃないっ！！」

瑞希の脅威的な点数で2人は絶叫してしまう。

「じゃ、いきますね」

パアアア・・・（力を溜め込む音）

「ちょっとちよつと待つてよ！？」

「律子ッ！！とにかく避けないと！」

瑞希の召喚獣の攻撃を回避すべく、2人の召喚獣は分かれたが、

ボオオオオ！！（エネルギー波を放つ音）

「きゃあああーッ!!」

「リッ律子!!」

その内の1人が巻き添えになった。ちなみに今の瑞希の点数は、

Fクラス

姫路瑞希

数学

450点

になっている。前のEクラス戦の時と比べ、だいぶ点数は上がっているようだ。

（そういや一定以上の点数を取ると召喚獣は特殊能力を使える腕輪を

装備できるとかなんとか・・・）

それを見た明久はポンと手を叩きながら納得する。

「ごっごめんなさい！これも勝負ですのっ」

瑞希は焦りながら自分の召喚獣に攻撃の指示をする。

ズバッ！！（一気に相手の召喚獣を切り裂く音）

「いッ岩山と菊山が一撃だ！？そんな馬鹿なッ！？」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手よ！」

瑞希の脅威的な力にほかのBクラスの部隊は驚愕する。

「えーっと・・・みつ皆さん、頑張ってください！」

瑞希の応援で、周りのメンバーは喜び始めた。

「やったるでえーッ！！」

「姫路さん、サイコーッ！！」

しかし信者急増中である。

「姫路さん、とりあえず下がって」

「あっはい」

明久は瑞希を下がらせた。

「やっぱり瑞希は強いな。俺よりよほど成績が良いな」
「そうやって関心したらすぐにやられるぞ」

関心する一騎にアルフは呆れる。

「とにかくあつちはあつちで何とかしてもらって俺は自分の任務を果たすか」

一騎は一旦渡り廊下を後にして、自分の任務を果たすためにBクラスの

教室前へと移動した。だが、一騎に邪気がくる事はまだ知らない。

第二十六問 宿敵と恋文と電撃作戦？

「まずはBクラスの教室の下見だな」

雄二の指示でBクラスの様子を下見する一騎。そこでアルフが少しばかりの

忠告を一騎に告げた。

「おい、迂闊に出てきたらすぐに返り討ちにされるぞ？ここは慎重に

行動するべきだ」

「そんなの分かってるよ。これぐらい出来なきゃ話にならないよ」

しつかり敵本陣の状況を把握しつつ、慎重に行動する一騎。するところ、

「一騎！ちよつと来て、秀吉が呼んでいるよ！」

「明久、どうしたのさそんなに慌てて」

明久が肉食動物に襲われそうな走り方で一騎を呼びつけようとする。

「いいから早く！」

「でも俺はまだ——」

「問答無用ッ！！」

一騎に一切の台詞を言わせる間もなく明久は一騎を連れて行く。

「明久、一騎を連れてきたか」

「うん、連れてきたよ」

「どうしたんだよいきなり・・・」

一騎はさっきまでのやる気を失いつつ秀吉に問いかける。

「ワシらは一旦教室に戻るぞ」

「え？何だよ？」

「Bクラスの代表じゃが・・・、『あの』根本らしい」

秀吉の一言で明久も深刻な顔で聞いてみた。

「根本って『あの』根本恭二？」
「うむ」

答えた秀吉は困った表情で心配してしまう。そう、根本恭二という男はとにかく

評判が悪く、噂ではカンニングの常連だとか……。目的の為に手段を選ばない

らしいが、用心に越したことはないのである。

「……なるほど。戻った方が良さそうだね」

「雄二に何かあるとは思えんが、念のためにの」

「分かった。俺もそうするよ」

3人は念のため、一旦教室へ戻ることにした。

「「「!!!!」」」

そこにはボロボロの状態の卓袱台と、完全に折れた鉛筆などの残骸が目に見えた。

「・・・何だよこれ・・・」

「・・・うわ、こりゃ酷い」

「まさかこうくるとはのう」

「卑怯・・・だね」

この状況を目撃した3人は何も言葉を追加する余地もなかった。

「筆記用具を壊して、点数補給を妨害しようとする算段ってワケか・・・」

「これじゃ補給がままならないね」

「地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

このやり方にかかなりの苦痛な心になる3人に、雄二がやってきてこう答えた。

「おそらく、Bクラスの連中だ・・・」

「雄二はこの状況になったことを知らないの？」

「知らなかった。けどあまり気にするな。修復に時間はかかるが作戦に大きな

支障はない。それに、やることが小さいな・・・」

「言われてみれば地味だな・・・」

雄二はBクラスが引き起こした行動に呆れる。更にそれを聞いた一騎も同情する。

「雄二がそう言うならいいけど・・・。どうして教室がこんなになつてゐるのに

気づかなかったの？」

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印のために教室を空にしていた」

「協定じゃと？」

（なるほどな・・・。だからこいつがない間に教室はこんな状態になった

という事なのか・・・）

アルフもこの状況に少し警戒してしまう。そこへ一騎が雄二に質問を伺う。

「協定つてまさか交渉みたいな事か」

「ああ。午後4時までに決着がつかなかったら明日の午前9時に持ち越し。

その間は試召戦争に関わる行為を一切禁止するってな」

「それ承諾したの？」

「そうだ」

雄二が頷きながら答えると明久は更に問いかける。

「でも体力勝負に持ち込んだ方が僕達に有利じゃない？」

「姫路以外は・・・な」

「あ！」

明久は一瞬何かを思い出す。それを思い出した明久に雄二が更に話しを続ける。

「あいつらを教室に押し込んだら今日は終了だろう。そうになると作戦の本番となる」

明日は姫路個人の戦闘力が重要になるんだ」

「瑞希個人の戦闘力ってまさか今回の電撃戦のことか？」

「そうだ。姫路には前線の指揮をもらっているが、姫路が迂闊に前へ

出たら一気に挟み撃ちにされてやられてしまう可能性があるからこの作戦を決行したんだ。それに、向こう側の跳梁に陥らずに

済むだろうし・・・」

「なるほど。確かにこの協定を結べば、向こうも性懲りもなく攻撃してくる」

心配もないだろうな・・・」

沈んだ空気の中、雄二と一騎は頷き合いながら状況を整理する。これも向こう側が提案してきた協定ならば明日に持ち越せば何とかなるはずなのだろう。

「だから受けたの？姫路さんが万全の態勢で挑めるように」

「そういうことだ。この協定は俺達にとってかなり都合がいい。それと、

後でほかの前線部隊や威力偵察部隊にも報告する予定だ」

（でも何かがおかしい。嫌がらせをするためにそんな協定を提案してくる

なんて……。根本恭二はそんな甘い男とは思えない……。)

だが、明久にとってはこのやり取りは傲慢だと感じてしまう。

「明久、とりあえず戻るぞい。向こうでも何かされるてるのかもしれん」

「あつ、うん」

「いつ怪しい状況になってもおかしくないからな……」

「雄二、あとよろしく!」

「おう、備品の手配をしておこつ」

3人は一旦教室を後にし、新校舎側の渡り廊下へと戻る事にした。

「何だかまだ色々やってきそうだね」
「そうじゃな」

急いで部隊の元へ戻りつつ、3人は駆け足で廊下を通る。

「俺達に何か挑まれても無碍に出来ないからな・・・」
「確かにこの程度で終わると思えん。気を引きしめた方が良さそうじゃ！」

会話をしながら走ると前線部隊の元へ辿り着いた。

「吉井ッ！！戻ってきたか！」
「俺も来たよ！」
「待たせたね！戦況は？」
「かなりマズイことになってる」

須川は一度言葉を挟みこう告げた。

「島田が人質にとられた」
「なっ!？」
「おかげで相手は残り2人なのに攻めあぐんでる。どうする?」
「・・・とりあえず状況を見たい」

「俺も一緒に行く」

「分かった。こっちにきてくれ」

須川に誘導されつつ、明久と一騎はその場所へと移動した。

（マズイ……。これでは美波が行うはずの作戦が無意味になってしまう。）

一体どうすればいいんだ……。ッ!!）

第二十七問 宿敵と恋文と電撃作戦？

須川の通達により、急いで移動する明久と一騎。するとそこには人質にとられている美波の姿があった。

「島田さんッ！！」

「美波ッ！！」

「よッ吉井、一騎ッ！！」

案の定、召喚獣も瀕死まじかの状態に陥っていた。

「お前ら、美波に何をした！」

一騎が美波を誘拐した連中に近づこうとすると、

「そこで止まれ！」

連中の1人が警告を開始する。

「それ以上近寄ると召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

「何だってッ！？」

（くそ、なんて汚い真似だ・・・ッ！！）

一騎がこの警告に驚き、アルフも同様の反応をとってしまう。

「じゃあどうしたらいいんだ・・・」

（数少ない女子を人質にしてこちらの士気を挫く作戦か。

うまいやり方だ……。このまま攻め込んでも先に島田さんの止めを刺され

辛い思いをさせてしまう）

明久は一度考え込み、部員達にこう指示した。

「総員、突撃用意いーッ！！」

「隊長それでいいのか！？」

須川は思わず驚いてしまう。

（仕方ないさ！戦争に犠牲はつきものなんだ！決して日頃の仕返しじゃないんだからね！）

「まッ待て吉井ッ！！コイツがどうして俺達に捕まってたと思ってる！？」

人質にとった連中の1人が聞きつけると、

「馬鹿だから」

「殺すわよ？（ギリッ！）」

明久は思いもよらない一言を発言する。それを聞いた美波は明久を嫉妬する。

「コイツ、お前が怪我をしたって偽情報を流したら1人で保健室に向かったよ」

「美波、大事な任務を果たすのにコイツらに捕まるのはちょっと・
・・」

「仕方ないじゃない！そんなの知らなかったんだからッ！」

一騎が説教をするような口振りをするが呆気なく失敗に終わる。

「島田さん・・・」

「なっ何よ」

更に明久が美波に質問をするが、美波は一瞬顔を赤くする。

「怪我した僕を止めを刺しに行くなんてアンタは鬼か！」

「違うわよ！」

「明久、それは逆効果だと思っんだが・・・」

明久が発言した言葉で逆効果だと感じてしまっ一騎。

「ウチがアンタの様子を見に行っちゃ悪いっての！？」

「それでも心配したんだからねッ！！」

「島田さん、それ本当？」

「そっそうよ、悪い？」

美波は今にも恥ずかしいような叫び方で明久を説得させる。すると明久は

その答えが本当かどうか聞いた後、一度考え込んだ。

「やっとわかったか・・・。それじゃ、おとなしく・・・」

連中の1人が降参を認めさせようとするが、

「総員、突撃いーっッ！！」

「どうしてよッ！？」

明久は部隊の全員に突撃命令を出した。

「ちよつ、明久ッ!？」

「あの島田さんは偽者だ!変装している敵だぞ!！」

一騎が止めにかかるが完全に無視する明久。

(変装する相手を間違えたな!あの島田さんにそんな優しさがあるわけがない!！)

「おい待てつて!！」

「コイツ本当に本物の島田だつて!！」

連中の2人が慌てて弁解するが、

「黙れ!！見破られた作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ!！」

明久には効果がないようだ。

「だから本当にーッ!！」

そして呆気なく止めを刺され、鉄人に連れ去られる。

「いやあああーッ!！」

「たすけてくれエーッ!！」

(つくづく煩わしい・・・)

この光景を見たアルフには到底理解出来ない茶番だと感じてしま
う。

「皆、気をつける！！変装を解いて襲い掛かってくるぞ！」

「明久、美波は１人しかいないのに気付かないのか！？」

唯一美波をかばってあげられるのは一騎ただ１人しかいなかった。

「よっ吉井、酷い……。ウチ本当に心配したのに……」

この状況で美波は思わず泣きそうな顔になる。

「まだ白々しい演技を続けるか！島田さんはそんな台詞を吐いた
りはしない！！」

「本当だよ！！」

明久が減らず口を続けるのに対して、美波はこう発言した。

「本当に『吉井が姫路さんのパンツを見て鼻血が止まらなくなっ
た』って聞いて

心配したんだから！！」

「包囲中止ッ！！コレ本物の島田さんだ！」

美波の一言でようやく攻撃態勢を止めた明久達。

「ようやく気がついたか……」

（こんな嘘に騙されるのは彼女以外いない！）

攻撃態勢を中止した明久は美波に近づく。

「島田さん、大丈夫だった？」

「明久、俺は威力偵察部隊の皆にさっきの事を伝えに行くから」
「うん、わかった」

一騎はさっきの雄二の協定の事で威力偵察部隊の皆に報告をしに行った。

「くそッそれにしてもBクラスめ、なんて酷い事を・・・!!」

明久はさっきの連中の2人の事を憎みながら美波と共に移動する。

「本当に無事で良かったよ。心配したんだからね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「それにしても卑怯な連中だね。人として恥ずかしくないのかな？」
「？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あ——島田さん、実はね」

「・・・・何よ」

美波の不機嫌そうな顔を見た明久は少し同様気味な態度で美波に質問する。

「僕っ本物の島田さんだって最初から気付いてたんだよ？」

グキリッ（首の骨にひび入った音）

殺されかけた。

「・・・ここはどこ？」

「あつ気が付きましたか？」

明久の横には瑞希が座っていた。そう、明久はFクラスに運ばれてたのである。

「心配しましたよ？まるで誰かに蹴られて散々殴られた後、廊下
にうち捨てられた

ように倒れているんですから。試召戦争だからと言って本当に怪我をする必要

はないんですよ?」

顔が痣だらけになってる明久に瑞希は心の底から心配する。

「いや・・・アレは戦争というか、一方的な虐殺だったような・・・」

「ちよつと色々あつてね。それで試召戦争はどうなったの?」

「今は協定通り、休戦中じゃ」

明久が質問すると、秀吉が答えてくれた。

「戦況は?」

「一応計画通り、教室前辺りまで攻め込んだ。こっちの被害も少なくなはないがな」

雄二は作戦の紙を読みながら今の戦況を告げる。

「ハプニングはあつたけど今の所順調ってわけだね」

「まあな」

この会話の中、ここでムツツリー二が戻ってきた。

「おっムツツリー二か。何か変わった事はあったか?」

（そついや今日のムツツリー二は情報係だったつけ）

「Cクラスが試召戦争をの用意を始めているだと?相手はAクラ

スカ・・・。

いやそれはないだろうから」

雄二はCクラスが動き始めたことに少し厄介だと感じる。

「漁夫の利を狙うつもりか・・・いやらしい連中め」

（つまりこの戦争の勝者と戦うつもりなのか・・・。疲れている相手なら

やりやすいしね）

明久も同様の反応をとる。そして雄二にこの状況に関しての整理を聞く事にする。

「雄二、どうするの？」

「そうだな・・・。Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラスを攻め込ませるぞ

と脅せば俺達に攻め込む気もなくなるだろ」

「それに僕らが勝つなんて思っていないだろうしね」

「よし、それじゃ今から行ってくるか」

明久達は念のため、Cクラスの所へ移動することにする。

「秀吉は念のため、ここに残ってくれ」

「なんじゃ？ワシは行かなくて良いのか？」

ここで雄二が秀吉にこんな要求を尋ねてきた。

「お前の顔が割れると俺の考えてる後の作戦に支障をきたすかもしれないからな」

「雄二が言うならワシは残るがの・・・」

秀吉は雄二の考えてる作戦を何となく理解しつつ、教室に残ることにした。

「ちよつと人数が少なくて不安だけどだけど行こうか」

人数が少ないことに不安を抱く明久だが、一旦教室を後にしてCクラスへと移動する。

（この人数で姫路さんをちゃんと守りきれるか心配だな・・・）

明久は瑞希を心配しながら歩くと、ここで美波達がやってきた。

「吉井！」

「お待たせ、何とか皆に伝えてきたよ」

「ありがとう。それでどうしたの島田さん・・・」

「アンタの返り血がこびりついて洗うのが大変だったんだけど
どうしてくれるのよ」

「それって吉井が悪いのか？」

美波はさつき明久をいたぶりつけた後の血を落とすのに大変だと思っ
て

明久のせいにする。

「まあまあ、そんなに明久を攻めちゃだめだよ」

「・・・一騎がそう言うなら見逃してもいいけど・・・」

一騎が美波を落ち着かせようと止める。すると美波はあっさりと
明久を攻めるのをやめた。

「丁度良かった。Ｃクラスまで付き合ってよ」

「んー別にいいけど？」

「俺も大丈夫だ」

「よくわからないけど俺も行くよ」

明久は一緒に来てほしいと要求すると3人はいいと答えた。

（姫路さんの盾——もとい仲間ゲット）

「？」

明久の突然のガッツポーズに瑞希は謎に思っばかりだった。

（俺にとってはとても危ない予感がするな……。一体何が起こる
と言うんだ……。？）

しかしアルフは邪悪のプレッシャーを感じさせながら警戒態勢をとった。

皆に何か起こらせないために。

第二十八問 宿敵と恋文と電撃作戦？

Cクラスへ移動している途中、一騎は雄二1つ質問をした。

「やっぱり作戦が1つ失敗しちゃったね」

「ああ。島田が行うはずの作戦があいつらの作戦により全て崩れたからな。このままでは俺が計画した電撃戦が失敗に終わってしまう

可能性があるかもしれないな・・・」

雄二は右手の拳を強く握りながら呟く。勿論、美波が行うはずの作戦

は失敗に終わった以上同じような作戦は行えないのは雄二はともかく

一騎達も分かってるはずだ。

「だとしたら・・・、残された希望は周りの敵を一双した後の瑞希の突入

だけだな。ほかにどうしたら・・・」

「心配するな。ほかにも作戦を立ててある。それを明日行えばいいだけだ」

一騎が不安な表情を見せるが雄二は保障する覚悟の上に一騎に告げた。そんな中、

アルフが一騎に話しかける。

「おい、そんなにいいのか？俺は到底敵があつた調子では勝てそうにない

と思うのだがな・・・」

「それは分からないさ。何しろ失敗は成功の元って言うじゃないか」

「だいいいんだが……。それと、向こうに行ったら何かありそうだ」

「どうしたんだよ急に」

アルフの深刻な話が始まると一騎は少し視線を前に移した。

「俺には分かるんだ。向こうに行ったら何か待ち構えている事くらい」

「確かに分からなくもない話したが、一応警戒した方が良さそうだな」

一騎は皆には内緒でCクラスに入った時の事を考えて警戒態勢をとった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

Cクラスの教室へ入ると、雄二は早速Cクラス代表を呼びつける。しかし

周りにはざわつく様子しか見えなかった。

（情報通りまだ結構人が残ってるな。やはり戦争をするつもりなのか）

やはりこの状況で構えてきそうな雰囲気を感じてしまう明久。

「私だけ何か用？」

そこへ余裕の様子でこちらにやってきたのはCクラス代表の小山友香である。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「交渉？ふうん・・・」

「不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ・・・」

雄二が不可侵条約を結びたいと答える。すると、

「どうしようかしらね恭二？」

小山は根本の名前を呼び、根本に相談する。

（（（！？）））

これを聞いた明久、瑞希、美波、そして一騎が驚く。

「当然却下。だって必要ないだろ？」

「まさか・・・君が根本なのか・・・？」

一騎はいつでも攻撃が可能な態勢で根本に聞きつける。

「そうだ、俺が根本だ。お前は俺にとってはじめてな顔だな」

「ああそうさ。俺はFクラスの千藤一騎だ」

「Fクラス。そうかお前もFクラスか。では話を戻そう」

（コイツ、何を企んでいる・・・？）

根本が本題へと話を戻す姿を見たアルフは強いプレッシャーを感じ取る。

「勿論条約は結ぶ必要はない。酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を

破るなんて・・・、試召戦争に関する一切の行為を禁止したよな？」

「根本君！Bクラスの君がどうしてこんなところにッ！？」

明久は驚きながら叫びだす。だが根本は更に何かを言い出す。

「先に協定を破ったのはソッチだからな？これはお互い様だよなッ！？」

根本の指示で一斉に一騎達の周りを囲むBクラスの部隊。

「これはどういふことなんだッ！？」

「罰としてここで排除させてもらうことにするのさ。それとお前、

さつきBクラスの近くで覗き見をしたようだな・・・」

「なっ！？なぜそれを知っているんだ！！」

「だって、密かにお前がBクラス前を通った姿を目撃したのにな」
「根本、ふざけやがってッ！！」

一騎がすぐに召喚獣を換ひ出そうとするが、

「そうはさせない、やれ！」

Bクラス部隊が一騎を囲み始める。

「こいつはやばい事になったぞ一騎！」

「ああ、だいたい予想はついていた！まさかこんな事が・・・ッ
！」

「何を一人でぶつぶつ呟いているんだ。とつとこいつを眠らせ
ろ！」

「そうはさせる——ぐあっ！！」

「一騎！」

一騎は急いで召喚獣を換ひ出そうとするが一步遅くなり、気絶させられた。

「アンタ達、こんなの卑怯だと思わないのッ！？」

「ああ何とも思わないさ。お前らが協定を破った以上なッ！」

「僕らは協定を違反なんかしていない！これはCクラスとFクラス
の——」

「無駄だ明久！！条文の『試召戦争に関する一切の行為』を盾に
しらを切る

つもりだ！」

雄二が推測するもの、すでに手遅れだった。

「ま、そゆこと」コイツはしばらくBクラスで預かる。邪魔立てをするわけにもいかないからな」

（くそ、一騎が眠らされているようだ。今ここで俺に交代しても
返り討ち

にされる可能性がある……。俺に再び街を破壊する能力が使
えたら・・・！）

一騎が気絶させられた姿を見たアルフは一度一騎の体から離れる。

「ちよつと根本！一騎に何かしたら許さないんだからね！ってア
ンタどこに

行くつもりなのよ！？」

「こんな下らない茶番に付き合っているに時間の問題だ。いつ
までここに

いたって煩わしい。俺はここで退場させて貰うぞ」

そう言い残し、アルフはCクラスから出てった。

「アイツの姿を見ることが出来るのは一騎と女だけなのね・・・
！なんて

面倒な奴なのッ！！」

「島田さん、今はそんな事で恨んでいる場合じゃないよ！」

「アイツは一騎を見捨てたのよ！？それ以前にアイツは破壊者だか
何だかよ！」

「いつまで下らない雑談を行っているんだ？もうそんな時間は残
されない

のでな。さあ覚悟はいいな？」

急激に窮地に追い上げられてしまう明久達。このまま反撃しても
返り討ち

にしてしまう危険性もあるのは例外ではない。

「俺だつて、まだ世界の破壊者の座を剥奪させるわけにもいかないのでな。」

何とか今の俺に出来る事を探すしかないようだ・・・！」

一人で廊下を通るアルフが何かを呟いた。おそらく、アルフにも何か

秘策はあるかもしれないようだ。

（待っている一騎。まだ俺とお前のコンビを解散するわけにもいかない

からな・・・ッ！）

第二十九問 宿敵と恋文と電撃作戦？

「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて、試召戦争に関する一切の行為を禁止したよな？」

「そんな筈はない！誰も協定を破るわけがない！」

「ま、先に協定を破ったのはソツチだからな？」

根本は周りの部隊全員に攻撃態勢の指示をする。

「こんな事を俺はする。これはお互い様だよなッ！？」

「僕らは協定違反なんかしていない！これはCクラスとFクラス

の――」

「無駄だ明久！！条文の『試召戦争に関する一切の行為』を盾にしらを切るつもりだ！」

（このままではあいつが危ない。ここは何とかしなければ・・・

）

危ない目に陥った状況の中、アルフはただ1人で教室を出てった。

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚を」

「させるか！！Fクラス須川が受けて立つ！試獣^{サモン}召喚ッ！！」

敵部隊の1人が召喚を始めようとした時、須川が代わりに相手をする。

「明久、今の内に逃げるぞ！！」

「でッでも！！」

「今は姫路で数学を戦わせるわけにはいかない！！」

「一騎はどうするの!？」

「今あいつを助けようとしても袋叩きにされるだけだ!今の俺達は根本にはめられたんだ!」

「逃がすなッ!!坂本を討ち取れ!」

万事休すの事態に陥った明久達は一騎の救出を後にして、根本から逃げることにした。

「はぁ、ふう・・・」

そして新校舎側の廊下を突っ走る明久達だが、その途中で瑞希は
疲れ

果てた様子になってしまふ。

「姫路、大丈夫か？」

雄二は瑞希に今の具合を聞くが、

「あッ、あの……。さッ、先に……。行ってくだ……。さい・
」

瑞希は皆に先を急いでほしいと告げる。これを聞いた明久は、

「雄二！」

急に雄二を呼びつける。すると明久はこう告げた。

「ここは僕が引き受ける！！雄二は姫路さんを連れて逃げてくれ
！」

「よッ、吉井君……。私のこと……。は……。気に……。し
ないで……。」

だが瑞希は気にする必要はないと答えてしまふ。

「……。わかった。ここは俺に任せる」

でも雄二は瑞希のことを引き受けた。

「・・・・・・・・・・」

「ムツツリー二も逃げてほしい。多分明日は君が戦争の鍵を握ると思うから・・・」

ムツツリー二にも逃げてほしいと答える明久。そう答え終わると雄二と瑞希とムツツリー二の3人は更に逃げることにした。

「んじゃ、ウチは残ってもいいかしら。隊長どの？」

「・・・頼めるかな？」

「はいはい。お任せあれっと」

唯一この場に残った美波は明久に同行することになった。

「・・・んで、どうするの？」

「うん。僕に考えがあるんだ」

明久が自分に考えがあると答えると、

「え？アンタに？」

と疑わしい目で明久を揶揄す。

「僕だつて補習室になんて行きたくないからね。任せといて」

ここまで言われて何とか保障すると明久は少し張り切る。

「ふーん。まっ、アンタがそこまで言うなら信用してみましようか」

美波は何かを眺めるような目で明久の考えを信用することにした。

「いたぞッ！！Fクラスの吉井と島田だ！ぶち殺せ！！」

少し道を進んでいると、Bクラス部隊の4人に遭遇する。

「Bクラス！！そこで止まるんだ！」

「たった2人で食い止めるとは良い度胸だ」

「いや、その前に長谷川先生に話がある」

戦う前に数学の長谷川教諭に話をする明久。

「・・・なんですか吉井君」

長谷川教諭を連れてきて、話をする明久。

「Bクラスが協定を違反しているのはご存知ですか？」

「話を聞く限り休戦協定を破ったのはFクラスのようなですね。反撃されて

違反を訴えるのは戦争云々以前に人としてどうかと思いますよ？」

（やっぱり、根本君が事実を捻じ曲げて事前に説明しているか・・・）

やはりこの状況でこの行為が傲慢すぎると長谷川教諭が告げる。

「予想通りの反応だけどどうするつもりなの？（ヒソヒソ）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

流石に沈黙状態になってしまふ明久に美波はどういう反応をとるの
と

囁く。

「アンタの考えってやつに期待してるからね！」

そして美波は明久が考えていた事で褒める。が・・・、

「・・・・・・・・万策尽きたか・・・・・・・・」

「「「「こいつ馬鹿だぁー！ツ！！」」」」

（失礼な・・・）

もうこの作戦が無駄だと断定する。これはもう流石に明久の考えは
言語道断としか言いようがあるまい・・・・。

「坂本君。吉井君は・・・、・・・大丈夫・・・なんですか・・・？」

「勿論だ。他のヤツならともかく、明久ならなんとかなる」

一方、根本から逃げている雄二達は何とか逃げ切れるような状態のようだ。

「でも・・・」

「確かにアイツは勉強が出来ない。でもな、学力が低いからって全てが決まる

わけじゃないだろう?」

「そッそれはどういう・・・?」

「あのバカも伊達に『観察処分者』なんて呼ばれていないって事だ」

「・・・・・・・・・・・・ここは、一体・・・・？」

「ようやく目が覚めたか。千藤」

「お前は根本ッ!？」

「そう興奮するなよ？今から面白いことをお前にやらせるからな。
お前ら、やれ」

「」「了解!!」「」

「・・・・・・・・何だよ？これは・・・・」

「お前は今からこの部屋に入ってもらふ。それで、決められた時間内

にこの部屋から脱出するのさ」

「意外と簡単そうだな・・・・」

「ああ、簡単さ。別の意味でな!!」

ドンッ!!（根本に蹴られる音）

ボタン（扉が閉まる音）

「うわッ!？」

「んじゃ、何とか脱出るんだな。時間は30分だ」

「くそ、脱出出来なかったらどうなるんだ!」

「勿論、お前は死ぬ。この部屋のどこかに仕掛けた爆弾が作動してな」

「何だと!？」

「まっ、お前では不可能だなッ!」

「根本、貴様ッ!!」

「せいぜい頑張ってこの部屋から出るんだな」

ガシャアアア!! (鎖が扉を閉める音)

「待て根本!・・・くそ、何とかここから出なければ・・・。
それと

なぜこんな時にアルフの奴はいないんだ・・・?」

「見つけた。一騎の代わりになる器が・・・」

第三十問 宿敵と恋文と電撃作戦？

根本にはめられた一騎は何とかこの部屋から脱出する手立てを考
えていた。

「くそ・・・、明久の言う通りだ。根本はやっぱり卑怯は奴
だったんだな・・・。そんなことより早くこの部屋から出なけ
れば」

一騎はこの部屋中のありとあらゆるものを探りながら何か仕掛け
となる
物を寄せ集めた。

「うーん、めばしい物がそんなにないな。一体こんなんでもうや
ったら
脱出が可能なんだ・・・？」

一瞬悩みながら今あるものでどう利用するか考える一騎。ちなみ
に一騎が
寄せ集めた物はこの通りである。

紙やすり 鉄パイプ 半田付け 孫の手 蛍光灯 金

鋏 モップ

アイスピック

玩具銃

サバイバルナイフ

成人向けの雑

誌 裁縫道具

といった物があるが、中には危険物や未成年には向いていない雑誌が混ざったりするとか。

「どうしようもない物ばかりだな……。でもましな物もあったりするな」

一騎は使えそうな物だけを集めて脱出する方法を考えることにした。

「よし、これで準備は整った。これなら脱出が可能なかもしれない
って

あと何分で爆発なんだ・・・？」

一騎は何か大事なことを思い出した。

『爆発まであと15分。繰り返します。爆発まであと15分です』

どこからともなくアナウンス的な声が聞こえてきた。

「何ッ！？もう半分切ったのか！これじゃ間に合わない・・・」

しかし一騎は極限まで考え込む。

「半田付けは扉をあけるのに必要だと思うな。それと紙やすりは何かで

使うと思うし、アイスピックは最後の手段として使うか」

全ての用意が整ったので脱出を開始した。

「・・・・・・・・・・。だめだ、全然わからない・・・」

何とか必要な物で脱出を行うことを半分やり遂げたが、この後の行動が

何も思いつかない。

『爆発まであと5分です』

しかもタイムリミットはすでに近づいてきた。

「くう……。もうここまでなのか……。ごめん、明久。ごめん、美波。」

「……………」

完全に死を覚悟する一騎。するとそこへ、

「離れろ、一騎!!」

「その声はアルフなのか!?つかお前今までどこに行ってたんだよ!」

一騎から離れたアルフがやってきた。

「話は後だ、今からこの扉を破壊する!そこから離れろ!!」

アルフの言う通り、扉の前から離れる一騎。

バアアアアアッ！！！！（扉を破壊する音）

扉は糸も簡単に破壊され、アルフは一騎の元へ近づく。

「大丈夫か？」

「ああ何とかな。って所で何でほかの人間に取り付いているんだよ」

「今の状態じゃ何も力を発揮する事が出来ないからな。誰かに乗り移る事に」

より、力はある程度使う事が可能なのさ」

「そうか、一応お前は破壊者なんだもんな・・・」

一騎はアルフに1つ忠告をする。

「気をつける。この部屋には時限爆弾が仕掛けてある」

「何となくそんな気がした。今から俺がその時限爆弾を空へ投げ飛ばす」

「でもどこにあるのかわからないし」

「安心しろ。こんな小細工など俺にはお見通しだ。ふんッ！！」

アルフはこの部屋の全ての物をどかせ、爆弾を見つけた。

「これでよし。あとはこいつを外へ投げ捨てるだけだ」

そして時限爆弾を空へ放り投げるアルフ。

ドカアアアアンッ！！！！（爆弾が爆発する音）

「これで何とかなつたなアルフ」

「当然の事だ。礼はいらん」

「よし、早く明久達に合流しないと」

「そうだな。あの男の制裁は明日行ふ。今構つても時間の問題だ」

全てが解決し、明久達の元へ合流をしに行く一騎とアルフ。この後アルフは一時的に乗り移った体を捨て、一騎の体へと戻った。

「代表、千藤があの部屋から脱出しました！」

「そうか、だったら明日少し保険打つとか。ふふふ・・・」

「「「^{サモン}試獣召喚！」「」」

「吉井どうするのよ！！この先行き止まりよ！」

「どうするって言われてもどうしよう！？」

「いいから何か考えなさいッ！！」

一方、Bクラス部隊に追われてる明久と美波は何か良い作戦はな
いか

考えていた。

「よし、こうしよう。まず島田さんが4人を引き付ける！」

「ふんふん、それで？」

「僕が逃げ易くなる！」

「・・・アンタとは一度決着をつける必要があるそうね」

これはただの個人的に生き延びたいゆえの目的である。

「それじゃ島田さんが召喚獣を喚んで」

「喚んで？」

「僕の盾になる！」

「死になさいッ！！（バツ！！）」

「うわッ、突然どうしたの！？キレる十代ッ！？」

またもや美波を身代わりにさせようとする明久に、美波は攻撃を仕掛ける。

「作戦もないまま行き止まりについちやったじゃない！！何とかしなさいよ！」

美波が叱ってる間、Bクラス部隊の4人が話し合う。

「ちよろちよろ逃げ回りやがって・・・、疲れるだろうがッ！」

「というかこいつらは追う必要なかったんじゃないか？」

「仕方ないだろ・・・。こいつらに付き合ってたら坂本達に逃げられちまった

んだから・・・」

「さっさと片付けて帰らない？」

（だったら見逃してよ・・・）

「ちよつと・・・、好き勝手言ってくれるじゃないの」

美波はこの会話に関して気に食わなく直線的に対抗する。

「だって・・・なあ？」

「だって何よ？」

更に美波が尋ねると、

「お前ら最低クラスじゃん」

と答える部隊の1人。すると明久は、

「クラスは最低じゃないぞ！メンバーが最低なだけだッ！！」

「吉井は黙ってなさいッ！！」

（あれ？フォローしたのに怒られたよ？）

必死でフォローするが、呆気なく美波に止められた。そしてこの戦いはまだ終わらないのであった。

第三十一問 宿敵と恋文と電撃作戦？

「最低クラスなぞ、俺達の敵ではないな」

「Fクラスだからって甘く見ないことね」

「ふん・・・、所詮Fクラスだろ？」

「なら自分で確かめることね！試獣^{サモン}召喚ッ！」

最低クラスの実力を見せ付けろべく、美波は召喚獣を喚び出す。
足元からは

毎度お馴染みの幾何学模様が現れ、そこから自分の召喚獣が姿を
現す。

「上等だ！！実力差を思い知らせてやる！」

そして互いの召喚獣がぶつかり合いだす。

（島田さん。Bクラスに真正面からとか無謀過ぎ・・・）

しかし明久はこの行為が無謀だと断定してしまう。だが、

Fクラス

島田美波

数学

171点

美波の点数はそれなりに高いのである。

「なッ!？」

「お前本当にFクラスか・・・!？」

「ふふっ、数学を選んだのが間違いだったわね・・・。これなら漢字が読めなくても何とか解けるのよ!」

最初のEクラス戦の時から美波の数学の点数は高得点なので彼女にとって

は敵ではないのである。そのため、数字を使った問題（証明問題を除く）は

かなりの才能を誇るのだ。

「ちなみに古典は？」

「一桁よ」

ちなみに古典に関しては皆無に等しい。

「工藤君、フォローしようか？こんなので戦死とか嫌でしょ？」

「・・・くっ、頼む」

（今加勢されたら島田さんに勝ち目はない・・・!）

敵側の加勢に戦く明久は何とか美波を援護しようと話かける。

「島田さん、フォローしようか？こんなんで戦死とか嫌でしょ？」

「足手まといよ」

「酷いッ！」

だが呆気なく断られた。でも明久はまだ諦めない。

（だけど今は遊んでる余裕はない……。痛みや疲労があらうとも、

ここは逃げるべき所じゃない……。いよいよ僕も戦う時が来たみたいだ）

「――^{サモン}試獣召喚！」

ここで明久も召喚獣を換び出す。そこには精悍な顔立ち、しなやかな形態、

換び出すたびに感じる絶対的な強さが顕現する――

「吉井は構うな！見るからに雑魚だ！」

「返せッ！僕のカッコイイ描写を返せッ！」

この一言で全てが台無しに陥ってしまった明久。

「どきなさい、雑魚でヘナチョコッ！」

「島田さん、君は僕の味方じゃないの！？あと全く

関係ない罵倒も混ざってるよ……！」

更には美波からも見放される羽目になってしまつたのであった。

「これはキツイわね……！」

「それじゃ、さようなら」

美波が戦ってる場に部隊の1人が攻撃を仕掛けようとしたその時、

「そうはさせるか！（ガッ）」

「ああッ！？」

「更にッ！（ドッ、ガシッ）いいいよいよしょおーッ！！！！（ゴンッ！！）」

明久の召喚獣が返り討ちにした。だが驚くのは点数であった。

「なんでだよッ！！真田の点数の方が高いはずだろ！？何である弱そう

な召喚獣にやられてるんだよ！！」

今言った通り、明久の点数と敵の点数はかなりの差が出来ている。

つまり、明久の点数が51点に対し敵の点数は166点である。

「あれ？私の召喚獣まだ生きてる」

「吉井、どういうこと？」

今の現状で美波は明久に質問を伺う。

「まあ『観察処分者』の数少ない利点ってトコかな？」

明久が軽く補足説明をする。つまり怪力な上に体系が自分と違う

召喚獣

の操作は結構難しい。だから皆は突撃などの単純操作しか出来ず、点差で勝敗

が決してしまう。しかし『観察処分者』は沢山の雑用をこなし、感覚を共有

してきたおかげで他の人より上手く操作することが出来るのである。

「利点？」

「要するに召喚獣を使うのに慣れるってこと」

これを聞いた美波は何となくこの内容を理解した。

「ぐッ偶然よ!!」

そんなことを気にせず、攻撃を続行する真田。

「うりゃッ！（カッ）」

ドウッ（敵の召喚獣を攻撃する音）

「はぁあッ!!（ダンッ!!）」

だが明久は華麗に召喚獣を使いこなす。

「・・・本気でやった方がいいな」

「いや・・・出来れば遠慮してもらえると・・・」

でも明久にも限界があるが、

「行くぞ、コラア!!」

「ちょこまかと!!」

容赦なく攻撃を仕掛ける残りの2人。それでも攻撃を回避する明久の召喚獣。

「一撃当たれば倒せるのに・・・!」

「全然当たる気がしねえ・・・」

「メタルス。イムみたいなヤツだな」

(そこまで弱くないやいつ)

雑魚呼ばわりも無理はない。

「さて、ウチらも続きははじめましょうか?」

「・・・くツ!!悪いが一旦退かせてもらう!」

(これで3対2・・・いや、島田さんもかなり消耗しているから3対1か・・・)

やはりここは・・・)

「島田さん、『アレ』を!」

「! 了解!」

明久は美波が戦死しては困ると思い、ここは自分達も撤退しようと考えてる。

（よしッ、これで逃げ切れる！！）

何とか一安心した明久は消火器を使い始める。ところが・・・、

「島田さん？早く使って・・・」

「うーーーーん・・・、どうしようかなーーーー？」

美波は突然何かを考え始めた。

「なッ何が望みなの！？」

「望み？そうねーーーー」

「今なら大抵のことは聞きます！！」

こんなやりとりが始まったその時には、

「？ 明久と美波だ！って何をやっているんだ・・・？」

「何だかまた面倒なやりとりみたいなのが始まりそうだな」

一騎とアルフがやってきた。

「まずは呼び方を変えてもらいましょうか？」

「変える！！変えさせて頂きます！！」

既に明久はただ美波の指示に従う奴隷と化した。

「じゃ、今後ウチはアンタのことを『アキ』って呼ぶから、アン

夕は

ウチのことを『美波様』って呼ぶように」

「みッ美波様！！これでいい！？」

「今度の休み、駅前の『ラ・ペデイス』でクレープ食べたいな」

「おのれ！僕は塩水で生活してるのになんて贅沢を！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ああッ、おごります！おごらせて頂きますッ！！」

次第にエスカレートする2人の会話に周りは何も言葉が出なかった。

「よろしい・・・・・・・・じゃ、最後に」

「まだあるの！？」

美波様はご立腹のようです。

「ウ・・・・ウチのことを愛してるって言うてみて？」

（そこまでして僕をからかうのかッ！後で覚えてろ！！）

「ウチのことを愛してるッ！！」

（これで一語一句間違わずに言ったぞ！どうだ！？）

「・・・・・・・・ばか」

ブシュッ！！（消火器を放つ音）

何とか脱出成功。それなのに島田さんの機嫌がとても悪かったのは何でだろう？と明久はただ疑問に思っただけであった。

「あー！疲れた・・・」

数分後、何とか逃げ切った明久は教室へと入る。

「よっ吉井君！！無事だったんですね！」

そこへ瑞希が心配そうな顔で明久を労う。

「うん、このくらいなんともな——いだあッ！！（メキンッ！）」

同じタイミングで戻ってきた美波に足を踏まれる明久。

「ふんッ！」

だが美波はまだ機嫌が元通りになっていないようだ。

「しッ島田さん、僕が何か悪いことでも・・・」

「（キッ！！）」

「いッいや、美波様・・・」

「だからもう『様』はいらないってば！！」

「ごッごめんってば！」

これで美波の機嫌は戻りつつあった。今言ったように『様』はつけないとも

必ず呼び方を変えなければいけないという約束が出来たのでこれも油断は

出来ないのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

これを見た瑞希は、

「・・・随分2人共仲良くなつたみたいですな?」

「確かに、これで美波も明久に親しくなつたようだな」

「・・・俺にとってはどうでもいいしろもんだ」

嬉しいのか少し戸惑った顔で関心する。それと同じく一騎も感心する。

「おッ戻ってきたか。お疲れさん」

「無事じゃたようじゃな」

「散々だったけどね」

雄二と秀吉も無事に戻ってこられたことを労う。

「一騎よ、お主も無事で何よりじゃ」

「ありがとう、でもアルフが助けたけどな。だよなアルフ?」

「別にお前を助けたわけではない。ただ大事なパートナーを失うわけにも

いけないからな」

一騎がアルフに話かけるが、男子陣はただの独り言にしか見えなかった。

「一騎、また独り言を・・・?」

「何を言ってるのよ、一騎が独り言を言うわけがないじゃない」

「そうですよ。私達にはちゃんと見えますよ」

「そうか、時々一騎と入れ替わるんだね・・・」
「いいんだよ別に。明久達が見えなくても俺には見えるからな」
「・・・好きにしろ」

アルフはこの会話を聞くのが時間の無駄に感じ、一騎の体へと戻った。

「さてお前ら、こうなった以上Cクラスも敵だ。同盟戦がない以上、連戦

になるだろうが正直Bクラス戦直後にCクラス戦はきつい」

「このままじゃ勝ってもCクラスの餌食だよ？」

「そうじゃなあ・・・」

さっきの協定でCクラスと不可侵条約を結ぼうと思ったが、根本により

全てが台無しとなったのだ。

「心配するな。向こうがそう来るなら、こっちにも考えがある」
「考え？」

「ああ・・・。明日の朝に実行する。目には――――目をだ」

（一体何をするつもりなんだ・・・？）

第三十二問 宿敵と恋文と電撃作戦？

翌日

「今から昨日言っていた作戦実行する！」

翌日の作戦会議。雄二は昨日言った作戦の準備を開始する。

「作戦？でも開戦時間より30分も前だよ？」

「BクラスじゃなくてCクラスの方だ」

「あつ、なるほどね。それで何するの？」

明久が雄二に尋ねると、

「秀吉にコイツを着てもらおう」

雄二は袋から女子用の制服を取り出した。

（・・・所で雄二、それどうやって手に入れたの？君に何があったんだい？）

雄二の突然な行為に明久はただ疑問に思う事しか出来なかった。

「別に構わんが、それでどうするんじや？」

「秀吉には『木下優子』としてAクラスの使者を装ってもらう」

雄二がやろうとしたのは、このためである。そう、秀吉にはAクラスに双子

の姉がいる。皆からは一卵性双生児かと思うほどよく似てると言われるが

違う部分は成績と性格ぐらいである。

「というわけで秀吉、用意してくれ」

「うッ、うむ・・・」

秀吉はとりあえず雄二の指示で早速着替え始めた。しかも皆がいる前で

生着替えをする。

（なっ、何だろう。この胸のときめきは・・・。相手は男なのに目が離せない・・・！！）

あまりにの秀吉の可愛さに明久は胸を押さえてしまう。

（良かった・・・。ときめいているのは僕だけじゃなかった）

明久だけではなく、周りの男子もときめいてしまっているようだ。

「よし、着替え終わったぞい。・・・ん？皆どうした？」

秀吉はこの光景を見て、疑問に感じてしまう。

「それじゃ、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

「あッ、僕も行くよ！」

「悪い、俺も行く！」

気を取られたか、明久と一騎もついて行くことにした。

「——さて、ここからは1人で頼むぞ秀吉」
「気が進まんのう・・・」

それでも秀吉のやる気は沸いてこない。

「そこを何とか頼む」

「むう・・・、仕方ないのう・・・」

「悪いな。とにかくあいづらを挑発してAクラスに敵意を向けさせてくれ。」

演劇部のホープのお前なら出来るはずだ」

「はあ・・・あんまり期待はせんでくれよ・・・」

秀吉はそう呟きながらCクラスへと入ろうとする。

「本当に大丈夫？別の作戦を考えた方が・・・」

「俺も不安だな・・・」

「多分大丈夫だろ」

「心配だなあ・・・」

「シッ！秀吉が教室に入るぞ」

このタイミングで明久達は黙り込む。そして・・・、

「静かにしなさいッ！この薄汚い豚ども！！」

「・・・うわぁ」

「流石だな、秀吉」

「・・・何ていうか、少し怖い」

「なッ何よアンタいきなり!？」

「話しかけないでッ!豚臭いわッ!！」

「アンタAクラスの木下よね!？ちよっと点数いいからっていい気になってる

んじゃないわよ!何の用よッ!！」

「ふんっ……。私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ学園内にあるなんて

我慢ならないの!貴方達家畜は豚小屋で充分だわッ!！」

「なッ!！言っに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですってッ!？」

私達はそこまでクズじゃないわッ!」

(別にFクラスとは言っていないぞ小山さん!！)

「どうかしらね?けど手が穢れるのがものすごく嫌だけど、薄汚い貴方達

に相応しい教室に送ってやるわ。覚悟しておきなさい。近ううちに始末

してあげるわ」

「これで良かったかのう？」

秀吉は何事もなかったかのように笑顔を見せた。

「ああ、素晴らしい仕事だった」

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！！Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

「向こうもまんまとAクラスに攻撃を仕掛けるようになったな」
「作戦も上手くいったことだし、俺達もBクラス戦の準備を始めるぞ！」

「うん！」

そう言いつつ、明久達はFクラスへと戻ることにした。

「よし、開戦だ！しっかり戦ってこい！！」

そしてBクラス戦は再開され、皆は一斉に教室から飛び出した。

「アルフ、ここから勝負時だな」

「さあな。まだ分からないさ」

アルフは少し笑いながら答える。どうやら一騎と少し気があつてきたようだ。

「一騎、ウチが危なくなったら代わりに戦つてね」
「了解、いつでも交代するよ」

ここで美波が一騎に支援を求め、一騎に了解を得た。

（さてと、今日は思つ存分働くとするか・・・！）

「一気に畳み掛ける!!」

所が、向こうもかなりの点数を持っている。

「だめだ、このままじゃ・・・」

「みんな、まだ諦めちゃだめだ!」

周りが戦死まじかの中、明久は必死で応援する。

「明久!」

「一騎、どうしたの?」

「雄二が危なくなったら使えって!」

一騎は明久に指令書を渡し、その場を去った。

「雄二が・・・?よしッ!」

明久は雄二からの指令書の内容を読み上げた。そして、

「みんなよく聞け! Bクラス代表の根本には、ガールフレンドがいるぞッ!」

「「「何iiiiiiiiiiiッ!!??」」」

「相手はCクラス代表、小山友香さんだッ!!」

「「「何iiiiiiiiiiiッ!!!!??」」」

「しかも、手作りのお弁当を作って貰ってるそうだッ!!」

「「「何iiiiiiiiiiiッ!!!!??」
??」」」

それを聞いた周りのFクラス男子は、思いつきり絶叫する。

そして今理不尽な怒りが頂点に達した時、異端審問会FFF団が誕生する。

更には鬼の補習など物ともせず容赦なく、殺戮の使者となるのだ。

「『ゆる〜さんッ!!』」

これこそ、暗黒の集団の誕生を意味とするのだ!

「よくも1人だけ良い思いを〜ッ!!」

「お前らに、1人身の辛さが分かるか〜!」

「何だコイツら、危険だ!全力で防御だッ!」

必死で防御に専念するが、1人の一撃が非常に高いためにゆえにすぐに

戦死をさせるほどの威力を誇る。

「戦力は傾いたぞ!行けえッ!!」

明久が指示すると、FFF団の連中は一気に突撃を開始した。

「なんなんだあいつら、補習が怖くないのかッ!?!」

そして次々と敵を殲滅していくFFF団に驚くBクラスの連中。
しかも、

自滅してまでも攻撃に専念してる姿になすすべもなかった。

「・・・戦死者は、補習・・・」

最後は鉄人に処理される様に・・・。

「ありがとう、須川君。君の犠牲を無駄にはしないよ。ちゃんと、
僕の怒りを抑えるに役立ったから!」

「船越先生の事、まだ恨んでおったのじゃな・・・」

「？」

秀吉がそう呟くが、一騎には何のことなのかさっぱりわからなかった。

（そろそろ油断は出来ない頃だな・・・）

アルフは、この戦争の大いなる黒幕が行動を開始する予兆を感じつつ、

どう対抗するのか考え始めた。

第三十三問

宿敵と恋文と電撃作戦？（前書き）

一週間ぐらい遅れてしまいましたが、今回でBクラス戦は完結です。

第三十三問 宿敵と恋文と電撃作戦？

「ドアの壁をうまく使うんじゃ！戦線を拡大させるでないぞッ！」

Cクラスへの挑発を終え、更には緊急的な作戦によりFクラスは今有利の状態へと保っている。そして昨日行おうとしたはずのBクラス前への

進軍を改めて開始。雄二曰く『敵を教室内へと閉じ込めろ』とのことだが、

この大事な時に問題が発生してしまう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そう、瑞希の様子がおかしいことである。

「人数は減った。陣形を立て直すんだ！」

「その後、勝負は極力単教科で挑むのじゃ！あとは点数が消耗したものは回復試験も念入りに行え！」

総司令官のはずの彼女が今日は一向に指示を出さないどころか何も参加

しない。今は副司令官の秀吉と一騎の指示でここ数時間はうまくやれてる。

それを見た明久は瑞希の事が気になって仕方ない。

（一体何があったっていうんだ、姫路さん・・・ッ！）

「左側出入り口が押し戻されてる！！古典の戦力が足りない！援軍を頼む！！」

（古典の竹中先生か……。まずいな、Bクラスは文系が多いから流れを変えないと一気に突破される……。）

Bクラスの文系の学力では到底敗北してしまうと感じる明久は瑞希に

援護を頼ませる。

「姫路さん、援護を・・・」

すると、

「あ・・・そ、そのッ・・・！（おろッ、おろッ）」

瑞希は今にも泣きそうな顔で動揺をしてしまう。

「・・・姫路さん？」

（どうやらあの女にも何かあったようだな・・・）

瑞希の思わぬ反応でアルフも不審に思う。

「瑞希・・・」

「一騎、どうしたのじゃ？」

「いや、何でもない」

更には一騎までも瑞希の様子がおかしいと断定する。

（このままだと突破されてしまう・・・！！）

明久はほかに方法はないかと考え、ある行動に出た。

「だああッ！！」

一気に竹中教諭の元へ近づき、

「・・・ッラ、ずれてますよ？」

と囁いた。すると竹中教諭の桂がずれ、

「しょ．．．少々席を外します!-!」

慌ててこの場を後にした。

「今のうちに態勢を立て直そう．．．」

—安心した明久は瑞希を慰めようと質問する。

「姫路さん、どうかしたの?」

「そ．．．その、なッ何でもないですッ!-!」

瑞希は首を横に振りながら答える。でも明久には何かがあったような言い方

にしか聞こえないのである。

「姫路さん．．．」

「右側出入り口、教科が現国に変更!-!」

「数学教師はどうした!-?」

「Bクラス内に拉致された模様!」

この状況を聞いた瑞希は、

「私が行きますっ!」

と答えるが．．．、

「あ．．．．．」

彼女はある物を見てやる気を失ってしまう。そして明久はその方向に振り向く。すると衝撃の事実が発覚してしまう。

（根本・・・？あの手紙はもしかして！？）

それはBクラス戦が再開して間もない頃の出来事であった。

「どうして、私達の教室を荒らしたりしたんですか？」

「俺達がやった証拠でもあるのか？」

誰もいない廊下で会話する瑞希と根本。これは昨日の教室が荒れ果てた

時の事で質問している時だ。

「それは・・・」

「ふふふ、やったのは俺達だ。証拠もある」

根本がそう答えると瑞希は、

「許しません！召喚獣——」

召喚獣を喚び出そうとするが、とあるものが飛び出してしまった。

「おっと危ない危ない」

「ッ！！」

それを手にする根本が答えると、瑞希は衝撃的に驚いてしまう。

「犯人の方から証拠を見せるなんて、気が利いてるだろ？」

「そんな・・・」

「思いがけない収穫だったよ。今時、ラブレターなんて可愛いじゃないか」

「か、返して下さいッ！！」

瑞希が必死で根本に要求するが、

「一体何て書いてあるだろうなあ」

ビリッ（封筒を開ける音）

「・・・・・・・・」

根本はラブレターの封筒を破き始める。

「おっと、これは後のお楽しみにしよう」

所が破くのをやめ、後にとつとこうと揶揄す。

「貴方という人は・・・」

「こんな事しなくても勝てるんだがな。保険代わりだ。試召戦争が終わったら

返してやるよ。もし、気が変わらなかったらただけだな、ははははッ！！」

そう言い残し、根本は去っていった。

そして現在に至る。

「・・・なるほど。そういうことか」

明久は何となく想像した結果が思い浮かべた。

（昨日の協定の話を聞いたときからおかしいと思ってたんだ。あの時はもう

姫路さんを無力化する算段が立ったわけだ。それならあの協定だっ

たっ
うなずける・・・）

ここで明久は瑞希に再度話しかける。

「姫路さん」

「は、はい・・・？」

「具合悪そうだからあまり戦線には加わらないように。試召戦争はこれで」

「終わりじゃないんだから体調には気をつけて」

「・・・はい」

「じゃ、僕は用があるから行くね！」

「あ・・・！」

明久はそう言い残し、この場を後にする。

「・・・」

「どうしたのじゃ一騎。またボーっとした顔になって」

「秀吉、ここからは俺だけに任せてほしいんだ」

「どういふことなのじゃ？」

「実は頼みがあるんだ」

「面白い事してくれるじゃないか、根本君」

明久がそう呟くが、本性は全く違うのである。

（あの野郎、ブチ殺す・・・）

ドンッ！、ドンッ！ドンッ！

「雄二ッ！！（ダンッ！！）」

「どうした明久、脱走か？そんならチヨキでシバクぞ。それとここで

テストを受けてるヤツもいるんだ、少しは静かにしろ」

「雄二、話があるんだ」
「何だ？」

明久がそう答えると雄二は話を聞く態度をとる。

「根本君が着ている制服が欲しいんだ」
「・・・お前に何があつたんだ？」

（し、しまった！！これじゃただの変態だ！）

突然の発言で雄二は若干ドン引きするような顔になる。

「いや・・・その、えーっと・・・」

（ただ制服の中にある手紙が欲しいだけなんだけどそれは話せないし・・・、

このままだと男の制服が欲しい変態と思われるてしまう！！）

明久の頭の中は今全てが台無しになることばかりである。

「まあいいだろう。勝利の暁にはそれぐらいなんとかしてやろう」

（受け入られた！？）

所が雄二は簡単に受け入れた。

「で、それだけか？」

雄二が尋ねると、明久は本題の内容を話す。

「あと、姫路さんを戦線から外して欲しい」

「何かあったのか？」

「理由は言えない」

「どうしても外しないとダメなのか？」

「うん、どうしても」

明久が話そうとしたのは瑞希の戦線離脱である。

「……………」

それについて雄二は一度考え込む。

（かなり無理を言ってるのはわかってる……。姫路さん抜きでBクラスを

倒すなんてただの自殺行為だ。それが原因で負ければ雄二の責任問題に

なるだろう。こんな理由も話さない頼みを僕なら受けたりはしない）

「頼む、雄二ッ!!」

「お前がそう言うならいいだろう。但し、条件がある」

これで承諾を得た雄二は明久にこう告げる。

「姫路がやる予定だった任務をお前がやるんだ」

「……わかった」

明久は頷きながら答える。そして明久は内容を伺う。

「それで、僕は何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって敵本陣に奇襲を掛ける。方法は任せる。科目は何でも構わない」

「皆のフォローは？」

「ない。しかもBクラスの出入り口は今の状態のままだ」

（場所的に常に一対一になる出入り口を抜けるためには圧倒的な個人の

火力が必要だ。それこそ姫路さんのような・・・）

個人の火力を上げるには点数をひたすら上げる必要があるが、それこそ

瑞希のような頭の良い者でなければ不可能である。だがそれでも雄二は

明久にそれをやらせようとしたのだ。

「失敗した時は・・・？」

「失敗はない。必ず成功させるための任務だ」

（失敗はそのまま敗北ってことが・・・。どうする？どうやって目的を達成する？）

「・・・出来るか？」

そして雄二はもう一度明久に要求する。すると明久は、

「やってみる・・・。いや、やってやる！絶対に成功させてやるさ！-」

「・・・良い返事だ、明久」

瑞希の分まで受け継ぎ、覚悟を決める。そして雄二はその意気込

みで関心する。

「・・・なるほど、そういうことか」

一旦教室の前を通る一騎はこの会話を聞き取り、前線に戻った。

「それじゃ、うまくやれよ」

「どこか行くの？」

「Dクラスに『例の指示』を出してくる。それと明久」

最後に雄二はこう告げた。

「お前は確かに点数は低いが、秀吉やムッツリーニ、そして一騎のようにお前

にも秀でている部分がある。だから俺はお前を信賴している」

「・・・雄二」

「うまくやれ。計画に変更はない」

そう言い残した雄二はFクラスを後にする。

（僕の秀でてる部分・・・狭い場所じゃ細かい動作なんて役に立たないし・・・）

「・・・あ」

自分の秀でてる部分を振り返る明久はある事を思いだした。

（他の人とは違う、僕だけの特別がもう1つだけあった・・・）

「痛そうだよなあ」

不安そうに呟く明久だが、自分の頬を強く叩きこう叫んだ。

「—— よっしゃ！！あの外道に目に物を見せてやる！」
「ちよつとアキ、補給テストの邪魔なんだけど」

所が教室で試験を受けていた美波が呟く。

「美波！皆も協力してくれ！」

「何か用？」

「どうしたのよ？」

「テストはどうするんだ？」

美波だけじゃなく、ほかにテストを受けている生徒も聞きつけた。

「補給テストは中断。その代わり、僕に協力して欲しい。この戦争の

鍵を握る大切な役割なんだ」

「・・・随分とマジな話みたいね」

「うん、ここからは冗談抜きだ」

「で、何をすればいいの？」

美波が質問すると明久はこう答えた。

「僕と召喚獣で勝負して欲しい」

「——えーっと2人とも、本当にやるんですか？」

Dクラスの教室内。明久は英語の遠藤教諭を連れて来て、召喚許可を

出そうと交渉した。

「勿論です」

「このバカとは一度決着をつけなきゃいけなかったんです」

「・・・でもそれなら、Dクラスでやらなくてもいいんじゃないですか？」

遠藤教諭はDクラスでやるのを疑問に思う。

「仕方ないんです。このバカ『観察処分者』だからオンボロのFクラスじゃ

教室壊れちゃうんで」

「もう一度考え直しては・・・」

「いえやります。彼女には日頃の礼をしないと気がすみません！」

「明久よ、本当にやるのか？」

「秀吉、どうしてここに・・・？」

「一騎に頼まれてDクラスに入って欲しいといわれたのじゃ」

「何のために？」

「それは言えないのじゃ・・・」

秀吉は一騎にある頼みでDクラスに移動したので明久にとっては全く

状況が理解出来ないのである。

「——わかりました。お互いを知るための喧嘩も教育とし

て重要かも

しれませんね」

流石にこの状況だとやらせるしかないかと断定する遠藤教諭。

「「^{サモン}試獣召喚っ！！」」

そして互いに召喚獣を喚び出し、勝負が始まる。

「行けえええッ！」

ドンッ！（壁を殴る音）

「ぐ——うッ！！これくらい……！」

ズンウウン・・・（天井に震動が伝わる音）

「ほら、ちゃんと狙いなさいよ！」

「へっ、本番はこれからさ」

狙いが外れ、攻撃が全く当たらない明久に対し美波はそう答える。
だが明久も本気で攻撃を続ける。

「たあッ！！」

ドンッ！！（更に壁を殴る音）

「ぐああッ！！」

だが明久自身も痛みを感じさせる。

「アキ、急がないと」

（作戦開始まであと3分―――）

現在の時刻は2時57分。作戦開始時刻は3時のため、あと3分しか残されない。

「何だ？」

その頃、Bクラスではこの震動に驚く生徒が多数現れる。

「お前らいい加減諦めろよな。教室の出入り口にバカみたいに群がりやがって……。暑苦しいことこの上ないっての」

根本がそう呟くと、雄二とその仲間がやってきた。

「どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

「はア？ギブアップするのはそっちだろ？」

「無用な心配だな」

「そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？」

「お前らじゃ役不足だからな。休ませておくさ」

「けっ！口だけは達者だな、負け組代表さんよお」

「負け組？それがFクラスのことならもうすぐお前が負け組代表だな」

「まだまだああッ!!」

ドンッ!!!(更に壁を殴る音)

「くう・・・!!」

しかし明久の拳からは地が流血し、下へと迸る。

「大丈夫か、明久!？」

「平気だ、これしき・・・ッ!」

「それにこの暑さは何だ。エアコンきいてんのか？」

この空気の中、かなり蒸し暑い状況に陥っている。今は4月の半ば頃

の時期なのに。

「おいッ、窓全部開けとけよ！」

根本が叫ぶと、雄二は自分の時計を見てこう告げた。

「・・・態勢を立て直す！一旦下がるぞ！」

「なんだよ！散々ふかしておきながら逃げるのかよ！全員で一気に畳み掛ける！誰！人生きて返すなッ！！」

「アキ、そろそろよ」

「うん、わかってる」

美波が伝えると明久は頷いた。そして、

「2人とも、一体何をしようとしてるんですか？」

（必ず・・・この作戦は、絶対に成功させるんだ！！何があつても、

——姫路さんのためにもッ！！！！）

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あとは任せたぞ、明久！！」

作戦は、開始された。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおッ！！」

それと同時に、明久は懇親の一撃を壁にぶち込んだ。

ドゴンッ！……！（壁が崩壊する音）

「ンなッ！？」

これを見た根本は驚き、

「くたばれ、根本恭二ッ！！」

「壁を壊すとかどういう神経してんだ！？」

この場から離れようとした。

「遠藤先生！Fクラス島田が」

「Bクラス山本が受けますッ！！」

「近衛部隊かッ！！」

所が、向こうの近衛部隊がやってきた。

「はッははッ！驚かせやがって！！俺が無防備でいられると思っ
たか？」

残念だったな！お前らの奇襲は失敗だッ！！」

根本が降伏を要求する。確かに根本までの距離は約20m。そして
周りを近衛部隊

全員に取り囲まれた以上、彼らになす術はない。だが、これで見
的は達した。

ここでちょっと教科の特徴と説明をしておこう。各教科の担当の
教師によって

テスト結果に特徴が現れる。例えば数学の木内教諭は採点が早い。
世界史の

田中教諭は点数のつけ方が甘い。今いる英語の遠藤教諭は多少の

寛容は見逃して
くれる。

では、保健体育は？

保健体育は採点が早いわけでも甘いわけでもなく、召喚可能範囲
が広い

わけでもなければ御しやすい教師というわけでもない。保健体育の
特性、それは教科担当が体育教師であるがための――

「かかった、ムツツリーニッ！！」

バリインツ！！（窓ガラスが割れる音）

並外れた行動力！

「・・・・・・・・・・・・・・・・Fクラス土屋康太」

「そして、千藤一騎」
「何ッ!？」

「「Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」」

「「^{サモン}試獣召喚ッ!!」」

Bクラス

根本恭二

保健体育

203点

V
S

Fクラス

土屋康太

保健体育

572点

Fクラス

千藤一騎

&

保健体育

4
4
1
点

この攻撃により、根本の敗北は決定した。

第三十四問 戦後の告白

「実は、根本のことなんだけど」

「根本がどうかしたかの？」

「あいつには散々世話になったからな」

「昨日のことじゃな」

「ああ、だから秀吉がこのままここにいたらあいつに気付かれてしまう。」

そこで戦力が減少しないように秀吉はDクラスに移動して欲しい」

「うむ、それでどうすればいいのじゃ？」

「おそらく明久が代わりに攻め込む予定だと思うから勢力を分散させ、

一気に相手の部隊を囲むようにするという事を考えてるけど。そこで

雄二達もここに攻めると思うから安心して敵を一双出来ると思う」

「お主はどうするつもりなのじゃ？」

「俺はムツリーニが来たタイミングで根本に攻撃を仕掛けようと思ってる」

「なぜお主が・・・？」

「実はさっき明久に相談したんだ。もし万が一瑞希が本題の電撃戦の作戦が

失敗してしまった時の事を考えてその保険代わりとしてムツリーニと

一緒に止めを刺して欲しいと言われて」

「1つ聞きたいのじゃが、もし明久がDクラスに来たらワシの事は言っても

よいのか？」

「正直まだ言わない方がいいと思う。なぜなら秀吉がDクラスに行つたと敵に

バレたら結構な妨げとなってしまう可能性があるから」

「ではどのタイミングで言えばいいのじゃ？」

「もし、敵に近衛部隊が攻めて来た時にほかの部隊の人と一緒に進撃する

ようにと告げてもらいたい。そうすれば攻撃に怠らずに済むと思うから」

「うむ・・・、正直少し信用し難い部分があるが、お主の言うとおりでしょう」

「ありがとう。あんまり強引なお願いを言うつもりじゃないけど引き受けて

欲しい」

「わかつたのじゃ。お主を信じてるぞ」

そして今に至る。

「ば、バカな……。教師ごとだと……。？」

根本は止めを刺され、教師がいることに驚く。今連れてるのは鉄人である。

そう、補習担当である鉄人こと西村教諭は全教科を承認出来るだけでなく運動

能力においても群を抜いているのだ。

「……………。つたく……」

鉄人は明久が壁を破壊したことに呆れつつ、

「戦争終結ッ！！勝者、Fクラス！」

と告げた。そして周りは大喜びするように声を出した。

「明久、随分と思いきった行動に出たのう」

援軍を呼そうとした所で戦争が終わったため、援軍を呼ばなかった秀吉が

明久が壊した壁に多少驚く。

「うう……。痛いよう、痛いよう……」

明久は自分の拳にふうふうと息を吹きかけながら呟く。

「なんとも……。お主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？もつと褒めて褒めて！」

秀吉が褒めたような言葉で明久は嬉しそうな顔になるが、

「後先考えず自分を追い詰める男気ある素晴らしい作戦じゃな」

「……。遠まわしに馬鹿って言ってない？」

遠まわしに馬鹿と答えたようだ。

（壁を壊すなんて初めてだし、きっと留年や退学にはならないはず……！）

「ま、それが明久の強みだからな」

（馬鹿が強み！？なんて不名誉な！）

雄二も更に遠まわしに馬鹿と答えた。でもそれが明久の特徴なのだろう。

「残念だったな、根本」

「坂本……」

雄二は本題の設備交換の件で根本に話しかける。そして雄二は教卓を叩き、

「そこで、Bクラスの皆に提案がある。本来なら設備を明け渡してもらいたい。」

そう、Bクラスの設備を我々の素敵な卓袱台と交換する所だが、条件によつて

は特別に免除してやつてもいい」

雄二の提案でFクラス一同は不安を抱かせる。

「落ち着け、俺達のゴールはここじゃないだろ？」

「・・・条件は何だ」

「条件？それはお前だよ、負け組み代表さん」

「俺だと？」

根本は疑問を抱くように答える。すると雄二はこう告げる。

「ああ、お前には散々好き勝手やつてもらったし、正直去年から目障りだったんだよな。そこでお前らBクラスに特別チャンスだ」

「もしかしてBクラスと戦う前に言つたあれか」

一騎はふと頭の中で思い出した。

「Aクラスに試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば

今回の設備は見逃してやる。但し宣戦布告ではなく戦争の意思がある」と

だけ伝えるんだ」

「・・・それでいいのか？」

「ああ。Bクラス代表がコレを着て今言つた通りにしてくれたら

な。

それと、一騎が後でお前と話したいそうだ」

「何！？馬鹿なことを言うな！！俺がふざけたことを・・・ッ！」

「Bクラス全員で必ず実行させよう！」

「約束しよう！任せてくれ！」

「それだけで教室を守れるならやらない手はないな！！！」

（根本君は今まで一体どんな事やってきたんだ？）

根本に女子用制服を着せようとBクラス一同は約束を守る。

「んじゃ、決定だな」

「くつやめろ！よっ寄るな！！俺はそんなもん——ぐふうッ——！」

根本が抵抗するが、気絶させられた。

「一騎、根本をどうするつもりだ？」

「あいつには少しばかり制裁が必要だな」

一騎に質問する雄二は根本をどうするのか伺った。

「ああ、そうか。お前にはヤツがいるのか」

「俺ではなく、アルフに任せようと思う」

「そうか、そしたら後は任せたよ。親友」

雄二はそう言い残し、皆が集まってる所へ行った。

「んで、本当にお前は根本を制裁するんだな？」

「ああ、一度お前を怪我す外道はこの俺が葬る使命が今出来ただ」

「あのな……。とりあえずはあいつが来たら任せろよ」

廊下を歩きながら一騎とアルフは会話する。そして教室へと戻ろうすると、

「たっだい——！？」

「どうした？」

「いや、なんかこの展開は・・・、邪魔しない方がいいかもな」

一騎が見たのは教室へと戻る明久と瑞希の姿だった。

「つまり邪魔立てしないで見届けるとのことか・・・」

「まあな。んで、何を話すんだろう・・・」

一騎はこっそりと耳をあて、様子を聞き取る。

「吉井君！」

「ふえッ！？な、姫路さん！？」

「吉井君・・・！」

瑞希が来たのを驚き、明久は弁解しようとする。

「いやッこれは・・・、そッそう雄二の鞆に悪戯をね・・・あれッ
間違えたかなははは——ほわぁあつと！？」

すると瑞希は明久に抱きついてきた。

「あッありがとう・・・いびきます・・・ッ！わッ私ずっとでっ
していいか

・・・わかんなくて・・・！」

瑞希が泣きながら答えると明久は顔を赤くしながら、

「とツとにかく落ち着いて。泣かれると僕も困るよ」

瑞希から離れる。そして瑞希は涙を拭きながら謝る。

「はッはい、いきなりすいません・・・」

（つてしまった！！引き離してどうする！こんなチャンス二度とないのに・・・！）

明久は思わず失敗してしまったかのような様子になる。

（もう一度抱きついてってお願いしたい！）

「もッもう一度——（ハア、ハア）」

「はい？」

（げッ思わず口に出でた！誤魔化さないと・・・）

自分が思っていることがつい口に出てしまい、瑞希に気付かれた明久が何とか

誤魔化そうと考えた結果、

「もう一度壁を壊したい！」

（つて馬鹿あ！！お前はどこのテロリストだよ！！）

と答えたのであった。

「あの・・・更に壊したら留年されちゃうと思いますよ・・・」

（うんわかってる。わかってるからそんな気の毒そうな目で僕を見ないで）

更に瑞希も困った顔でそう答えたのであった。

「俺は少し、この辺りを散歩していく」

「そうか、すぐに帰ってこいよ？」

「わかってる」

アルフは気晴らしに散歩するために、一騎から一度離れた。

「ふむ。あれからあいつに取り付いてから5日たったか・・・。
色々あったが

まだ使命は果たしていないな」

散歩しているアルフが呟くと、

「アンタ、そこで何をしているのよ」

「ちっ、見つかったか・・・」

美波に遭遇した。

「気晴らしに散歩してるだけだ。その何がいけない？」

「幽霊の状態でうろろしていたら変だと思わないの・・・？」

「知るか。お前のような人間に俺の何がわかる」

「くう・・・！言ってくれるじゃない。それより、一騎はどこに
いるの？」

アルフに罵られるような喋り方されてイライラする美波が尋ねる。

「あいつなら教室の前にいる」

「そう。わかったわ」

アルフがそう答えると、美波は一目散にFクラスへと向かったの
であった。

「アルフの奴、また変なことを仕出かしてないだろうな・・・」

「一騎！」

「美波？どうしたの？」

美波が来たのを驚く一騎は美波に質問を伺う。

「その、ちょっとお礼を言いたくて・・・」

「何の事？」

「実は、昨日ウチが人質にとられた事だけど。その、昨日は助けてくれてありがとう」

「昨日のつて・・・、あれか。その、何て言えばいいか・・・」

美波が礼を言うとい騎は一瞬顔を赤くして呟く。

「それと助けたのはほかの人だと思っただけだな・・・」

「そうかもしれないけど、何ていうか・・・対話面に関しては一騎に助けられた

感じかも」

「うーん。ちょっと理解出来ないけど、昨日の明久の発言にはちよっと

一方的な苛めとしか言いようがないな」

一騎は昨日の出来事を振り返り、やりすぎではないのかと思ってしまう。

「その・・・、お願いがあるんだけど」

「お願い？」

「うん、実は今度の週末に一騎も誘おうと思ってるんだけど」

「もしかして・・・、ああ明久に最初に言ったクレープを奢る事か」

「？ 一騎・・・、まさか昨日のウチとアキの会話を盗み聞きしたわけ

じゃないでしょうね？」

一騎の言葉で美波は疑う顔で一騎を睨む。

「別に盗み聞きしたわけじゃないよッ！ただ偶然通ったら聞こえてしまっただけ

で・・・」

「ふふふ、一騎って本当にアキにそっくりだね」

「え？俺が・・・？」

美波が突然笑みを浮かべると一騎の思考回路が一瞬停止してしまう。

「なーんて、冗談よ。ただのジョークのつもり」

「ちよっとおどかさないでよ・・・。それより、もう俺は用があ

るから

続きはその・・・週末にしよう

「・・・一騎」

一騎がそう言つと、アルフの元へ移動した。最後の言葉を聞いた
美波は

胸を当てて一騎を見送る。

（まさか、一騎が言おうとした事の続きじゃ・・・？）

第三十五問 ユリとバラと保健体育？

「・・・・・・・・ねえ」

「なんだ？」

「・・・・・・・・さつき雄二が話していた『大化の改新』っていつのこと？」

「三年生にもなつてまだそんなことも知らないのか？翔子は馬鹿だなあ」

「・・・・・・・・まだ習つてないから。雄二の頭が良すぎるだけ」

「覚え方は簡単だぞ？『無事故の改新』で覚えるんだ」

「・・・・・・・・無事故？」

「そう、『大化の改新』は無事故で起きたからな。無事故――

625年だ」

「・・・・・・・・無事故。625年」

「忘れるなよ？」

「・・・・・・・・きちんと覚えた」

「よし、忘れるなよ」

「・・・・・・・・大丈夫。絶対忘れない」

「こッこの服、やけにスカートが短いぞッ!!」

「いいからキリキリ歩け」

「さッ坂本め!!よくも俺にこんなことを・・・」

「無駄口を叩くな!!これから撮影会もあるから時間がないんだ
」!

「きッ聞いてないぞッ!？」

一方廊下ではFクラスの連中に連行される根本の姿が確認されて
る。根本は

撮影会があるのを聞いて戦っている様子である。

「ようこそ根本」

「お前は千藤!？」

「実は君に用事があつて来たんだ。アルフがねッ!!」

一騎は合図をするべく、いつの間にか別の体へと移動したアルフが姿を現した。

「誰だお前は!？」

「ふん、くされ外道の貴様に名乗る名はない。今ここで俺に処刑される」

「何を馬鹿な事を!？」

「んじゃ、後は任せたよアルフ」

そう言い残した一騎はこの場を去った。

「待て、俺が一体何を——ぎゃあああああああああッ!!!」

「これでお前が犯した罪を償え、根本」

こうして根本は、Fクラスの連中+アルフに制裁されたのであった。

「所で雄二、このままAクラスに乗り込むの？」

数十分後、Fクラスで会議を開始する直後に一騎が雄二に質問を伺う。

「ああそつだ、俺達はBクラスにAクラスとの対決出来る状態になつてると

告げて来いと命令したんだ」

「せめて今日じゃなくても・・・」

「いや、もう後には退けない状態だ。次に勝てば、Aクラスの設備が

手に入る。少し計画が狂ったが問題はない。事は全て俺のシナリオ通り

に進んでいる」

この一言で全てが懸かってる、と一騎は少し感じる。そうでもない

Aクラスとの戦争で決着がつくので妙に辻褄が合わないこともないだろう。

「さて、Aクラスに乗り込むぞ」

雄二は皆に指示を諭し、教室を後にする。同時に皆も教室を後にした。

「ここがAクラス・・・」
「まるで高級ホテルのようじゃのう」

そしてAクラスに到着した一騎達は教室へと入る。すると周りの設備を見た美波と秀吉は一瞬凄いと感ぜてしまう。

「僕が学園生活を送るには相応しい設備じゃないか」
「はははは・・・まあ確かにそうだな・・・」

明久の言葉で苦笑いしてしまう一騎はAクラスの設備を見渡す。

「見て、アキに一騎。フリードリンクにお菓子も食べ放題よ！」

フリードリンクコーナーにお菓子が置いてある場所を見つけた美波は

大喜びする程の嬉しい笑みを浮かぶ。

「ああ僕が覗き見た時に見つけたからね」

「確かに言われてみれば凄いけど、そんなことしてもいいのかな？」

「まさしくやりたい放題の領域だな」

「それは違うと思うぞアルフ・・・」

突然のアルフの戯言で啞然とした顔で煽る一騎。

「ふん、そんなのにいちいち驚いてたら足元が見られるよ。もっと堂々と構えて」

「尽く発言と行動が伴わぬの・・・」

明久の行動っぷりで秀吉は呆れながらも煩わしいと感じた顔でそう呟いた。

それと同時に美波はいかにも明久を殴ってやろうと言った体勢で身体を

振るわせる。

「全く明久は懲りてないなあ。そんな事していたら誰かに――」

「あら。開戦は来週じゃないの？」

一騎が呟こうとしたら、誰かが喋る声が聞こえた。

「姉上」

「秀吉、姉上って・・・」

（確か奴が変装した姉本人ではないのか？）

秀吉が姉上って言ったのはその名の通り、秀吉の双子の姉の木下優子である。

「もう降伏しに来たの？」

「もうすぐ俺達の設備になる下見だ」

「随分強気じゃない」

「交渉に来た。クラス代表同士での一騎打ちを申し込みたい」

「・・・ッ！？」

これを聞いたAクラス一同はかなり驚いた反応をとる。

「一騎打ち？貴方バカじゃないの？2年の主席に一騎打ちで勝てるわけ

ないでしょ？」

「怖いのか？確かに終戦直後で弱っている弱小クラスに攻め込む
卑怯者

だしな」

「うーん、何が狙いなのか？」

不安を抱く優子は雄二に問いかける。それを他所に、

（木下優子さん。秀吉の双子の姉ただけであってとても可愛い・・・）

この娘を認めると秀吉にも気があるということに・・・！）

相変わらず明久の胸がドキドキしているばかりである。

「この通り、勿論俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

「面倒な試召戦争を終わらせるのはいいけどね、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないかな」

「賢明だな。所でCクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題もないし」

優子がCクラスと戦ったことに関して問題なと告げた。ちなみに秀吉の

挑発に乗ってAクラスに攻め込んだCクラスは半日も経たずに決着をつけられ、

今はDクラス同等の設備になっているのだ。

「Bクラスとやり合う気はあるか？」

「Bクラスって、さっき来ていたあの・・・」

「確実に根本だろ・・・」

根本が来たのをドン引きする優子に対し、一騎は呆れ果てながらもそう呟いた。

「ああ、アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだのようだが、

さてどうなることやら・・・」

「でもBクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の経たないと
試召戦争

出来ないはずだよね？」

しかし優子は自意識過剰に質問してしまう。確かに戦争で負けた
クラスは三ヶ月
の準備期間を経ないと宣戦布告は不可能。これは負けたクラスが
すぐ再戦を

申し込んで泥沼化させない為の取り決めのはずなのだが――

「実情はともあれ、対外的にあの戦争は『和平交渉にて終結』って
なっているんだ。規約に問題もない。・・・Bクラスだけじゃ
なくて

Dクラスもな」

雄二は和平交渉での終結を心掛けてるようだ。

「・・・それって脅迫？」

「人聞きが悪いただのお願いだよ」

「うーん・・・、わかったよ。何を企んでいるのか知らないけど、
代表が負ける

なんてありえないからね」

「え？本当に？」

「だってあんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん・
・・・」

優子は悪寒を漂わせながらそう呟いた。無論、彼女が嫌がる以上

誰も

戦争などしたくないのだろう。

「でもこっちからも提案。代表同士じゃなくて、そうだね・・・お互い5人

ずつ選んで。一騎打ち5回で3回勝った方の勝ちっていうのならしいよ」

「なるほど。こっちから姫路が出てくる可能性を警戒してるんだな？」

「多分大丈夫だと思うけど代表の調子が悪かったら問題次第では万が一

があるかもしれないし」

「安心してくれ。うちからは俺が出る」

保障するように心掛ける雄二は自分自身を主張した。

「無理だよ。その言葉を鵜呑みには出来ない」

雄二に告げた優子は最後に「これは競争じゃなくて戦争だからね」と答えた。

「そうか・・・。それならその条件を呑んでもいい」

「本当？嬉しいな」

条件を呑んだ雄二に、優子は微笑ましい雰囲気で満面の笑みを浮かべた。

「但し勝負の内容はこちらで決めさせてもらっ。そのくらいのハ
ンデはあっても
いいはずだ」

「え？うーん・・・」

一度考え込む優子。すると、

「・・・・・・・・・・受けてもいい」

「・・・・・・・・？」

一騎はその声の主の方へ振り向いた。

「・・・・・・・・・・雄二の提案を受けてもいい」

「代表！？いいの？」

優子に雄二の提案に乗るのを諭されたのは、Aクラスの代表にして正真証明の

学年主席である霧島翔子だ。

「彼女が学年主席なのか・・・？」

「だろうな。俺にもそういう予感がした」

一騎とアルフは翔子が来たのを少し戦いてしまっ

「・・・・・・・・・・でも、その代わり条件がある」

「条件？」

「・・・・・・・・・・うん」

翔子は頷くと次はこう告げた。

「・・・・・・・・・・負けたら何でも1つ言うことを聞く」

その言葉を告げた先には――

『そんな・・・、そんなことをしたら私・・・』

『・・・抵抗しないで。すぐに楽にしてあげるから』

『だめですッ！私はそんなに・・・ああッ！？』

『・・・大人しくして。もう逃げられないから早く楽にな
って』

『ちよつと・・・、私、もう・・・』

『・・・じゃ、いくよ？』

『あああああああああ~~~~~!!!!!!』

「……………」

というビジョンが明久に見えた。

（こっこれは姫路さんの貞操と人生観の危機！どどどどうしよう！
？もし

こんなことになったら・・・ドキドキして夜も眠れないよ！）

「……………？明久……………」

この状況が知らない一騎には到底理解出来ない内容である。

「ってムツツリー二、まだ撮影の準備早いよ！というか負ける気満々

じゃないか！」

カメラを取り出すムツツリー二に明久は焦ってしまう。

（これも計算の内なのか？霧島翔子、恐るべし・・・）

どこら締まらない部分があるのに気づいてるは明久だけではないようだ、

誰も気づかないだろう・・・。

「じゃ、こうしよう。勝負内容は5つの内3つ決めさせてあげる。2つは

うちで決めさせて？ちなみにアタシ達Aクラスには学園の治安と品格を

守る義務があるの。一学期早々、何の努力も積まない内にやらかした

バカへの制裁措置よ」

「木下さんの言いたい事はだいたいわかった。だが、俺はこの学校に

転校して間もないからそんなに細かい特権は知らない。けど一度挑んだ勝負に対し敵に尻尾を巻いて逃げるわけにはいかないんだ」

「あなたは千藤君だね。幾ら争おうと結果は見えているのよ。Fクラスに入れられたあなたにも勝ち目はないと思うけど？」

ここで一騎が優子に梱包的な宣言を告げるが、彼女には一方的な策略

は通じないようだ。更に優子は威圧を漂わせるような事を諭した。

「それと、ただでさえ3つのクラスを落とした所で何の多士にもならないと

アタシは思っけど。そんなつまらない減らず口を呟こうが叫ぼうが伝えようが

どうにもならないし、それを遮るような真似なんてしたくないし、どちらに

せよそれがただの負け犬の遠吠えだったら余計傲慢に思えるわ」「くっ……！」

「一騎、それ以上責めないで」

「いや、止めないでくれ美波。これは俺——いや、俺達Fクラスのスの

問題だ」

「そう？もしそれが気に食わないのならアタシ達に勝ってから証明する

事ね。それと提案はそれでいいよね」

「姫路さん、どうする？」

「え？何がですか？」

優子が勝負の内容の提案についての答えを伺う。

「何がってもし僕らが負けちゃったら姫路さんは……」

「よくわからないですけどきつと大丈夫です」

「そんな簡単に……、もし負けたら姫路さんは霧島さんに……」

明久が必死で瑞希を心配しようと答えるが、

「交渉成立だな」

と雄二が告げる。

「ゆッ雄二!!まだ姫路さんが了承得てないのにそんな勝手な!」

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない」

「雄二・・・」

そして雄二は必ず瑞希に迷惑をかけるような真似をしないと答えた。

「多分、向こうも本気でくるだろうな・・・。無断は禁物だな」

「か、一騎・・・」

優子に散々言われた一騎を心配してしまう美波はただ見守る事しか出来なかった。

「両名共準備は良いですか？」

「ああ」

「・・・・・・・・問題ない」

高橋主任が答えると雄二と翔子はいつでもいいと告げる。

「それでは1人目の方、始めて下さい」

（とうとう始まったか・・・）

第三十六問

試召戦争編エピソード

ユリとバラと保健体育？

「では両名共、準備は良いですか？」

「ああ」

「・・・・・・問題ない」

準備完了の了解を促す高橋主任に対し、雄二と翔子は返事をする。

「じゃあアタシから行くよ」

「ワシがやるう」

最初に出たのは秀吉と優子だった。そして先陣を取った秀吉に――
騎は

元気良く応援する。

「頑張つてね秀吉」

「ワシに任せろ。何とか凌いでみせる」

（木下優子さんは秀吉のお姉さん・・・・。苦手科目や集中力の乱
し方

を知っているはず・・・・！）

「それでは一人目の方、初めて下さい」

高橋主任の合図で、互いは前に出る。すると優子は秀吉に突然満
面の笑みを

浮かばせながら質問を伺いに来た。

「所でさ秀吉」

「何じゃ？姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

「じゃーいいや。その代わりちよつとこつちに来てくれる？」

「うん？廊下で何の用じゃ姉上？」

優子はそう言い残し、秀吉を廊下に連れ込んだ。

「一体何を話すんだろう・・・？」

「さあな———と言うわけにもいかないようだ」

一騎とアルフはこれから起きる事に疑問を抱きつつ、秀吉を心配する。

『姉上、勝負は・・・。どうしてワシの腕を？む？』

『あんたCクラスで何してくれたかしら？どうしてアタシがCクラスの人達を』

豚呼ばわりしてるのになってるのかなあ？』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して』

あつ姉上ツちがっ・・・！その関節はそつちには曲がらなっ・・・

・・・！』

『戦争に犠牲はつきものなんだから仕方ないよね？』

ガラ・・・（ドアを開ける音）

用事を済ませた優子は教室へと入っていく。すると、

「秀吉は少し頭が痛いから保健室に行っただってさっ。代わりの人出して

くれる？」

彼女の頬には血痕が付いていた。それを驚く人はかなり続出しているようだ。

「わかった・・・。代わりのヤツを出そう・・・。」
「だったら誰を出すの雄二？」

今の光景に頭を振る雄二に一騎は誰を出すのか尋ねる。

「そしたら、島田を出そう」

「確かに、美波なら何とかいけるはずだな」

雄二が宣言すると「わかったわ」と答える美波。

「頼んだぞ島田」

「それじゃ、行ってくるね」

雄二に促され前に出る美波に対し優子は、

「早い所済ませましょう。どうせ勝負にならないんですから」

と余裕を咬ました顔で降伏宣言を告げながら前に出る。

「Fクラスだからって舐めないでよねッ!」

「あら、意味のない抵抗をいつまでも言っても結果は見えてるのよ」

「前同情はここで終わりよ。ウチはやる時はやるんだからねっ」
「御託のつもり? 幾ら争おうと同じことよ」

互いに威圧感を漂わせながら試合が開始される。

「それでは改めて、試合開始!」

(ついに始まったか……。頑張ってくれよ、美波……。!)

「試験召喚獣、試験召喚ツ!!」
「試験召喚
サモン」

試合開始と同時に、互いは召喚獣を喚び出す。すると毎度お馴染みの幾何学的な模様が出現し、そこからは自分とよく似た顔の召喚獣が姿を現す。

「数学に關してだけはウチはBクラス並みの学力があるんだから」
「あら、凄いでしょ。うね。やりなさい」

互いに自分の召喚獣に指示を出し、攻撃を開始する。美波は自分の召喚獣に

間合いを出さずに懷に飛び込むように指示をするが、

ズガッ！（相手の召喚獣の攻撃を受ける音）

ドンッ！（最後に巨大な槍で止めを刺される音）

「そんな・・・」

「アタシは勿論Aクラス並みですけどね」

呆気なく止めを刺されてしまう。しかも互いの点数からして、

2点
Fクラス

島田美波

数学

1
8

6点
Aクラス

木下優子

数学

3
7

V
S

余裕で差があるのでほぼ勝ち目はないに等しいのである。

「そんな……。こうも簡単に決着がつくなんて……」

「流石は双子の姉と言った所か……」

後ろで見てた一騎とアルフも優子の実力に戦いてしまう。

「勝者、Aクラス、木下優子」

高橋主任のアナウンスでAクラス全員は喜びの声を上げる。

「仕方ないよ。Bクラス並みじゃあAクラスに勝てない事も分らない

程度の頭に酸素が足りない！！ってちょっと気持ちいかもしれないよ

「これえ！」

「アンタがそれを言う立場なのッ!？」

「や、やめてあげようよ美波！！それ以上やったら明久が……」

明久を関節技で締める美波を止めようと必死で押さえつける一騎。ただ春の夜に夢の如しとはまさしくこの事を表すのである。

「では五回戦、最終ラウンドに入ります」

色々とハプニングが勃発した中、あっという間に最後の試合に入ろうとした

その時、

「高橋先生、少しいいですか？」

「何でしょうか？木下さん」

優子が突然高橋主任に1つ提案をする。

「実は、Fクラスの千藤君と一回対決してみたいのですが・・・」
「そうですね。まだ彼はこの学園に転校してきたばかりのようですね。」

わかりました、特例によりそうしましょう」

「ありがとうございます。所で高橋先生、向こうからは誰が出るのですか？」

一騎はその提案に乗り高橋主任に礼を告げる。すると一騎は向こう側からは

誰が出るのか聞いてみた。

「そうですね……。そしたら――」

「私が出ます」

高橋主任が答えようとしたら、後ろから髪が少し長めの女子が前に出た。

「君は一体・・・」

「お前、千藤一騎と言ったわね。私は鷺ノ宮雫、よろしく頼む」

「ああよろしくな・・・」

嫌な予感がするのか、少し警戒態勢に移ってしまう一騎に雫は、

「その態勢からして、お前は私の事が怖いのか？」

「別に怖いってわけじゃ・・・！」

「ふん、随分と面白い事言うじゃない。早く召喚獣を出しなさい」

雫に促された一騎は自分の召喚獣を換び出す。

「わかったよ。試獣召喚ッ!!」
「その息よ。試獣召喚」

更に雫も召喚獣を換び出した。さつきと同様に互いの足元からは幾何学的な

模様が浮かび上がり、自分と似た顔の召喚獣が姿を現す。

「教科は何にしますか？」

「総合科目でお願いします」

「いい度胸ね。お前から総合科目を選択するなんて・・・」

総合科目を選択した一騎に雫は冷酷な顔で呟いた。

「では、特別試合を開始します」

高橋主任の合図で互いの召喚獣は攻撃を開始する。

「君はどれくらいの学力を持ってるのか知らないが、この戦いは俺が勝つんだ！」

「果たしてどうなのかしら？私に挑んでくる相手は無碍に出来ないからね」

「へっ、それはどうか？今だアルフ!!」

「しょうがないな。俺も派手に暴れさせて貰う!!」

一騎がアルフに指示をすると、アルフは一騎の召喚獣に乗り移った。

「やれアルフ！」

「そうはさせない!!いけ!!」

互いに武器がぶつかり合う中、一騎は必死でアルフを見守る。今一騎の

頭の中は空っぽだ。ただ、この勝負に勝つ事だけを信じてるのだ。

「思った通りにやるじゃないか。だが、これで終いにしようか！

」！

「それはこっちの台詞よ！勝つのは私だ！！」

最後の一撃を互いの召喚獣に打ち込む。アルフは相手の召喚獣の動きを把握

しつつ相手の懐に攻撃をした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

互いに沈黙状態が続く。結果は、

Fクラス
4000点

千藤一騎

総合科目

V
S

互いの点数が互角のため、引き分けとなった。

「この勝負、引き分けです」
「思ったよりやるじゃない」

「ああ、そっちこそ・・・な・・・（ボタン）」

一騎は疲れ果てたのか、満面の笑みを浮かべながら倒れてしまった。

「一騎！大丈夫！？」

「み、美波・・・俺は大丈夫だよ・・・」

「良かった・・・本当に負けるかと思った」

「！？」

美波はあまりの嬉しさで一騎を抱きしめた。すると一騎は顔を赤くしながら

混乱してしまう。

「ふん、お前にとっては大サーブスみたいだな」

「黙れよアルフ！！別にそういうことじゃ・・・！！」

「ふふふ。一騎ったら本当に子供ね」

「えええッ！？美波まで！？」

「とりあえずゆっくり休みなよ。勝負はこれからだしさ」

「明久・・・わかった、そうさせてもらうよ」

明久がそう答えると一騎は少しばかりか休んだ。そして何だかんだ進んで、

Fクラスの卓袱台はミカン箱と化したのであった。

「雄二ッ！！これじゃあシステムデスクじゃなくてミカン箱デスクになるじゃないか！！」

敗北した雄二に明久は怒りに狂いながら叫んだ。

「三対二でAクラスの勝利です」

「・・・・・・雄二、私の勝ち」

「・・・・殺せ」

雄二がそう呟くと明久は、

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！！」

「吉井君、落ち着いて下さい！」

左手の裾を上げながら攻撃を仕掛けようとする。でも瑞希に止められてしまう。

「これでもう証明出来ないな・・・」

「だいたい53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとか思うけど」

「この点数だと――」

「いかにも、俺の全力だ」

「この阿呆がぁー！ッ！！」

（これであいつは役立ずになったか・・・）

あまりの下らなさにアルフは呆れ果ててしまう。

「まさかあんな伏兵がいるとは意外だったなあ」

「自分が伏兵になってどうするんだよッ！！！」

「アキ！アンタだったら30点も取れないでしょうが！」

「それについては否定しない！」

「それなら坂本君を責めちゃダメですっ！」

「くっなぜ2人共なぜ止めるんだ！？この馬鹿には喉笛を引き裂くという」

「体罰が必要なのに！！」

「それって体罰じゃなくて処刑よ（です）！！」

明久の怒れっぷりに瑞希と美波は困ってしまう。

「・・・でも危なかった。雄二が所詮小学生並みの問題だと油断していなければ負けてた」

「言い訳しねえ」

翔子が油断をしていれば負けるのも無理はないと思うのだが、雄二は敢えて

それを否定しないようだ。すると翔子は何かを思い出したかのよう
に雄二に

尋ねようとする。

「……………所で、約束」

「約束って、何でも言うことを聞くって……………」

「わかっている。何でも言え」

「……………!!」

ムツツリー二は約束のことを思い出し、カメラを取り出す。

「い、いけないよ霧島さん！女同士だなんて……………」

明久はさっきの妄想を思い出し、翔子を必死で止めようとするが、

「……………それじゃ——」

翔子はそれを無視して雄二の元へ近づく。そして翔子は、

「……………雄二、私と付き合って」

と皆がいる前で告げた。

(……………はい?)

その言葉を聞いた一同は目を細くし、沈黙状態へと化した。

「やっぱりな。お前まだ諦めてなかったのか」

「・・・・・・・・・・私は諦めない。ずっと雄二のことが好き」

（え？え？どういうこと？霧島さんは女の子が好きなんじゃないの？）

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「・・・・・・・・・・私には雄二しかない。他の人なんて興味ない」

雄二が抵抗しても翔子はそう言い続ける。つまり異性に興味がないって

噂は単なる一途に雄二をを想っていた結果になる。瑞希を見てたのは

雄二の近くにいる異性が気になってたことだと思っただけ。

「拒否権は？」

「・・・・・・・・・・ない。約束だから今からデートに行く」

「あ、いや待て———」

雄二の言い訳を聞く暇を与えずに翔子は雄二の顔面を鷲？みする。

「ぐあっ！！放せ！！やっぱこの約束はなかったことに———」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

この光景に関して、誰も言葉を挟む者はいなかった。

「さてFクラスの皆、お遊びの時間は終わりだ」

そんな中、明久達の所へ来たのは、

「あれ？西村先生、僕らに何か用ですか？」

鉄人こと西村教諭であつた。そして鉄人はこう告げた。

「ああ。今から我がFクラスの補習についての説明をしようと思つてな」

（我がFクラス？）

「おめでとう。お前らが戦争で負けたおかげで福原先生から俺に担任が

変わるそうだ。これから1年死に物狂いで勉強出来るぞ」

「「「なにッ！？」」「」」

鉄人の言葉で一氣に絶叫してしまうFクラス一同。

「確かにお前らはよくやったが、幾ら『学力が全てではない』からといって

人生を渡つてく上で強力な武器の1つなのに蔑ろにしてはいけない」

（雄二がサボらずに勉強してちゃんと暗記できていれば鉄人にこんな説教

くさいことを言われなくてよかったのに！雄二の馬鹿！！）

明久は雄二を恨み続けるが、

「吉井と坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ開校以来初の観察処分者

とA級戦犯だからな」

鉄人は躊躇なくそう告げた。

「そうはいきませんよ！なんとしても監視の目を掻い潜って今まで通りの

美しい学園生活を過ごしてみせます！」

「・・・お前には悔い改めるといふ発想はないのか」

「何て気の毒なんだ明久・・・」

すぐに元気になった一騎が悲しそうな顔で呟いた。

「とりあえず明日から補習の時間を2時間設けてやろう」

「なっ！？西村先生！補習今日からやりましょう！思い立ったが仏滅ですよ！」

「『吉日』だバカ」

「そんなことどうでもいいですから！」

「うーん、お前がやる気なのは嬉しいが・・・」

鉄人は少し悩み出すが、

「無理することはない。今日だけは存分と遊ぶといい」

「おのれ鉄人！僕が苦境にいると知った上での狼藉だな！」

すぐに普通の状態になり、明久をからかうような素振りを呟いた。

「こうなったら卒業式には伝説の木の下で釘バットを持って貴様を待つ！」

「斬新な告白だなオイ」

そして鉄人との苦痛な時間を終え、Fクラスへと戻ると、

「明久よ、戻ってきたのか」

「まあね。所で秀吉は大丈夫だったの？」

「大丈夫なわけがなかるう・・・」

優子に制裁された秀吉がいた。大丈夫じゃない限り、相当の傷を負ってるのだろう。

「あの・・・、ごめん姫路さん」

「？」

「前より酷い教室になっちゃって・・・」

「明久・・・」

明久は前より設備が落ちたのを謝るが、

「いいえ、良い教室ですよ」

「・・・え？」

瑞希はそれを気にすることなく、平気で答えた。

「私、大好きですよ。このFクラス」

「・・・」

「それと・・・、——」

「え？」

最後に告げた瑞希の言葉を聞き取れなかった明久は驚いてしまう。
すると、

「さあ〜てと。それじゃアキ、今日は約束通りクレープ食べに行きましようか！」

「え？それって週末の約束じゃ・・・」

「週末は週末。今日は今日」

「そんな！二度も奢らされたら次の仕送りまで僕の食費が！」

美波は何事もなかったかのようにそう答えた。でも明久は嫌がってしまふ。

「だッダメです！吉井君は私と映画を観に行くんです！！」

「ええッ！？それは話題にすら上がってないよ！？」

「はい、今決めたんです」

瑞希も負けずと言わんばかりに必死で対抗する。

「今日は無理なんだ！今日は一騎と一緒に——」

「アキ！そんな事言っただけで逃げようたってそうはいかないからね？」

「ち、違うよ！今日はたまたま予定が入って——」

「吉井君！その前に私と映画ですっ！」

「それは雄二じゃなくて僕なの！？」

瑞希にも引つ張られる明久は慌てて問いかける。

「坂本君？なんのことですか？私はずっと昔から吉井君の事——」

「アキ！いいから来なさい！」

「あがぁッ！美波、首はヤバイからって一騎！早く助けて——！」

聞く暇もなく美波に連れて行かれる明久は一騎に助けを求める。
すると、

「……悪いな明久。俺、もう帰るから」

「ええええええええええええ！！？？」

「あとは任せたよ」

一騎はわざとらしい表情で教室を出てった。

「ほらアキ！早くクレープ食べに行くわよ！」

「わッ私と映画に行くんですよね！」

「いやああッ！生活費が！僕の栄養があッ！！」

連行された明久を見た秀吉とムツツリー二は、

「あいつはもしかしたら、本物のバカかもしれんのだ」

「うん」

明久がバカだと断言する。それと明久は明日から公園の水が主食になりそうである。

「頑張ってな、明久」

「ふん、めんどくさいな……」

明久を陰で見送る一騎とアルフは一緒に呟いた。

第三十七問 食費とデートとスタンガン？

「昨日は災難だったな・・・」

「俺には関係のない事だ。ただあのくされ外道を始末しただけ
良い事などない」

翌日。朝早く家を出た一騎は道を歩きながらアルフと会話をする。

「ああ根本な。あいつは多分昨日の雄二の指示通りにやってくれたから十分に懲りたと思うから」

「これで邪魔者はいなくなった事だ。あとは俺達でベストを尽くそう」

「そうだなアルフ」

互に関心しながら左側の信号を渡ろうとする。すると、

「おはよう一騎」

「あ、おはよう美波」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。そして一騎に挨拶を交わすと隣

に移動する。一騎に挨拶したのは同じクラスメートの島田美波。綺麗な脚に

ポニーテールが特徴の女の子だ。

「どうしたの一騎？やけに顔色が悪いけど・・・」

「いや、何でもないんだ。ただ昨日色々あってな・・・」

不機嫌そうな顔になっている一騎を思わず心配してしまう美波は元氣付けようと

一騎にお茶を差し出した。すると一騎は若干嬉しそうな表情で「ありがとう」と礼を告げた。

「そういえば昨日はどうだった？」

お茶を一口飲んだ後に一騎は美波に昨日の事を尋ねた。昨日の事と言えば明久がクレープを奢る約束や、瑞希が即席で思いついた映画に連れて行くと言う約束なのである。

「まあ、楽しかったと言った方がいいかな？」

「そうか。俺も行きたかったけどなあ」

「そうなの・・・？」

一騎が羨ましがる顔で空を眺めていると、美波は若干顔を赤くしながら鞆で自分の顔を隠してしまう。

「どうしたの？いきなり顔を隠しちゃってさ」

「・・・あの、その事なんだけど・・・。昨日ウチが一騎も一緒に誘う約束を

したのを・・・覚えてる？」

「うん、覚えてるよ。それがどうかしたの？」

「その・・・、昨日一騎が言ってた続きは週末にしようって、あれは・・・

どういう事なの・・・？」

更に顔を赤くする美波は必死で一騎に尋ねる。しかし一騎も美波の反応につられて

しまい、同様に顔を赤くしてしまう。

「・・・あれは、昨日美波があのお礼を言いたくて・・・、それでタイミング

良く急用が出来てしまって・・・、だから辻褄が合わなくなつたから週末にしよう

って・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

互いに沈黙の時間が続く。すると、

「そこで何をやってるのよ・・・」

2人に話しかけたのはAクラスの鷺ノ宮雫。昨日一騎と戦い、引き分けとなつた

ため今は教科書を手に持ち、読みながら道を歩いていたようだ。

「あ、君は・・・」

「千藤君、おはよう。所でお前は何をやったと言っただ？」

「いや、何でもないんだ」

「うん。本当に何でもないわ」

「・・・そうか。てっきり何か拙い事をやってしまうような反応だと私には

思っけど・・・」

仏頂面を見せる事もなく雫は関心する。最後に雫は何かを忠告す

るような助言を

一騎に諭す。

「それと、ここは人が通ってるからあまりそのような行為はしない方がいいと

私は思うのだが・・・」

「・・・え？」

怪しいと感じた一騎は一目散に周りを見渡した。そこには人盛りが目に見えてしまう。

「ちよつと美波！？これってまさか・・・ッ！？」

「嘘ッ！？今の会話、全部丸聞こえてことなの！？」

思わず動揺してしまう2人は慌てて雫に別れを告げた。

「じゃ、俺達はもう行くから！」

「鷺ノ宮さん、またね！」

そして大急ぎで信号を渡り雫と別れる一騎と美波。

「・・・はあ？何を言ってるのかしら・・・？」

咄嗟におかしいと断定してしまう雫は反対方向の道を歩き出した。

「一体何が言いたかったのかしらね、ルドルフ？」

「オデは知らねえぜ。ただ、あの2人はいい恋人同士かもしれねえぜ」

「・・・恋人同士なのか？」

さっきの騒動を無性に忘れない気分で急ぎつつ、ようやく文月学

園へと辿り着いた。

「はぁ……。一時はどうなるかと思ったよ」

「本当ね、もしこの事が誰かにバレたら大変な事態になってた所よね」

今にも疲労が溜まりそうな勢いでため息を吐く2人は上履きへと履き返る。すると、

「そんな変な奇麗事が広まる所でどうにもならんがな」

「アルフ、お前も何か言えばよかったのに……」

「そうよ、アンタだけが抜け駆けしてもウチらが大変な思いになるだけよ」

「ご機嫌斜めな顔で頭^{かぶり}を振りながら溜め息混じりな労いを口にするアルフ

がまるで神出鬼没の如く呟いた。だがこれに反論する気持ちも今は持てないようだ。

「あ、おはよう一騎、美波！」

「明久か……。おはよう」

「？ どうしたの？ 不機嫌そうな顔してるけど……」

「いや、何でもないんだ。な、美波……？」

「ええ、本当に何でもないのよアキ……」

ここで明久がやってくると、一騎と美波は何事もなかったかのよう
に反応をとる事

が出来ずに不機嫌そうな顔になってしまう。

「そうなんだ……。じゃ、先に教室に行ってるね……」

あまりにも違和感がある空気に耐えられない明久は教室へと向かった。

「そうだ、折角週末にお出かけするんだから何か計画を立てないか？」

「確かにそうね。何か事前に計画を立てるのもいいよね」

少しでも気分が悪い事を忘れるために週末の計画を立てる事にした。

「あのさ明久、頼みがあるんだけど」

「どうしたの？僕に何かしてほしいことがあるの？」

休み時間。一騎は早速明久に頼もうと屋上へとやってきた。すると、

「実は・・・（ヒョイ、ヒョイ）」

一騎が指で何かを促した。

「何やってるんだ一騎。いや、待てよ。これって・・・」

「ああそうじゃな。さっき言いかけたことをそのまま伝えようと
しておるのじゃな」

この行動がおかしいと感じた雄二と秀吉は敢えて明久に言わず、

「あ、ここにいたんですね!」

「やっと見つけたわよ」

そのまま見届けた。つまり一騎が促したのは瑞希と美波を入れさせる
ための合図である。

「ねえねえアキ、週末の待ち合わせどうする?」

「待ち、合わせ?」

「忘れたとは言わせないわよ。クレープ奢ってくれる約束でしょ」

この一言で明久は絶望を味わうような悲惨な顔になってしまう。

「そ、それって・・・、昨日ので終わりじゃないの?」

「昨日は昨日、約束は約束」

「私も一緒にいいですか?」

(え? 姫路さんも・・・?)

「実は、吉井君と一緒に見たい映画があるんです」

瑞希がそう答えると明久は、

（僕の・・・、食費がツ！！）

絶叫しそうな顔でグツと堪えた。

「まあ俺も一緒に行くからお金が足りなくなったら俺も少し出してやるから」

「ううう……。ありがとう一騎……」

「じゃ、決まりね。明日遅れたらおいてっちゃんからね」

（一騎は一体何をしようとしてるんだ……。？益々場が理解出来ないな……。）

所が、アルフには到底理解不能な状況なのである。こうして、週末のデートは

4人で行く事になった。

第三十八問 食費とデートとスタンガン？（前書き）

ものすごく今更ですが、今回でバカテストを追加しました。

第三十八問 食費とデートとスタンガン？

【化学 記号】

問 以下の問に答えなさい

『調理の時に火にかける鍋を製造する際、重量が軽いのでマグネシウムを

材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点と

マグネシウムの代わりに用いる金属合金の例を一つあげなさい』

姫路瑞希の答え

「問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応するため危険であるという点。

合金例・・・ジュラルミン」

教師のコメント

「正解です。合金は『鉄』なので駄目という引っかけ問題ですが、姫路さんは引っかけかりませんでしたね」

土屋康太の答え

「問題点……ガス代を払っていなかったこと」

教師のコメント

「そこは問題じゃありません」

吉井明久の答え

「合金例・・・・・・・・未来合金（↑すごく強い）」

教師のコメント

「すごく強いと言われても・・・」

千藤一騎の答え

「問題点・・・・・・・・マグネシウム自体を使うのが間違いだと思うので却下

合金例・・・・・・・・ガンダリウム合金、超合金Z、超合金ニ
ューZ」

教師のコメント

「問題点に関しては正しいですが、幾ら色々な合金を挙げても間

「違いは間違いです」

「ふあゝ。今日は待ち合わせ時間が早いから結構急ぎのつもりで用意したが、

まだ眠いなあゝ・・・」

「十分に睡眠をとっておくべきだと思っただがな・・・」

そんなこんなで週末。今日の待ち合わせ時間が早いため、一騎は急いで私宅

を完了した。そのため、まだ眠気が覚めないのである。

「よし、もう行くか・・・」

「そうだな」

眠気に負けずと言わんばかりに一騎はとアルフは外に出た。

「確か、この辺りだと思っただけど・・・」

一騎は自分の腕時計を見て時間を確認しながら待ち合わせ場所を探す。すると

後ろ側から明久がやってきた。

「あ、おはよう一騎！」

「明久か、おはよう」

「一騎も間に合ったみたいだね」

「まあな。？ あそこに瑞希がいるな」

向こう側の噴水の近くの方に振り向くと、そこには華やかな私服姿の瑞希が

立っていた。すると彼女の手には何か封筒のような物を持っていた。

（？ やっぱり罰ゲームじゃないか・・・）

すると明久は突然悲しみを味わうかのように絶望する。

「明久・・・？」

「何やってるのアキ？」

不安を感じさせる一騎を他所に、後ろ側から水色のＴシャツに白のブラウスを

着ており、とてもかわいらしいショートパンツを穿いている。いてる美波の姿が見えてきた。

「人生の不条理に打ちのめられてたんだよ・・・」
「吉井君！」

「おはよう、瑞希。その服かわいいね！」
「ありがとうございます。でもこの服選んでてすっかり遅刻する所でした」

瑞希の服装に労う美波に対し、瑞希は礼を告げ、更にどの服を着ようか

迷いつつようやく決まったので少し苦労したかのように答えた。
すると美波も、

「うちもさっきまで何を着てくか迷ってたけど。去年のブラウスまだ着れて

ラッキー！」

先程の時間までにどの服装にするか迷ってたみたいだ。でも何とか着れたようだ。

「よかったね、美波。とても似合ってるよ」

「えッ！？か、一騎！？別にそのつもりじゃ・・・！」

「まさか時間内にこんなにかわいい格好でくるなんて思わなかったよ」

「そ・・・、そう？・・・ありがとう（カア・・・）」

美波の言葉につられてしまい、一騎が彼女の服装に褒めた。すると褒められて

顔を赤くする美波は嬉しそうに礼を告げた。しかし、

「へえ、それはつまり去年から全然膝の関節があらぬ方向に曲がろうとして

ってまだ何も言っていないのにiiiiiiiiiiiiッ!？」

「言いたい事がわかってるからいいのッ!！」

明久に関しては全然逆効果である。それと同時に美波は明久に元祖サソリを

仕掛けた。

「ストップストップ!!ここで争いはやめようよ!」

「ったく、とんだ茶番だ・・・」

周りの迷惑にさせないために、一騎は必死で美波を取り押さえた。すると美波は

驚いたような顔で「ごめん、一騎」と謝った。

「全く、そうやってすぐ明久に暴力を振るうのはいけないよ。それじゃ

明久が可哀想だよ?」

「わかってるわよ・・・。でもアキが・・・」

「貧弱な戯れなど知ったことか」

「黙れアルフ」

これでほぼ解決したようなので早速映画館へ移動した。

「吉井君は何が見たいですか？」
「今日はアキが選んでいいよ」
「正直俺はこういうの苦手だから・・・」
「え？僕が？」

いきなり指摘された明久は思い切ってどの映画にするのか選んだ。
すると、

「・・・・・・・・雄二、何みたい？」

「「「「!?」」」」

そこには雄二を手錠らしき物で連れている学年主席の霧島翔子がいた。

「俺の希望を、叶えられるのか？」

「・・・・・・・・じゃあ『戦争と平和』」

「おいそれ7時間4分もあるだろ！」

（いや、普通の映画は最大で3時間程度なだけだな・・・）

「・・・・・・・・2回見る」

「14時間8分も座ってられるか!!」

「・・・・・・・・退屈なら、隣で寝てていい」

「それ卑劣だぁッ!!」

「・・・・・・・・大丈夫、ずっといるのは同じだから」

「NO、NO、NO——もぁぁッ!!——（ビリ、ビリ、ビリ）」

翔子はそう呟きながら雄二をスタンガンで眠らせた。そして翔子は、

「・・・学生2枚、2回分」

「はい、学生1枚にまた気を失った学生1枚無駄に2回分ですね」
即座に2回分を買った。

「はつきり気持ちを伝えられる人って羨ましいです」
「憧れるよね」

（いやいや、色々とおかしい部分はたくさんあるけど一番おかしいのはなぜ

スタンガンを持つてるのが気になる・・・！！）

この光景に憧れる瑞希と美波だが、この光景に疑問を抱きまくる一騎も

おかしくなかった。

「・・・短いのにしよう、映画」

明久はこの光景に耐え切れず、短い映画を選んだ。

そんなこんなで映画が終わり、4人はラ・ペディスという店でクレープを

食べる事にした。ところが、

「アキと一騎は本当に食べないの？」

「美味しいですよ？」

明久と一騎はクレープを食べないらしい。

「い、いやあ。実は僕、食べ物にうるさくてね。クレープはちょっと口に

合わないんだよ」

「そうか？俺は折角クレープを奢った身だし、自分で食べるのも難だから

ここは敢えて食べないでおこうかなあって」
「どうして？」

「だって自分も食べたなら何か惜しい気がする・・・」

そんな2人を癒そうと美波から最初にこう発言した。

「ふうん。ウチのバナナクレープ多いから、ほんのちょっと食べて貰えれば

良かったのに」

「え？」

「私のストロベリークレープも、一口食べて見たら良かったのですが・・・」

「ええ!？」

続いて瑞希もそう呟くと互いに驚きの声が上がってしまう。

「口に合わないんじゃない・・・」

「ですね、残念です・・・」

「別にそういう意味で驚いてるわけじゃ・・・」

「そうだよな、一騎!」

必死で対抗し続ける明久と一騎に2人は更にこんな行動に入った。

「ちょっとだけ、食べてみない？」

「そうですよ、2人共」

すると即座に前を振り向き、声の主の方を見た。

「美味しいわよ」

「し、しょうがないな」

「よ、吉井君!私のも食べて下さい!」

「でもいっぺんに食べさせるのは無謀だと思うからジャンケンし

た方がいいよ」

一騎の提案で瑞希と美波はそれぞれ互いが座ってる方向に振り向いた。

「そしたらこうしない？ いっぺんに食べさせるのは無謀だからどちらか最初に

食べさせるって事でいい？」

「いいですよ」

「じゃ、瑞希が勝ったらアキから食べさせる、ウチが勝ったら一騎から食べさせる

ようにしましょ？」

「わかりました……。受けて立ちます！」

こうして、誰から食べさせるのかジャンケンで決める提案は実行された。

その結果……、

「私が勝ちました。だから吉井君から最初に食べさせます」

「流石は瑞希ね」

「じゃ、お言葉に甘えて……」

ジャンケン勝負は瑞希の勝利に終わった。そして明久からクレープを

食べさせようとするが、

「いけません、お姉さまッ！！（ガン！ガン！ガン！）」

突如、フォークやナイフが横から降り注いできた。それと同時に瑞希と美波が

持ってたフォークを払い落とした。

「「「「！？」」」」」

「酷いです、お姉さまの甘い甘いクレープをその口につけたフォークごと

薄汚い家畜に与えるなんて許しません！それ以上豚が図に乗って狼藉で

働かないよう――」

「え？豚？」

ここで4人を妨げたのはDクラスの清水美春だった。そして美春は、

「今、この場で成敗します！」

「ええッ！？僕！？」

明久に攻撃を仕掛ける。それを驚く明久は咄嗟に逃げ出した。

「ちょ、明久！？」

急いで明久を追いかける一騎はすぐに瑞希と美波と一緒に連れ、後を追った。

「どうして僕がこんな目に!？」

「あの娘は特別だから・・・」

「特別!？」

何とか明久の元に辿り着いた一騎達は急いで美春から逃げ出している。すると、

「おーお明久、何をしておるのじゃ？」

「秀吉、こつちに！」

「うわ、何じゃ!？」

偶然出会った秀吉を連れて、草の中へと隠れた。

「豚野郎——ッ!——!」

それと同時に美春がやって来た。

「どこにいったのです? お姉さまに家畜な臭いを移そうと思うのなら、

直ちに火破りにしてやりますッ!——!」

(くそ、これはかなり拙い状況だな……。何とかしなければな)

窮地に立たされたこの状況を乗り越えるべく、一騎はこんな提案をした。

「あのさ、俺に良い考えがあるんだ」

「どうしたんですか、千藤君？」

「実は——」

「そういうことね。わかったわ」

「これで作戦はうまくいくはずだと思うから」

「流石一騎、あとは僕らがやればいいよね？」

「ああ、俺を信じろ」

「期待させて貰うぞ、一騎」

「お前にも手伝ってもらうぞアルフ」

提案を告げた一騎は一旦明久達と別れた。

「まずは俺達が文月学園に逃げたら明久達も向かってくるはずだ」
「よくわからんが、これでうまくいくとは限らんがな」
「さあ、どうだろうな？」

そうやって会話をしながら先を急ぐ一騎の前に、

「千藤君、どうしたの？いきなり急いであるような顔だけど」
「ああちょっとな」

「私には到底理解出来ないな。何か隠してるのか？」

「いや、何でもないから・・・」

私服姿の鷺ノ宮雫と出会った。するとアルフは、

「な、お前は・・・!」

「久しぶりだな、アルフ」

「どうしたアルフ？」

「なぜお前がここに・・・」

突然何かに驚きだした。そして雫は簡単な補足説明をした。

「こいつは私のパートナーのルドルフ・エイジ」

「何？もしかしてアルフ以外にも似たような奴がいるのか」

「なぜ肉体言語の化身のお前がその女に・・・!」

「おいおい、肉体言語の化身って言わないでくれよ。オデはただ姉御さんの

元にいるだけだぜ？」

ルドルフがそう答えると一騎は1つ質問をした。

「お前、何か肩書きはあるのか？」

「オデの肩書きか、それは『世界の叛逆者』さ」

「世界の、叛逆者・・・？」

登場人物紹介？（前書き）

ここでは、オリジナルキャラの紹介をしていきたいと思います。

第一回は主人公の一騎とその相棒のアルフを紹介します。

登場人物紹介？

せんとうかずき
千藤一騎

12月24日生まれ。山羊座のA型。優しい性格で少し静かな雰囲気。

自分から行動する習性がある。この春に文月学園に転校し、Fクラスに

所属することになった。しかし最初の印象は絶望的と答えたが、今は教

室の設備に慣れてるらしい（本編では殆ど触れていないが）。クラスメ

イトの中で過去に一緒に過ごしたのは明久、瑞希、美波の3人である。

明久と瑞希とは小学生の時で知り合い、美波とは幼い頃に知り合った。

また、3人との過去の出来事があるがそれについてはまたの機会に触れ

ていきたい。

彼は点数が高く、瑞希とほぼ同じ学力に匹敵する。そのため、Aクラスと

の一騎打ち勝負の時では総合科目の点数が4000点を行く程の実力を

発揮している。なので全ての科目においてかなり優秀である（保健体育も

かなり点数が高い）。召喚獣の装備はごく一般的な装備であり、あまり

特別な装備はしていない。しかし、学力が良いのでそれなりに強い。

相棒のアルフとはあまり気が合わないが、いざとなれば一緒に行動する。

だが、それと成し遂げることには2人の絆は益々深まっている（あまり確
認できていないが）。時々ア

ルフが彼と意識を入れ替える時があるが、

これはほかの男子と会話する（？）ためや、何かあった時のためなどで

入れ替わってる。更には食事する時でも入れ替わる時があったりする。

ちなみに彼は美波の事になれば決して逃さなく、石に噛り付いても

美波を守る。一騎曰く『美波を傷つける奴と俺は戦う』とのこと
で、

誰であろうと容赦しない勢いだとは断定しても例外ではない。それは過去に彼が言っていた『必ず美波ちゃんを向かいに行くから』と言う言葉が全ての始まりなのかもしれない。その意味はまだハッキリして

いないが、誰かを思い続けると言う気持ちを持って欲しいと答え
たが

そこまで意味が成立していない。おそらく、その言葉に続きがあるの

かもしれないだろう。そして、この告白で2人の距離は少し縮んだと

言えるかもしれない。やがて彼は益々色々な思いを胸に刻んだのだろう。

アルフ・フォード

別名、世界の破壊者。かつてさまざまな世界を崩壊し、その目的やその能力などが謎に包まれている。しかし、とある町で捕まってしまい処刑

されてしまう。だが彼は魂だけを残し今まで世界中をさ迷っていたので

気がつけば現代になっていた。そこで、少しでも自由を得るため

にほかの体を利用しようと考えた。結果的に一騎に取り付くことになる

がすぐにバレてしまった。それに気がついた一騎はアルフに言及するもの、

アルフは嘘の事情を説明し一騎を説得させる。少し嘘っぽいと感

じる

一騎だがやがて2人はコンビを結成した。

彼の判明している能力は、普通では考えられない物に乗り移ること
とで

触ることが出来なかった物が触れるようになることだ。つまり、
一騎

の召喚獣に乗り移った時にそれが発揮したのだろう（但し、幽霊
や零体

といった怪奇現象形に限る）。なので本来なら召喚獣で物を触れ
ること

が出来るのは観察処分者の肩書きがある生徒の召喚獣だけだが、
アルフ

が召喚獣に乗り移る事により、それとほぼ同じ能力を得る事が可
能である。

ただ欠点な部分は、限られた人間の特性にしか対応しない事であ
る（まだ

本編では確認出来ていないがいずれは判明する模様）。

彼の性格は至って真面目だが、人の毒舌する態度をとる事が多い。
しかし

一騎の場合は言葉を発する範囲が限られるのであまり自嘲出来な
い（そ

れは一騎次第の反応による）。前記で表記した通り、アルフは時
々一騎

と意識を入れ替える時がある。食事する際にも入れ替わる場合も
あるが

これはアルフ曰く『魂の塊の状態でも何か食べなければ成仏して
しまっ』

との事である。これに至っては流石に理不尽としか言いようがな

い。

更には零体状態のアルフを見る事が出来るのは一騎となぜか女子及び

女性だけである。どうして男子、及び男性には見えないのかは本人すら

不明なのだ（ちなみにアルフは魂の塊でも体のある零体なのでなぜ頭を

振る動作があると言う疑問はツツコまなくていい）。

所々謎な部分があるが、最も謎な部分の1つは瑞希の料理を食べても

何とも思わない事だ。おそらく彼の味覚はおかしいのかそれとも一騎

と入れ替わった故に食べれたのかと推定されるが詳しい真相はまだ明かされていない。更に週末の出来事で突然美春に声を掛けられて、

アルフは少し表情を表している部分も確認されている。そのためアルフ

と美春は仲良くなったたりする。しかしなぜ美春はアルフに一目ぼれした

のかは不明である。そしてアルフは一騎と共に色々な事を学び、更に

様々な試練など大きな広がりを経験しつつ、2人の学園生活はまだまだ

続くのである。

登場人物紹介？（後書き）

新たに出たキャラはまたの機会にします。

次回は本格的に清涼際編に突入です。

第三十九問 食費とデートとスタンガン？

「オデの肩書きは『世界の反逆者』さ」

「世界の、反逆者……？」

ルドルフの言葉で一瞬おどろいてしまふ一騎。ところが、

「あまりこいつの言葉を信用するな。どうせハツタリにしか思えん」

「おいおいそいつを言っちゃおしまいだぜ？」

アルフが眉を左へ受け流すように動かしながら一騎に言葉を促す。それに対し

ルドルフは平常心を保ちながら弁明を口にする。

「おい、あまり余計な事を言うな。私まで疑わしく思われるだろ」
「許してくだせよ姉御さん。オデはただ説明をしようと……」
「それが煩わしいと言っているんだ。悪かったわね。こいつが一方的で」

ルドルフの行動に頭を振る雫は一騎に謝る。すると、

「いや、いいんだ。まだアルフよりはマシだから」

「それは俺が邪魔だと言う事なのか？」

「五月蠅い、お前には言ってない」

一騎は何も疑う事なく普通に許した。それと同時にアルフが遮るように質問すると

すぐに話を終わらせる一騎。

「あ、もう俺達行かなきゃ」

「何処へ行くの？」

「まあちよつと追われているんだ。だから今急いでいるんだ」

一刻も早く明久達に合流するために、一騎は先に文月学園へと辿り着くのが目的

である。なので時間は押されてるので急がなければならない。

「追われてる？誰に・・・？」

「悪い、そこまで説明は出来ないんだ！じゃまた！」

雫が困った顔で質問するが、一騎は一目散に雫と別れた。

「・・・一体何があったのかしら・・・？」

「アルフ、学園まであとどれくらいなんだ？」

「ざっと2〜3分はかかるな」

学園に辿り着くまで走り続ける一騎はアルフに時間を質問した。
しかし一騎は

深刻な表情で明久達を心配してしまう。

「明久達、本当に大丈夫だろうか……。このまま捕まらなければな……。」

「心配するな。あいつらなら出来るさ。俺を信じろ」

「アルフ、お前……。」

まるで逆境を打ち破るような言葉をアルフが鵜呑みにすると、一騎は絶えるように

呟いた。

「俺だって人を信用する。何せ俺達はパートナーだろ？」

「……。まあな。伊達に破壊者って呼ばれてないんだよね……」

ッ！
」

全てを振り絞り、一騎は全力で文月学園へと走り続けた。

「どっしりよう、まだ追ってくるよー」

場所を移して明久達へ。美春に見つかった明久達は何とか建物が
多い場所へ

逃げようとするが、すぐに追いつけられそうな状況に陥ってしま
った。

「仕方ないわ、三本に別れて逃げましょう！」

「それって僕だけが標的になるって意味じゃないの！？それ以前
に一騎の

作戦を忘れたの！？」

「それとこれは別よッ！すぐに追いつけばいいだけでしょ！？」

「もう時間がないよ！」

そんなやり取りで話し合っているうちに、

「おい！みんな、こっちだ！」

「一騎！」

ようやく一騎と合流し、学園までの緯度口を確保したようだ。

「この道を通つ直ぐ行けば学園に辿り着くはずだ！」

「ありがとう一騎！助かったわ！」

そして何とか学園に到着し、近くの教師へと向かう。向かったのは、

「あの先生は・・・」

「竹内先生は現国よ！ウチ全然戦力にならないんだけど・・・！」

「今は贅沢を言ってる場合じゃない！」

現代国語の竹内教諭であった。そして一騎達は竹内教諭の元へ辿り着いた。

「竹内先生、模擬試召戦争をやりたいんですけど・・・」

瑞希が急ぎで竹内教諭に質問すると、

「あ、はい。承認します！」

笑顔で返事をし、召喚許可を出した。すると周りからは召喚フィールドが出現する。

「よし！試験召喚獣、試験召喚！（明久）」

「試験召喚獣、試験召喚！（美波）」

「試験召喚獣・・・、試験召喚！（瑞希）」

「試験召喚、試験召喚獣！（一騎）」

召喚フィールドが出現したと同時に4人は召喚獣を換び出した。足元からは

いつもの幾何学模様が現れ、そこから自分の召喚獣が姿を現す。

「ッ！ 酷い、私の愛を邪魔するつもりですか？ 試獸召喚！^{サモン}」

あとから追いついた美春も戦闘態勢に入り、召喚獣を換び出した。

「姫路さんと一騎の召喚獣がいれば怖いものなしだ！この勝負、勝てる！」

4対1の召喚獣バトルが始まり、前方に瑞希の召喚獣が突っ走る。そこから

横に明久の召喚獣、美波の召喚獣と続き、一番後ろには一騎の召喚獣を控える。

「清水さん、ごめんなさい！」

「そうはいきません！」

美春は最初に勝てそうな相手に攻撃を仕掛けようとする。ちなみにそれぞれの

持ち点は、

F
ク
ラ
ス

姫
路
瑞
希

現
代
国
語

6
8
点
F
ク
ラ
ス

吉
井
明
久

現
代
国
語

1
3
2
点
D
ク
ラ
ス

清
水
美
春

現
代
国
語

&

V
S

3 F
2 ク
0 ラ
点 ス

千
藤
一
騎

現
代
国
語

&

1 F
6 ク
点 ラ
ス

島
田
美
波

現
代
国
語

&

3
4
5
点

となっている。なのでここは一騎か瑞希のどちらかが強行突破するしか方法はない。

そこで点数の低い方の召喚獣はなるべく前線に出ないようにする。しかし、

「えッ！？ウチに・・・！？」

美春の召喚獣は真っ先に美波の召喚獣に攻撃を仕掛けた。結果は美春の方が

圧倒的に点数が高いので美波は戦死してしまった。

「うそおおお！？」

あまりの衝撃的な行動で美波は成すすべがなくなった。しかし、

ズザアッ！！（剣で切り裂く音）

瑞希の召喚獣と一騎の召喚獣は相手の懐に回りこみ、止めを刺した。

「0点になった戦死者は補習ううううッ！！！」

それと同時に鉄人がやってきて、美波と美春を取り押さえ補習室へと連行させる。

「ええええ！？今日はお休みなのにッ！？」

「美春はお姉さまとなら、鬼の補習も天国です」

「！！ 一緒はいやああああああッ！！！」

「うふふ、お姉さまと一緒に」

そんな美波の悲鳴が一騎に響き渡った時には、

「……。少しか我慢してね」

と小さい声で呟き、小悪魔状態へと変化した一騎であった。

「随分と弄ばれたな」

補習が終わるとすぐにアルフが嫌みつたらしい言い方で美波を諭す。

「アンタには言われたくないわ・・・！」

「そうですね！お姉さまを侮辱するなんて——」

美春が何かを答えようとすると突然黙り込んだ。

「？ どうしたのよ美春？」
「・・・・・・・・（／／／）」

疑問に思った美波は美春に質問する。すると美春は、

「あの・・・ お名前を聞かせてくれませんか？」
「美春？ ってまさか！」

アルフにそう答えた。そしてふと何かに気がついた美波はアルフに近づく。

「アンタまた・・・」
「なんだ。 またこいつと入れ替えてはいけないとも言いたいの
か」

そう、アルフは一旦一騎と魂を入れ替えているのだ。

「何でまたやってるのよ」
「先程あの筋肉バカの男に少しばかり話をしたばかりだ」
「西村先生の事ね・・・」
「ちゃんと奴から許可を得た。 それぐらい見逃せ。 ？ なんだお前
は」

「あの、あなたのお名前を聞きたいのですが・・・」
アルフは美春に話しかけられてるのに気がつき、質問に答えようとする。

「俺の名はアルフ、アルフ・フォードだ。 お前の名は何ていう？」
「美春、 清水美春っていいいます。 是非、美春と・・・」

アルフに少し顔を赤くする美春は横を向きながら呟くとする。
するとアルフ

はこう答えた。

「お前の言いたい事はだいたい分かった。いいだろう、要するに俺と仲良くなりたいたいのか？」

「え？まだ何も・・・」

「まさか美春、あんな奴に・・・」

「・・・はい！これからよろしくお願いします！」

一度戸惑った美春は笑顔でアルフに答えた。だが美波には理解不能であった。

「あの・・・、あなたの事を何て言えば・・・」

「俺の事はアルフでいい」

「じゃあ気軽に美春って呼んでください、アルフさん！」

「そうさせてもらおう、美春」

こうして、突然アルフに一目ぼれ(?)した美春はアルフと仲良くなった。

「まさかアルフの奴がそんな事するなんてな」

「ウチも意外よ。まさか美春が男を好きになるなんて・・・」

数十分後、校内の噴水の近くに座る一騎と美波は美春がアルフを好きになる

話をしていた。

「あのさ、折角ここにいるからあの時の続きを・・・」

「・・・あの時の・・・？」

突然一騎がそう呟くと、互いに顔を赤くしながら距離を詰める。

「そう、どこから話せばいいのかもわからなくなったけど」
「じゃあ、簡単に話しましょ？」

誰もいないか確かめた後に美波から話を始める。

「ウチ、ずっと気になってたけど・・・」

「何が？」

「昔、一騎が日本に帰ってしまう時に言っていたあの言葉だけ」

「あの言葉・・・？」

「うん、『必ず美波ちゃんを向かいに行く』って言ってたの。それって

本当にウチの事が・・・」

過去の出来事を振り返る美波はあの時の言葉を思い出しながら一騎に告げる。

それはやがて大きな広がりが起きるのかどうかを質問しているのだ。

「あれは、本気だ」

「え？」

すると一騎は真剣な顔で美波に答えた。それを聞いた美波は胸をあてながら

驚いた。

「ずっと誰かを思い続けるという気持ちを持って欲しいからだ。だから

あの時俺はそう答えたんだ」

「一騎・・・」

「何があっても俺は美波を守る。だから、美波を気づつける奴と

俺は戦う」

「・・・・・・・・嬉しい」

最後に一騎がそう答えると美波は一騎に抱きついた。

「！！ 美波！？今のはちょっとした言葉で・・・・」

「それだけで十分嬉しい」

「え？」

「だってウチにとって一騎は初めて出来た男の子の友達だし、それとウチを

大切に思っているのは一騎だけだし、まだ久しぶりにあってから1週間も

経ってないのにここまで思い続けてる人は一騎しかないんだから」

「美波・・・・・・・・じゃあ、美波の気持ちは何なの？」

「それは・・・・・・・・まだ内緒」

最後に美波が伝えたい事を一騎が聞くと美波は満面の笑みを浮かべながら

一騎の耳元で囁く。

「だったらいつになったら・・・・」

「それはまだ決まってるじゃないわ」

「そんなぁ。ずるいよ1人だけ何も教えないなんて」

「そんな事ないわよ。いつかきつと、この気持ちを伝えたいと思っ
っているから」

「・・・・。わかった、そしたらいつかまた美波の気持ちをきかせ
てよ」

「うん、絶対に約束する」

「必ず、だよ？」

互いに笑みを浮かばせながら嚴重に約束をする。そして互いに立ち上がり、

明久達の元へ移動する。

「（ボソ）その時はあなたの気持ちももう一度聞きたいわ」

「？ 何か言った美波？」

「ううん、何でもない」

「それにしても、あの時は結構疲れたな」

「ま、これで一件落着と言った方が良さそうだな」

週明けの登校日、一騎とアルフは先週の事を振り返りながら道を歩く。

「別にそこまでもないさ。余計な事をしなかった分マシだったからな」

「全くお前という奴は……。まあいいさ、これからもよろしくな相棒」

「ああ！」

アルフが言葉を促すと、一騎は元気よう返事をした。彼らの学園生活は

まだまだ続く。

「いつか、きっとだからね」

第三十九問 食費とデートとスタンガン？（後書き）

これで第一章は終了です。次回について説明します。

次回は清涼際編に突入しますが、本来なら準備期間のため一時的に休載をしようと思ったのですが、都合により急遽ぶつつ抜けでやりたいと思います。

まだまだ色々と言葉の理解が出来ない部分が結構あると思いますけど、これからも『バカと破壊者と召喚獣』を宜しくお願い致します！

第四十問

清涼祭編プロローグ

実行委員決め

「・・・・・・・・雄二、『如月ハイランド』って知ってる？」

「ああ、今建設中の巨大テーマパークだろ？もうすぐプレオープンっていう話の」

「・・・・・・・・とても怖い幽霊屋敷があるらしい」

「廃病院を改造したっていうアレか？面白そうだな」

「・・・・・・・・日本一の観覧車とか世界で3番目に早いジェットコースターも」

「考えるだけでワクワクしてくるな」

「・・・・・・・・ほかに面白いものが沢山ある」

「それは凄いな。きつと楽しいぞ」

「・・・・・・・・それで今度、そこがオープンしたら私と」

「ああ、お前の言いたい事はよくわかった。それじゃあ今度・・・

・・・

「・・・・・・・・うん」

「友達と行って来いよ！」

「・・・・・・・・握力には自信がある」

「ぐああああッ！！（みしみしみし・・・）」

「・・・・・・・・私と雄二2人で一緒に行く」

「オープン直後は混み合っているから嫌ぐぎゃああッ！！」

「・・・・・・・・それならプレオープンのチケットがあつたら行ってくれる？」

「プ・・・プレオープンチケット？痛た・・・あれは相当入手が困難らしいぞ？」

「・・・・・・・・行ってくれる？」

「んーそうだなー、手に入ったらなー」

「・・・・・・・・本当？」

「あーあー本当本当」

「・・・それなら約束。もし破ったら――」

「大丈夫だったの。この俺が約束を破るようなヤツに見えるか？」

「――この婚姻届に判を押してもらっ」

「命に代えても約束を守ろう」

新緑が芽吹き始めたこの季節、彼らの通うこの文月学園ではまもなく新学期

最初の行事である『清涼祭』と呼ばれる学園祭の準備が始まりつつあった。この

学園は試験召喚戦争などの特殊なシステムを採用している事や、毎年多くの来場者

に賑わいを見せ生徒達はそれに応えるべく奮起して準備に接ぐんでいた。主にお化け

屋敷に焼きそばやクレープ屋『試験召喚システム』を展示をするクラスなど。

学園祭準備のためのLHRの時間はどの教室を見ても活気が溢れている。

そして彼らがFクラスはというと――

力チャ・・・

「プレイボール！！（秀吉のコール）」

野球をしていた。

「さあこい！吉井っ！」

「勝負だ、須川君！！」

ちなみに明久がピッチャーで須川がバッターである。

「お前の球なんか場外まで飛ばしてやるー！」

「言っただな！？こうなったら意地でも打たせるもんか！」

（雄二のサインは・・・『次の球は』）

明久はキャッチャーである雄二とアイコンタクトを交わしながら
次の球を

予測する。

（『カーブを』）

（『バッターの頭に』？）

「ってそれって反則じゃないのッ!？」

「遠慮するな!ドンと来い!」

「遠慮するよッ!」

雄二が促そうとするが明久は叫んだ。すると、

「貴様ら!!学園祭の準備をサボって何をしているか!」

「ヤバイ!鉄人だ!!」

校舎から鉄人がやってきて明久達の前に現れた。

「吉井!サボリの主犯はお前か!」

「ちッ違います!!どうしていつも僕を目の仇にするんですか!
?主犯は

クラス代表の雄二に決まってるじゃないですか!」

必死で弁明する明久は雄二に話しを吹っつけた。すると雄二は、

『フオークを鉄人の股間に』

と合図した。それを見た明久は、

「ってぶざけんなーッ!!今求めているのは球種やコースじゃない
!それと怒られる

のは僕じゃないか!!」

などと叫びながら雄二を攻める。最もそれを仕掛けた時点ですぐ
では済まされないが。

「いいから全員教室へ戻れ！この時期になっても学園祭の出し物が決まってるない

のは、Fクラスだけだぞ！！」

「……へーい……」

ようやく一同全員は教室へと戻ったのであった。

「そういうわけで、学園祭の出し物を決めなくちゃいけない時期なんだが・・・」

とりあえず議事進行並びに実行委員として誰かに任命する。そいつに全権を

委ねるので後は任せた」

教室に戻ると、代表の坂本雄二はあくびをしながらそう答えた。

（あの野郎、興味がなかったら全部人に押し付けて寝るつもりだな？）

それを見た吉井明久は悪友を恨みながら蔑んだ。

「雄二って普段はあんな感じなのかな？」

少し雄二の行動に疑問を感じたのは転校してから1ヶ月くらい経ち、すでにこの

学園に慣れてきた千藤一騎である。そんな一騎を他所に、

「誰もが興味を持つというわけでもなさそうだな」

などと呟いたのは一騎の相棒のアルフ・フォードだった。彼の別名は世界の破壊者

であるが、今は互いに目標を達成するためにコンビを組んでいる。

「それにしても、この設備を何とかしないと・・・」

「仕方あるまい。全てヤツの責任だ」

一騎は今の教室の設備を眺めながら呟く。しかし負けたものは仕方ないのである。

「——んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

「え！？ウチがやるの！？」

突然雄二に指名されたのは唯一の女子の1人である島田美波。帰国子女であり、

ポニーテールなどの特徴を持つ女の子だ。そんな雄二の指名で美波は驚くように

言った。

「うーん………、ウチは召喚大会に出るからちょっと困るかな」

「雄二、実行委員なら美波より姫路さんの方が適任じゃないの？」

「え？私ですか？」

明久が1つ提案をすると雄二はこう言葉を返した。

「姫路には無理だな。全員の意見を丁寧に聞いている間に時間切れになる」

「あと瑞希は少し体に弱いからあまり無理はしない方が良く俺は思うんだ」

「それにねアキ、瑞希も召喚大会に出るのよ」

「え？そうなの？」

美波が尋ねると明久はひょんとした顔で答えた。そして瑞希は張

り切った

表情で明久にこう答えた。

「はい！美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

「試験召喚システムの宣伝みたいな行事なのに2人とも物好きだなあ」

「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希ってばお父さんを見返したい

って言つてきかないんだから」

「「お父さんを見返す？」」

その言葉で明久と一騎は一斉に言葉を告げた。すると最初に一騎から美波に

質問を伺った。

「どうしてお父さんを見返したいの？」

「家で色々言われたんだって。Fクラスのことをバカにされただけで怒ってるの」

「あらら、姫路さんが怒るなんて珍しいね」

「だって皆の事何もわかってないくせにFクラスだからって理由だけで

バカにするんですよ？許せませんっ！」

珍しくも瑞希が怒鳴りそうな口調でそう告げた。しかしよく知ってる明久や

最近知った一騎でもFクラスは十分にバカの集まりだと思うのである。

「だからFクラスのウチと組んで大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

「なるほど、そういう事か。それならわかってもらえるはずだね」
「お前ら、こっちの話を続けていいか？」
「あつ、ゴメン雄二」

4人はすっかり雄二の話を忘れてしまい、雄二を呆れさせてしまったようだ。

そして実行委員決めの話を続ける雄二は次にこう述べた。

「じゃあサポートに副実行委員を選出しよう。それなら負担も減るし良いだろ？」

（まさか僕を人身御供にするつもりか？）

「んゝそうね、その副実行委員次第でやってもいいけど」

一度考え出す美波が呟くと、

「ではまず皆に候補を挙げてもらいその中から島田が2人選んで決選投票でいいな」

雄二は決選投票を選択した。

「やはり坂本がやるべきじゃないか？」

「姫路さんと結婚したい」

「ここは須川にやってもらった方が」

皆が相談しあつてる中ここで、

「ワシは明久が一騎が適任じゃと思うがの」

明久と一騎を推薦したのは木下秀吉だった。爺言葉が特徴だが、皆からは女子だと

間違われそうな顔をしているが歴とした男である。

「そういう面倒な役は出来ればパスしたいんだけど・・・」

「というより、俺はこういうのは苦手なんだ・・・」

「そうかの？島田が実行委員なのじゃからお主らのどちらかが適任じゃろ」

「じゃあ島田、今の中から2人選んでくれ」

「そうね〜。それじゃ・・・」

雄二に促された美波は早速チョークを手にとり、黒板に候補を書いた。

候補？ 吉井

候補？ 明久

「さて、この2人のどちらがいいか選んでくれ」

「ねえ雄二、明らかに美波の候補の挙げ方はおかしいよね？」

ちなみになぜ一騎が入っていないのかはツツコまなくていい。

「どうする？どっちがいいと思う？」

「そうだな・・・、どっちもクズには変わらないし・・・」

「こらあっ！！真面目に悩んでいるフリをするんじゃない！あと平然とクラスメイト

をクズ呼ばわりする君らが人間のクズだ！！」

明久が周りに対して叱るが、

「ほらほら、アキってば。ウチとアンタで決まったんだから前に出てきなさいよ」

美波は嬉しそうな顔で明久を促した。

「なんだか僕はいつも貧乏くじを引かされてる気がするよ・・・」

「ははは・・・」

「んじゃあとは任せたぞ」

そう言い残し、雄二は自分の席に戻り眠り始めた。

「一体どんな出し物にするんだろう？」

「俺は知らない」

Fクラスによる学園祭の準備はまだまだ続く。

第四十一問 波乱(?)の出し物決め

「それじゃ、ちゃっちゃと決めるわよ。やりたい出し物があれば
拳手

してもらえる?」

スッ（ムツツリーニが手を上げる音）

「はい土屋」

ここでムツツリーニこと土屋康太が手を上げる。そしてムツツリ
ーニはこう
提案した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・写真館」

「・・・・・・・・それってどんな写真を飾るの?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・秘密」

「・・・・・・・・秘密って・・・・・・・・」

ムツツリーニの発言で明久は思わず呆れた顔になってしまふ。そ
れでもムツツリーニ
は話を続ける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・神秘の世界を覗き見る貴重な写真を、部
屋に飾る」

「・・・・・・・・土屋が言うと写真館ってかなり危険な予感がするんだけ
ど・・・・・・・・」

それは覗き部屋って表現が正しいかもしれないだろう。

「アキ、一応意見だから黒板に書いてもらえる？」

「あいよー」

美波に促され、明久は写真館を黒板に書いた。

「写真・・・館、ひみ・・・ひ・・・、・・・秘密・・・？」
の・・・

覗き・・・へ・・・、部屋・・・？」

候補？ 写真館 『秘密の覗き部屋』

「・・・なかなかシユールな提案だね・・・」

「所詮はそんな程度か」

写真館の名前を見て苦笑いする一騎と高みの見物をするような目で見るアルフが

一緒に呟く。しかしそんな不名誉な発言は口にしないだろう。

「はい横溝」

次に横溝が拳手する。すると横溝はこんな提案を告げた。

「メイド喫茶——はもう目新しくないので『ウェディング喫茶』」

なんてどうだろう?」

「ウェディング喫茶?それってどういうの?」

「普通のメイド喫茶みたいだけどウェイトレスがウェディングドレスを着るんだ」

「斬新ではあるな」

「憧れる女子也多そうだ」

「でもドレスだと動きにくくないか?」

「調達するのも大変そうだぞ?」

「それに男は嫌がらないか?結婚は人生の墓場とか言うくらいだし」

周りの男子が不安な部分を言いつつ美波は明久に促した。

「ほらアキ、今の意見も書いて」

「あっうん」

チョークを手にとり黒板に書く明久は少し疑問を抱くような言い方で呟く。

「ウェディング・・・人生・・・っと・・・墓場・・・?」

候補? ウェディング喫茶 『人生の墓場』

「……………」

「……実に下らん」

流石に一騎とアルフも頭かぶりを振りながら呆れた顔になってしまう。
そして何事もなかったかのように美波は進行を続ける。

「他に意見は——はい須川」

ここで須川が挙手した。そして須川はこう提案した。

「俺は『中華喫茶』を提案する」

「中華喫茶か。なかなかないね」

一騎は須川の意見で少し関心する。しかし美波は、

「チャイナドレスでも着せようと言うの？」

と少し疑わしい謙遜で伺う。だが須川はこう答える。

「いや違う。俺がやりたいのは本格的な烏龍茶と簡単な飲茶を出す店だ。」

イロモノ的な格好で稼ごうってワケじゃない。そもそも食の起源は中国にあると

言われるように中華料理ほど奥深いジャンルはない。近年ヨーロッパ文化による

中華料理の淘汰が見られるが本来食というものは——」

（すッ須川君は一体何を話してるんだろうか？内容が全く頭に入
ってこない・・・）

須川の補足説明についていけない明久は混乱しつつあった。

「ほら早く書いてよ」

「りよ、了解」

再度チヨークを手にとり、黒板に記入する明久は再び何かを呟く。

「えつと、中華・・・っ、ヨーロッパン・・・」

「アンタ、頭に残った単語を書いてどうするのよ・・・」

候補？ 中華喫茶 『ヨーロッパン』

「でもなかなか良い名前だと思うよ」

「ウチはそこまで良いとは思っていないけど・・・」

「ヨーロッパみたいなきだな」

「お前少し黙れよ」

再びアルフが何かを答えようとしたが一騎に言葉を遮られた。

「お前ら、学園祭の出し物は決まったか？」

するとここで鉄人が教室に戻ってきてそう答えた。

「今のところ、候補は3つ挙がってます」

美波が鉄人に告げると鉄人は黒板に書いてある候補を見た。すると鉄人は、

「……………補習の時間を増やした方がいいかもしれんな」

と呆れながら呟いた。それを聞いた明久は「え？ 何だこれ!？」と驚いた。

「セツ先生それは違うんです!!」

「それは吉井が勝手に書いたんです!!」

「僕らがバカなわけじゃありません!!」

周りの男子が必死で弁明する声が聞こえてくる。すると鉄人はこう答えた。

「馬鹿者!! みつともない言い訳するな!!」

（流石は腐つても教師。友達を売って逃れようとする魂胆が許せないとは

ちよつと見直したよ）

鉄人の一喝で明久は少し見直した気分になるが、

「先生はバカな吉井を選んだこと自体バカな行動だと言ってるんだ!!」

どうやら神様に恵まれていないらしい。それを聞いた明久にとっては同じ同級生

だったらシバいてるところだったのだろう。

「全く、少しは真面目にやったらどうだ。これを気に利益を出し、クラスの設備を

向上する気はないのか？」

「それって稼いだお金で机を買うつて事ですか？」

鉄人がそう告げると美波は真っ先に質問を伺った。すると秀吉は、

「おお。何とその手があったか！」

「そんな事してもいいんですか先生？」

と閃いたかのような反応をとる。それと同時に瑞希も嬉しそうな反応で鉄人に問いかける。

「幾らお前らが成績最低ランクのクラスに在るとはいえ、設備が下がるとは

思わなかった。罰則をはいえ勉学に支障をきたしては本末転倒。学校の行事の

一環として特別に許して貰えるよう、俺が学園長に前兆に掛け合つてやる」

「本当ですか!？」

「もうこんなミカン箱とゴザを使って勉強しなくても良くなるのじゃのう」

「ありがとうございます、西村先生！」

これで設備についての駆け引きは成立し、一騎は鉄人に礼を告げた。

「それならお父さんの鼻をあかせます！」

「え？姫路さん、設備の事も？」

「えッ！？いや、何でも・・・」

（瑞希、何か隠し事でもしてるのかな？）

瑞希の表情で一騎は心配してしまうが瑞希は張り切った気分で皆にこう告げた。

「とりあえず、皆さん頑張りましょう！」

（姫路さんがここまでやる気を見せるなんてどうしたんだろう？）

「やっぱり利潤の多い喫茶店がいいんじゃないか？」

「いや初期投資の少ない写真館の方が」

「けどそれだと営業停止処分を受ける可能性もあるぞ」

「中華喫茶ならはずれはないだろう」

「目新しさに欠けるなあ。汚くて人が来ない旧校舎だとそれは致命的じゃないか？」

「じゃあウエディング喫茶はどう？」

「初期投資が大きすぎて清涼祭2日間じゃ儲けが出ないだろ」

「いやハイリスクハイリターンに違いない！」

「はいはい！！ちょっと静かにして！（パンパン！！）」

周りが騒ぎ始めたのを聞き、美波は必死で静かにさせるが全く通じない。

それどころかざわつきは益々エスカレートしていく一方だった。

「お化け屋敷とかの方が受けると思う」

「簡単なカジノを作ろう」

「焼き玉蜀黍を売ろう」

「まったくもう……。ねえアキ、坂本を引っ張り出せない？これじゃあ

まとまりが悪すぎるわ」

「うーん、雄二は興味の無い事には驚くほど冷たいからなあ……

」
「だったらもうこの中から選ぶしかないよ」

戸惑っている美波に一騎は唯一明確な判断を提案した。一応それしか通用しないので仕方ないのである。

「そつか……。もうっ！！とにかく静かにして！決まらないからこの候補の中から選ぶからね！」

美波が叫ぶと周りからは批判な声が聞こえてきた。しかしそんな事は気にせず、

「ほらっブーブー言わないの！1つだけ選んで挙げること！それじゃ写真館に

賛成の人！———はい、次はウェディング喫茶！———

——最後、中華喫茶！」

勢い良く進行を続けるのであった。そんな状況に一騎と明久は苦

笑いしてしまう。

「はいッFクラスの出し物は中華喫茶に決定！！全員ちゃんと協力するように！（バンッ！！）」

最終的にFクラスの出し物は中華喫茶に決定した。役割分担について各自で

行い、これで基本的な役割は全て決まった。

（全く、とんだ茶番だ・・・）

この光景を見たアルフは戦慄しながら額に手を当てた。こうして、Fクラス

で行う中華喫茶は『中華喫茶 ヨーロピアン』と言う名称になった。

第四十二問 彼女の相談

放課後。一騎と明久が一緒に帰ろうとすると、そこへ美波がやってきた。

「アキ、一騎。ちょっといい？」

「ん、何か用？」

「俺達に何か言いたいのか？」

2人が反応すると美波はこう答える。

「用っていうか相談なんだけど……」

「相談？僕らで良ければ聞かせてもらうよ」

「うん、ありがとう。多分2人が言うのが一番だと思うけど――」

――

胸を撫で下ろす美波は最初に明久から質問する。

「まずアキから聞くな……。その……。やっぱり坂本を何とか引っぱり出せないかな？」

「うーん、やっぱりそれは難しいなあ……。さっきも言ったけど雄二は興味

ない事には徹底的に無関心だからね」

「大方、あの様子じゃあ何もやってくれなさそうだし……」

沈んだ空気の中、3人は一度考え込む。すると美波は真剣な顔で、

「でもアキが頼めばきつと動いてくれるよね？」

と鵜呑みにするように諭した。それに対し明久は少し驚くように答える。

「えっ別に僕が頼んでもアイツの返事は変わらないと思うよ?」
「そんな事ない……。きつとアキの頼みなら引き受けてくれる筈。」

だって――」

「そりゃ確かによくつるんでるけどだからと言って……」
「何を言いたいのか……?」

一度言葉を区切り、次にこう告げる美波。

「アンタ達、愛し合ってるんでしょ?」

「もう僕お婿に行けないッ!」

「着目するのはそこなの美波……?」

明らかに着目する所がおかしいと思ってしまう一騎。普通ならそんな発言は控えている所だ。

「って誰が雄二なんかと! だったら僕は断然秀吉の方がいいよ!」

明久が大胆な発言をすると横にいた秀吉が鞆を落としながら3人の方へ驚くように振り向いた。

「そ……その……お主の気持ちは嬉しいがそんな事言われてもじゃな……ワシ」

らには色々と障害があると思うのじゃ……。その……。ホラ、歳の差とか……」

「ひ、秀吉！ちち違っんだ！もの凄い誤解だよ！さっきのはただの言葉のアヤで！」

それと僕らの間にある障害は決して歳の差じゃないと思う！！」

「……それ、全然効果がないよ明久……」

「尽く行動と発言が伴わないわね……」

今言った明久の言葉で思わず秀吉が顔を赤らめつつ動揺するような顔でそう呟くと

明久は必死で弁明する。というか、歳の差などないと思うが……。

「とにかく坂本は動いてくれないって事？」

「え？あ、うん。そういうことになるかな」

「本当に何とか出来ないの？このままじゃ喫茶店が失敗に終わるような……」

（美波、随分と悲しい顔している……。一体何が……）

美波の表情に心配してしまう一騎。するとここで秀吉が質問を伺った。

「所でお主ら何の話をしておるのじゃ？随分と深刻のようじゃが」「深刻ってほどじゃないんだけど店の経営とクラスの話でね」

「別にたいした事じゃないよ」

「2人とも、そうじゃないの。本当に深刻な話なの……」

「え？どういうこと？」

一騎と明久がそうでもないと答えるが、美波は深刻な話と答える。

「今回は絶対に成功しないといけないんだから。頑張つてよ2人とも」

「今回はつて・・・？」

「本人には誰にも言わないでつて言われたけど。事情が事情だし・・・けど

一応内緒の話だからね？」

（一体誰の事だろう・・・）

「実は瑞希なんだけど」

「姫路さん？姫路さんがどうかしたの？」

「・・・もしかしたらあの娘、転校するのかもしれないの」

美波がそう告げると、

（姫路さんが・・・・・・、転校ツ！！？？どうしよう、まだ楽しい思い出

を沢山作らなきゃいけないのにFクラス唯一の清涼剤である彼女が転校しちゃった

らどうなるのさ！？皆は希望を失いクラスは荒廃し、暴力と略奪の跋扈する地獄と

化して喉の渇きを潤すために禁断の果実に手を伸ばす羽目に――

「む、マズい。明久が処理落ちしておるぞ」

「このバカ！不測の事態に弱いんだから！」

「もうどうしようもなさそうだね・・・」

明久は処理落ちしかけながら大変な妄想をしてしまう。ここで秀吉が明久の目を覚まそうと声をかけた。

「明久、目を覚ますのじゃ!!」
「ああ、秀吉・・・僕がモヒカンになっても、好きでいてくれるかい・・・?」

正気に戻った明久がそう呟くと、

「・・・どういつ処理をしたら瑞希（姫路）の転校からこいつの反応が得られる

のだろう・・・（じゃ？）（かしら・・・）」「」「

一騎、美波、秀吉の3人は頭を横に振りながら呆れるように呟いた。

「・・・はっ!? 美波! 姫路さんが転校ってどういうことさ!」
「どうもこうもそのままだの意味。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの」

「このままだと・・・?」

「島田よ。その姫路の転校と喫茶店の話が全然つながらんのが」

秀吉が尋ねると美波は話を続けた。

「そうでもないのよ。瑞希の転校の理由が『Fクラス環境』なんだから・・・」

「ってことは転校は両親の仕事の都合とかじゃなくて・・・」
「そうね。純粹に設備の問題になるって事になるわ」

「つまり、瑞希の両親はFクラスで勉強する事を心配してるのだろぅ・・・」

戯言ではないがそれが事実である以上、向こうがそういう理由で転校させるのも

例外ではないのだろう。

「それに瑞希は身体も弱いから」

「それが一番マズいよね」

「確かに。この劣垢な環境で成績最下位の生徒達と一緒に過ごしてるからな。」

心配になるのも無理はないな・・・」

「纏めて言うとな転校してしまえば普通の環境で勉強出来るというワケよ」

「さっきのお父さんの鼻をあかすってそういう事だったんだ・・・」

「

勿論、瑞希は明るい女の子だ。そんな悪影響を及ぼす教室で勉強するのは不可能かもしれない。

「なるほどのぅ。じゃから喫茶店を成功させて設備を向上させたいのじゃな」

「でも設備に関しては西村先生が学園長に話すって言うてたし」

「瑞希も召喚大会で優勝して両親にFクラスを見直してもらおうとしてるけど

やっぱり設備を何とかしないと・・・」

やはり嚴重な状況になってしまいが、美波は明久と一騎に1つ質問をした。

「・・・アキと一騎はその・・・、瑞希が転校したりとか嫌だよね・・・？」

「勿論嫌に決まってる！！姫路さんだけじゃなくてそれが美波や秀吉であつても！」

「俺も同じだ。大切な人達がいなくなるのが一番嫌いだ」

2人がそう答えると、

「そつか・・・。うん、アンタ達はそうだよね！」

美波は満面の笑みを浮かべながら労った。ちなみに雄二だったらどうでもいい

というのは秘密である（明久にとっては）。

「そういう事ならなんとしても雄二を焚き付けてやる！」

「そうじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙っておれん」

「それじゃまず、雄二に連絡を取らないとね」

明久は雄二を焚き付けるべく、早速連絡を開始する。

『———もしもし』

「あ、雄二。ちょっと話が———」

『明久か。丁度良かった。悪いが俺の鞆を後で届けに———
げっ！！翔子！！』

「え？雄二、今何をしてるの？」

『くそっ見つかつちまった！！とにかく鞆を頼んだぞ！（プツッ）』

「雄二！？もしもし！もしもーしー！」

明久は再度返事をする。どうやら雄二に何かあったのかもしれないようだ。

「……わざわざよくテレビでやる事を再現しなくてもよかったのに……」

そして一騎はそこにツッコんだが、それに関しては言及しない。いい。

「坂本は何て言ってた？」

「えっと……、『見つかつちまった』『鞆を頼む』とか」

「……何それ？」

「大方、霧島翔子から逃げ回っているのじゃろ。アレはああ見えて異性に

滅法弱いからの」

ここで秀吉が簡単な補足説明を述べた。それに頷く一騎は「なるほどな」と答える。

「じゃあ坂本と連絡を取るの難しいわね……」

「いや、これはチャンスだ」

「え？どういう事？」

美波が尋ねると明久はこう答える。

「雄二を喫茶店に引つ張り出すには丁度いい状況なんだようん。ちよつと

皆協力してくれる？」

「それはいいけど・・・坂本の居場所はわかってるの？」

「大丈夫、相手が読めるのはなにも雄二だけじゃない」

そして明久は雄二を探すために教室を後にした。

「あのさ一騎。実は一騎にも相談があるんだけど・・・」

「ああさっきの事か。いいよ」

「木下、ウチらは一度廊下に出てるからね」

「ああ、構わんのじゃ」

「それで、俺に言いたい事は？」

「そんなに長い話じゃないんだけどね。さっきの事だけど」

美波は言葉を区切りつつ一旦深呼吸し、話を続ける。

「もし転校するのが瑞希じゃなくてウチになったら一騎はどうしてた？」

「・・・。それはもう石に齧りついてでも美波の両親に説得する所だった」

「まあ一騎だったらそうするとしてアキも同じ事を言うのかもしれないわね」

「明久も俺と同じ気持ちだったしな」

「それはよしとして、瑞希の転校を止めるのアルフにも手伝って欲しいのよ」

「アルフにも・・・？」

突然アルフにお願いを言う美波に一騎は一瞬自分の思考回路が停止してしまう。

「そう。アイツにも出来るだけ手伝って欲しいの」

「でもアルフがそんな事する筈——」

「どうした。頼み事を聞くほど暇ではないが」

「アルフ、お前目覚め早っ」

そしてアルフの目覚めの速さに戦ってしまう一騎は事情を説明する。

「実はな——」

事情を説明中

「そうか。あの女がいなくなるのか」

「アンタにも手伝って欲しいから・・・」

「仕方ない。今回は特別に協力してやろう」

「本当に手伝ってくれるかアルフ？」

「勿論だ。俺とお前は相棒同士だろ？」

「・・・まあな！」

これでアルフを説得出来た一騎と美波は教室へと戻った。それと同時に明久と

雄二も教室に戻ってきたようだ。

第四十三問 学園長との取引？

「そうか・・・、姫路の転校か・・・。そうになると喫茶店の成功だけでは

不十分だな」

雄二を連れた明久が教室に戻り、雄二に事情を話した。すると雄二は不安を促してしまう状況を予想する。

「不十分？どうして？」

「姫路の父親が転校を勧めた要因は恐らく3つ」

明久が尋ねると雄二は原因を説明する。

「はず1つ目はこの貧相な設備。快適な学習環境じゃないという面だな。これは

喫茶店が成功したら利益で何とか出来るだろう」

「設備の事は西村先生が駆け引きするってさ」

「・・・確かにあの時の雄二は寝ていたからね・・・」

「今この場でお前の鳩尾を殴り飛ばそうと思ったがやめておこう」

（この野郎。僕が普通に答えたにも関わらず暴力を振るおうとするなんて、

コイツには人としての論理関はないのか・・・）

なんて事で雄二を嫉妬する明久だが敢えてやめる事にした。そして次の原因を雄二が説明した。

「2つ目は老朽化した教室。これは健康に害のある学習環境という面だ」

「Fクラスは旧校舎側の教室だから色々と障害を及ぼす過程なのも例外ではないな」

「益々心配になってきそうだわ・・・」

新学期になって間もない頃だが、設備はともかく教室自体の老朽化が進んでいるので

劣垢な環境で過ごしている事が瑞希の父親も転校をさせる原因の1つだろう。更に

美波は少し心配してしまいそうな表情になってしまう。

「1つ目は道具で2つ目は教室自体って事？」

「そういう事だ。しかし教室自体の改修ともなると金銭的にも学校側の協力が

不可欠だ」

「つまり現実的に考えたら修復するのに相当な大金が必要になるな・・・」

頷きながら一騎が答える。無論、教室を修復をするとなれば専門業者側の金額

はおろか学校側からも金額を出すための承諾をせざるを得ないだろう。

「そして3つ目はレベルの低いクラスメイト。つまり姫路の成長を促すことが出来ない

学習環境という面だ」

「参ったね・・・。問題だらけだ」

「そうじゃな。1つ目だけならともかく、残りの2つは難しいの

う」

「そうでもないさ。3つ目の方は既に姫路と島田で対策を練ってるんだろっ?」

雄二はさっきの会話の事を思い出し、美波に問いかける。

「この前、瑞希に頼まれちゃったからね。『どうしても転校したくないから協力

して下さい!』って。召喚大会なんて見世物にされるだけみたいで嫌だった

けど、あんなに必死に頼まれたら、ね?」

「瑞希は一途に美波に頼みたかっただろうね」

美波が嬉しそうに答えると一騎も同情する。これも彼女のお願いならやらないわけにもいかないだろう。

「翔子が参加するなら優勝は厳しいが、アイツはこういう事に無関心だからな。

姫路と島田の優勝は十分ありえるだろう」

「瑞希は全ての科目の点数が高いし、美波は数学の点数が高いからいけそうだね」

「本当は姫路抜きでFクラスの生徒が優勝するのが望ましいけどな」

「それは言いつこなしたよ」

「2人が優勝すれば喫茶店の宣伝にもなるじゃろうし、一石二鳥じゃな」

皆で関心しながら答えると美波が2つ目の問題について尋ねてきた。

「で、坂本、それはそうと2つ目の問題はどつするの？」
「どうするも何も学園長に直訴したらいいだけだろ？」
「それだけ？ 僕らが学園長に言つたくらいで何とかしてくれるかな？」

少し不安な事を口にする明久に雄二は、

「あのな、ここは曲がりなりにも教育機関だぞ？ 幾ら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすような状態なら改善要求は当然の権利だ」

と指示をするように答えた。すると明久はこつ答える。

「それなら早速学園長に会いに行こつよ」
「そうだな。学園長室に乗り込むか」
「念のため、俺も行くよ」

明久の提案で雄二と一騎も動向する事になった。

「秀吉と島田は学園祭の準備の事でも考えておいてくれ。それと鉄人を見かけたら

俺達は帰つたと言つておいてくれ」
「了解じゃ。ついでに霧島翔子も見かけたらそう伝えておこつ」
「アキはともかく、一騎もしっかりやってきなさいよ」
「わかつたよ。何とか交渉してみせるよ」

こつして、一騎・明久・雄二の3人は学園長室へと突入する事になった。

賞品の．．．として隠し．．．
 こそ．．．勝手に．．．如月ハ

中からそのような会話を聞いた明久は少し不審を抱くように様子を聞く。

「どうした明久」

「いや、中で何か話してるみたいなんだけど」

「つまり中には学園長がいるってわけだな。無駄足にならなくてなによりだ。」

さつさと入るぞ」

雄二は早速学園長に話をするべく、ドアにノックをする。

「失礼しまーす」

そして挨拶をしながら部屋に入っていく。すると、

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は入る前に返事を待つもんだよ」

と堂々と言葉を返したのは、試験召喚システムの開発中心人物にしてこの文月学園の

学園長である藤堂カヲルだった。

「やれやれ、とんだ来客ですね。これでは話を続けられません。・
・まさか

学園長、貴女の差し金ですか？」

更に横から喋ったのは教頭の竹原であった。

（第一声がガキどもって・・・、流石試験召喚システム開発の中心人物。規格外な

ところが多そうだ）

「馬鹿を言わないでくれ。どうしてこのアタシが負い目があるわけでもないのに

そんなセコい手使わなきゃいけないのさ」

「それはどうだか・・・。学園長は隠し事が得意のようですか
ら」

「さつきから言ってるように隠し事なんてないね。アンタの見当違いだよ」

「・・・そうですか。それではこの場はそういう事にしておきま
しょう」

（一体何を話してたんだろうか・・・）

「それでは、失礼させていただきます」

そう言い残し、竹原教頭は退室した。そして学園長は、

「んでガキども、アンタらは何の用だい？」

と問いかける。すると雄二はこう答える。

「今日は学園長にお話があつて来ました」

「私は今それどころじゃないんでね。学園の経営に関することな
ら教頭の

竹原に好いな。それとまずは名前を名乗るのが社会の礼儀って
モンだ、覚えておきな」

（こんな横柄な婆さんに礼儀を説かれるなんて世も末だ）

学園長の言葉で明久は呆れてしまふ。

「失礼しました。俺は2年F組代表の坂本雄二。それでこっちが

2年生を代表するバカです」

（どうしてコイツは普通に名前を言えないのだろう）

「ほう・・・そうかい、アンタ達がFクラスの坂本と吉井かい」

「ちよつと待って学園長！僕はまだ名前を言ってませんよね！？」

「そして俺は千藤一騎です」

「アンタが今年転校したばかりの千藤かい」

学園長は一騎の目を見つめるなり、そう答えた。

「おい一騎、あの婆さんは誰だ？」

「あの人はこの学園の学園長だよ。アルフは初めて見るのか」

突然アルフが問いかけると一騎は平然とした顔で告げる。

「色々と気が変わったところだし、話を聞いてやろうじゃないか」

「ありがとうございます」

学園長が諭すと雄二は姿勢を正した。そして今から学園長との交渉が始まること

していた。

第四十四問 学園長との取引？

「それじゃ、さっさと話を聞いてやるうじゃないか」

「ありがとうございます」

「礼を言う暇があったらさっさと話なウスノロ」

学園長が言っていると雄二は話を始める。

「Fクラスの設備について改善を要求してきました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましい事だね」

「今のFクラスの教室はまるで学園長の脳みそのように穴だらけで隙間風

が吹き込んでくるような酷い状態です」

雄二がそう説明するが、すでに言動が綻び始めている。それでも

雄二は説明

を続ける。

「学園長のように戦国時代から生きている老いばれならともかく、今の普通の

高校生は健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます。

要するにボロい

教室のせいで体を壊す生徒が出る前にさっさと直せクソババア、というワケです」

（うん、やっぱり僕の知ってるいつもの雄二だ）

最後の一言で明久は関心する。でも一騎には到底理解出来ない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あの、学園長・・・・？」

一度黙り込む学園長に明久は声を掛ける。すると学園長は「・・・・ふむ、丁度いい

タイミングだね・・・・」と小声で呟いた。

「よしよし、お前達の言いたい事はよくわかった」

「え？それじゃ直してもらえるんですね！」

明久が喜ぶと学園長はこう答える。

「却下だね」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨てようよ」

「・・・・明久、もう少し態度には気を使え」

「・・・・それ以前にそんな事言ってもいいのかな・・・・？」

ヒソヒソ話をする3人は学園長の方へ振り向き、作り笑顔でこう答えた。

「全くこのバカが失礼しました。どうか理由をお聞かせ願いますかババア」

「全くですね、教えて下さいババア」

「全く誰もそう思いますので主張して下さいババア」

「・・・・お前達は本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい？」

3人の言葉で学園長は思わず呆れてしまう。そして少し落ち着いた所で話を再開する。

「理由も何も設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。

ガタガタ抜かす

んじゃないよ、なまっちょろいガキども」

「それは困ります！僕らはともかく身体の弱い子が倒れて――

――」

「――いつもなら言ってるんだけどね。可愛い生徒の頼みだ。こちらの

頼みも聞くなら相談に乗ってやろうじゃないか」

学園長が頷きながら答えると雄二は少し怪しいと感じる態度を取ってしまう。

「・・・雄二？」

「とりあえず、そいつには条件があるのさ」

「その条件って何ですか？」

一騎が尋ねると学園長は話を始めた。

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええまあ」

「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

「え？優勝賞品？」

学園長が告げると明久はポカンとした顔で尋ねる。

「学校から贈られる正賞には賞状とトロフィー、それに『白金の腕輪』。副賞には

『如月ハイランドプレオープンプレミアムチケット』が用意してあるのさ」

「はあ・・・、それと交換条件に何の関係が・・・」

「話は最後まで聞きな。慌てるナントカは貰いが少ないって言葉

を知らないのかい？」

（知らない）

「この副賞のペアチケットだけどちよつと良からぬ噂を聞いてね、出来れば回収

したいのさ」

「回収？それなら賞品に出さなければいいじゃないですか」

明久が答えると学園長はため息交じりな反応で「そう出来るならしているさ」と

呟いた。

「おい、あのばあさん大丈夫なのか？」

「よくわからないけど学園長なりの提案があると思うから・・・」

アルフが疑問符を浮かべるように言う和一騎は恐る恐る保証する。

「けどね、教頭が進めた話とはいえ如月グループとかわした正式な契約を今更覆す

わけにはいかないんだよ」

「契約する前に気付いて下さいよ、学園長なんだから」

「五月蠅いガキだね。白金の腕輪の開発で手一杯だったんだよ。

それに悪い噂を聞いた

のはつい最近だしね」

現状な判断で学園長が説明する。これも重要なので聞かないわけにもいかないだろう。

「それで、悪い噂つてのは何ですか？」

「如月グループは如月ハイランドに1つのジnkスを作ろうとしているのさ。」「ここ

を訪れたカップルは幸せになる」というジnkスをね」

「そのどこが悪い噂なんですか？良い話じゃないですか」

「ほかに悪い事はないんですか？」

益々疑問に思えてくる明久と一騎は更に学園長に質問を伺う。

「そのジnkスを作る為にプレミアムチケットを使ってやって来たカップルを結婚

までコーディネートするつもりらしい。企業として多少強引な手を用いてね」

「なっ、なんだとッ！？」

学園長が説明すると雄二は突然驚き始めた。

「どっとうしたのさそんなに慌てて」

「慌てるに決まってるだろう！！」

（一体何を根拠に驚いているんだ・・・？）

「今ババアが言った事は『プレミアムチケットでやって来たカップルを如月グループ

の力で強引に結婚させる』って事だぞ！？」

「う、うん。言い直さなくてもわかってるよ？」

雄二が戦っている姿に明久は骨が折れそうな顔で呟いた。

「そのカップルを出す候補が我が文月学園ってわけさ」

「くそっ、うちの学校は何故か美人揃いだし試験召喚システムと

いう話題性もたつぷり

だからな。学生から結婚までいけばジंकスとしては申し分ないし如月グループが

目をつけるのも当然か」

「流石は神童と呼ばれていただけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか」

学園長が関心するような態度で雄二を見つめる。幾ら雄二とは言え、自分にとって

危うい話となれば風前の灯となるのだろう。

「雄二とりあえず落ち着きなよ。僕らはその話を知ってるんだから行かなければ済む

話じゃないか」

「そうだよ、別にそこまで危ない話でもないから……」

「……絶対にアイツは参加して優勝を狙ってくる……」

……。行けば

結婚……。行かなくても『約束を破ったから』と結婚……

。俺……の

将来は……」

(……。一体何があったんだ?)

完全にスランプ状態の雄二に2人は既に身震いをするような状態に陥ってしまった。

「——どうやらここに世界の破壊者と呼ばれた男がいるよ

ピッ、ピッ、ピッ……

「……そうか、わかった。ならばこの条件は——」

うだ。行けるか？」

「YES、MY MASTERA・・・」

「・・・？」

「どうしたアルフ？」

「いや、何でもない・・・」

「そうか・・・」

(この威圧感、まさか奴が・・・?)

第四十五問 学園長との取引？

【問題 化学】

問 以下の問に答えなさい

「数々の星座の中で昆虫の名前の星座を答えなさい」

姫路瑞希の答え

「ハエ座」

教師のコメント

「正解です。ハエ座は南天星座の1つですぐ隣にはカメレオン座があります。しかし

残念ながら日本では観る事ができません」

土屋康太の答え

「ミツバチ座」

教師のコメント

「惜しい気もしますが残念ながら不正解です」

吉井明久の答え

「ベルゼブブ座」

教師のコメント

「英語で訳すのは間違いですが、意味としては正解なので良しとしましょう」

千藤一騎の答え

「蚊座」

教師のコメント

「先生も蚊は嫌いです」

「まっそんなワケで本人の意思を無視してうちの可愛い生徒の将来を決定しようって

計画が気に入らないのさ」

学園長がボチボチと説明をすると、一騎が躊躇いもなく質問詰める。

「それだったら無視したらいいんじゃないですか。気に食わないなら」

「それが出来たら苦勞はしないさね」

しかし学園長は明後日の方向を向くように溜息をつく。

「つまり交換条件ってのは――」

「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それが出来たら教室の改修くらい

してやるんじゃないか」

（ふむ、召喚大会の賞品と交換か。それなら・・・）

などと目論む明久だが、

「無論優勝者から強奪や譲ってもらうなんて真似するんじゃないよ。私はお前達

が優勝しろと言ってるんだからね」

（くっ読まれたか！）

学園長にはお見通しだった。そして学園長は一騎の方へ振り向きつつこう答える。

「所でアンタの横にいるそいつは誰だい？」

「・・・まさか、貴女にも見えるんですね。こいつが」

「それは当たり前だ」

「おいその老婆。俺もその条件に乗ってやる」

アルフが学園長に告げると「まだ説明は終わってない」と即答した。

「学園長、俺達が優勝したら教室の改修と設備の向上を約束してくれるんですね？」

「何を言ってるんだい。やってやるのは教室の改修だけ。設備についてはうちの教育

方針だ、変える気はないよ。但し、清涼祭の利益で設備を変更するなら今回だけ

目を瞑ってやってもいい。最も、先程西村先生が私に聞いてきたばかりだけどね」

鉄人が設備を向上させる件を学園長に話したので何とか出来たのだろう。

「でも大会に集中するためにもそこは何とかオマケして設備の向上を・・・」

「明久無駄だ。ババアに譲る気がないのは明白だ。この取引に応じるしかない」

明久が抵抗するが雄二に止められてしまう。そして雄二は学園長に承諾する。

「わかりました。この話、引き受けます」

「そうかい。それなら交渉成立だね」

「但し、こちらからも提案がある」

「なんだい？言ってみな」

雄二が言つと学園長はあっさりと引き受けた。

「召喚大会は2対2のタッグマッチ。形式はトーナメント制で1回戦が数学なら

2回戦は化学といった具合で進めていくと聞いている。そして

各チームから1人

補欠を作るとの事だ」

「それがどうしたんだい？」

「対戦表が決まったらその科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

説明をする雄二に少し委ねるように愚痴を告げる学園長。すると少し考えながら

こう答えた。

「ふむ・・・いいだろう。点数の水増しとか言ったら一蹴していたけど、それくらい

なら協力しようじゃないか」

「・・・・・・・・・・ありがとうございます」

「さて、そこまで協力するんだ。当然優勝出来るんだろうね？」

「無論だ。俺達を誰だと思ってる？」

キビキビとした様子で雄二が答える。それに対し明久と一騎も一

緒に答える。

「絶対に優勝してみせますよ。そっちこそ約束を忘れないように」
「必ず役目を果たします。それで絶対に困っている生徒を助けます」

（ふん、これで条件は揃ったか・・・）

「それじゃボウズども、任せたよ」

「『『おうよッ！！』（パンツ！！）』」

そう答える3人はハイタッチを交わした。こうして、設備の調達と瑞希の転校阻止

のため一騎・明久・雄二の3人は召喚大会に優勝すると誓ったのであった。

「これより、プロジェクト00?を実行するが何か問題はないか・
・」

「・・・問題はあります。全て障害となる物は排除するだけです・・・」

「そうか、ならば我々の計画を実行出来る。誰にも邪魔されずに・
・。そして、

世界の破壊者と一緒にいる人間を消去する・・・」

「いつもただのバカに見えるけど坂本の統率力は凄いわね。あんな短期間で

あのFクラスをここまでにするなんて」

教室に入ってくる美波が驚きながら言う。実は清涼祭が始まる1日前に既に

用意を終えていたのである。

「まあ伊達に神童と呼ばれていないけどね」

「確かに僕もこれは驚きだよ」

一騎と明久が頷きながら関心する。すると明久は横にあるテーブルを触り始めた。

「このテーブルなんてパツと見は本物と区別つかないよ」

触り心地を感じながら言つとそこに瑞希がやってきてこう答えた。

「あつ、それは木下君が作ってくれたんですよ。どこから綺麗なクロスを持ってきた」

「こう手際よくテキパキと」

自分の目を輝かせながら瑞希が説明する。すると秀吉は、

「演劇部の小道具を少々拝借したおかげで見かけはそれなりになったがの。」

「その分クロスを捲るとこの通りじゃ」

テーブルクロスを剥がし、実際に使用している物を見せる。

「うーん、少しどころかかなり困った状況だよな・・・」

「これを見たら店の評判はガタ落ちね」

ミカン箱を使用してるのを見て怪訝を促すかのように一騎と美波が呟く。

「きつと大丈夫だよ。こんな所まで見ないだろうし、見たとしても胸のうちに

しまっておいてもらえるさ」

「そうですね。わざわざクロスを剥がしてアピールするような人來ませんよ、きつと」

「室内の装飾も綺麗だし、これならうまくいくよね！」

明久が自信満々の表情を見せながら答える。しかしアルフは、

「だが俺には妙な胸騒ぎが起きそうな気がする・・・」
「そうか？別に大した事はないと思うけどな」

嫌な殺気を予知するかのように警戒する。でもこの状況では起こりそうもないだろう。

「・・・・・・・・・・飲茶も完璧」

「おわッ！（ビクッ！！）」

突如、明久の後ろで呟いたのはムツツリー二こと土屋康太だった。
厨房担当の

ムツツリー二は飲茶などを用意しているようだ。

「む、ムツツリー二。厨房の方もオーケー？」

胸をドキドキさせながら明久が尋ねる。するとムツツリー二は胡麻団子を差し出した。

「・・・・・・・・・・味見用」

「わぁ・・・、美味しそう・・・」

ムツツリー二が作った胡麻団子を見て嬉しそうな顔を見せる美波。
すると、

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「では遠慮なく頂こうかの」

味見をするため、瑞希・美波・秀吉の3人は早速胡麻団子を食べた。

「おツ美味しいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチしてるし、食感も良いし！」

「甘すぎないところが良いのう」

胡麻団子を存分に味わい、次に飲茶を飲んだ。

「お茶も美味しいです。幸せ・・・」

「本当ね～～・・・」

飲茶を飲んだ瑞希と美波は完全に心も体も癒されていた。

「へえ、そんなに美味しいんだ。そいじゃ、僕も貰おうかな」

試しに明久も胡麻団子を試食してみた。

「（モグモグ）ふむふむ、うん！表面はゴリゴリであり中はネバネバ。甘すぎず

辛すぎる味わいがとっても——んゴパツ！—」

（ああ、あの頃は良かったなあ・・・）

吐き出す胡麻団子に明久は走馬灯を見てしまう。

（ってこれは走馬灯（一部妄想）じゃないかー！！）

「あつ、それは食品サンプルだよ？」

「何でサンプルが紛れているの！？そもそも何で一騎がそれを知ってるのさッ！？」

「実は俺も厨房班なんだ・・・。食品サンプルを作ったらつい・・・

」

一騎が頭を下げながら明久に謝る。すると美波が一騎に尋ねてきた。

「というより一騎ってこういうの作れるの？」

「まあね。昔、蠟を溶かして作る行事をやった事があるからね。

それで今日の

中華喫茶にディスプレイして置こうと事前に作つといたんだよ」
「着色がしっかりしておるのう」

秀吉は明久が食べた胡麻団子のサンプルを手に取り、じっくりと観察する。

「でも昨日徹夜したおかげでまだ眠いけどね・・・」

「お主も大変じゃったのう」

「ホント、一騎にはかなわないや」

そんな会話をしていると雄二が戻ってきた。

「うーっす。戻ったぞー」

「あ、おかえり雄二」

「お？美味そうじゃないか。どれどれ・・・」

「あ!？」

雄二は秀吉が持っていた胡麻団子のサンプルを手に取り、それを頬張った。

「・・・大した男じゃ」

「雄二、君は今最高に輝いているよ」

「お前らは一体何を言ってるんだ・・・？（モグモグ）ふむふむ、表面はゴリゴリ

であり中はネバネバ。甘すぎず辛すぎる味わいがとっても——
んゴパツ——！」

（あ、なんか既視感^{デジャブ}）

サンプルを口にした雄二が横たわっていると明久はさめざめとこう告げた。

「あー雄二、とっても美味しかったよね？」

「ちょ、明久！？今食べたのは食品サンプルだよね！？ここは喋る言葉が

何も一致してないよッ！？」

明久の言葉で一騎は思わず絶叫してしまつ。

10分後

「……明久てめえ、最初にそれがサンプルだと言えっつの」
「……雄二が躊躇なく食べたのがいけないじゃないか」

無表情で互いの胸倉を掴み合いながら愚痴る明久と雄二。しかし少し落ち着いた

所でやめ、雄二は起き上がる。

「所で雄二はどこに行つておつたのじゃ？」

「ああちよつと話し合いにな」

秀吉が尋ねると雄二はそう答える。実は学園長室に行つて例の試験科目の指定して

きたところだが、フェアな事ではないので正直に話せず雄二にしては珍しく返事の

齒切れが悪いのはそのせいなのかもしれない。

「そうですか。それはお疲れ様でした」

「いやいや気にするな。それより喫茶店はいつでもいけるな？」

「バッチリじゃ」

「……………お茶と飲茶も大丈夫」

自信満々の勢いで秀吉とムツツリー二が答える。すると雄二は自分の時計を

見ながら2人にこう告げた。

「よし、少しの間喫茶店は2人に任せる。俺達は召喚大会の1回戦を済ませてくる」

「あれ？アンタ達も召喚大会に出るの？」

「え？あつ、うん。色々あつてね」

「もしかして、賞品が目的とか……？（じー）」

「うゝん、一応そついう事になるかな」

美波が問いかけると明久は平然と答えた。

（正確にはペアチケットと設備の交換が目的だけど。そういや賞品の白金の腕輪も

交換しないとダメなのかな……。召喚獣の戦闘で役立つ特殊効果があるって

噂だけど……）

などと頭の中で整理をする明久。すると美波は何かを嫉妬する目で明久に言及する。

「……誰と行くつもり？」

「ほえ？」

（こッ、これは攻撃色！？）

「吉井君、私も知りたいです。誰と行くこうと思ってたんですか？」

（ゆら……）

「だッ、誰と行くって言われても……」

一時的な窮地に立たされた明久に雄二はこう告げる。

「明久は俺と一騎で行くつもりなんだ」

「え？坂本が一騎のどちらかとペアチケットで『幸せになりに』行くの……？」

「ちよつと美波！？明らかに趣旨が間違ってるよッ！？」

完全に話の内容が乱れてる美波に一騎が絶叫する。それを横に明久が物凄い勢いで雄二を睨み出す。

「（ボソ）明久に一騎、堪えるんだ。事情が知れたらババアに約束を反故されるぞ」

（ぐう……。これも姫路さんのため雄二も同性愛疑惑を我慢するみたいだし

ここはグツと堪えて・・・）

「俺は何度も断っているんだがな」

（え？何？裏切り？）

もはや助けるための命綱すら求められなかった。そして一騎も同じく驚愕する。

「アキ・・・アンタやつぱり木下よりも坂本の方が・・・」

「ちよつと待って！！その『やつぱり』って言葉が凄く引かかる！それと秀吉！！」

少しでも寂しそうな表情しないでよ！」

両手を顔に当てて泣き出す美波と寂しそうな仕草を見せる秀吉に明久は絶叫する。

これに関しては誰も成すすべはない。

「吉井君、男の子なんですから出来れば女の子に興味を持った方が・・・」

「それが出来れば明久だって苦勞はしてないさ」

「雄二！！全然フォローになってないから！！」

妙に優しい言い方で雄二が答えるが全く明久をフォローする言葉ではない。

「つと、そろそろ時間だ。行くぞ、明久、一騎」

「・・・くっ！と、とにかく誤解だからね！」

「・・・はあ。一体こんな事を誰が信用してくれるのやら・・・」

額に手を当てながら呆れる一騎が呟く。結局この話題を解釈出来た者は誰一人いない。

「・・・さて、お前達の活躍を見せて貰おうじゃないか」

学園長室のモニターを見ながら学園長が呟いた。こうして、召喚
大会の幕が

きって落とされようとした。

第四十七問

召喚大会1回戦？

バラバラのコンビ

「所で雄二、この召喚大会でFクラスの主力チームは瑞希と美波で俺達はバックアップする側なの？」

「そうだ。それと秀吉とムッツリー二には別の任務を与えている」
「なるほど。そうすればうまくいくかもしれないね」

試合が始まる会場に移動しながら雄二が説明する。とりあえず彼女達を主力にして一騎達が補えば何とか勝つ事が可能だ。

「それと、姫路さんの転校を阻止するためにも絶対に優勝しないと・・・」

「ああ、そうしなけりゃババアとの約束は成立しないからな。ちなみに明久、

お前はちゃんと勉強してきたんだろうな？」

「試合の前にちゃんと補給試験を受けとかなないと勝負にならないよ」

「任せておいて、多分僕の得意科目が出るかもしれないから」

明久は試合表を確認しながら2人に答える。すると雄二は頷きながら「お前も

よくやったな」と呟いた。

「だいたい戦力が整えば何の問題はない。俺達でベストを尽くそう」

「了解、一騎は補欠だから俺と明久のどちらかが危なくなったら交代するんだ」

「ああ！」

3人の決意が団結し、試合に勝つ事に専念した。

「えー、これより試験召喚大会1回戦を始めます」

アナウンスを務めるのは数学教師の木内教諭である。そして木内

教諭は1つ報告を

かねながら答える。

「3回戦までは一般公開ありませんのでリラックスして全力を出して下さい」

巨大モニターからそれぞれのチームが表示し、更に生徒の名前も表示する。

Fクラス
補欠 千藤一騎
吉井明久
&
坂本雄二
(

V
S

Bクラス
補欠なし
)

岩下律子

&

菊入真由美

(

「縛って行くぜ!」
「おう!」

気合が入っている明久と雄二が張り切る。一方、Bクラス側のチームも気合が入っている様子である。

「頑張ろうね律子」
「うん、行こう真由美」

(彼女達、前のBクラス戦の時でもいたよな。でも今回ばかりは油断出来ないかもな・・・)

後ろで待機する一騎が警戒しながら見つめる。それと同時に木内教諭の合図が下される。

「対戦科目は数学です。では召喚して下さい」

木内教諭が召喚フィールドを出すと互いに召喚を始める。

「「^{サモン}試獣召喚っ！！」」

最初はBクラスのチーム。するといつもとは違う出現の仕方です。召喚獣が姿を現す。

これは召喚大会のために用意したらしい。そして互いに点数も表示される。

Bクラス

岩下律子

数学

179点

&

Bクラス

菊入真由美

数学

163点

「やるな、流石はBクラス。・・・だがなあッ！」
「ああ、僕らも召喚しようか！」

「「サモン試獣召喚ッ！！」」

次に明久&雄二が召喚獣を換び出す。そして特殊な出現方法で互いの召喚獣が姿を現す。

「・・・素手？」
「馬鹿が。よく見る。メリケンサックを装備してるだろ？」

突然明久が雄二の召喚獣の装備を確認すると雄二は諭すように答える。

「ざッ、雑魚だ！雑魚がいる！！」

しかしそれを見た明久は驚くばかりであった。

（装備がメリケンサックなんて他の召喚獣には一体もいなかったぞ）

「行くわよ、修学旅行のお土産コンビ」

「律子違っわよ、チンピラコンビだよ」

（・・・もはやあれは否定出来ない・・・）

後ろで見ているアルフが呆れながらそう思った。

「好き放題言ってくれちゃって！！」

明久が答えるとそれぞれの召喚獣の点数が表示される。

Fクラス

吉井明久

数学

63点

&

Fクラス

坂本雄二

数学

179点

「つて雄二!」

「何だ?」

「どうしてそんな点数になってるの!?!」

明久が驚くのは装備だけではなかった。もう1つは雄二の点数である。

（179点なんてBクラス並の点数だ……。バカのはずなのに！バカのはずなのに！！）

「俺はな、前回の試召戦争以来から今度こそAクラスに勝つ為に本気で勉強

してるからな」

「Aクラスに……。？雄二、そこまでして……」

この言葉で明久は心配しそうな顔になるが、

「前に翔子に聞かれたんだ」

「……。何を？」

「……。式はどこで挙げたいかと」

雄二は絶望するように告げる。もはや翔子は完全に一途である。

「俺は、俺の人生を守る為にAクラスに勝たなきゃならねえんだ」
「！」

「……。雄二、そこまでして……」

「一蓮托生だ！お前も無様な真似見せんじゃねえぞ！」

「わかってるよ。僕だってこの日のために勉強してきたんだ」

「でもお前の点数どうしようもないな」

「しょうがないだろッ！」

相変わらず2人の息は一致しない。

「どうやら、私達の敵じゃないみたいね」

「さつさと片つけて、次の試合の準備しましょう」

一息ついた所で試合が開始された。まずはBクラスのチームからの行動に入る。

「律子！」

「真由美！」

「行くわよ！！」

互いに回り込みながら行動する戦法に入り、明久達を妨害しようとする。

「へえ、息は合ってるみたいだね」

「女の子の仲良しごっこにしてはそれなりによく出来ているな」

「しッ、失礼ね！！」

「私達のチームワークは最強よ！」

明らかにバカにされた気分で怒るBクラスチームの2人。すると後ろから一騎

の声が入ってきた。

「2人共、ここは迂闊に攻め込まないなんて通用しないから一気に攻め込むんだ！」

「了解だ一騎！」

「それじゃこっちは、本当のコンビネーションを見せてあげるよ！」

「そうだな、明久！」

返り討ちされる前に迎撃するべく、明久と雄二は互いに連携を整えながら準備する。

「雄二ッ！」

「明久ッ！」

「後は任せたッ！！！」

互いに告げると周りは失望したかのように呆れる。

「つて雄二！！お互いに相手に任せてどうするのさ！」

「それはこつちの台詞だ馬鹿野郎！！ここは明らかにお前の出番だろ！俺は前の

戦争で召喚した事ないんだぞ！？」

「なッなんて使えない男なんだ！！それなら責めて僕の盾になれないか！」

「使えないとはなんだ！お前なんて点数がゴミみたいなもんじゃなにか！」

「言つたな！？上等だ！表に出ろ！！！」

「望む所だッ！！！」

ついには互いに喧嘩が勃発してしまう羽目に。これを見た岩下と菊入は、

「男の子の仲良しって変わってるね・・・」

「私達、女で良かったね」

この光景を見つめるなりそんな事を言い出した。

「はッ！？・・・あ、コホン。ふん、コンビネーションは五

分五分という

所か」

「「ええッ!?!」」

（もうそれはコンビネーションとかいう問題じゃないと思うんだけど・・・）

もうこの光景についていけない一騎はただ落ち込むばかりである。

「でも僕らには学力とは別の『知恵』というものがある! コンビネーションは

同等でも知恵を使った作戦で僕らの勝ちが決まったようなものさ!」

「律子、あの人あくまでコンビネーションは同等って事にしたいみたいだよ」

「気にしちゃダメ。アイツはちょっとアレ（・・・）な人なんだから」

（どんどん僕の評判が1つの方向に収束し始めてる気がする）

岩下と菊入はヒソヒソと会話しながら明久を脱力状態へと変える。

「よし明久、例の作戦で行くぞ」

「・・・作戦?」

「明久が片方の敵を引き付けて――」

雄二が説明すると明久は仕方なく聞く事にした。

「――その隙に、お前がもう片方を倒す」

「それって両方とも僕じゃないかーッ!?!」

こう見えても2人は仲が悪いがとても仲が良いそうです。

「仕方がない。明久、ここまできたら小細工は無用だ。2人の力を合わせて

真っ向勝負だ」

「・・・仕方がないのかよ」

呆れながら明久が呟く。しかし試験召喚大会第1回戦はまだまだ続くのであった。

第四十八問

召喚大会1回戦？

苦渋の勝利

「じゃあこうしよう」

「・・・今度は何？」

再び雄二が作戦を提案する。でも明久は疑う事しか出来ない。

「俺が攻撃を担当する。お前は盾を担当しろ」

「僕だけやられるじゃないか！攻撃が当たると痛いんだよッ！？」

勿論、明久は観察処分者なので攻撃が当たるとその痛みがフィードバックされて

しまうから尚更拒否するだろう。

「律子、どうしよう？」

「こんなバカ相手に負けるわけないわ。受けて立つわよ！」

「うん！」

岩下と菊入は一気に肩をつけるために真向勝負に入った。そして、

「やあッ！！」

スッ・

「いのッ……ッ（グハッ）」

タンッ・・

「このッこのおッ!!（ブンブン）」

サッサッサッ

岩下は明久の召喚獣に攻撃を仕掛けたが、呆気なく回避されてしまっ
た。

「うーん・・・。何だか弱いもの苛めになっちゃいそうだ」

明久はこの状況を見て参ったなあといった顔で答える。

（そういえばこの娘達、前の戦争で姫路さんに一撃でやられた娘
達か。早々に

戦線離脱して慣れてなくても当然か。とは言え、避けてばかり
じゃ埒があか

ないし・・・）

「そろそろ——いきますかアッ!!——」

張り切って敵の召喚獣に攻撃を仕掛ける明久の召喚獣。そう、逆に観察処分者の

召喚獣は雑用で召喚獣を使い慣れているためが故に素早い動きが得意である。なので

さっきの攻撃を余裕で回避したので明久にとっては楽勝である。

「えッ!！」

そして相手の正面に飛び込み・・・、

「わッ!！きゃあッ!！」

一気に攻撃を繰り出す。やがて相手の点数も下がりつつあった。

「よし、雄二は?。」

「おらおらおらおらおらおらおらおらおらおらおらおらおらおらおらッ!！」

一方、雄二も相手の召喚獣をたたみ掛けていた。

「何で!？」

菊入はこの攻撃についてこれなく、自分の召喚獣がやられる一方だった。

（一撃が弱いなら急所に狙いつつ手数で勝負に入ったか・・・でもこの格好で

女子を滅多打ちってどう見えても明久が悪役だと思うが・・・）

何て事を一騎が思うと・・・、

「ふはははッ！？無駄無駄無駄あッ！！」

（もっと悪役っぽい人があるーーーーッ！！！）

雄二の方がよっぽどの悪役だった。やがて・・・、

「今だあああッ！！」

『CAUTION』（ここからはイメージ描写のため、読むのが面倒な人は

直ちに飛ばして下さい）

「ふふふ・・・」

「・・・ぎい・・・」

「ガルルル・・・」

ドガッ、バキッ、ゴスッ、ドンッ・・・

完全に凶暴と殺戮の塊と化した悪鬼となる明久の召喚獣と雄二の召喚獣。これを

見た観客席いる女子全員は、

「「「・・・・・・ッ!!」」」

この光景に怒りを狂わせていた。

「あれ・・・、何か・・・僕ら・・・、悪役っぽくない・・・?」

（もう君達の召喚獣は最悪だな・・・）

もう完全に暗い表情になってしまった一騎が2人を見つめるなり既に拒絶

し始めた。

「・・・教育者としては坂本吉井ペアには是非とも負けてもらいたいものです」

「そんなッ!? 酷い!!」

所が既に手遅れだった。まあ最初に調子くれた事が原因だが。

「くうっッ!! 悔しいッ!!」

「こんなのにも負けるなんて恥ずかしいッ!!」

「・・・勝者、坂本吉井ペア」

木内教諭がそう告げると観客席にいる女子全員からの苦情が相次いでいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その横には絶望したかのように頭を振る一騎の姿が。
かぶり

「・・・・・・・・よっしゃー・・・・・・・・」

流石に明久と雄二も納得いかない苦渋に満ちた表情に陥っていた。

「・・・・・・・・まずは一勝だ明久・・・」

「・・・そうだね、・・・それじゃ、改めて・・・――」

氣力を無くしたかのように手を差し出す明久と雄二。すると、

「さっきの決着をつけるぞ、クソ野郎!!」

「それはこっちの台詞だよ、バカ野郎!!」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」

すぐに正氣に戻り、内ゲバ状態へと変化した。

「明久に雄二、殴り合いなぞしておらんで急いで教室に来てくれんかの？」

「あれ？秀吉、喫茶店で何かあったの？」

そんな中、秀吉が急いで明久達の方へやってきて答えた。

「うむ、少々面倒な問題が発生じゃ。このままでは客が誰もいなくなってしまうぞい」

（もしかして・・・まさか・・・ッ！？）

秀吉の言葉を聞いた一騎はとある事を思い出した。

「・・・営業妨害か？」

「あはは、まさか。学園祭の出店程度でそんな真似して何のメリットが・・・」

「それが雄二の言った通りなんじゃ」

廊下を歩いて教室に向かおうとしていると秀吉がそう答える。

「相手はどこのだいつだ？」

「うちの学校の3年じゃな」

「まっそういうトラブルなら雄二にお任せだね。チンピラにはチンピラを」

充てるのが一番だよ」

「それが人にものを頼む態度か？」

「・・・？あの声は・・・」

「確かあの大声で騒いどる連中じゃな」

「じゃ、ちよっくら始末してやるか」

4人はこの問題を解決するため、急いで教室に入った。

「マジきつたねえ机だな!!（バンツ!）これで食べ物扱っていいのかよ!!」

テーブルクロスを捲ったモヒカン頭の生徒が発言すると、

「うわゝ、確かに酷いな・・・」

「クロスで誤魔化してたみたいね」

「学園祭って言っても一応食べ物のお店なのに・・・」

周りの客がざわざわと話しながらドン引きする。

「雄二、早く何とかしないと経営に響くよ・・・」

「やはり、俺の予想通りみたいだ。どうする雄二?」

「そうだな・・・。秀吉、ちよつと来てくれ」

「なんじゃ?」

ここで雄二が秀吉を呼ぶと、雄二は秀吉にこう話す。

「至急用意して欲しい物があるんだ」

次にその内容を秀吉の耳元で囁くと、

「・・・一応用意は出来るが・・・あっても2つ程度じゃぞ？」

「それで充分だ。残りは後から調達してくるさ」

「了解じゃ、すぐ戻る」

秀吉は雄二の指示通りに動き、ある物を調達しに行った。

「明久と一騎はあの小悪党共をよく覚えておけ」

「よくわかんないけど了解」

「あのモヒカン頭に坊主頭の奴らね。わかったよ」

「全く！！責任者はいないのか！このクラスの代表ゴペツ！！」
「ゴッ！！」

坊主頭の生徒が発言すると突如、何者かに殴られた。

「私が代表の坂本雄二です。何かご不満な点が御座いましたでしょうか？」

雄二がそう答えるとモヒカン頭の生徒は、

「不満も何も今夏川が殴り飛ばされたんだが・・・」

恐る恐る雄二に答える。すると雄二は、

「それは私のモットー、『パンチから始まる交渉術』に対する冒瀆です」

と嬉しそうにモヒカン頭の生徒に告げる。

「ふざけんなコノヤルオオオふぎゃあッ！！（めぴょッ！）」
「そして、『キックでつなぐ交渉術』で御座います」

殴りかかってきたモヒカン頭の生徒の顔面を蹴り飛ばした雄二が次にそう答えると

坊主頭の生徒が目を覚ました。

「いててて。おい、常村？・・・」

「最後に、『プロレス技締める交渉術』が控えておりますが？」

「え？いや、もう充分だ」

苦笑いする坊主頭の生徒が遠慮すると、

「そうか。それなら——」

「おいッ！俺はもう何もしてないよな！？どうしてそんな大技を
げぶるアッ！！！」

雄二は容赦なく止めを刺し、「——これにて交渉終了だ」と告げる。

「お、覚えてろよッ！！」

目を覚ましたモヒカン頭の生徒が坊主頭の生徒の肩を組みながら逃げていった。

「すっかり固めてるね……」

「カールゴツチ一式ねえ……」

このやり取りを見た明久と一騎はのほほんとした顔で見届けてた。ちなみに

一騎が紙に何かメモをした所に関して明久は悪寒を漂わせたのであった。

「流石にこれじゃ食っていく気はしないな」

「折角美味しいそうだったんだけどね」

「食ったら腹壊しそうだからなあ」

（あれは教頭の竹原先生？こういう催し物が好きそうに見えなかったけど……）

「店変えるか」

「そうしようか」

「あッお客さん!!」

この状況で中華喫茶に出入りしたくないと断定してしまう客が出ようとしたその時、

「失礼しました。テーブルの到着が遅れ、仮としてこのような物を使つてしまい

ましたが、ただいまテーブルが届きましたので安心して下さい」

雄二は励ましの言葉を客に告げた。先程雄二が秀吉に頼んだのはテーブルの調達だったのだ。

（これは演劇部の大道具テーブルか。なるほど、こうすれば衛生面を改善した姿を見せられる）

明久は関心しながらテーブルを運ぶのを手伝った。するとアルフは、

「さっきの連中、かなり厄介になりそうだ」

「どうしたアルフ？あの3年の2人の事か？」

さっきの3年の2人の事で何かを悩んでいたようだ。

「もしかしたら、奴らも召喚大会で生き残りそうな予感がする」

「・・・そもそもあの2人が出場してそうな雰囲気ではなさそうだぞ？」

「悪いが、出場選手の表を密かに見させてもらった」

「・・・あのなあ・・・」

いつどこでそれを見たのかは敢えて口にしなかった一騎はある事を考え始めた。

（となると、鷲ノ宮さんも召喚大会に出ているのかもしれないな・・・）

しかし、まだ一騎に学園祭の最悪の思い出が来る事をまだ知らない。

第四十九問 忍び寄る黒幕

「あれ？テーブルを入れ替えてるの？」

テーブルを入れ替えていると、瑞希と美波が戻ってきた。

「あ、おかえり。1回戦はどうだった？」

「はいっ。何とか勝てました」

瑞希はVサインをしながら答える。どうやら彼女達も勝ち抜いたようで

嬉しい気持ちになっているようだ。

「ねえ大丈夫なの？テーブルを入れ替えちゃって。演劇部にあるテーブルなんて

そんな多くないでしょ？」

「まあせいぜい2〜3台程度かもな・・・」

周りを見渡し悩むように答える一騎は美波にお茶を差し出した。

美波はお茶を受け

取りながら他のテーブルの状態を確認しながら頭の中で計算する。その結果、

「そうとなると、演劇部にあるテーブルでは絶対足りないわ・・・」

「でも雄二なら何とかしてくれそうだな」

一騎がそう呟いていると、

「それでは他のテーブルの入れ替えが終わりますので、こちらのテーブルでおくつ

ろぎ下さい」

雄二は客に告げながらこちらにやってきた。

「ふう、こんなところか」

「お疲れ雄二」

「おう。2人共、その様子だと勝ったみたいだな」

「一応ね。それより喫茶店は大丈夫なの？」

「このまま何も妨害がなければ問題ないな」

（やはり雄二もそれほどの警戒はしているな・・・）

腕を組みながら雄二を見つめる一騎。そうすると先程の連中が再び来ても可笑しくないだろう。

「あの・・・、テーブルは足りるんですか？」

「ああ、そうだな・・・。明久、2回戦まであとどれくらいだ？」

「小一時間つてところかな」

自分の携帯で時間を確認する明久は雄二に言う。

「あまり時間がないな。・・・ちやつちやと行くか。明久、ついで来い」

「ウチらは手伝わなくてもいいの？」

「お前らはそこでウェイトレスを頼む。評判回復のためにも笑顔で愛想よくな」

「はいっ！頑張ります！」

雄二が2人に頼むと瑞希は張り切った様子で答えた。

「俺はどうするの？」

「一騎も手伝わなくていい。それと次の試合はお前が出るまでもないし」

「どういう事？」

一騎がひょんとした顔で雄二に尋ねる。すると、

「おそらく次の対戦相手は奴らかもしれないからな」

「奴ら？・・・ってまさか・・・」

「対戦表を見たらわかるさ。後はどうなるかお前の想像に任せる」

ニコニコとした表情で雄二が答えると明久と一緒に教室を後にした。

「・・・だったら俺は何をしようか・・・」

「どうしたの一騎？何かボヤーっとした顔だけど」

「いや、何でもないよ！ちよっと考え事を・・・」

突然美波の顔が目の前にあったのを驚く一騎は慌てて美波から離れる。

「俺ちよっと留守にするから」

「どこに行くの？」

「散歩でもしてくるだけさ」

「なるべく早く戻ってきてね」

美波に手を振り、一旦教室を後にする事にした。

「どこに行くつもりだ？」

「別に。ただ散歩するだけさ」

廊下を歩いているとアルフが一騎に尋ねてきた。

「？何だろうあれは・・・」

すると一騎はとある物を目にした。

「どうやら人盛りのようだな」

アルフが答えると一騎は真っ先にそちらに向かった。すると、

「さ、鷺ノ宮さん・・・」

「何だ、お前か」

「一体これはどういう事？」

一騎が最初に遭遇したのはAクラスの鷺ノ宮雫だった。雫は諭すように一騎に説明する。

「実は、私と工藤さんは次の試合のために召喚大会の会場に向かうとしたら

突然何者かに対戦相手を変えられた。しかも私達も」

「えーっと。その話と人盛りの意味が全く通じないんだけど・・・」

「

「最後まで話を聞け。すると変えられた直後、対戦相手だった生徒2人が突然消え出したんだ」

腕を組む雫が憎悪を生み出すように説明を続ける。これを聞いた一騎は、

「なぜだろう。幾ら何でもここは学校なのに、突然その生徒達が消えるのはおかしいよ」

「確かに私も同じだわ。消える瞬間を目撃した時にはもう何事もなかったかのような罪悪感だった」

悩むどころか不安を抱くように言葉を返した。すると雫はある物を一騎に差し出した。

「これを見て欲しい」
「何これ。写真？」

一騎は差し出された写真1枚をじっくりと見る。すると気になる所に目を窺った。

「これは・・・」
「ああ。これは試合が始まる時に撮影した写真で、その直後に対戦表が変更された。」

しかもその後ろには男らしき人物がいた」
「だったらその男がやった可能性が高いかもしれない・・・」

この写真を仕舞おうとするとアルフが突然顔を出した。

「少し俺にも見せる。何か思い当たる節があるかのしれない」
「どういう事だアルフ？」
「いいから見せる」

一騎は少し信用しながらアルフに写真を渡す。そしてその写真を見終えたアルフは、

「なるほど。この事件のトリックはわかった」
「それは何だ？」

深刻な雰囲気を見せるかのように2人に答えた。

「この学校にまだ、俺とルドルフ以外の霊体がまだ存在する事がわかった」

「じゃあ、あの男にその霊体に取り付いているって事が」

「となると、この人盛りは生徒が消えたのを恐れて非難態勢に入ろうとしている状態になるな」

訝しげにアルフが推測する。だがこの人盛りでは到底非難態勢に入れる状態ではなさそうだ。

「だったら、この召喚大会今すぐ中止にするべきじゃ・・・！」

「なぜだ。なぜ中止にする？」

「なぜって、それは生徒全員が消えてしまう可能性が高いから・・・」

「」

「一騎！お前はババアの約束を忘れたのか！！」

「アルフ・・・」

一騎が行動を開始するとアルフは一騎に一喝を入れた。

「中止にしたら、瑞希が転校してしまうんだぞ。こんな所で下らない茶番をして何になる！」

「でもそれだと・・・」

「目を覚ませ！！あの男に関しては現れてからにしろ！それよりも今は瑞希の転校を

阻止するのが先決だろうがッ！！」

アルフの言葉で一騎はある事に着目した。

「アルフ・・・、お前今瑞希って・・・」

「そうだ。誰かのためになるなら人の名前を覚えておかないでどうする？それともう

1つ言わせておこう——」

「・・・何だよ？」

一旦言葉を挟むアルフは深呼吸した後にくう答えた。

「——アイツの料理が美味かつたし・・・」

「・・・ふん、お前って奴は本当に無茶を言うな」

「千藤君、正気なのか？」

雫が恐る恐る尋ねて見る。すると、

「悪かったなアルフ。今は大会に優勝して瑞希の転校を阻止する事だな。それで

もってこの写真の黒幕をとっ捕まえる事も忘れずにやり尽くすか！」

「流星は俺の見込んだ相棒だな」

「私は今いる生徒や先生方を一旦声を掛ける。お前達の活躍っぷりを期待している」

「ありがとう、鷺ノ宮さん！」

「っとその前に——」

「どうした？」

最後にアルフが何かを言い出した。

「―――大会は2日間に渡って行われる。幾ら転校を阻止しなきゃいけないかも

1日で大会が終わるとは限らない。もしかしたら、黒幕の男を最初に捕まえる事が

最優先になる」

「そうか、清涼祭は2日間に渡って開催されるのか。これなら時間をおわすにやれる

って考えか」

頷きながら告げる一騎は時計を見ながら周りを確認する。要するに、大会が2日続く

のなら犯人を捕まえるのを優先順位にしてもし捕まったら楽に召喚大会に集中出来る。

逆に今日中に捕まらなければ明日の召喚大会がきつくなる可能性も極めて例外ではないという事である。

「行こうアルフ。今すぐその犯人を捕まえないければ」

「ああ。でもあまり無理はするな」

「また後で会おうな」

「鷺ノ宮さん、また後でね!」

一騎とアルフは犯人を捜すため、雫と別れた。

「本当にいいんですか姉御さん?」

「やらせてやれ。あの2人は私達より無茶してくれると思うわ」

「セカンドフェイズに移行・・・。先程の人間のデータを元に、
新たな作戦が

実行される・・・」

「あの人間を利用すれば、こちらの作戦に支障をきたす事もありませんね・・・」

「そうだ。この文月学園の生徒全員を抹殺する機会が得たのだからな・・・。そして

世界の破壊者に、その宿り主。何れ奴らも我々によって排除される。そう、この

終焉に導く破壊者のお前の力を借りてな・・・。」

「・・・・・・・・一騎」

「どうしたんですか美波ちゃん？」

「ごめん瑞希、ちよつとウチも留守にするから・・・・・・・・！」

「あつ美波ちゃん・・・・・・・・！」

「すぐに戻るから！試合までに間に合うように・・・・・・・・」

「・・・・・・・・。。どうしたのでしょうか・・・・・・・・」

第五十問 T U E N A N D T U E N

現在、一騎とアルフは召喚大会を妨害した犯人を捜すべく、学園全体を回って

いる。するとアルフが一騎に一つ質問した。

「所でこの建物は少々複雑な部分が多いな。これはどういう事だ？」

「どうもこうもないだろ？元々こういう建物なんだから。そもそもお前は

今まで学校というのは知らなかったのか？」

からかうように返事を返す一騎。でもアルフは昔の人間なので学校など

知らないだろう。

「まあ知らない事もない。俺が処刑される前に既に日本で学校という物は出来てたからな」

「そうか。お前は明治ぐらいの人間か」

「っとまあこんな感じの質問だ。それより早く探すぞ」

「わかった」

話を後にする2人は急いで犯人捜しを再開した。

1
5
分
後

「あれからいろんな人から情報を得ようとしたけど、遊弋な情報がないな・・・」

「ああ。まともな情報がないな・・・」

蔑むように2人が呟く。するとそこに誰かがやってきた。

「あつ、一騎・・・」

「・・・み、美波？どうしてここに・・・？」

「べ、別に深い意味はないけど一騎が今どこにいるのか探してただけで・・・」

頬を赤らめながら答える美波。この様子だと、余程一騎の事を心配してるのだろう。

「でも雄二がウェイトレスをやってるって言ってたけど・・・」

「いいの、すぐに戻れば良いし。・・・一騎」

「・・・何？」

今度は照れ隠しの如く質問を伺う美波。そして・・・、

「・・・一騎って、何か隠してない・・・？」

「・・・へ？」

「その、さつきから切ないような表情しているけど・・・」

悲しそうに答えてくる。それに対し一騎はこう答える。

「何を言ってるのさ。別に隠し事なんて——」

「そんな事ない！一騎は絶対何か危ない事をやりそうな雰囲気よ・・・！」

言葉を紡ごうとしたが、呆気なく美波に遮られる。更に彼女の言葉が続き・・・、

「ウチ、実は一騎がさつき生徒達に話している姿を見たもの・・・。その内容は

召喚大会が危ないって感じの話で・・・、もしかしたら一騎がどうなるのかが

心配で心配で・・・」

前触れもなしに不安を抱き始める。そんな彼女の行動に一騎は、

「止めないでくれ。これは俺とアルフにしか出来ない重要な役目だ。こんな所で

美波を——いや、皆を巻き込みたくない。でも俺とアルフでも出来るかどうかの

役目なんだ・・・。ここで巻き込んで失ったら何も得る事は無い」

「か・・・かず・・・き・・・」

齒を食いしばるように告げ、説得させる。

「だから、美波は喫茶店を頑張って設備を向上させて。そうした

ら——」

「・・・!!」

パシンッ!!

突然、乾いたような音が廊下に響き渡った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

「一騎はそれでいいの！？ウチはそんなの嫌よ！もし一騎がやるうとした事で

一騎に何かあったら・・・、どうすればいいのよ・・・。」

そして泣きながら一騎に言葉を紡ぐ美波。これに対してどう反応すればいいのか一騎

にはわからない。しかし・・・、

「そんな事はない。必ず無事に保ってみせるよ。だから心配しないで・・・・・・・・」

「・・・・・・・・一騎」

暖かい温もりで彼女を包み込み、保証する一騎。

「じゃ、もう行くからね。後でまた戻ってくるさ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん！」

そしてゆっくりと手を離し、後ろを振り向きながら歩く。美波は涙を拭い、一騎を

見送った。これで、無事でいられるようにと信じながらも・・・。

「もう誰もいないようね」

「姉御さん、後はオデ達も安全な場所に――」

スウウウ・・・

「・・・あれは・・・」

第五十問

T U E N

A N D T U E N (後書き)

今回はやけに短いですが、次回は少し長くしますので許して下さい。

第五十一問 刹那のように・・・

「あれは・・・!」

「ふふふ・・・。この私の恐ろしさを知らないような顔をしてるな。

いいだろう、まずは貴様から排除する・・・!」

突然、雫の前に現れた謎の男。男は雫に攻撃を仕掛けようとする。

「そうはいかない! ルドルフ、頼む!」

「了解しましたぜ姉御さん!」

すると振り返ちにするために雫はルドルフに命令をする。

「そらっ!」

「ふん、当たらんな・・・。なら、これならどうだ!」

男は謎の波動を放つ。その瞬間、ルドルフに直撃してしまう。

「うわああ!?!」

「大丈夫か!?!、お前よくもルドルフを・・・!」

「ほう、何も出来ない人間がこの私に立ち向かうとは・・・」

次に雫に向かって攻撃をしようとする。しかし今の状態では彼女に逃げ場はない。

「・・・! どうしよう、ここままでは・・・!」

「では、さらばだ——」

「させるかあああああああッ！！！」

「ぐおあッ！？」

瞬間、懷から一騎とアルフの拳が男に致命的な一撃を与えた。

「千藤君、アルフ・・・！」

「大丈夫、鷺ノ宮さん？」

急いで雫を抱えて後ろへと下がらせる一騎。そして、

「お前が召喚大会を妨害させた真犯人か・・・！」

「何か早い気がしたが、ここで俺達に降伏を宣言しろ」

「くっ！小癪な真似を・・・！」

男を取り押さえる態勢に入り、準備を整える。所が・・・、

「残念だな。貴様らにはちょっとしたゲームに付き合って貰う」

「どういう事だ？」

「こういう事なのだ！！」

男は突如、自身の羽衣を覆うように姿を隠した。すると再び男の姿を現し、横には

人質らしき人物が男に吊られていた。

「あれは・・・！」

「き、木下さん！？」

「そうだ。今から行つゲームに少々代償となる人物を探していたものでな。だから

人質としてこの女を利用する」

そう、男が人質として捕らえたのは秀吉の双子の姉の木下優子だった。

「なぜ木下さんを！」

「私はただ適当に選んだだけだ。目を覚まさないように眠らせておいている」

「何て外道な奴だ・・・！」

殺気立つ空気の中、男はゲームのルール説明をしようとする。

「では、説明をする。ルールは簡単だ。この校舎のどこかにあるカードを7枚を探し、

私に差し出す事だ。制限時間は次の召喚大会が始まる時刻までだ」

「一回聞いたら簡単そうだな・・・でも次の試合までもう時間は――」

「聞いての通り、あまり残されてない。せいぜい頑張るのだな」

躊躇なくゲームを始めようとする男に一騎は最後に1つ質問した。

「もし、見つけれなかったら？」

「勿論、この女には死んで貰う。私の計画の障害とみなし」

「尽く汚い奴だ・・・。わかった、約束しよう」

「千藤君、本当にいいのか・・・？」

心配するように雫が尋ねる。すると、

「・・・大丈夫。彼女は死なせない。何とか救い出してみせる」

「そうか・・・。木下さんの事は任せる。私はルドルフを何とかしないと・・・」

一騎は必ず成功してみせると宣言し、雫と別れた。

「問題は一体どこにあるかだな・・・」

「ああ、慎重に探さないとな」

現在一騎とアルフがいるのは1階の新校舎側。7枚のカードを男に渡すため、召喚大会

の次の試合が始まるまでに急がなくてはならない。

「よし、手当たり次第探すか・・・」

「ふん、無茶を言うてくれるな・・・」

一か八かと言った表情で一騎が答える。こうして、優子を救うために必死でカードを
探す事になった。

「・・・あと・・・一枚か・・・」
「だが、もう時間は残されていない・・・」

15分後

学校全体を探索した2人は15分というあっという間の時間で6枚のカードを見つけ、早くもあと1枚となった。しかし最後の1枚はどこにあるのかわからない。

「このままじゃ、木下さんの生命が・・・」
「く、万事休すか・・・ッ!」

もう成す術がないと断念したその時、

「もしかして、君は千藤君？」
「・・・？」

一騎の前にやってきたのは1人の女子。彼女は一騎に質問を伺った。

「千藤君は何をしてるの？」
「いやちよつと探し物してる所なんだよ。所で君の名前は？」
「あ、そうだった。自己紹介してなかったね。ボクは工藤愛子、よろしくね」

彼女はAクラスの工藤愛子だった。一騎の言葉で愛子は少し考え出した。

「・・・もしも？」
「ひよつとしてこれの事かな？」
「・・・！それは!？」

探し物をしてるという単語で愛子は1枚のカードを一騎に差し出した。

「それどこで手に入れたの？」

「何かいつの間にボクのポケットに入ってたからサ」

「ありがとう、工藤さん！」

「君の事、ちょっと気に入ったかも」

「・・・へ？まさか・・・」

愛子の発言で少し悪寒を漂わせる一騎。そして、

「じゃ、ボクと君は今日から友達って事でいいよね？」

「ええええええええッ！？」

「それと、今度からボクの事を『愛子』って呼んでいいよ。その代わり、ボクも君の

事を『一騎君』って呼ぶから」

「待つて待つて待つてえ！？という理由で友達になるのか説明してよ！？」

「ゴメン、ゴメン。ボクもう行かなきゃならないから。それじゃあね」

「俺の話を聞いてよーーーーーッ！！！」

何の間合いもなく、愛子は新校舎側の階段を上っていったのであった。

「・・・お前も随分とモテるようになったな」

「五月蠅い、お前には関係ないだろ・・・。おっと！早く奴の所に行かないと！」

「・・・そうだな」

2人は一刻も早く男にカードを渡すよう、急いで廊下を走ったのだった。

「ふん、ノコノコと来たか」
「ああ、約束通りこのカードを渡す。だから、早く木下さんを解放しろ」

男は、一騎からカードを受け取る。しかし次の瞬間・・・、

「お前は愚かだな——ぐわあああああ……………」

シューウウウウ……………

「ふん、この程度の小細工などお見通しだ」

「アルフ、お前……………」

男が何かをしようとしたが、アルフの攻撃で姿を消した。よって、

「この男はただの幻影……………。つまり偽者だ」

「くそ……………。俺達は偽者に惑わされてたのかよ……………」

あの男は何者かが作った幻影でしかなかった。

「そうだ、木下さんは無事なのか？」

「とりあえず、コイツを起こそう」

「そうだな」

一騎は優子が無事かどうか、起こす事にした。

第五十二問 謎の少女

一騎は優子を起こすために、声を掛けてみた。

「木下さん、大丈夫？しっかりして」

「無事だと良いんだがな・・・」

心配してしまいそうな気分だけど、もう少し粘ってみる。そして、

「・・・ううん。ここは・・・」

「・・・！気がついたみたいだ」

眠気を覚ますように優子が目覚めた。所が・・・、

「ッ！？きゃあああああああッ！！！！」

「いやあああああああああッ！！！！」

突然悲鳴を上げ始めた優子に一騎も同じく悲鳴を上げてしまった。

~~~~~しほへお待ちナれ~~~~~

「はあ……、はあ……。死ぬかと思ったよ……」  
「……本当にごめんなさい。気づかなかったわ……」  
「」

恐怖のドン底に叩きのめされたかのように怯える一騎。それに気がついた優子は

泣きながらも謝るが、一騎に何があったのかはわからない。

「全く、俺も不幸に落ちぶれた物だよ……」

「お前は人としての情はないのか……」

呆れながら一騎を罵声するアルフ。でもアルフも人の事を言える立場ではないが。

「何でアタシはここに……」

「君はさっきまどこにいた？」

「Aクラスだけど」

「その時何をしていた？」

「喫茶の準備をしていた」

ひょんとした顔で優子が言つと一騎が1つずつ優子に質問をした。

「それでこのあとどうなった？」

「突然何者かが来て、そのあとわからなかった」

「そうなんだ」

「って会話のキャッチボールが成立しないんだけど・・・」

「ごめん、端折りすぎた・・・。実は――」

事情を説明中

「——というわけなんだよ」

「そうだったのね……。ちつとも気づかなかったわ」

ようやく理解出来た優子は立ち上がり、服に付いたゴミを掃った。

「さて、俺も教室に戻るか」

「ちよつと待って」

「?どうしたの?」

すると優子は教室に戻ろうとした一騎を呼び止めた。

「その……。さつきはありがとう」

「いやいや、このくらいお安い御用だよ」

礼を告げる優子に一騎は笑みを浮かべつつ返事を返した。

「最後に1つ言いたいけど……。その、明日の後夜祭が始まる時に学校の

噴水で待ち合わせしたいの……。伝えたい事があって……」

「うん、わかった。君が言いたい事を何でも聞いてあげるよ」  
「・・・ありがとう！」

優子はそう言い残し、教室の方へと戻った。一騎も自分の教室へと戻り、喫茶店

をうまく経営しようと決意した。

「ただいまー」

「あ、おかえり一騎」

「どこに行ってたのじゃ？」

教室に戻ると、明久と秀吉がやってきた。すると一騎は少し落ち着いた顔で

説明する。

「ちよつとほかの教室の出し物が何なのか見に來ただけだよ」

「そつか。色々な所を見るのも暇つぶしになるしね」

「まあね。秀吉、氣になってたけどこれはどういう状況なんだ？」

「・・・むう。ワシはずっとここにおるが、妙な客はあれ以降來ておらんぞ？」

一騎が尋ねると秀吉は手に顎を当てながら周りの客を見渡す。

「つてことは教室の外で何か起きてる？」

「かもしれんのう」

更に不安を抱えていると、

『お兄さん、すいませんですっ』

『いや気にするなチビッ子』

『チビッ子じゃなくて葉月ですっ!』

「雄二が戻ってきたようじゃな」

「あつ、うん。そうみたいだね」

廊下で雄二の声が聞こえてきた。でも雄二は廊下で誰かと会話をしている。

（はて、葉月？あの声どこかで聞いた事があるような・・・）

すると明久は頭の中で何かを思い出そうとしていた。

「んで、搜してるのはどんなヤツだ？（ガラ・・・）」

教室のドアを開けながら雄二が尋ねる。すると、

「おつ坂本、妹か？」

「可愛いなあ。ねえ、5年後にお兄さんと付き合わない？」

「俺は寧ろ今だからこそ付き合いたい」

Fクラスの生徒の3人が女の子に質問詰めをし始めた。

（むむ・・・、野朗どもが邪魔で見えないな・・・）

「あッあの、葉月はお兄ちゃんを捜しているんです」

「お兄ちゃん？名前はなんて言うんだ？」

「あう・・・、わからないです・・・」

「家族の兄じゃないのか？それなら何か特徴は？」

雄二が葉月と名乗る女の子にそう言うと、

「えっと・・・、バカなお兄ちゃんでした！」

女の子は自信満々な気分で答えた。

（なんとも凄い特徴だ）

「・・・そうか。・・・沢山いるんだが？」

雄二が周りの面子を見渡す。当然否定は出来ない。

「あつ、あの。そうじゃなくてその・・・」

「うん？他に何か特徴があるのか？」

女の子があたふたと戸惑うと雄二は更に尋ねて見る。すると女の子はこう答えた。

「その・・・すつごくバカなお兄ちゃんだったんですっ！」

この言葉で周りは「」「吉井だな」「」と告げた。

（やだな。泣いてないよ？）

無論、横で泣いている明久は否定をするが何も通用しない。

「あの娘、明久の事を知っているのかな？」

「そう言っている限りはそうかもしれない・・・」

一騎とアルフは女の子を見て、ひょんとした顔で呟いた。

「全く失礼な！！僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！絶対に人違い——」

「あつ、バカなお兄ちゃんだっ！（だきッ）」

明久の言葉を遮るように女の子が明久の身体に抱きついてきた。

「絶対に人違いがどうした？」

「・・・人違いだといいなあ・・・」

切なく答える明久は涙を堪えて女の子に話掛ける。所が・・・、

「って君は誰？見たところ小学生だけど僕にそんな歳の知り合いはいないよ？」

「え？お兄ちゃん・・・、知らないって酷い・・・」

明久は女の子を知らないと答えてしまった。やがて・・・、

「うわあああん！！バカなお兄ちゃんのバカあつ！バカなお兄ちゃんに会いたくて、

葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃん知りませんか？』って聞きながら来たのに！」

女の子はそのショックで泣き出してしまった。すると雄二と秀吉

は、

「明久——じゃなくてバカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

「バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう」

明久がバカだからと理由で代わりに謝った。

（なんだろう、僕まで泣きたくなってきた）

「2人とも、それはフォローになってないから・・・」

言い訳がおかしいと気づいたのは言うまでもない。

「でもでも、バカなお兄ちゃん。葉月と結婚の約束もしたのに——」

更に女の子が答えると、

「瑞希！！（ダッ）」

「美波ちゃん！！（ダッ）」

「「殺るわよ（りますよ）！！」「」

「「ぐぶあッ！！」（ドウッ！！）」

瞬間、瑞希と美波の拳は明久の鳩尾へ直撃した。

「（ブルブルブルブルブルブルブル）」

するとこの光景を見た一騎は身震いを連発してしまう。

「姫路に島田、どうやら勝ったようだな」

「瑞希、そのまま真後ろに捻って。ウチは膝をやるわ（グギギ・・）」

「こっ、こうですか？（キュッ）」

雄二が2人に励ましの言葉を告げる。どうやら彼女達も次の試合に勝ったみたいだ。

「ちよつと待って！！結婚の約束なんて僕は全然――」

「酷いですッ！！ファーストキスもあげたのにーっ！！」

「吉井君、そんな悪い事するのはこの口ですか？」

「坂本は包丁持ってきて。5本あれば足りるわ」

更に続く葉月の言葉で瑞希はヤキモチをやいたかのように明久の口を引っ張り、

美波は平然と雄二に包丁を要求する。

「お願いひまふう！はなひを聞いてくらはいつ！！」

「そうだよ！それ以上明久をこらしめないで！！」

「仕方ないわね・・・。2本刺したら聞いてあげるからちよつと待ってなさい」

「あのね美波。包丁って1本でも刺さったら致命傷なんだよ？」

一騎も止めに入ったが、美波は包丁の本数を減らそうとする。どうやら美波様も

物事をちゃんと理解出来てないようです・・・。

「あつ、お姉ちゃん。遊びに来たよ！」

そしてようやく泣き止む葉月は美波に話しかける。すると明久の頭の中で何かを

思い出させようとしていた。

（お姉ちゃん……。葉月ちゃん……。ぬいぐるみ……。フ  
アーストキス……）

「ああッ！あの時のぬいぐるみの子か！（ガバ！）」  
「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ（ぷう）」

これで明久は全てを思い出した。葉月と過去に出会った事を。

「そっか、葉月ちゃんか。久しぶりだね、元気だった？」

「はいですっ！」

「葉月ちゃんって言うんだ。宜しくね」

「どうもですっ！」

落ち着いた所で一騎も葉月に一言挨拶をする。

（去年、葉月のお姉ちゃんにぬいぐるみをプレゼントするのを手  
伝ってあげたん

だっけ。そのあと観察処分者にされたり色々バタバタしてす  
っかり忘れてたよ……）

「それにしてもよく僕の学校がわかったね？」

「お兄ちゃんがこの学校の制服着てましたから」

明久が聞くと葉月は明久の制服をクイッと掴みながら答える。

「あれ？葉月とアキって知り合いなの？」

「去年ちよつとね。美波こそ葉月ちゃんの事知ってるの？」

「去年って俺がここに来る前か・・・」

質問に答える明久は美波に質問を返す。すると美波は、

「知ってるも何も、ウチの妹だもの」

「「へ？」」

以外な言葉を返してきた。これを聞いた明久と一騎は一緒に目を丸くする。

「吉井君と千藤君はずるいです・・・。美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合い

なんかして、私はまだ両親にも会ってもらってないのに・・・。

それに千藤君は

幼い頃から仲良くなって・・・、もしかして実はもう『お義兄ちゃん』になっちゃ

ってたり・・・」

突然瑞希が泣き出し、そのような事を呟いた。最近彼女もたまに思考回路が壊れてる

気がする。これもボロい教室のせいなのかもしれない。

「あつ、あの時の綺麗なお姉ちゃん！ぬいぐるみありがとうでしたっ！」

「こんにちわ、葉月ちゃん。あの子可愛がってくれてる？」

すると葉月は瑞希に礼を告げだした。どうやら瑞希にもぬいぐる

みってくれたようだ。

「はいですっ！毎日一緒に寝てますっ！」

「良かった。気に入ってくれたんだ」

天真爛漫な笑みを浮かべる葉月に瑞希はホッとしたようだ。

「あれっ、姫路さんも葉月ちゃんの事知ってるの？」

「ええまあ・・・」

「美波、あの時美波のお母さんが最後にいなかったのは葉月ちゃんを出産するため

だったの？」

「そうなの。黙っててごめんね」

「いいよ、これで俺は葉月ちゃんと話すの始めてだし」

一騎が微笑むと美波も微笑んだ。よほど一騎の事を気を使ってるのだろう。

「それと、さっきの件はどうなった？」

「あれはあれで、水の泡さ」

「・・・良かった。何も起きなくて・・・」

さっきの事を一騎に話すと、美波は胸を撫で下ろすように喜んだ。

（それと、さっき色々あったけどな・・・）

「それよりも、この客に少なさはどういう事だ？」

すると雄二は本題の客の事で葉月に問いかけた。

「そっいえば葉月がここに来る途中、色んなお話を聞いたよ?」

「ん?どんな話だ?」

「えっとね、『中華喫茶は汚いから行かない方がいい』って」

「「ッ!!--!」(ざわ・・・)」「」

第五十三問 俺とメイドと新たなる旅立ち（？）？

「ここへ来る途中道に迷って色々な人に『一番バカなお兄ちゃんのお店どこ

ですか？』って聞いたら、皆すぐにここに教えてくれたんです  
っ  
」

Fクラスの教室に滞在している葉月が皆に説明をする。すると、

「その時に皆『中華喫茶は汚いから行かない方がいい』って言う  
てたですっ  
」

「「「ツ!!」「」」

葉月の衝撃的な言葉で皆は驚いてしまう。

「そんな・・・」

「ちゃんと皆で掃除したり、綺麗に飾りつけたのよ？」

「来てくれたお客も不満げな者はおらなんだ」

「確かに、この状況だと閑古鳥が鳴いていてぺん天草が生えそう  
な勢いだな・・・」

沈んでしまった空気で、一騎がそのような事を予測した。

（もう机の問題は解決したはずなのに一体・・・）

「おそらく、2人を除いてな」

「「「・・・!!」「」」

雄二がそう告げると、皆は何かを思い出した。

「俺の予想だと、例の連中の妨害が続いているんだろうな。捜し出してシバキ倒すか」

「例のつて、あの常夏コンビ？まさかそこまで暇じゃないでしょ」  
「・・・常夏？」

「常村と夏川だから、漢字で書くと訳して常夏つてわけじゃのう」

秀吉が解説すると「なるほど・・・」と訝しげに一騎が呟いた。

「どうだかな・・・。ひとまず様子を見に行く必要があるな」  
「そうだね。少なくとも噂がどこから流れててどこまで広がってるのかを確認しないと」

明久が動こうとすると、

「お兄ちゃん、葉月と一緒に遊びに行こっ」

葉月が明久の腕を掴みながら陽気で答える。でも、

「ごめんね葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなきゃいけないからあんまり一緒に遊べないんだ」

明久は葉月の頭を撫でながら答えた。無論、自分のクラスの店が危うい事になれば放っておくしかないだろう。

「むっ、折角会いにきたのにっ」（プーッ）

「ははは」

頬を膨らませながら葉月がいちやもんをつけてくる。葉月も明久の事が好きだから

文句を言ってしまうのも無理はない。

（でもここは姫路さんのためにも後悔のないように全力を尽くさないと）

「それならそのチビっ子を連れて行けばいい。他の飲食店の偵察も必要だし、一緒に

に回ればいだろう」

「んゝゝそっか。それじゃ、一緒にお昼ご飯でも食べに行く？」

「うんっ！」

雄二が提案すると、明久は関心しながら葉月に質問する。すると

葉月は元気よく

笑みを浮かべて返事をした。

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行こうかな」

「だったら俺も行こうか」

「ふむ、島田と一騎も行くとなれば姫路と雄二も一緒に行くと良いじゃろ。召喚大会

もあるじゃろっし、早めに昼を済ませてくると良い」

ここで秀吉が雄二と瑞希も一緒に同行した方が良いと答えた。一

応、何が起きても

すぐに対応出来るために。

「所で葉月。さっきの話の続きだけどその噂はどこで流れたの？」

本題の話へと戻す美波は葉月に問いかける。すると葉月は、

「えつとですね・・・、綺麗なお姉さんが一杯いるお店ですっ！  
しかも短い

スカートを穿いているメイドさんが一杯いたよっ！」

凄い勢いでしかも興奮しながら答えた。それを聞いた女子に興味  
ある男2人は、

「「なんだって!?!」」

などと発言した。しかも怒涛の狂戦士の如く。

「雄二、それはすぐに探し出すぞ！」

「そうだな明久！我がFクラスの成功のためにも（低いアングル  
から）綿密に調査  
しないとな！」

「・・・どうも目的が変わっておりそうなのじゃが・・・」

こんな明久と雄二の行動に秀吉は違和感を抱くように呟いた。そ  
して一目散に

教室を後にした明久と雄二を呆れるように眺める女子陣（美波だ  
けだが）と苦笑い  
するように眺める一騎は、

「アキ最低」

「吉井君酷いです」

「お兄ちゃんのバカ！」

「皆、もうそれ明久しか攻めてないよ？」

などと答えた。もはや、女子陣の行動に一騎は何もついていけな  
いようだ。

所が・・・、

「・・・明久、ここはやめよう」

「ここまで来て何言ってるのさ！！中に入るよ！」

目的の場所まであと一步の所で雄二が突然拒否を始める。その理由は・・・、

「頼む！！ここだけは・・・、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

目的の場所はAクラスが営業しているからである。

「そっか、ここって坂本の大好きな霧島さんのいるクラスだもんね」

「道理で雄二が嫌がってたわけだな・・・」

対等な意見だが、これはこれで事実である。

「坂本君！女の子から逃げ回るなんてダメですよ！」

「雄二、これは敵情視察なんだ。メイド喫茶だからといって決して趣味じゃない」

「んだから・・・」

明久が雄二にたきつけるようと答えるが、

パシャッ、パシャッ、パシャッ（カメラのシャッター音）

不用意にムツツリーニがカメラでウエイトレスを撮影している姿が確認される。

「……………ムツツリーニ？」

「（ブンッブンッ）……………人違い」

ムツツリーニは慌てて否定するが、こんな事するのはムツツリーニぐらいだけである。

「どこから見ても土屋でしょうが。アンタ何してるの？」

「……………敵情視察」

するとムツツリーニはキリッとした顔でそう答える。とは言うものの、最近

の敵情視察はロールアングルから女の子を撮影する事らしいが。

「ムツツリーニ、だめじゃないか。盗撮とか撮られた女の子が可哀想だと」

「……………一枚百円」

「ニダース貰おう。可哀想だと思わないのかい？」

「アキ、普通に注文してるわよ」

明久は必死でムツツリー二を説得させようとしたが、誘惑に負けてしまい写真を購入してしまう。

「あの男、大したもんだ」

「いや、それ励ましになってないぞアルフ・・・」

何の前触れもなくアルフがムツツリー二を褒めだした。するとムツツリー二は、

「・・・・・・・・・・そろそろ当番だから戻る」

と言に残し、教室に戻る事にした。

「全く、ムツツリー二にも困ったもんだね」

「吉井君、その写真どうするつもりなんですか？」

（あ、バレた）

明久はこっそりと写真をしまったが、瑞希にバレてしまう。

「やだなあゝゝ。勿論処分するに決まってるじゃないか。それより早くお店に

入ろう。ものすごくお腹減っちゃったよ」

「あっそうですね。入りましょうか」

「うんうん、早く敵情視察も済まさないと――」

瑞希がニコツとした顔で言うと、明久はその隙に写真を確認する。しかし、

男の脚の写真、ニダース中ニダース半

「男の脚ばかりじゃないか畜生っ!!」

「やっぱり見てるじゃないですかっ!!」

男の脚の写真ばかりで地面に叩きつけるように写真を投げた。結局・・・、

「ぐっ、ごめんなひゃい! くひをひっぴらないれ!! (ギューッ!)」

瑞希と葉月に引つ張られてしまう羽目に。そんな事を放っておく美波は最初に

店の中へと入ろうとする。

「それじゃ、入るわよ。(ガラ・・・) お邪魔しまーす」

「・・・おかえりなさいませ、お嬢様」

「わあ、綺麗・・・」

するとそこにはメイド服姿で出迎えてくれるAクラスの代表かつ学年主席の

霧島翔子の姿があった。瑞希は翔子が着ている姿に見惚れてしま  
う。

「ここが葉月ちゃんと言ってたお店のようだな」

「特に異常はなさそうだが・・・、まだわからんな」

周りの装飾を見渡す一騎とアルフも中へと入る。

「・・・おかえりなさいませ。ご主人様、お嬢様」

「わああ！霧島さん、綺麗だね！」

「・・・ありがとう、吉井」

その瞬間、明久から痛い視線が放ってきたがその事実は言うまでもない。

「・・・チツ」

「（ボソツ）・・・おかえりなさいませ。今夜は返しませ  
ん、ダーリン」

「・・・今帰っていいか？」

舌打ちする雄二に翔子は耳元で囁いた。当然、雄二は拒絶してい  
る。

「霧島さん、大胆です・・・!!」

「ウチも見習わないとね・・・」

「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」

「・・・」

この光景で瑞希と美波は興奮するように翔子を戦慄する。横では明久と一騎が

戦く姿が目に見えてる。しかし葉月には到底理解出来ない内容である。

「・・・・・・・・では、メニューをどうぞ」

全員が席に座ると、翔子がメニュー表を渡してくれる。

（それにしてもすごいお客さんの数だな。衣装やメニューも立派だし、Fクラス

とは段違いだ・・・）

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「葉月もー！」

「あつ私もそれがいいです」

早くも注文するメニューが決まった女子陣から最初にオーダーする。

「えーっと、僕は――」

続いて明久が注文をとろうとする。所が・・・、

ショートケーキ

モンブラン

パナコッタ

ガトーショコラ

カボチャプリン

レモンのタルト

マジョレーヌ

チーズのタルト

季節のフルーツパフェ

ふわふわシフォンケーキ

チョコティラミス

レアチーズケーキ

ケーキセット ￥450円 (ケーキ単品 ￥300円)

セットのドリンクは以下からお選び下さい

ブレンドコーヒー

カフェラテ

紅茶<sup>ダージャン</sup>

カプチーノ

レモンティー

アイスコーヒー

「・・・・・・・・・・・・・・・・『水』で。付け合せに塩があると嬉しい・  
・・・・・・・・」

無気力状態でオーダーした。先程写真を購入したせいだろうか。

「俺は『ブrendコーヒー』にするよ」  
「・・・・・・・・・・畏まりました」

続いて一騎も注文を終える。次は雄二に回ってきたようだ。

「・・・・・・・・・・こちらの旦那様は？」  
「・・・・・・・・翔子、このメニューは何だ？」

すると雄二は今にの文句を訴えつけようとする態度で翔子に問いかける。

「・・・・・・・・・・本日のおすすめ。メイドとの新婚旅行、メイドとのラブラブデート、  
メイドとの甘いキス。限りがあるので早めに注文して」  
「しねえッ！ー！！」

尽く翔子を拒絶しまくる雄二も苦勞しているようだ。

「やっぱり霧島さんは大胆です・・・！」

「そうね、ウチも今度あんな感じで勧めようかな・・・（ポツ）」  
「葉月もそうしようかな？」

更に広がる女子陣の発言で益々明久と一騎の生命線が断ち切られそうになっている。

「・・・・・・・・僕には姫路さんがやろうとしてる事がさっぱりわからない・・・・・・・・」

「・・・・・・・・だよな、俺も美波が何をしてくるのか全然わかりもしないな・・・・・・・・」

Aクラスが営業しているメイド喫茶の騒動はまだまだ続く。

第五十四問 俺とメイドと新たなる旅立ち（？）？

現在、一騎達は葉月に中華喫茶の悪い噂をしていると聞きその場所へと滞在している。すると明久は葉月に1つ問いかけた。

「んで、葉月ちゃん。君の言ってた場所ってここで良かった？」  
「うんっ。ここで嫌な感じのお兄さん二人がおっきな声でお話してたの」

（嫌な感じのお兄さん二人が。それってやつぱり・・・）

怪しいと感じた明久はさっきの連中を思い出す。すると・・・、

『おかえりなさいませ、ご主人様』  
『おう二人だ。中央付近の席は空いてるか？』

「あつ、あの人達だよ」

葉月は今入ってきた二人に指を指した。そう、やはりあの二人だった。

「いやあ、ここは綺麗でいいなあ！」

「そうだな、さっきの2―Fの中華喫茶は酷かったからな。豪い違いだ」

「店は汚いわ、変な臭いはするわ、店員は不細工でおまけに・・・中華喫茶

のヨーロピアンって頭悪いんじゃないの？」

「それに、テーブルが腐った箱だったし虫も沸いてたもんな！」

！」

大きい声で発言してるのは常夏コンビだった。余程嫌がってたの  
だろう。

「アイツら、嘘ばかり！！」

「待て明久」

「雄二、早くあの連中を止めないと！！」

「落ち着け。こんな所で殴り倒せば悪評は更に広まるだけだ」

「まあ、1つは本当らしいが・・・」

雄二が止めてるのにも関わらず、アルフが本音を語りだす。当然  
一騎はアルフの

言葉を無視してるらしいが。

「だからってこのまま指をくわえて見てるだけなんて・・・」

「もう許さないな・・・」

「いや、やるなら頭を使えという事だ」

「じゃあどうすればいいのさ」

明久が疑問に思いながら聞くと雄二は、

「そうだな・・・。翔子」

「・・・何？」

少し考えながら翔子に尋ねた。

「あの連中がここに来たのは初めてか？」

「・・・さつき出て行ってまた入ってきた。話の内容もず  
っと同じような

事を言っている」

「そうか……。よし、とりあえずメイド服を貸してくれ」

（この男は突然何を言っているんだ？）

すると雄二は何の躊躇もなく翔子に要求した。

「……………わかった（スルツ）」

返事を返した翔子は自分の着てるメイド服を脱ぎ始めた。

「きッ霧島さん！？こんな所で脱ぎ始めちゃダメですッ！！」

「そうよ！ここにはケダモノが沢山いるのよッ！？」

「わぁ〜〜。お姉さん胸おつきいです〜〜」

この光景を見た瑞希と美波は慌てて翔子を隠すように押さえつけた。しかし

葉月は平然とした顔で翔子の胸部を眺めつつ、羨ましがった。

「……………雄二が私を欲しいって言ってたから（ノノノ）」

（彼女、雄二の頼みなら何でもやっちゃうんだな……。何て危うい人なんだ）

鼻血を出して倒れてる明久を応急処置しながら翔子を見つめる一騎。これも

雄二を一途に思ってる彼女の本心なのだろう。

「待て待て、何やってんだ！？それにお前じゃなくてメイド服だし、予備があれば

貸してくれって意味だッ!!」

「…………今持ってくる」

「あからさまにしょんぼりするな!!」

（まあ雄二がこんな感じだし、霧島さんも大丈夫だと思うな……

）

雄二が説明すると、翔子はガツカリとした顔で呟き予備のメイド服をとりに行った。

勿論、一騎も安心するように翔子を見送っているのだろう。

「あの店の出してる食べ物もヤバいんじゃないか？」

「言えてるな。食中毒でも起こさなければいいけどな! 2―Fには気をつける

って事だ!」

更に罵声が広がる常夏コンビに明久は目覚めた。

「雄二!! なんでもいいから早く連中を!」

「いいからもう少し待ってろ」

それでも時間を粘る雄二。すると雄二は何かを尋ねた。

「姫路に島田。櫛を持ってるかい？」

「? 持ってますけど……」

「ちよつと貸してくれ。他にもエチケット用品があれば全部」

雄二がそう答えると、瑞希は自分の持つてる櫛やエチケット用品を全て雄二に渡した。

「・・・・・・・・雄二、これ」

「おう、すまないな」

その直後、予備のメイド服を持ってきた翔子がやってきた。予備のメイド服を

テーブルに置くと、

「・・・・・・・・貸し一つ」

「だそうだ明久」

翔子が一言を告げた。すると雄二はその言葉を明久に回した。

「わかったよ。御礼に今度、雄二を1日自由にしていいよ」

「（ブウッ!!）」

「（ぱあああ・・・・・・・・）・・・・・・ありがとう。吉井は良い人」

明久が仕方なく答えると翔子は嬉しそうに礼を告げ、一目散に去って行った。

「ちょっと待て!どうして俺が!!」

「・・・・・・・・何て可哀想なんだ、雄二は・・・・・・・・」

横では額に手を当てながら呟く一騎の姿が目撃された。

「雄二、メイド服をどうするの?」

「決まってるだろ?秀吉に応援を頼む」

「なるほど、名案だね」

明久が尋ねると雄二は秀吉にも頼むよう、告げた。

『これでどうじゃ？女性らしく見えるかのう？』  
『さっすが秀吉だなあ。なかなか女性になつてゐるじゃないか』  
『この手のメイクは得意中のじゃ』  
『え？ブラマでするの！？』

『完璧をきたせば役に入りきれぬ。本来なら下も――』  
『そ、それは――』

「つたく、あの汚ねえ中華喫茶なんか行くヤツなんかいねえぜ」  
「なんせFクラスだからな。ろくなもんじゃないぜ。とにかく汚い教室」

「だつたよな」

「まっ、教室のある旧校舎自体も汚いし当然だよな」

瞬く間にFクラスを罵声し続ける常夏コンビに1人のウェイトレスがやってきた。

「なんの用だ姉ちゃん？」

「ひゅう！結構可愛いじゃねえか」

ウェイトレスに見惚れる二人はにやけながら見つめる。するとウェイトレスは、

「ん？どうした？俺に惚れ——」

「くたばれえええッ！！！（ドゴッ！！！）」

夏川の身体を掴み、後頭部を地面に直撃させた。このウェイトレスの正体は、

「て、てめえはFクラスの・・・！」

（不味い！こうなったら・・・）

明久だった。常村は明久の姿に戦き、一步下がる。すると明久は次の行動に移った。

「きゃあああ！この人、私のスカートの中覗いてますーッ！！」（裏声）

裏声で叫ぶと、常村は動揺しながら答えた。

「え？ちよつと待て——（ゴッ！）」

すると、横から常村を殴り飛ばす雄二の姿があった。

「公衆中の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎がッ！！」

「なーにしゃがる！被害者はこっちだ！」

「黙れッ！！たった今コイツはこのウェイトレスの胸をもみしだ  
いただろ！」

（うゝゝん、この坊主どうしよう。とりあえず秀吉に押し付けら  
れたブラでも頭に

付けてみるか。瞬間接着剤で）

その間に明久は倒れてる夏川の頭にブラを貼り付けた。その直後、

「きゃあああ！この人変態ですーッ！！（裏声）」

明久は再び裏声で叫んだ。するとその言葉を聞いた一騎が二人を  
遮るようにやってきた。

「やれやれ。向こうで何をやってたら、ウェイトレスに痴漢行為  
をやったとはな」

「く、何だこれ？（ムニユ、ムニユ）う、取れねえぞ？」

「ほら、もみしだいてるだろ」

ブラを揉む夏川に雄二がそう答える。と言うよりはブラではもみ  
しだくの部類には  
入らないが。

「かなり違っだろうがーッ！」

常村が絶叫するように叫んだ。それは当たり前である。

「チッ、牽制が悪い。逃げるぞ夏川！（ダッ）」

「畜生！！覚えてろ変態めッ！！（ダッ）」

（お前には言われたくない）

「待ちやがれー！」

「逃がさんー！」

急いでメイド喫茶を後にする常夏コンビを追いかける明久と一騎と雄二。すると

明久は何かを思い出した。

「所で雄二、この会計は？」

「俺達は何も頼んでないだろ！島田達に任せておけ！」

そうこしてる内に後ろで会計を済ませようとする美波の姿が。

「・・・・・・お会計、野口英世を一枚か坂本雄二を一名かのどちらかになります」

「坂本雄二を一名でお願い」

（本当にそれでいいの？千円で売り飛ばされてるけど）

今ので言動が綻びてるのかは一目瞭然である。

「よし追っぞアキちゃんー！」

「了解！！でもその呼び方は勘弁して！」  
「やれやれ・・・」

彼らの学園祭はまだまだ続く。

## 第五十五問 友情のタッグバトル？

「明久ッ！！奴らは四階に逃げたぞ！」

「四階と言ったら3年生のいる階だよな」

常夏コンビを追いかけるため、急いで廊下を走っている3人。すると

周りの生徒達が突然ヒソヒソと会話を始め出した。

「雄二ッ、やっぱりアキちゃんって呼んで！！何だか周囲の視線が刺されるんだ！」

「わかった！吉井明久————もといメイドのアキちゃん！！」  
「キサマ絶対ワザとだなッ！！」

とりあえず、周りに気づかれないように雄二が告げた。でも明久には

ワザとらしかったのだろう。

「いたぞ！アイツら、今度はどこに逃げようと・・・！」

「3―Aに入ったのが見えたッ！こつちだッ！」

数分後、早くも常夏コンビを発見した一騎達。2人が隠れたのは自分達のクラス  
の教室だった。

「いらっしやいませ。3名様ですね？」

3―Aの出し物はお化け屋敷のため、受付の生徒の服装はそれなりの服装だった。

そして受付の生徒が聞くと雄二は、

「いや5名だ。金は後ろの連れが支払う」

などと答えた。これは凄いためらいなく他人に会計を押し付ける行為である。

「では恐怖の世界をお楽しみ下さい（ガラッ）」

受付の生徒が扉を開け、一騎達を誘導させる。

「これは大した出し物だよな」

「まあ3年でお化け屋敷を出すのも過言ではないな」

頷きながら道を歩く一騎と雄二。明久もはぐれないようにしっかりと行動する。

「雄二、暗いから慎重に行動しないと」

「そうだな。連中がどんな罠を用意してるかわからん」

「奴らはいざとなれば傲慢な手を使うかもしれない」

（とは言つもの、これで何か騒ぎを起こしたら他学年との連帯責任で指導を受ける

羽目になるだろうな・・・）

そう思いながら歩いていると、

「気をつけるよ女装趣味の偽メイド」

（それは大きな失礼だ）

「う、うん。気をつけないと気をつけないと・・・」  
「何がくるかはわからない・・・」

突然邪気を感じさせる空気が漂ってきた。ここでアルフも何かを感じた。

「・・・来る」

「何がだ？」

「・・・あの連中が来る」

「まさか常村と夏川かなのか・・・？」

そう予兆していると・・・、

「!？」

「「へッ、変態だッ!!!」」

「「どつちもな」」

頭にブラジャーを被っている夏川から遭遇した。ツッコみは雄二をアルフで行った  
ようだ。

「ここまで追って来るなんてしつこい連中だぜ!（ダッ）」

叫びながら後ろへ撤退する夏川。すると雄二は、

「逃がすかッ!! 必殺アキちゃん爆弾を食らえ!（ガシッ）」

「雄二その技はやめよう! 名前を聞く限り一番の被害者は僕のような気がする!」

明久を利用しようとした。所が・・・、

『今だッ！！壁を倒して閉じ込めろ！』

「マズイ！！身動きが取れなくなるぞ！」

「あの声は常村か！？」

どこからか常村の声が聞こえてきて、一騎達を戦慄させる。

「仕方ない、脱出だアキちゃん！」

「それしかないね！」

壁が倒れるのを警戒し、脱出をしようとする。しかし、

「・・・あれ？壁、倒れてこないね」

これはまんまの嘘だった。

「はったりか！！あのモヒカン野郎・・・！」

「・・・俺達はアイツに遊ばれたと言うのか・・・！」

「雄二、一騎。そろそろ3回戦が始まるよ」

「何？もうそんな時間か？・・・仕方ない。悔しいがここは一旦戻りましょう」

3回戦目が始まる時刻が近いのでここは戻る事にした。

「雄二、次の試合はどうするの？」

「そうだな・・・。次は明久と一騎で出場してくれ」

対戦表の紙を読み上げながら雄二が答える。おそらく雄二にも何

か考えがあるのだろう。

「どういう事？」

「俺は少しババアの所に用がある。副賞の1つの『白金の腕輪』  
に關しての事

で聞きたいからな」

「なるほど。確か学園長はそんな事を言ってたな」

先日 of 学園長の言葉を思い出しながら答える一騎。雄二は『白金  
の腕輪』の特徴や

その能力を調べるために次の試合をパスする予定のようだ。

「だから、俺は一度ババアと話をしてくる。その間、お前と明久  
で試合に勝つて来い」

互いにすれ違つように後ろに進む雄二。どうやら彼も一騎を裏切  
つたりはしないだろう。

「それじゃ、後は頼んだぞ」

「・・・ああ！」

そう言い残し、雄二は学園長室へと向かつていった。

「一騎、そろそろ時間だよ。僕らの力を見せてやろうよ！」

「そうだな。血が騒いできたぜ・・・！」

互いに手を握り、その後ハイタッチを交わした。

「それでは、試験召喚大会第3回戦を行います！」

司会の教師が変更され、今は数学の長谷川教諭へと交代されてる。

「出場チームは、この通りです！」

巨大モニターからそれぞれ出場するチームと選手が表示される。

F  
ク  
ラ  
ス

吉  
井  
明  
久

&

千  
藤  
一  
騎

V  
S

Aクラス

鷺ノ宮雫

&

工藤愛子

「次は鷺ノ宮さん達のチームか」

（そういえば、彼女達のチームって不戦勝したんだっけ・・・？）

次の対戦相手に一騎は一瞬首を傾げた。大事な事を言い忘れたせいだろうか。

「千藤君に吉井君が相手のようね。手加減はしないぞ」

「ヤッホー」また会ったネ」

「はぁ・・・。俺はつくづく不幸だ・・・」

「・・・？」

一騎の落ち込みに思考回路が回らなくなった明久。一応彼にも言えない魂胆が

あるのだから。

「・・・は！俺は何を・・・？」

「ようやく正気に戻ったね。それじゃ、行くよ！」

「いつでもいいよ」

「私もいつでも構わない」

互いに意気込んだ所で長谷川教諭のアナウンスが入る。

「それでは、第3回戦開始します！」

「」「」「<sup>サモン</sup>試獣召喚！！」「」「」

そして今、一騎と明久の戦いが幕を開けようとした。

「・・・何？ダミーを見破られただと・・・？」

「申し訳ありません。何者かに消されてしまいました・・・」

「まあ仕方ない。また新たな作戦を実行する。私の手駒共を使う」

「手駒ですか・・・？」

「そうだ。とっておきのな・・・」

## 第五十六問 友情のタッグバトル？

「対戦科目は、物理です。それでは試合開始です！」

長谷川教諭の合図で一斉に召喚獣を喚び出す。フィールドからはお馴染みの

幾何学模様が浮かび上がり、そこから自身の召喚獣の姿が出てくる。

「次はいきなりAクラスと当たるなんて……。でも、僕らなら何とか

なるよね、一騎？」

「こんな所で俯いてる場合じゃないな。行くか、明久！」

「キミ達で勝てると思ってるの力ナ？」

「勿論、私は潰せる方から潰す」

（出来れば僕に攻撃をしない方がいいけど。観察処分者だから痛みは尋常じゃない程くるから……）

悪寒を漂わせつつ明久が警戒してしまう。そして互いの召喚獣が出てくると後から点数が表示される。

F  
ク  
ラ  
ス

吉  
井  
明  
久

物  
理

1  
2  
点

&

F  
ク  
ラ  
ス

千  
藤  
一  
騎

物  
理

4  
2  
8  
点

A  
ク  
ラ  
ス

工  
藤  
愛  
子

物  
理

3  
0  
5  
点

&

A  
ク  
ラ  
ス

鷺  
ノ  
宮  
雫

物  
理

4  
3  
7  
点

V  
S

「流石はAクラスだな。結構点数が高いな」  
「お前こそ、点数が高いようだな」

一騎と雫は互いの点数を褒めながら態勢を整える。彼女も平常心を保つ勢いだが、

この時に限って一生懸命勉強してきたのだろう。

「奴もあの時の勝負でかなりの実力を発揮してたからな。今回は油断出来ないぞ」

「わかってるさ。次こそは絶対に勝つ。一蓮托生だな」  
「危なくなったら俺も加勢する」

アルフは一騎に助言を交わし、協力を申し出た。前回は引き分けに終わったので

今回こそは本気で行くようだ。

「よし、僕も出来る事をやり尽くすぞ！」  
「吉井君、ボクに勝ったら良い事を教えてあげてもいいよ？」  
「どんな内容なの、工藤さん？」  
「それは秘密。それじゃ、正々堂々と勝負しようか」

愛子は自分の召喚獣に攻撃を指示させる。するとそれを一瞬で遮

るように一騎の

召喚獣が切り払いを発生させる。

「まだまだだね。まずは俺を倒す事だな！」

間合いを取りながら一騎の召喚獣が攻撃する。しかし、愛子の召喚獣は武器で攻撃

を防ぐ。それと同時に雫の召喚獣が懐に飛び込み、脚払いを仕掛けてきた。

「しまった！？迂闊すぎたか・・・！」

「行動に伴ってるようでは、私達に勝てない！」

その後、一騎の召喚獣に一発攻撃を与える雫の召喚獣。呆気なくよろけてしまい態勢が乱れてしまう。

「一騎！ここは僕が・・・！」

「やめる明久！今の点数だとやられるだけだ！」

「僕に考えがある」

「考え・・・？」

明久は闘争本能を煩わせるように一騎に告げる。そして一旦深呼吸し、

「まず、僕が鷲ノ宮さんを誘導させる。その後一騎は誘導してきた場所へと移動し、

そこから攻撃をしてくれ」

作戦内容を説明した。すると一騎は驚くような顔で言葉を反した。

「でもぐいぐいやって」

「大丈夫。僕は『観察処分者』だから、他の人と違って召喚獣の扱いには慣れてる。」

僕を信じて」

「・・・・・・。わかった、明久を信じよう。何としても引きつけてくれ」

頷くように返事をする一騎は、引き続き愛子を相手にする。明久は自分が瀕死状態になる覚悟を持ち、雫を誘導させる。

「こっちだ！鷺ノ宮さん！」

「なッ！？何て速さなんだ・・・！？」

明久の召喚獣の動きについていけない雫はこの光景に驚いてしまふ。観察処分者は

雑用として召喚獣を使つてゐるため、動きに無駄のない行動が可能となる。つまり明久

の召喚獣は日々日々教師達にコキ扱われているので優雅に素早い動きを見せてくれる。

（何としてもうまくやってくれ。明久、俺は君を信じてる．．．！）

「一騎！後は俺がやる！」

「アルフ……よし！ やってくれ！」

タイミングを見計らい、アルフが一騎の召喚獣に乗り移る。するとその瞬間、普通

ではあり得ない行動力を発揮した。

「な・・・ッ！？キミは一体・・・！？」

「そうさ。俺にはちよつと変わった奴がいるんでな。今からそれを証明するのさ！」

一騎の召喚獣に乗り移ってるアルフが愛子の召喚獣に懇親の一撃を与える。更に、

目にも見えない速さで全方位で攻撃を仕掛ける。この動きに愛子は言葉も出なかった。

「俺の相棒の力を借りてるのさ」

「相棒・・・？」

「アイツの名前はアルフ・フォード。別名は世界の破壊者。まあ俺はアイツがそう

呼ばれてた事自体が疑わしいけどな・・・」

「それに、『観察処分者』でもないキミがどうして召喚獣の動きが・・・」

「要するに、アイツのおかげだな」

一騎が片目を瞑りながらアルフに指を刺す。そして一騎は、

「話せば長くなるが――」

アルフの特徴を説明中

「と言った感じかな？」

「あはは……。まさかそんな事が」

愛子にアルフの特徴を手短に丁寧に説明した。要約理解した愛子

は苦笑いしながら  
呟いた。その時、

「一騎！今だ！！」

「OK！任せてくれ！！」

雫の召喚獣を誘導させた明久の召喚獣がこちらにやって来た。

「よし！このままこっちに！」

「・・・もはや私にはお前達の友情さが理解出来んな・・・」

「・・・へ？いや、別にそういつつもりじゃ・・・」

所が、雫はこの行動に呆れた口調で蔑んだ。寧ろ男の友情と女の  
友情ではそれぞれ

異性には理解出来ない部分があるのだろう。

「後は俺に任せろ！これで敵の召喚獣を纏めて仕留める！」

「頼むぞアルフ！・・・って何か力チ力チと音し  
ない？」

「何の事だ？気のせいじゃないか？」

すると突然、アルフの方から力チ力チと音が聞こえてくる。

「まさか・・・」

「これって・・・」

ドガアアアアアアアアアッ！！！！（アルフが持っていた爆弾が爆発する音）

この光景に皆は無言の状態へと陥った。これはもう……、

「……勝者、千藤吉井ペアです……」

「「「「イカサマだ————————ッ!!!!!!」  
「「「「」  
「「「「」

アルフのいかさまでしかなかった。アルフは最初からこの時を待  
って爆弾を作動

させたのだろう。いや寧ろどこで爆弾を入手したのが不思議だ。  
・  
・  
・  
・。

「……………アルフ、貴様これはどういっつもりだ？」

「おい、そんなに握るな。気持ち悪いぞ」

廊下で歩いていると、一騎はアルフの鳩尾を握りながら言及してくる。

「……………正直、僕らの作戦が台無しだね」

「ああ。このクソ野郎のおかげでな……………」

達成感を失うかのように教室に戻ろうとしたら、

「2人共、ちょっといいか」

「鷺ノ宮さん？どうしたの？」

「いや、その……………さっきの試合の事でな」

「アルフのクソ野郎がどうしたの？」

そこに雫がやって来た。彼女は1つ何かを言いたいようだ。

「お前達の連携プレイ、なかなか良かったわ」

「え？そうかな・・・」

「この調子で次の試合も頑張つて欲しい」

「鷺ノ宮さん、もし良かったら後で僕らの店に来てよ」

すると明久が雫の手を握りながら答えてきた。これに対し雫はこう答えた。

「・・・！その・・・お前の言いたい気持ちはわかった。うん、後で立ち寄ってみるよ」

（しまった！勢いで鷺ノ宮さんの手を握ってしまった！！このまま姫路さんや美波

に見つからなきゃいいけど・・・）

「それじゃ、私は戻らせて貰う」

「またね」

雫は手を振りながら一騎と明久に別れを告げ、自分のクラスへと戻って行った。

「さて、俺達も教室に戻るか」

「そうだね。雄二は後からくるだろうし」

こうして、一騎と明久による最初のタッグ戦（？）は幕を閉じた。



## 第五十七問

僕と女子のウェイトレスなお願い

「で、3回戦は勝ったのじゃな？」

「うん、一応ね・・・」

教室に戻ると秀吉が二人に尋ねてくる。何せアルフが不正行為をしたのが

原因なのだから。

「まあ次の試合まで結構時間はあるし。とりあえずはここに滞在するか」

「そうだね。今は喫茶店を成功させるのにここにいとかなないとね」

椅子に座り少し休憩を取ろうとすると、

「よう、試合は勝ったか？」

「あ、雄二。どうだった？」

学園長にちよつとした話を聞いてきた雄二が戻ってきた。すると雄二は1枚の

紙らしき物を一騎に渡してきた。

「『白金の腕輪』に関する説明が載ってる紙だ。それを明久と一緒に読むと良い」

「そうか。ありがとう」

「へえ、説明が書いてあるのか。後で読んでみようかな」

一騎は説明の紙を折りたたみ制服のポケットにしまった。明久も白金の腕輪の事で

余程気になったのかもしれないだろう。

「お主ら。すまぬがこっちの立て直しに協力してくれんか？」

すると秀吉が焦っているような顔で3人に尋ねる。

「まあ、この状況では客は来てくれない過程だと思うな。何かインパクトのある

ことをやる必要があるな」

「ふむ・・・、それで何をするかじゃが・・・」

「雄二、何かアイデアはある？」

「任せておけ。安直過ぎるがこれなら効果は絶大なはずだ」

雄二は答えながら紙袋から何かを出そうとする。

（あれ？雄二っていつからあれを持ってたんだろう・・・？）

首を傾げながら雄二の持つてる紙袋を見つめる一騎。すると、

「ほう、若干裾の短い気もするがこれならば確かにインパクトはあるじゃろつな。

コレを宣伝用に――」

雄二が取り出したのはチャイナ服だった。それを見た秀吉は関心するように頷く。

「ああ、コレを――」

（確かに姫路さんや秀吉が着たらインパクトは絶大だろう）

「明久が着る」

「何て豪快な発言だ・・・」

きつぱりと雄二が告げる。確かにそれはインパクトがありすぎるだろう。

「ちょッ・・・・・・・・！！チャイナ服まで着たらきつと僕はホンモノって皆に

認識されちゃう！！」

「冗談だ。これは姫路と島田と秀吉に着てもらっ」

でも雄二はそこまで甘い考えはしない。これで明久もホッとしたのだろう。

「あッ、なんだ。良かった」（ホッ）

「ワシが着るのは冗談ではないかのう・・・・・・・・？（はぁ・・・

）

「・・・確かに秀吉も入れるのはちよつと・・・」

胸を撫で下ろす明久と苦笑いする一騎と溜め息交じりの言葉を咳く秀吉の姿。

正直冗談ではない事も実現してしまうのかもしれない。こんな会話していると、

「たっただいま〜。ってアキつてばメイド服脱いじゃったんだ」

「あ・・・残念です。可愛かったのに・・・」

「葉月もう一回見たいな〜」

別の店（本当かどうかは知らないが）も回ってた瑞希と美波と葉月が戻ってきた。

「あれは次の試合があったから、ね・・・？」

「流石にあの服装で出場したら優勝が縁遠いからのう」

優勝どころか、批判も多く出るし未来永劫すらないだろう。そんな瑞希達に明久と

雄二は、

「残念ながらタダで人のコスプレを見られるほど世の中甘くないよ？」

「そういう事だ。二人共クラスの売り上げに貢献してもらっぞ」

「なッ、何だか二人共目が怖いですよ？」

「凄く邪悪な気配を感じるんだけど・・・」

瑞希と美波を囲むようにチャイナ服を手に持つ。そして、

「やれ、明久！」

「オーケー！（バツ）」

明久から飛び込もうとした。まるで獲物を捕らえるかのようにつに。

「へっへっへっ！おとなしくこのチャイナ服に着替え——」

ドゴッ！！（美波が明久の後頭部にラリアットする音）

「マジすんませんでしたっ！！自分チョーシくれてましたっ！！  
(ペコッペコッ)」

「弱いな、お前・・・」

しかし呆気なく美波に追撃され、咄嗟に謝り始めた。これはもう  
自業自得だ。

(もうどうしようもないな・・・)

「どうしてまた急にそんな事を言い出すのよ？チャイナドレスは  
着ないって話

だったと思うけど」

どうしても信用し難そうな表情で美波が尋ねる。すると雄二は明  
久にも諭すように

答えた。

「店の宣伝と明久の趣味だ。明久はチャイナドレスは好きだよな  
？」

(本当は好きだけどそういう趣味を知られるのは恥ずかしいな・  
・。ここは  
適当に誤魔化そう)

場の空気を読み、明久が答えようとする。

「大好————愛してる(キリッ)」

「・・・お前は本当に嘘をつけないヤツだな(うんうん)」

すると雄二は頷きながら渋々と呟いた。

「でも、チャイナドレスを着たらお客さんも沢山くると思うだろうし。ここは

明久に免じて許してやろうよ？」

この場をそうにかしようと一騎は瑞希と美波に交渉する。

「わっ、わかったわよ。店の売り上げのために仕方なく着てあげるわ。（ボソッ）

・・・それと一騎がそう言うなら・・・」

「？何か言った美波？」

「な、何でもないわよ！」

平然と問いかける一騎に美波はうなじるように叫んだ。美波もこれに関して

流石の後には退けないだろうし。

「そっ、そうですね。お店のためですしね」

でも瑞希は何とか笑顔で答える。そんな二人に葉月は、

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「えっ、葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

明久におねだりするかように尋ねた。葉月もこの状況だと着たくなつたのだろう。

「お手伝い・・・？あっ、うん！手伝うからあの服、葉月にもちようだい！」

「うーん、気持ちは嬉しいんだけど葉月ちゃんの方は数が――」

バサッ！（カーテンから飛び出す音）

キュピーン！（天井の光が一回転するムツツリーニを照らす音）

ガシャン！（ムツツリーニが何とか椅子に着地した音）

チクチクチクチク・・・（何かを縫っている音）

「ムツツリーニッ！？っていつかさっきまでいなかったよね！？」

突然現れたムツツリーニに明久は怖がるように戦く。するとムツツリーニはこう答える。

「……………肉まん百個、大至急」  
「自分で運べ」

しかし呆気なく雄二に拒否されてしまった。

「ムツツリー二、何をやってるの？」  
「……………俺の嗅覚を舐めるな」

（なんだろう。格好いい台詞が凄く格好悪い）

一騎が試しに質問してみるとムツツリー二は突然意味不明に答えた。

「それじゃ、3回戦が終わったら着替えますね」  
「いや、今着替えてもらいたい」

「え？」

所が、雄二はそのような事を告げた。その理由はただ1つ。

「宣伝のためだ。そのまま召喚大会に出てくれ」

召喚大会の時に自分達のクラスの店の宣伝をするためらしい。

「こつ、これを着て出場しろって言うの…………？」  
「流石に恥ずかしいです…………」

それでも引き下がりそうに答える瑞希と美波。すると明久は、

「二人共、お願いだ」

一礼をして再度交渉する。これに対して雄二はこう告げる。

「明久・・・！お前本当————チャイナ好きなんだな・・・」

（これはこれで良しとしてやろうぜ・・・）

ずっと様子を窺ってるアルフが雄二を見つめてそう思った。

「もしかして吉井君、私の事情を知って・・・」

（瑞希、やはり転校させられるのを分かって明久を心配してるの  
だろうか・・・）

「仕方ないわね。クラスのためだし協力してあげるわ。ね、瑞希？」

「あつ、はっはい！これくらいお安い御用です！」

「それならスグに着替えて会場に向かってくれ。自分達がFクラスって事を

強調するのを忘れずにな」

「オッケー、任せておいて。行くわよ瑞希」

「はいっ」

次の試合に出るため、瑞希と美波は一旦教室を後にした。

「・・・・・・・・・・出来た」

「わッ、このお兄さん凄いですッ！」

それと同時にムッツリーニは葉月のチャイナドレスを完成させた。

（下心が絡んだ彼に不可能はないと知っていたけど、まさか小学生まで守備範囲

だったとは・・・）

「ふむ、それでは着替えるとするかの（ぬぎっ）」

秀吉が制服を脱ごうとすると、

「ちょッ、ちょっと秀吉！！ここで着替えるの！？きちんと女子更衣室で着替え

ないとダメだよッ！！」

突如、明久がビツクリするように秀吉に発言する。

（純情少年の僕と妄想少年のムツツリーニにその刺激は強すぎる！！）

「・・・最近明久がワシの事を女として見てるような気がするんじゃないが」

「気のせいだ。秀吉は秀吉だろ」

「別にそこまで気にしてないからさ」

明久にとっては明らかな見間違いだろう。

「んしょんしょ・・・」

「はッ、葉月ちゃんダメだよ！！ムツツリーニが出血多量で死んじゃう！！」

躊躇なくこの場で着替えようとする葉月を必死で止める明久も苦

労はしていた。

そして3回戦での宣伝が終了し、ようやく中華喫茶というイメージが持てたFクラス  
は今こういう状況になっていた。

廊下には可愛い看板や、さっきよりも色合いの良い装飾や、いかにも本場の喫茶店を意識した教室内などで客を魅了していた。そして肝心の女子二人は、

「中華喫茶・ヨーロッパへようこそ!」

笑顔で客を出迎えてくれた。瑞希のチャイナドレスは赤が全体色で鳳凰が描かれてる

チャイナドレスを着ている。一方見波の場合は青が全体色で虎が全身に描かれてる

チャイナドレスを着ている。そして二人のチャイナドレスを見た妄想少年は、

「誰か、誰か蘇生をお願いします!」

純情少年に抱えられて倒れていた。

「明久よ、手が足りぬ。キッチンを手伝ってくれんか?」

すると向こうから緑色のチャイナドレスを着ている秀吉の姿があった。しかし、

「ダメだ!今はそれどころじゃ・・・!」

「・・・仕方ない。ワシがやるかのう」

ムツツリーニの蘇生で手が出せない明久に秀吉はただ厨房に戻っていった。

「そつちの状況はどう？」

「姫路と島田が宣伝したおかげで今はちよくちよくとお客が来て  
おる」

厨房で料理を作っている一騎が今の状況を尋ねた。これも売り上げ向上のため  
なら手段は選ばないだろう。

「3番テーブルにいるお客の注文の品は出来てるかの？」

「うん、これで全部だ」

「そうか、ならば運ぶでしょう」

秀吉は一騎から注文してある品を全部手に取り、客に持っていった。

「これなら売り上げは上がるはずだな」

「そして設備の向上も出来るというわけだな」

関心する一騎に便乗するかのようにアルフも同情する。

「さて、あっちはどうなってるのかな・・・？」

すると一騎はホールの様子をこっそりと窺った。

「いらっしやいませー。只今、ウェイトレス人気アンケートをお願いしてます。

帰りにでも是非投票して下さいー！」

入り口付近ではウェイトレス人気アンケートを美波が勧めていた。

「ふむふむ、あれは良い考えだな。確か瑞希も提案してたようだな」

「一体誰が1位になるだろうか・・・」

「まあ俺は妥当に美波だと思うけど」

「俺は瑞希だと思う」

互いに頷き合いながら答える。それは1日目終了してからじゃないとわからない。

「さて、俺も早く仕事に戻らないと！」

「そうだな」

一騎は張り切るようにキッチンへと向かった。清涼際1日目はまだまだ続く。

第五十八問 奇想天外？4回戦への準備

「ふむ、だいぶお客が増えてきたようだな」

「この調子だと、人気が高くなりそうだ」

厨房から再びホールを覗く一騎とアルフは関心していた。すると、

「・・・・・・・・・・・・・・・・茶葉がなくなった」

「あれ？ムッツリーニ、どうしたの？」

ムッツリーニが隠蔽するかのように厨房へと戻ってきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・大至急茶葉を持ってきて欲しいと明久に

伝えてくれ」

「うん、わかったよ」

一騎は一旦厨房を留守にし、明久の元へ向かっていった。

「さて、色々と仕事が忙しくなりそうだ」  
「バカなお兄ちゃんっ！」

窓際で一休みしている明久に葉月が小走りするようにやってきた。

「どうしたの葉月ちゃん？」

「気がついたら女性客も増えてきてるんだよ」

「きつと味の評判も流れ始めたんだろうね」

葉月が言う限り、女性客もちよくちよくと増えてきてるようだ。  
そして明久は

葉月の頭を撫でながら、

「それじゃ、お兄ちゃんもそろそろ仕事に戻るから葉月ちゃんも

頑張ってね」

と笑みを浮かべつつ葉月を労った。それに対して葉月は「はいですっ!」と返事をした。

（結構大間かな仕事になりそうだけど、ここは利益を高めるしかないね）

そして仕事を再開してから15分後――

「君、注文をしてもいいかな？」  
「あっ、はい」

突然明久に注文を要求してきた人がいた。

「本格烏龍茶と胡麻団子を」

「畏まりました。少々お待ち下さい」

（・・・あれ？教頭の竹原先生、また来てくれたんだ）

明久がその声の主へと振り向くと、そこには教頭である竹原が座っていた。

「それと聞きたい事があるんだがいいかね？」

「はいなんでしょうか」

すると竹原教頭が突然明久に質問を伺い始めた。

「このクラスに吉井明久という生徒がいると聞いたんだがどの子かな？」

「え？吉井明久は僕ですけど・・・」

分かりきった質問に答える明久。すると、

「ああ君が吉井君（笑）か」

「教頭先生、人の名前に（笑）はおかしいと思います」

竹原教頭は突然訳のわからない事を言い始めた。

「ああそれはすまない。だが私はどうしても教え子である君を吉井君（馬）とは呼べなくてね」

「あの、僕は職員室で何て呼ばれているんですか・・・？」

恐らく鉄人が全教師達に広めたのだろう。

「明久、ムツツリーニから伝言。飲茶を作るための茶葉が無くなつたから大至急

持ってきて欲しいって」

「ん、わかったよ」

そして厨房から一騎がやってきて明久に伝えた。

「先生、ちょっと行ってきたでもいいですか？」

「構わんよ。特に用があつたわけではないのでね」

「????そうだったんですか？」

最後に告げた竹原教頭に明久は首を傾げてしまった。

「明久、ムツツリーニが急いで欲しいって言ってたよ?」

「あ、ごめん」

一体何を言いたかつたのだらうと思いつつ、茶葉を取りに行った。

（ストックは確かこの空き教室に・・・）

空いている教室に入る明久は茶葉の入ってる箱を取り出す。

（しまった、どれだけ持っていくか聞いてなかった）

茶葉を取り出すので夢中になり、取り分を聞き逃してしまったよ  
うだ。慌てて

箱の中から取り出そうとすると、

「おい」

「うん？」

突然見知らぬ顔の男3人がやって来た。

「ああここは部外者立入禁止だから出てもらえますか？」

明久が振り向きながら答えると男達はドアをピシヤリと閉め明久に何かを言い出す。

「そうはいかん。吉井明久に用があるんでな」

「へ？僕に何か？」

恐る恐る男達に答えた明久。すると、

「お前には恨みはねえけどおとなしくしてくれやッ！！（ダッ）」  
「ちよつと待った！人違いじゃないのッ！？」

突然男の1人が明久に殴りかかろうとした。明久は慌てて回避をする。

「逃げんなコラ！おとなしくしてろッ！！」

「そんな事言われても！！」

（このまま外に出て逃げるのは簡単だけど、それだと喫茶店にこの連中が

来てしまうし。どうしたものかな・・・）

いきなり窮地に立たされた明久に成すすべがないと断定したその時、

「おい明久、ムッツリーニが茶葉の他に餡子も急いで持ってきてくれと——（ガラッ）」

雄二が更に伝言を伝えようと空き教室へと入ってきた。

「あとそれと、美波からの伝言で紙を持ってきて欲しいと――」

続いて一騎も明久にもう1つ伝えようと入ってきた。

「ん？なんだこいつらは？」

「これはどういう状況なの？」

「あつ、二人共丁度よかった」

ようやく助けが入り助かった明久は雄二と一騎に答える。

「よくわからないけど雄二と喧嘩したいみたいなんだ。一騎、悪いけど代わりに」

茶葉と餡子を持ってきて。だからあとは宜しくね」

「なんだそりゃ」

「あ・・・、うん」

これで何とか逃げ切った明久はドアを閉め、胸を撫で下ろした。

「おい明久、これは――ああそうか。そういう事か」

「なるほど、どうりでおかしいと思ったぐらいだ」

「コイツらどうする？」

「面倒だから一緒にやっちまおうぜ」

1  
分  
後

「おッ、覚えてろッ!!」

「てめえらの面わすれねえからな!!」

「夜道に気をつけろよ!!」

1分後、無残にボコボコにされた男達の姿が。

「雄二、あの連中なんだったかわかる？」

「売れ行きが良くなったFクラスの妨害でもしに来たんだろ」

「あはは、そんな理由で絡んでくるバカはいないよ」

無論、そこまで企む連中はそこまでいないだろう。

「それにしてもお前も大した腕だな」

「へ？そうかな・・・？」

「へえ、一騎も喧嘩慣れたんだ」

一騎の腕前に羨ましがる明久と雄二。実は普段見慣れない一面も得意だったりする。

「流石は俺の見込んだ相棒だ」

「勝手に仕切んなよ・・・」

「よし、とりあえず急いで戻るぞ。ムツツリーニが待ってる」

とりあえず不可解な問題も解決した所で教室へと戻る事にした。

そんなこんなで40分が過ぎ

「明久、一騎。そろそろ4回戦だ」

「え？もうそんな時間なの？」

「時刻表ではそう書いてあるしね」

厨房で仕事をしている一騎を呼び出し、ホールで話す雄二。

「あれ？アキ達もそろそろなの？」

「そうだけど、姫路さんと美波はいつ出番なの？」

3人に問いかける美波に明久が答える。すると、

「実は私達もそろそろ出番なんですよ」

「へえ。偶然的に一緒だね」

瑞希が少し張り切るように答えた。多分瑞希達もここまで勝ち抜いたからここで

戦う事になるのも例外ではなさそうだ。

「おそらく、次の対戦相手はどうなるのかわからないようだし・・・」

「少し予測つかないな」

顎を当てながら呟く一騎とアルフ。次の相手が余程強敵でなければ楽勝だが、

ここまできたら流石に予測もつかない。

「お兄ちゃん、葉月を置いてどこか行っちゃうの？」

すると葉月が明久に強請るように尋ねてくる。そこで雄二が、

「チビツ子。バカなお兄ちゃんは今から大事な用事があるんだ。だから

おとなしく待ってないとダメだ」

葉月を説得させようと何とか交渉してみる。しかし、

「うう、でも・・・（ぷうー）」

葉月が頬を膨らませながら駄々をこねてしまう。それでも雄二はこう答える。

「その代わり良い子にしてたら・・・、バカなお兄ちゃんが恋愛  
方法  
のデート  
を覚えてくれるからな？」

「葉月、お手伝いしてくるですっ！（・・・）」

葉月はこの言葉ですっかりと元気を取り戻し、必死で仕事に戻っ

た。

「ちッ、違うんだよ葉月ちゃんッ！！僕は君が期待するような財力はないんだ！！」

ねえ、聞いてる！？」

（困った……。オトナのデートって一体いくらかかるんだろう？あの調子だと

公園のブランコ程度じゃ許してもらえないぞ）

すっかり明久は拍子抜け状態へと陥ってしまった。すると、

「アキ？ちよつと校舎裏まで来て？（めしいッ）」

「ッ！！」

突然美波に肩を鷲掴みされた明久は更に恐怖へと陥る。

「美波ちゃん、ちよつと待って下さい」

ここで瑞希が何かを伝えようと美波を止めた。所が・・・、

「次の対戦相手は吉井君達のようなのですから、召喚獣でお仕置きした方が

遠慮なく出来ますよ？」

（つてそれ死刑宣告？最近の姫路さんの考えが読めない）

微かに憎悪を漂わせるかのように答えだした。

「ちよつと待って！僕の召喚獣はダメージのフィードバックつき

なんだよ!?

姫路さんの召喚獣に攻撃されたら僕自身も酷い目に――」

「フンッ、望む所だ」

「雄二!お願いだから勝手に僕の生命を左右しないで!」

「もう仲間割れの発生にしか思えないけど・・・」

雄二が答えると一騎は呆れるように呟いた。完全に明久を弄ぶ  
人にどうしようも  
ないと断定するように。

「上等よ。早く会場に向かいますようか。アキがどんな声で啼く  
か楽しみだわ」

「いいだろう。そこまで言うなら、明久にどこまで大きな悲鳴を  
上げさせるのか

じっくり見せてもらおうか」

(美波まで・・・。4回戦、一体どうなる事やら・・・)

もはや明久の味方は一騎以外誰もいなかった。仲違いするように  
・。  
・。  
・。

『それでは4回戦を始めたいと思います。出場者は前へどうぞ！』

そして召喚大会の4回戦が幕を開け、一騎達はそれぞれの場所へと出場する。

「4回戦になると人が凄いなあ。これなら宣伝効果も抜群だね」  
「そうだな。しかも今回は出場メンバーが全員Fクラスだ。絶好

の宣伝の

機会だ。ちなみに一騎は今回も補欠だからな」

「了解」

雄二に促された一騎は出入り口付近で待機する事にした。

「そんなわけだから二人共しつかり宣伝よろしくね」

「あ、あの……。やっぱり恥ずかしいです……。 (モジ、モジ) 」

すると瑞希が顔を赤くしつつ動揺しながら呟く。なぜならば……

「アツ、アキもメイド服着てきなさいよ！不公平よッ！！ (ノノ

ノノ) 」

今彼女達の服装はこの通り、チャイナドレス姿のままなのだからこれは流石に

恥ずかしいに決まっているだろう。

「僕がメイド服を着たらFクラスの評判が下がっちゃうよ。もし姫路さんの

お父さんが見に来たら困るじゃないか」

明久は何とかそう答えるが、

「え？どうして吉井君がその事を？」

(マズイ！！僕はその事を知らない事になってたんだ！！)

瑞希がビックリするように答えてきた。明久は慌てて誤魔化そうとする。

「ほッ、ほらー！姫路さんが活躍するなら家族の人はきつと見に来ると思って！」

（ナイスフォローだ明久。ここでバレたら全てが台無しだからな・・・）

風前の灯な雰囲気になる前に答えた明久に一騎は関心する。

「ふむ、明久としては将来の義父さんに恥ずかしい姿は見せたくないだろうな」

「いえ！吉井君のメイド服姿は可愛かったから大丈夫です！」

（あ、つつこみどころはそこなんだ）

若干趣旨が違ってきた気もするが、何とか言葉に留めておく瑞希。

「4人共、そろそろ良いですか？」

「あつ、はい。それじゃあ・・・」

「・・・」  
「サモン 試獣召喚！！」  
「・・・」

こうして、Fクラス同士の召喚大会の幕が切って落とされた。



## 第五十九問 殺戮と残虐と灰燼の戦い

「『『『試獸<sup>サモン</sup>召喚ッ！』』』」

そしてそれぞれ召喚獣を喚び出すと、フィールドから毎度お馴染みの幾何学模様が

が浮かび上がりそこから自分の召喚獣の姿が現れる。

『では、4回戦を――』

「ちよつと待って下さい」

ここで雄二が急に止めに入った。

『・・・はい？何かありますか？』

「すいませんが少しマイクを借ります」

雄二はマイクを借りて、何かを伝えようとした。

『清涼祭にご来場の皆様、こんにちわ』

軽く挨拶をすると一騎の方へ振り向き、アイコンタクトで誘導させた。

（なるほど、ここでも宣伝をしようとするんだな）

一騎は雄二の目に促され、前に出た。

「（ヒソヒソ）姫路さん、美波。こっちに並んで。雄二が宣伝するつもりみたい」

「え？あつ、はい」

この状況でしなくちゃいけないとわかった明久は瑞希と美波に並ぶように誘導させた。

『僕らは本格飲茶を提供する2―Fの中華喫茶で働いています。こんな可愛らしい

女子も一生懸命頑張っていますのでよろしければどうぞお立ち寄り下さい』

マイクを片手に持ち観客に宣伝をする。すると一騎が雄二に小声で、

「雄二、ちょっと貸して。あと1つ言いたい事があるから」

「そうか、あまり長引かせるなよ」

マイクを貸しして欲しいと頼み、一騎も1つ宣伝を開始する。

『ちなみに、只今中華喫茶ではウェイトレス人気アンケートを実施しています。

今いる女子二人以外にも可愛いウェイトレスがいますので気に入ったウェイトレス

に是非とも投票してみてください』

「「宜しく願いしまーすッ！（ペコッ）」」

一騎の宣伝が終わると、最後に皆で一礼をして挨拶をした。

（そうすれば設備を戻す事も簡単になるし、瑞希の転校も阻止出来る）

「先生、マイクをお返しします」

雄二は一騎からマイクを受け取り、マイクを返却する。

『———ということだそうです。ご見学の皆様、お時間に余裕がありましたら

出場選手達のある2―Fに立ち寄ってみて下さい。さていよいよ召喚大会の始まり

です。Fクラスの4人共良い試合をお願いします』

まもなく試合が始まるので一騎は出入り口付近で待機した。

「アキに坂本、ここまでよく勝ち残ってきたわね。でもウチらに勝てるとは流石に

思ってないでしょ？」

（この様子だと、3年生が受験のおかげで強敵が殆どいないから優勝候補とすら

呼べるくらいだな・・・）

美波がここまでの余裕を見せてるおかげか、一騎は少し緊張感を高ぶってしまう。

「甘いな島田。お前達は確かに優勝候補だがそれ故に、勝ち上がってくる事は

簡単に予想出来た……。それなら対策は幾らでも打てるという事だッ！」

・、雄二はモニターに指を刺し、対戦科目に着目させた。その結果・

Fクラス

姫路瑞希

古典

399点

&

Fクラス

島田美波

古典

6点

次の対戦科目は古典という事だ。

「こッ、古典！？4回戦は数学じゃなかったのッ!？」

この状況で美波が戦慄するように驚く。つまり美波の一番の苦手科目は漢字を

ふんだんに使用する事の多い古典である事が確定された。

（だからあの時の補充試験で頭を掻き毟ったような動作をした事か・・・）

後ろで見ている一騎がちよつとした予測をしながら思う。数字しか使わない数学

ならどの問題でも余裕（証明問題や文章問題を除く）な美波にと

つての一番の  
難関である。

「お前らに渡した対戦表だが――あれは俺の手作りだ」  
「だッ、騙したわねッ!!」

雄二が決め顔で答える。流石にこの行為は卑怯過ぎるが。

「くははははッ!!これで勝負は2対1ッ!勝ったも同然だな明  
久!」

「その通りだよ雄二!6点しかない美波の召喚獣なんていないも  
同然さッ!!」

「くッ!なんて卑怯な連中なのッ!!」

この光景に逆鱗に触れそうになる美波。所が・・・、

F  
ク  
ラ  
ス

坂  
本  
雄  
二

古  
典

2  
1  
1  
点

&

F  
ク  
ラ  
ス

吉  
井  
明  
久

古  
典

9  
点

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・明久」

「・・・・・・・・正直、悪かったと思ってる」

（はあ、もう悲しくなってきたよ・・・）

この点数だと明久は文句を言えまい。

「よし、雄二ッ！ここは前みたいに個人戦いこう！雄二は姫路さんを頼む！」

「待てッ！！それは俺の負担が大き過ぎるだろ！」

「わかってる！だからそこは得意の頭脳でカバーするんだ！」

「なんて無茶言いやがる！」

この場をどうにかしようと明久が提案をする。それでは雄二への負担が大きいので

雄二はこう答える。

「・・・仕方ない。こうなればお前の言っとおり頭を使ってやる」

雄二は呆れながら二人の方へと進み、一旦深呼吸をしながら何かを伝えようとした。

「——島田に姫路」

「何よ？」

「はい？」

「明久がペアチケットを手に入れようとしてるって話したよな？」

「それがどうしたのよ」

蔑むように美波が答えると雄二は、

「一緒に行きたい相手が俺だと言ったが——あれは嘘だ」

はつきりと二人に告げた。

（何を勿体つけてるのやら……。僕が同性愛者じゃないなんて誰でもわかってる

事なのに・・・）

訝しげに雄二を見つめる明久だが・・・、

「「えええッ!？」」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

世の中は甘くはなかった。

「そつ、それじゃ一体誰を・・・？」

「そんなの決まってるだろ？明久が誘いたいのは——」

雄二が止めの一言を告げようとしたその時、

『バカなお兄ちゃんっ！頑張るですーッ！！』

突然モニターから葉月の姿が載っていた。

「え？葉月ちゃん、どうして・・・？」

「って言うかどこから入ってきたの！？」

一騎は葉月がいる場所に驚く。葉月が今いるのは放送室であり、召喚大会の進行

や点数表示は全て放送室で行っている。どうやら葉月は明久の応援しに来たようだ。

『葉月が応援してるから負けないで下さいっ！』

（ごめんね、葉月ちゃん。子供にはわからない大人の事情が・・・

）

『勝つたらご褒美に大人のキスをしてあげるですっ！！』

「「ッ！！」」

そして葉月の発言に瑞希と美波は驚きだした。

「・・・・・・・・え？」

『キスだけじゃなくて、一緒にお風呂も入るですっ！』

「・・・・・・・・！！！」

更に続く葉月の発言で怒りのボルテージを溜める瑞希と美波。

『葉月が、疲れたお兄ちゃんのお背中流してあげるですーッ！』

「・・・・・・・・！！！！！」

極めつけには全てを抹殺する悪鬼と化したのだった。

「・・・・・・・・・・殺すわ」

（なっ、何だこのプレッシャーは！？僕は何も言っていないのにいつの間にか生命

が危険に晒されている！！）

「（ズンッ！！）」

「待つんだ美波！！僕は別に葉月ちゃんに何かしようとは思ってない！」

慌てて弁明をする明久だが、もう既に手遅れだった。

「妙に仲がいいと思ったら・・・・・・・・、まさかそういう事だったなんてね。」

それに手を抜いたら失礼なものね・・・・・・・・ッ！！」

（妹の危機に立ち上がる優しい姉も僕にとってはまだの殺人鬼だよ！）

チエーンアレイを持って攻撃態勢をとる美波に完全に怯える明久。

「待ったッ！！そんな事したら明久は致命傷になるよッ!？」

一騎が必死で声を掛けるが、彼女には何1つ聞こえなかった。

『くたばれーッ!』

『『『くーたーばーれーッ!!!』』』

そして観客には何時ぞやのFFF団の姿も。

「やっぱり吉井君には押お仕置が必要みたいですね?」

「ひ、姫路さん・・・?」

明久が見えた瑞希は完全に阿修羅のようだった。

「・・・・・・・・・・やっぱり試合は本気で戦わなきゃですよね・・・

・・・・?」

「そんなあゝ。本気で戦ったらフィードバックで痛みが・・・」

『殺せー』

『『『『こーろーせーッ!!!!』』』』

「・・・・・・・・・・なんだろう。Fクラス同士なのに、この超アウエイな

感じは・・・」

罵声の聲が広がる会場に完全に鬱状態になる明久。

「こうなったら全力で行くぞ明久！」

「でも姫路さん達にどうやって!？」

「瑞希ッ!!アキの召喚獣をボコにして!ウチはアキの本体をボコにするから!」

「わかりました!」

「わからない!二人の言ってる事が僕にはさっぱりわからない!」

このような光景はバカテスでの常識である。

(このままだとフィードバックと実際の痛みで僕はショック死する可能性が・・・!)

「行きますっ!」

まずは瑞希の召喚獣から攻撃を開始する。しかし明久の召喚獣ではこの速さ

にはおいつけない。

「わッわわッ!」

でも寸前で回避に成功する。所が・・・、

「アキ!おとなしく殴られなさい!(ダダッ!)」

「美波!それは反則行為だよッ!」

美波も自分の召喚獣とともに明久を滅多打ちにしようと追いかけていた。

『反則はありません』

（いいの？教育者としてそれでいいのッ！？）

試召戦争ならともかく、召喚大会ならば何でもありらしい。

「……………そんなに逃げなくても一撃であの世に送ってあげますから……………」

そして完全にヤンデレ状態の瑞希も明久を血祭りへと上げるようだ。

「明久！キツイだろうが姫路の武器を封じろ！！あとは俺がやる

！」

「わかった！」

雄二の言葉を信じ、明久の召喚獣は瑞希の召喚獣の武器を押さえ込もうとした。

「……………なぜ抗うのですか？吉井君の抵抗も無意味ですから……………」

武器を押さえつける明久の召喚獣を瑞希の召喚獣は振り払う。すると…………、

ムニユ（明久の召喚獣が瑞希の召喚獣の胸部に顔をついた音）

「ッ！！」

その反動で瑞希の召喚獣の胸部へと向かった。

「きゃああああ！！何やってるんですかああああッ！？」

「離れなさいッ！！」

必死で明久の召喚獣を瑞希の召喚獣の胸部から引き離そうとする  
美波の召喚獣。

これはこれで明久にとってロマンなのだろう。

（でもこれを耐え切れれば雄二が止めを刺してくれるはず・・・！）

「雄二今だ！あとは僕を巻き込まないように——」

タイミングを合わせた明久は雄二に合図をするが、

「阿呆が。そんな事を考慮してたら威力が落ちるだろうが」

「きつ、キサマ謀ったな雄二いッ！！」

どうやら独り勝ちにしようと考えてたらしい。

「くたばれ姫路！明久とともに！！」

（雄二、200点超える召喚獣の威力はダンプカーの衝突にも匹敵するんだよ？）

「くえええええッ！！」

「きやあッ！！」

「ダンプッ！！」

そして雄二の召喚獣の攻撃で瑞希の召喚獣とともに0点になった明久の召喚獣。

「こ、交通事故って死ぬほど痛い・・・！」

横にはフィードバックで痛みが返ってきた明久自身もこの有様。

「瑞希っ！！」

「余所見とは余裕だな島田<sup>スッ</sup>」

「しまっ・・・！！」

「これで決まりだ（ドンッ！！）」

最後に美波の召喚獣にも止めを刺した。

『あゝ・・・、えゝゝと・・・。。姦計をめぐらせ相手もろとも

相手を葬った坂本雄二君の勝利ですッ！！』

「これって、誰にやられても一緒じゃな————ちよっ待ってどこへ————」

そしてFFF団一向へと異端審問会へとかけられた明久の姿が。

「色々納得いかないけどちゃんと勝てたしよかった事にしておう・・・」

この試合を最後まで見届けた一騎は呆れながら呟いた。

「卑怯者」

「二人とも酷いです・・・」

そして試合が終了してからの彼女達は落ち込んでいた。

「あ、いや。あれも勝負だったからさ」

「とても勝負とは程遠いけど・・・」

異端審問会から開放された明久が言うが実際にはただの殺戮と残虐に満ちたただの

殺し合いにしか見えなかったが。

「二人ともそう言うな。お前らの代わりにしっかりと俺達が優勝してやるから」

「そうだよ。あとは俺達が何とかするからさ」

何とか笑顔で答える一騎。すると、

「（ヒソヒソ）でもこのまま優勝しないと瑞希が転校してしまうから。油断は

出来ないよ」

「（ヒソヒソ）わかってる。僕もそのつもりだから。ってことで美波達は喫茶店

に専念してくれる？召喚大会は僕らが何とかするからさ」

一騎は小声で明久に答える。明久もそれを意識し、美波にも話を回した。

「そりゃアキ達が優勝した方が瑞希のお父さんの印象はいいだろうけど・・・。」

坂本がいるだけでもいいけど何かあった時には一騎と交代しなくちゃいけないし

逆に言えば一騎に何かあったら相手によつては優勝は不可能かもしれないのよ?」

（確かにFクラスの生徒に実力があるのを見せるなら瑞希じゃない方が

説得力があるのかもしれないな・・・）

美波の言葉で一度考え込む一騎。瑞希ならば余裕なのだが、ここは別の誰かにした

方が余程辻褄が合うのだろう。

「それはそうとアキ、本当に葉月に手を出そうとしてるわけじゃないわよね?（グイッ）」

すると美波は明久のネクタイを引っ張りながら尋ねてきた。

（試合後に散々説明したのに・・・。僕って信用ないなあ・・・）

「大丈夫だよ、僕はAカップに興味はないんだ」

「・・・あ、あはは。それは安心ね」

明久が必死で答えると美波は胸を撫で下ろすように安心した。

「（ブツ、ブツ、ブツ）・・・女は胸じゃないのに・・・アキの  
バカ・・・!」

所が、美波は突然そのような事を呟きながらスタスタと歩いてい  
った。

（あれ？美波一体どうしたんだろう・・・？）

目の前にいた一騎は首を傾げながら美波の方へと振り向いた。人  
の恋路を邪魔すると

馬に蹴られて地獄に落ちそうなのでここは敢て言及しないでおく  
事にしようだ。

## 第六十問 必殺料理人の浅知恵？

試験召喚大会の4回戦を勝ち抜いた一騎達は準決勝まで少し休暇を得ようと教室に戻ろうとするとFクラス前には大勢の客の行列が並んでいた。

「ほう、なかなか盛況じゃないか」

雄二はこの客の人数に頷きながら答える。すると、

「あ！バカなお兄ちゃんっ！お客さんがいっぱい来てくれたんだよっ！」

店で手伝いをしてた葉月がひょこつと顔を出しながらこちらに向かって来た。

「そうだね、葉月ちゃんお手伝いどうもありがとうね」  
「んにゃ〜〜・・・」

礼を言いながら葉月の頭を撫でる明久。これほど手伝いをしていれば喜ぶ

に違いはないかもしれないようだ。

「余談だけど、もし俺達が更に勝ち抜いたらお客さんが更に増えてくる

のかもしれないね」

「確かに、僕らが勝てばお客さんが増えるかもね」

教室に入ると、客の人数が増えているのでわかりやすいだろう。

「でもそれはそれで不幸中の幸いだと思うけど・・・（／＼／＼）」

二人の言葉を聞いた美波が胸を隠すようにうなじさせる。彼女は帰国子女なので

下手にはしゃいだら恥ずかしい気持ちになっってしまうのは予想の反中だ。

「おっ、あの娘達だ！」

「近くで見ると一層可愛いな！」

「手伝いの小さな子もチャイナのミニの子も可愛いしレベル高いな！」

すると周りの客が瑞希達を見て興奮をする。中には既に魅了されてる客もいるのだろう。

「明久に一騎、戻ってきたようじゃな。どちらが勝ったのじゃ？」

注文の品を運び終えた秀吉が歩きながら尋ねてきた。すると、

「雄二・・・かな？」

「そうね。坂本の一人勝ちね・・・」

「ですね・・・」

「ああ、もう寸法を測らずに豪快に勝ったからな・・・」

「お主らは同じチームなのに負けじゃったのか？」

青ざめた顔で答える一騎達に秀吉はただ首を傾げる事しか出来なかった。

「それよりも数少ないウェイトレスが固まったら客が落胆するぞ。今は

喫茶店に専念してくれ」

「そうですね。喫茶店のお手伝いをしないといけませんね」

「ちよつと視線が気になるけど売り上げのためにも頑張りますか」

「はいっ、葉月も頑張るですっ」

雄二が女子3人に告げるとそれぞれやり遂げるようにと決意した。

勿論、美波も

やる気を出して精一杯頑張る事にした。

「・・・ワシは一応男なのじゃが・・・」

「秀吉、絶対に性別をバラしちゃダメだからね？」

後ろでは明久がニッコリとした顔になりながら秀吉を咎めた。

「やれやれ、仕方がないの・・・」

それでも仕事のために懸命な働きっぷりを見せる事に。

「あ、いっらしやいませー！中華喫茶・ヨーロッパアンへようこそ  
ー！」

客が来たので爽やかな表情で招き入れた。

（本人の気持ちとは裏腹に演劇魂が勝手に反応しちゃうんだね）

「さて、俺達は一息休憩したら次の試合まで手伝うとするか」

「ん、そうだね」

「健康に管理しないとあとがきつくなるしね」

そして一騎達も一旦後ろの椅子に腰掛ける事にした。

「さて、そろそろ仕事に戻るか」

「あんまり客を待たせるわけにはいかないからな」

休憩を終えた一騎は厨房へと戻る。するとそこへ瑞希がやってきた。

「あの、ちょっといいですか？」

「どうしたの瑞希？」

瑞希がもじもじと体を動かしながら一騎の服をキュツッと掴む。そして

少し間を入れた後に瑞希はこう答える。

「その・・・、私にも胡麻団子を作らせて下さい」

「どうして？誰かに食べさせたいの？」

瑞希のうなじから全く目を逸らさない一騎は尽かさず問いかけた。この様子だと、

「はい。頑張ってる吉井君や千藤君、それに皆さんにご褒美に振舞いたいと思って・・・」

ひたすら頑張ってる明久や一騎に褒美として食べさせたいようだ。

「俺の分も作ってくれ」

「あ、あなたも食べたいんですか？」

「アルフも食べたいのか？」

ここで話に割り込むように瑞希に頼むアルフ。一騎はあの時アルフが言った言葉

を思い出しながら考え込む。

「なるほど。そんなに食べたいのか」

「ああ。俺は正直お前の手料理が大好きになった」

「そうですか。それは嬉しいです」

アルフが嬉しそうに答えると瑞希は満面の笑みを浮かべながら胸を撫で下ろした。

「それじゃあ、余った材料があればいいですので早速お願いします」

「いいよ。それじゃ、こっちに来て」

折角のお手伝いになりそうなので一騎は瑞希を厨房へと入れさせた。すると、

「・・・・・・・・・・貴様、俺を殺す気か・・・・・・・・！」

「？何を言ってるのムツツリーニ。別にそういうつもりじゃないけど」

突如包丁を手に取り出したムツツリーニが一騎に嫉妬した。

「へ？いきなりどうしたの。何で俺に敵意を向いてるのさ？」

「・・・・・・・・・・何でもない。仕事に戻る」

しかしムツツリーニは一騎が何を思っているのかがわからなかった  
ので自分の仕事  
に戻った。

「土屋君、どうしたのでしょうか？」

「さあ・・・」

今でも不安に思う一騎は首を振りながら自分の仕事場へ瑞希を連れた。

「今余ってる材料はこの通りだよ。好きなように使っていていいから」  
「でもそうしたら・・・」

「大丈夫、在庫にはまだあるから」

一騎は今余ってる材料を全て出し、瑞希に見せる。すると瑞希はある事を提案した。

「それでしたら私の方で特別な隠し味を入れますね」

「隠し味か。なるほど、良い提案だね」

最後に瑞希は小声で「・・・それと、ここからは私が占領しますので・・・」と  
呟くと、

「何か言った？」

「いえ、何でもありません」

一騎が尋ねるように言うと瑞希は苦笑いで誤魔化した。

「それじゃ、自由に調理していいよ。俺はちょっと席を外すから」  
「はい、任せて下さい」

そう言い残し、一騎は一旦厨房を後にした。

「それじゃあ・・・、とっておきの隠し味を入れときましようか・  
・・・」

「・・・・・・・・（ガタガタガタ・・・）」

後ろで調理してたムツリーニは悪寒を漂わせながら仕事を続けていた。

## 第六十一問 必殺料理人の浅知恵？

「どうも、ありがとうございますー」

一方、ホールでは客に一礼をしながら笑顔で挨拶をする美波。すると

後ろから葉月がやってきた。

「お姉ちゃん、お客さんの数が一向に減らないですねっ」

「確かに、さっきの宣伝の効果が抜群だったのかしらね」

投票用紙を入れる客に一礼を交わしながら答える。4回戦での宣伝は

かなりの効果が発揮したおかげというべきだ。

「・・・でもお姉ちゃんはあるまりはしゃげないからね」

「大丈夫ですっ。葉月も精一杯頑張りますから安心して下さいですっ」

「ありがとう葉月」

励ましの言葉をくれた葉月に礼を言う美波。自分の妹が懸命に手伝える

姿を見たらそれほどの仕事っぷりを表してるのだろう。

「美波、そっちの状況はどうなってるの？」

そこへ厨房から出てくる一騎の姿があった。一騎はゆっくりと二人に近づく。

「今はそこそこお客さんも増えてるわよ。それより瑞希はどこにいったの？」

「瑞希なら今厨房にいるけど」

厨房の方へと指を刺しながら言う一騎。すると横で仕事をしていた明久がやってきて質問を伺った。

「一騎、今なんて・・・」

「何って今瑞希は厨房にいるけど？」

「NO~~~~~ッ!~!~!」

すると突然明久は悲鳴を上げるかのように叫び始めた。

「きゃあ!どうしたのよアキツ!？」

「どうかしたんですかバカなお兄ちゃんッ!？」

そして明久の叫び声で思わず軽い悲鳴を上げてしまう美波とビツクリするかのように

驚く葉月が聞きつけてみる。

(どうしよう・・・!もし姫路さんが料理を作ってたら僕どころか、お客さんが

死んでしまう可能性があるじゃないか・・・ッ!~!)

「まったくどうした明久、お前の叫び声で思わずコップを割ってしまっただろうが」

明久の叫び声の反動で雄二が持ってたコップ1つを割ってしまった。

「雄二、どうしよう・・・」

「はあ？また何かバカな事をやらかしたのか？」

「実は――」

雄二に事情を説明中

「・・・今日という今日がお前の命日だな」

「勝手に僕を殺したかのような台詞を発言するなバカ雄二!!」

雄二に事情を説明するとドヤ顔で明久を蔑んだ。

（この野郎・・・！姫路さんが厨房にいるという事を説明した拳  
句に咄嗟に僕を

売りつけようとする魂胆を言ってやがる・・・！何て邪道な野  
郎だ・・・ッ!!）

「明久、あんまりやつれた顔していると姫路がいなくなってしまう  
ぞ？」

「少しは僕を認めるよッ！」

「んで、姫路は何をやってるんだ一騎？」

明久をからかった後、雄二は一騎に質問をする。すると、

「瑞希はちよつと何かを調理してるらしいけど・・・」

「「ウゾダンドコードンッ!!」」

「日本語を喋ろよ・・・」

明久と雄二の叫び声にアルフは呆れた状態になる。そして互いに  
アイコンタクト  
をとり始めた。

（どうする雄二？このまま秀吉とムッツリー二にも知らせる？）

（いや、ムッツリー二は厨房で働いてるからもう知ってるはずだ。それより自分

の生命を守るのが先決だ）

（そうだね。このまま最悪な清涼祭したくはないからね・・・）

片を疎みながら互いの目を見つめる二人。すると美波は二人を覗き見るように

様子を窺った。

「アキ、坂本。一体どうしたのよ。瑞希が何をやらかすと言つたよ」

「え？瑞希が料理したらいけないの？」

「ちがうんだよ一騎に美波！これには色々な事情というのがあつてねッ！」

「だよな明久！決して俺達は何も思つてないからなッ！」

仲良く笑いながら誤魔化す明久と雄二。実際、明久はまだ食べてないがああ時の

光景を見て完全に衰弱しそうな状態になったのだから。

「そうか。ならばいいけど」

「アンタ達、今日はどうしたのよ」

「「何でもないから」」

最後は真顔で終わらせる。相当内密にしたいのだろう。

「でも、何で瑞希が厨房に入りたいと言ったのかしら」

「それは頑張る皆に何かを振舞いたいって言ったから」

顎を手に当てながら答えると葉月はニコニコとした表情で、

「綺麗なお姉ちゃんがお料理するなんて羨ましいですっ！」

とピョンピョンと跳ねながら喜ぶ。子供には分からない事もあるのだから。

「ねえ一騎、ちょっといい？」

「何？どうしたの美波？」

「ちょっと頼みがあるの」

賑やかな状況の中、美波が一騎の手を引っ張りながら尋ねる。

「頼み？一体どういう事？」

「実は後夜祭の時に2日間の売上金次第では買える物が決まるけど、ウチは

あまりそういうのには手をつけられないと思うから・・・」

「つまりお菓子や飲み物などの物を買うのに計算で出来ないって事？」

「ちがう、ちょっと瑞希と一緒に両親を説得させようと思ってるの」

少し心配するように言葉を紡ぐ美波。それに対して一騎は、

「そうか、喫茶店を成功して召喚大会に優勝してもわかってもらえるかどうか

心配だよな・・・」

腕を組みながら深刻に考え込む。だからと言って見放すわけにも

いけないだろう。

「多分有り得る話だな」

「アルフ、どういう事だ？」

「瑞希の父親はこの教室の設備で勉強してる瑞希の姿が可哀想だ  
と思い、我慢

の限界で転校させようとするのはわかりきった事。ただ優勝し  
ても喫茶店を

成功させても瑞希の父親がわかってもらえないと何も意味がな  
い」

アルフは二人にわかりやすいように補足説明をする。これを聞いた  
美波は悲しい  
顔で何かを呟いた。

「そうだったら・・・、ウチはどうしたら・・・」

「大丈夫だよ美波。絶対に瑞希のお父さんに分かせてみせるよ  
うに頑張るから」

すると一騎は美波の片にそつと触れるように答える。大事なクラ  
スメイトを

転校させるわけにはいかないと決意するのが定めだ。

「・・・ありがとう、一騎」

励まされた美波は笑顔で礼を言った。最後に美波は肝心な事を答  
える。

「つまり最初に売れたお金で何かを買えるけど何かあった時は一  
騎に任せて欲しい

「というわけよ。出来る？」

「勿論さ。これくらいの仕事は朝飯前さ」

「ふん、尽くお前は無茶を言ってくれるな・・・」

「無茶じゃないさ、出来て当然の事だ」

アルフが呟く言葉に便乗するように一騎も言葉を紡いだ。

「出来ました。これで吉井君が喜んでくれたら安心ですね。」

一方、厨房では既に必殺料理人が調理を完了していた。

## 第六十二問 禁じられた(?) 接戦?

「さて、そろそろ試合の時間だな」

30分後、一騎は厨房から覗き見るように時計を見て確認する。

「ああ、そうだな。・・・けど何かがおかしい・・・」  
「どうしたのじゃ? 雄二」

すると雄二が咎めるように不信感を抱き始めた。

「・・・対戦カードがちよつとな・・・」  
「え? 別に変な事はないはずだけど・・・」

一騎が首を傾げるように返事をする。でも雄二の顔からして、何かがあるのだろう。

「いや、それはそうだが・・・、何かが不可解だ」  
「お主らが普通に勝ち進んでいる以上、何も無いはずじゃが」  
「そういうわけでもないさ・・・。秀吉、ムッツリーニ。作戦の準備をしてくれ」

ここで雄二が秀吉とムッツリーニに作戦を指示する。すると二人は、

「・・・・・・了解」  
「心得た」

と呟きながら教室を後にした。

「作戦って？」

「俺の読みが正しければ、次の相手がまともにぶつかったら勝てねえ」

蔑ろにするのは勿体無いと雄二が宣言をすると、

「雄二、そろそろ行くよ」

明久が急ぎ足でやって来て告げた。

「明久、今回の作戦は俺達だけじゃなくて秀吉とムツツリー二にも協力してもらう。」

「お前はそれに合わせるだけでいい」

「うん・・・」

鵜呑みにするように雄二が説明をする。だが明久は納得いかないような返事を

返してしまう。

「あの化け物二人には弱点はないが、付け入る隙はある」

「付け入る隙？」

「という事は、次の対戦相手は・・・」

すると一騎は頭の中でまとめて整理をした。よって、次の対戦相手は・・・、

「狙いは秀吉の姉、木下優子だ。奴を利用して一気に形勢を傾ける」

Aクラスコンビである霧島翔子&木下優子のペアになる。

「それより雄二が霧島さんとうまくやればいいんじゃないの？」  
「うるさい黙れ」

でも雄二にも悔れない事もあったりする。

「じゃあ、今回も俺は補欠って事か」

「余程強敵な相手でなければだからな。もう少しの辛抱だ」  
「了解。わかったよ」

一騎は腕を頭の後ろに組むように返事をする。今は彼にサポートを任せるのが

優先だ。

「ま、とにかく気合を入れろ。この戦いに負ければお前の大好きな姫路を失うし、

俺の今後の人生を失う。命が懸かってると思え」

「その『大好きな』ってのはやめて欲しいけど了解。絶対に負けるものか」

互いに拳同士をぶつけるように交わすと、教室を出て会場へと向かったのであった。

『お待たせしました！これより、準決勝を開始したいと思います  
』！

そして召喚大会準決勝が幕を開き、会場は更に賑わいを増していた。

「・・・・・・・・雄二、邪魔しないで」

目の前には学年主席である翔子が行く手を阻む。すると雄二は、

「そうはいくか！俺にはまだやりたい事が沢山あるんだ！」

胸を押さえるように翔子に向かって告げる。だがしかし・・・、

「・・・・・・・・雄二。そんなに私と行くのが嫌？」

翔子はそれに対抗するため、上目遣いで雄二を諭す。

（これは必殺上目遣い！！普段クールな子がやるとその威力はもはや無限大だ！

ここで酷い事を言える奴は人間じゃない！！）

明久はこの光景でかなりのダメージを覆ってしまった。所が・・・

「ああ嫌だね」

（人間じゃない）

雄二は平気で断った。それに対して翔子は、

「・・・・・・・・やっぱり一緒に暮らして分かり合う必要がある」

邪気を漂わせるかのように答える。だが雄二もそう簡単に引き下がる男ではない。

「ハッ！残念だったな！そんな寝言は俺達に勝ってから言うことだな！」

「……………わかった。そうする」

（流石は神童と呼ばれたぐらいの実力はあるな。なかなかだよ、雄二）

後ろで雄二を褒める一騎は頷きながら関心する。そして例を作戰を告げようとする。

「雄二、作戰はどう？」

「任せておけ。抜かりはない」

明久が尋ねると、雄二は頷くように答える。

「頼むぞ！秀吉ッ！！」

（雄二は何を言ってるのだろう……？相手は秀吉の双子の姉の

—————）

一瞬、チンプンカンプンな状態になってしまう一騎は何かを思い出す。

（そうかッ！瓜二つなのを利用した二人の入れ替わりの作戰か！結構良い作戰だ、

やるじゃないか雄二！）

これで雄二がやろうとした作戦を理解出来た一騎。つまり秀吉が変装する事で戦力を増やすための作戦である。

「やったね。秀吉が木下さんと入れ替わるなんて、双子ならではの作戦だね」

「そうだ。これでうまくいけば俺達の勝ちだ」

こっそりと会話をする明久と雄二。所が・・・、

「・・・ふふっ、そううまくいくかしら？」

「え？秀吉・・・？」

「秀吉、もう木下さんの演技はいいから早く僕らと――」

（待てよ。ひょっとして・・・ッ！）

アルフも何かを感じるように驚く。よって・・・、

「秀吉？秀吉ってあの「ミ」の事？」

『く・・・すまぬ雄二。ドジを踏んだ・・・』

「ひ、秀吉ッ！？どうしてそんな姿に――！」

ここに居るのは正真正銘、秀吉の双子の姉の優子だった。そしてモニターには

衰弱状態の秀吉が映ってた。

「バツバカなッ!？」

「…………雄二の考えてる事くらい私にはお見通し」

「ま、匿名の情報提供もあつただけだね」

(そんな……! 一体誰がそんな事を!? 俺と明久も知らなかった作戦をバラす

なんて。常に俺達をマークしてないと出来ないはずだ……!)

予想外な事態へと陥ったこの雰囲気。一騎はムツツリー二に連絡を取った。

「もしもしムツツリー二? 今そっちの状況は？」

『……………何者かに情報が流れた』

「やはりな。作戦は失敗に終わった。悪いけど秀吉の縄を解いて欲しいんだ」

『……………わかった。俺に任せろ』

そう言い残し、ムツツリー二は直ちに秀吉を解放する事にした。

「おとなしくギブアップしてくれると嬉しいな。弱いものいじめは好きじゃないし」

完全に作戦が無意味になった所で、優子が片目を瞑りながら降伏

宣言を委ねる。

「くう・・・ッ！」

今の雄二の状態は風前の灯状態である。

（おそらく、匿名の情報提供を携えたのは常夏コンビの可能性がある・・・もし

奴らだったら生かしておくわけにはいかないな・・・）

一騎が軽い推測をする。もし本当に常夏コンビが翔子達に情報を提供したのであれ

ば誰かが常夏コンビに最初に教えた可能性も有り得る。状況を整理すると誰かが盗

み聞きをしてそれから常夏コンビに伝え翔子達に伝わったのだろう。だが常夏コンビ

が伝えてなくその張本人が伝えた可能性も考えられる。逆に言えばその元凶は何者

かによる罠だと考えられるのも例外ではないという事だ。それを含まえ秀吉を衰弱

させた人物は翔子達に情報提供を携えた奴なのかもしれない。いやむしろそれを知

った人物は秀吉を行動不能させ翔子達に事前に伝えたのだろう。

そして今に至ると  
いう事だ。

（雄二の作戦は失敗——このままでは正面から戦うしかな  
なくなってしまう。）

そんな事したら僕らの負けは確実だ・・・！）

硬直の時間が続く中、明久が何かを考え始めた。

「情報の提供は完了しました」

「これで奴らの行く手を阻む事が出来ます」

「ご苦労・・・。次はあの教室のウェイトレス達を誘拐しろ。姿を変えてな・・・。」

第六十三問 禁じられた(?) 接戦?

(今のでかなりのローリスクになってしまった……。だが、やるしかない……。！)

明久は自分で何か策はないかと考え始めた。そして、

「一騎、秀吉とムツツリー二を連れて来て欲しいんだ」  
「わかった、連絡をしておくよ」

一騎に秀吉をムツツリー二を誘導させようと指示をさせた。

(よし、ここはいよいよ僕の番だ)

「こうなったら、奥の手を使うしかない」  
「奥の手!? お前に策があるのか!？」  
「そうさ。雄二、今から僕の指示通りの台詞を言って欲しい」  
「お前、一体何を――」  
「今は迷ってる余裕はなんてないよ。とにかくよろしく」  
「わかった。今回はお前に任せよう」

雄二を促すように答える明久は二人が来るのを待つ。

(霧島さんと木下さんに何とか勝つにはこれしかない。今はこれで粘る……。ッ！)

「それじゃいくよ。僕の言った事をそのまま言っただ。棒読みにならないようにね」

「頼んだぞ、明久」

小声で説明する明久に頷く雄二。これから明久の作戦が始まる。

「翔子、俺の話を聞いてくれ（明久）」

「翔子、俺の話を聞いてくれ！（雄二）」

「俺はどうしても優勝したい（明久）」

「俺はどうしても優勝したい！（雄二）」

何とか明久の台詞通りに台詞を告げる雄二。次に雄二にこう指示をする。

「お前の気持ちは嬉しいが、俺には俺の考えがあるんだ（明久）」

「お前の気持ちは嬉しいが、俺には俺の考えがあるんだ！（雄二）」

「……雄二の考え？」

直々と台詞をこなす雄二に便乗する翔子が尋ねる。

「俺は大会で優勝したら「俺は大会で」お前にプロポーズ「優勝したらお

前に」したいんだ「プロポーズしたい」アイラビュー「アイラって誰が

そんな事言うかボケーッ!」

「……雄二（／＼／）」

妙に可笑しいとわかった雄二が叫びだす。要は明久が楽に勝ちた  
いが故にやる作戦  
だったのだろう。

「くたばれッ！（ガッ!）」

「くぺっ!？」

極め付けには雄二の首に攻撃をし、雄二を気絶させたのであった。

「明久、二人を連れてきたよ」

「ありがとう。それじゃ秀吉、後はよろしく」

「うむ、了解じゃ」

ようやく会場に到着した秀吉とムツツリー二を誘導させた一騎が明久を呼ぶ。そして

明久は秀吉に任せようとした。

「……………雄二？」

雄二の気絶により、少し動揺してしまう翔子。だが、

「あー、あー。俺は大会に優勝したら、お前にプロポーズをするんだ!そしてその暁

には結婚しよう!愛してる、翔子——————ッ  
!——」

秀吉は気絶してる雄二の代わりに声真似をして告げた。一方明久は気絶中の

雄二を奇妙なボーリングをさせつつ、誤魔化した。

「……………雄二、私も愛してる……。よって、私の負け」  
「代表ッ!？」

翔子の一途な台詞で完全に戦ってしまう優子。これはこれでよしとすべきである。

「ふはははは！！これで最強の敵は封じ込めた！」

（明久、もう君は悪魔と化してるよ・・・）

明久の叫び声に思わず呆れる一騎。だが戦いは続く。

「残るは君だけだ！木下優子さんッ！！」

「ひ、卑怯な・・・！ただアタシ一人でも吉井君には負けないわよ！行くよ——試<sup>サモン</sup>獣召喚っ！！」

けど優子は諦めてはいなかった。自分の召喚獣を換び、体勢を整える。

「ふふっ、それはどうかな！この科目が保健体育だった事を恨むんだね！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（コクッ）」

明久も体勢を整え、召喚獣を換び出そうとする。

「行くぞ！僕の最強の召喚を見せてやる！！新<sup>サーモン</sup>巻鮭ッ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・試<sup>サモン</sup>獣召喚（ボソッ）」

すると、フィールドからはムツツリー二の召喚獣が姿を現した。

「見たか！必殺代理召喚！・・・破れるものなら破ってみろ！」

「え！？それ土屋君の・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・加速」

そして後ろからムツツリー二が密かに呟き、自分の召喚獣を行動

させた。

「ほ、本当に卑怯——きゃあっ!!」

最後に優子の召喚獣に一撃を与え、止めを刺した。

「よしッ!! 僕と雄二の勝利だッ!」

「.....。先生、反則です」

『はい、ただいまの勝負ですが・・・』

(やっぱりダメ? 仕方ないな・・・)

今の光景で優子が司会の教師に告げる。すると明久は何か打つ手はないかと考えた。

「霧島さん、僕らの勝ちでいいよね?」

「.....それは」

そこで交渉をすべく、明久が翔子に尋ねてみる。しかしどうも納得いかない様子だ。

「.....うつつ.....。ぐへッ!!」

雄二が起きそうな所を明久が再度気絶させ、

「愛してる、翔子——————ッ!! (秀吉)」

後ろから秀吉が声真似をした。よって、

「……私達の負け。棄権します」  
「代表ッ!!」

翔子は負けを宣言した。

『……わかりました。坂本・吉井ペアの勝利ですッ!』

（本当にこれでよかったのだろうか……？妙に切ないような……）

後ろで見てた一騎が全てが抜けそうな気力で明久を見つめていた。

「明久、なかなかの機転であつたな」

「…………作戦勝ち」

「ありがとう。二人の協力というよりは一騎も含めての協力があつてこそだよ」

幸い、自分の身を犠牲に晒した甲斐があつたのだろう。過去の罪滅ぼしのように。

「所で雄二をあのままにしておいて良いのか？」

「え？別にいいんじゃないの？」

すると秀吉が心配するかのよう明久に尋ねてきた。

「そうか、明久がそういうのであれば良いのじゃが……」

「雄二もたまには素直になるべき——」

「霧島が雄二に一服盛って持ち帰ろうとしておつたので心配になつての」

その瞬間、

「きッ、霧島さん！雄二には決勝もあるからクスリは許して！！」

明久は大慌てで翔子を止めた。一方一騎は、

「全く明久も賑やかだね。ねえ木下さん、今の試合どう思う？」  
「……ッ！！」

優子に今の試合についての意見を聞こうとした。すると優子は突然驚くように顔を後ろに向いてしまう。

「……………あの、話はその……………明日にして欲しいの……………（／／／）」  
「……………？」

優子はそのままだ顔を赤くしながら去っていった。

「どうしたの言っのじゃ……………？姉上は……………」

それを見た秀吉は何が起きてるのかさっぱり分からない状態になっていた。

「明久、今日という今日はお前をコロス」  
「あはは、やだなあ雄二。目が怖いよ？」

廊下を歩いていると、雄二が嫉妬する目で明久を睨む。この後、クスリを吐かせて

冷水につけたら何とか正気を取り戻したので一安心だとか。

「だいたい雄二が霧島さんに作戦を読まれたのがいけないんじゃないか」

「ぐっ・・・それをいわれると反論出来ん・・・」

「いや、誰かがそれを伝えた可能性がある」

「どういう事？」

一騎の推測で明久は思わずひょんとした顔になる。

「恐らく、この清涼祭を妨害しようと目論む人物や常夏コンビという可能性がある」

「そうか。それを盗み聞きした奴が翔子達に教えたという事も十分に有り得るな」

説明を聞くと、雄二が腕を組みながら頷く。

（この学園には俺とルドルフ以外の霊体はいない……。だが何かが可笑的い・・・）

「所で姫路や島田は教室にいるのか？」

「え？まだ確認してないけど・・・」

「多分、彼女達はいるはずだよ？」

雄二が聞くと二人はそれぞれの反応を述べる。

「多分そろそろ仕掛けてくるはずだと思っんだが・・・」

「何を？」

「いや、ちよつとな」

俯く雄二が気になる一騎は少し心配してしまう。恐らくこのまま何も起きてなければいいのだが。

「・・・・・・・・・・雄二・・・！」

「ムツツリーニか。何かあったのか？」

するとムツツリーニが大急ぎでこちらにやってきて、こう告げた。

「・・・・・・・・・・大変、ウェイトレス達が連れて行かれた」

「「「ツ！！！！」」」

## 第六十四問 蘇る残酷な過去？

「・・・・・・・・・・・・・・・・ウェイトレス達が連れて行かれた」

「ええッ！？姫路さん達が！？」

ムツツリー二の突然の通達で一氣に場の空気が静まり始めてしま  
う。

「これは俺達がない間に起きた出来事だな・・・」

「ああ。一体誰が姑息な手を使ったのだろうか・・・」

腕を組みながら一騎とアルフが呟く。これは余程の事件なのだろ  
う。

「やはり俺や明久に一騎と直接やり合っても勝ち目がないと考え  
たか。当然

と言えば当然の判断だな」

（僕だからこそ知ってる事だけど雄二は勉強サボり続けた分身体  
を鍛えまくって

たからなあ。そう敵うヤツなんていない・・・）

「ってそんな事より姫路さん達は大丈夫なの！？どこに連れてか  
れたの！？」

相手はどんな連中！？」

すると明久は慌てるように雄二に答える。女子達が危険に晒され  
たのであれば

慌ててしまうのだろう。

「落ち着け明久。これは予想の範疇だ」  
「どういう事？」

少し頭の中で考えてる雄二がはつきりと告げる。理由となる過程はこの通りである。

「もう一度俺達に直接何か仕掛けてくるかまた喫茶店にちよっかい出してくるか。」

そのどちらかで妨害仕事を仕掛けてくるとは予想出来たからな」  
「なんだか随分物騒な予想してたんだね」

過言でもあるが、本当に妨害仕事を練ってるのなら本当に女子達を誘拐したのだろう。

（確かにウェイトレス達を連れ出されたら売り上げに影響が出るだろうけど、これは

これで結構洒落じゃ済まないようだな・・・）

「一応、引つかかる事が随所にあつたからな」

「・・・・・・行き先はわかる」

「何これ？ラジオみたいだけど」

明久はムツツリー二が持つてる何かに疑問に思った。するとムツツリー二は、

「・・・・・・盗聴の受信機」

「オーケー。敢えて何で持つてるかは聞かないよ」

即答するように答えた。明久にとっては可笑しいと思うがそれは

直感である。

「さて場所がわかるなら簡単だ。かるくお姫様達を助けるとし  
ましようか。」

王子様？」

雄二がニヤけるように二人に尋ねてくる。一瞬ドン引きするよう  
な反応だったが、  
ここは粘って聞いてみる事にした。

「その目つきは気に入らないけど今日は雄二に感謝しておくよ。  
姫路さん達に何か

あったら正直召喚大会どころじゃないからね」

「・・・それが向こうの目的だろうがな」

「え？」

（多分、誰かが仕掛けた罠の確率も有り得る・・・）

今の雄二の言葉で少し表情を変えるようにアルフが思う。彼も相  
当警戒してるだろう。

「とにかく、まずはあいつらを助けだそう。ムッツリーニ、タイ  
ミングを見て裏から

姫路達を助けてやってくれ」

「・・・・・・・・・・わかった（コクッ）」

「雄二、僕らはどうするの？」

役割を与えた雄二に明久が問いかける。すると雄二はこう答える。

「王子様の役目は昔から決まっているだろう？」

「王子様の役目？」

「お姫様をさらった悪者を退治する事さ」

（・・・？なんだか妙な寒気がしたような・・・）

一騎が身震いをするように歩いていった。多分、譲れない何かがあるのだろう。

「さてどうする？坂本と——吉井だったか？いや確かもう一人いたはずだな。」

そいつら、この人質を盾に呼び出すか？」

「待て、吉井ともう一人は知らないが坂本は下手に手を出すとマズい。今はあまり」

聞かないが、中学時代は相当鳴らしてたらしいからな」

「坂本ってあの坂本か？」

「ああ、出来ればことを構えたくないんだが・・・」

『気持ちわかるがそうもいかないだろ？（ザザ・・・）依頼は  
その3人を

動けなくする事なんだから』

「雄二、この連中って」

「ああ。黒幕に雇われたそこらのチンピラだろうな」

「中にはさっきの奴らもいるみたいだな・・・」

受信機から聞こえる声を聞く3人。すると・・・、

『お、お姉ちゃん・・・（ザッ・・・）』  
『アンタ達！いい加減葉月を放しなさいよ！』  
『お姉ちゃん！だってさ！かわいいーッ！』

『『ギヤははははッ！！』』

「この声は葉月か・・・。奴ら、性懲りもなく弄んでやる・・・」

「アルフもこの様子の話し声をちゃんと聞いていた。

（吐き気すら覚える外道の声が7人分って所か・・・。上等だ、  
今すぐ黙らせてやる）

明久が怒りの逆鱗に触れかかろうとすると、

「待て明久。勝手に行動するな。気持ちはわかるがまずは人質救出が最優先だ。

ムツッリーニがうまくやるまで待っている」

「・・・・・・・・わかったよ（ドスッ）」

雄二が止めに入った。すると明久は仕方なく我慢する事にした。

「今ここで飛び掛ったら分が悪い。タイミングを誤ったらダメだ  
明久」

「一騎もちゃんと考えて行動してね・・・」

一騎も一言入れるが、明久は納得いかないようだ。

「・・・・・・・・・・灰皿をお取替えします」  
「おう。で、このオネーちゃん達どうする？ヤッちゃっていいの  
？」

「だったら俺はコツチの巨乳ちゃんがいいなー！」  
「あつ、ズリーッ！！それなら俺2番ね」

現在作戦を遂行しているムツツリー二は、後ろに捕らわれてる女子達をこっそりと影で窺った。

「あ、あのっ！葉月ちゃんを放して私達を帰らせて下さい！」

捕まってる瑞希が連中どもに要求する。しかし、

「だつてさ。どうする？」

「それはオネーチャン達の頑張り次第だよな？（グイッ）」

「やつ！さ、触らないで——」

連中の一人が瑞希の手を強引に掴み始めた。瑞希は必死で声を掛けるが、無意味だった。

『ちよつと！瑞希を放しなさいよっ！』

『（ドタッ）あーもう、うっせえ女だなッ！』

『きゃあっ！！』

受信機からは美波の悲鳴が大きく響き渡った。今の反動で後ろのテールや

おろか、椅子などの物が当たったかのような音も大きく聞こえてきた。

「……………ッ！！！！（ダッ！）」

「か、一騎ッ！！」

———その時、一騎の中の何かがトンだ……。。

「一騎！・・・くそッ！」

勢いでダッシュする一騎につられて明久も一緒にダッシュした。

「おじゃましてーすっ！！（バンッ！）」

やがて、明久と一騎は勝負に入ろうとした。

「よ、吉井君？」

「一騎・・・・・・・・・・」

突然の訪問で一瞬言葉を失う瑞希と美波。明久は平然とした顔だが、一騎は暗い

感じの顔をしている。

「ハア？お前誰よ」

連中の一人がわけのわからない状態で話す。

（それじゃ、まずはこの人からいこうか）

「それでは、失礼して・・・（ギユ・・・）」

明久は連中の一人の手を掴み、

「死にくされやああッ！！（めピュッ！！）」

「ほごああッ！！」

懇親の一撃を大事な所へぶち込んだ。勿論、そいつは泡を吹きながら倒れた。

「てつ、てめえ！ヤスオに何しやがるッ！！（ガッ！）」

倒れた男の仲間の一人が明久の頬に殴った。だが・・・、

（痛ッ・・・。———けど、それがどうした！！）

「おらあッ！！（ガッ！）」

「ごぶあッ！！」

目で合図をする明久につられ、一騎がハイキックをお見舞いした。

「・・・さて、ここからはお前らがやれ」

今は何も出来ないアルフが二人に告げた。ここからは本気である。

「……………テメエら、よくも美波に手えあげてくれたな。（ギロツ…………）」

全員ブチ殺してやる……………」

更に横でのた打ち回る男を踏みながら告げる一騎。今の一騎は全てが

恐れる悪鬼の目になっていた。

「一人残らず全員なツ！！」

「コイツ、吉井って野郎だ！」

「どうしてここが！？」

明久の叫び声に思わず驚いてしまう連中ども。

（やったのはどいつだ？美波の近くにいた奴か？まあいい…………、わからないなら

全員殴ればいいだけだ！！）

「もう一人は知らねえがとにかく来てるなら丁度いい！ぶち殺せツ！！」

残った連中どもが二人に殴り掛かろうとした。一騎は喧嘩慣れしてるが、この人数

では流石に歯が立たない。鼻面におもいつきりぶん殴られチカチカと明滅するが、

鋭い痛みを堪え、こちら相手の鼻面ごと顔面をぶん殴った。しかし…………、

「たった二人で調子くれてんじゃねえよ!!（バキッ!!）」  
「舐めてんのかッ!!」（ドゴッ!!）」

向こうは大勢の人数であり、一騎と明久では到底倒しきれない。  
今の彼らには

逃げるという選択肢はない。進む血を拭い捨て、尽かさず殴り飛ばす。

「・・・・・・・・次は誰だ」

だが、一騎はこの程度では済まされなかった。相手の顔面を持ち上げ、地面に

叩きつける動作までしている。これほどの代償を背負いながらも躊躇なく連中どもを殺す勢いで立ち向かっている。

「お前ら全員・・・・絶対ブツ飛ばす・・・・・・・・!!」

明久も負けずとも言わんばかりに応戦していた。そして、

「やれやれ、この阿呆が。少しは頭を使って行動しろって——  
——のッ!!（ゴッ!!）」

ここでもようやく雄二が入ってきたようだ。

「雄二ッ!!」

「貸しイチだからな？」

「で、出たぞ！坂本だッ!!」

「坂本まで来てたのかッ!？」

雄二の増援により、連中どもが更に驚く。すると、

「坂本よお。このお穰ちゃんがどうなってもいいのかア？」

連中の一人が葉月を捕らえながら雄二に宣告する。

「いいか？おとなしくしてろよ？（クイツ）さもないとヒデエ傷  
を――」

「……………負うのはお前（ガッ！！）」

「あがぁッ！！」

連中の一人が喋ろうとした所をムツツリー二が灰皿で気絶させた。

（確かに宣言通り……。有言実行とは見上げた根性だ）

「やるな。あの動き、忍者のようだな……」

ムツツリー二の攻撃で関心するアルフは、周りに不審な物がないかと部屋中を見渡した。

「お、お姉ちゃん！お姉ちゃんっ！」

「葉月っ！良かった……………。怖かったよね…………？（ガバ  
ッ…………）」

解放させて泣き出す葉月を抱きしめる美波。姉妹同士の感動の再会だ。

「……………この程度じゃ、俺の怒りは収まらない……  
…………ッ！！」

でも、一騎はまだこの状態である。まだ、何か満足させない。

第六十五問 蘇る残酷な過去？

今、一騎達は女子全員を救出するために黒幕に雇われた場所へと乗り込んでいる。

（・・・とりあえずは人質何人かは救えたか。後は残った人質を助けるだけだが・・・）

アルフは今の状況を把握しつつ、連中どもの身元を調べてる。しかし、

（・・・・・・・・？コイツら、何かになりすましているのか・・・？）

よく見たら何か可笑しい点に気がついた。それはアルフにしかわからない事なのだろう。

「吉井君っ！（タッ）」

（もしや——これはチャンスかッ!？）

一方、同じく解放された瑞希が明久の元へと走ってくる。

「姫路さんっ!」

明久はそれに体様出来るように準備をする。キリッとした顔で。

（さあ、ドンと来いッ!—!）

所が・・・、

「吉井い！！ヤスオをよくもッ！（ゴッ！！）」  
「ぐぶあッ！！」

ドンと来たーッ！！

「・・・・・・・・・・ッ！！」

「な、何だコイツ？血の涙を流してるぞ・・・？」

（よくも！よくも千載一遇のチャンスをおおッ！！）

連中の一人に殴られ、妨害された明久は血の涙を流しながら恨み出す。

「姫路さん、ちょっと待ってて。コイツをシバき倒した後にもう一度――」

「姫路に島田！先に学校に戻ってろ！」

「雄二ツ！！キサマまで僕の邪魔をするのか！！」

何とか明久が瑞希を待たせようとするが、雄二に遮られてしまった。

「それにしても丁度いいストレス発散の相手が出来たな！生まれてきた事を後悔

させてやるぜええツ！！」

そして雄二は全てを支配する暗黒の帝王へと変化したのであった。

「こ、これが坂本か・・・！！」

「悪鬼羅刹の噂は本当だったのか・・・」

連中どもが弱音を吐くように呟く。翔子に追い詰められてる雄二と喧嘩をしよう

だなんて、この連中どもにはご愁傷様としか言いようがない。

「美波ちゃん、吉井君。早く行きましょう！」

「わかったわ」

「・・・仕方ない。でも今は秀吉を解放させないと！」

「その仕事はアキに任せる。ウチらは一刻も早くここから出ないと・・・」

美波が言つと、明久はすぐに秀吉を方へと向かった。

「お姉ちゃんっ！早く行くですっ！」

「そうはさせねえな！」

葉月が糸口を見つけたが、連中の一人が邪魔してきた。

「……………邪魔だ（ガッ！）」

「ぐわあッ！」

懐から一騎がやってきて、男の後頭部に裏拳を打ち込んだ。すると、

「丁度いい……………」

「…………へ？」

「これでめえをぶっ潰せる……………」

男のポケットからはスタンガンやナイフなどのものが出てきた。  
一騎はそのうちの  
スタンガンを手にとった。

「さつさと死ねッ！！」

「ひいいい！！」

一騎がスタンガンを振るうと、男は急いで回避した。

（チッ…………、外しやがったか…………）

「…………だが、いまさら遅せえんだよ…………！（ガンッ、ガンッ、ガンッ！）」

「ごふあああッ！！」

だが、一騎は尽かさず男の鼻面ごと顔面をおもいつきりスタンガ

ンで殴りだした。

男の顔の形が変化するように。

「助けてくれえッ！」

「黙れッ！！誰がてめえ如きに助けがくるかよ……！」

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

この光景を見てしまった美波が悲しそうな仕草で絶句してしまう。  
しかしもう遅かった。

「美波を傷つけた恨みを思い知れ……」

「やめてくれ！俺が悪かった！だから——うぐうッ！」

更には男の喉を殴りつけ、ひたすら地面に顔を押し付けた。

[illegible]

死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね

[illegible]

死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね

死ね死ね死ね

死ね死ね死ね死ね」

まるで、殺人兵器のように男の顔を地面に叩き続ける一騎。



10分後

やがて、この行動を繰り返し続ける事10分が経過した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・もうお終いか？っざけんじゃねえッ！！（ガッ！

！）  
「

次は男の顔を壁に叩きつけるように蹴り出した。男は何も喋る事も不可能な状態

へと陥ってしまった。

「一騎！お前何を――」

「アルフ、今話しかけないでくれ。このゴミ野郎をぶっ殺してる所だ・・・」

「もう連中どもは諦めた。だから・・・」

「雄二や明久が許しても、俺が許さない・・・」

アルフが止めようとしたが、一騎には通用しなかった。

「・・・もう、やめてくれ・・・」

「今なんつつた・・・？」

「・・・もう・・・、何もしない・・・から、・・・」

だから、勘弁――がはぁッ！――」

男が衰弱状態で答えようとしたが、一騎は男の腹部を蹴り上げた。もはや彼には

何一つ声が聞こえない。

「・・・・・・一騎」

「美波ちゃん・・・？」

美波の呻き声に瑞希は首を傾げてしまう。彼女は一騎のこの状態が怖がつてるのだろう。

「おるぁッ！（ガッ！）・・・さて、これで終いにしようか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ひiiiiiiii・・・・・・・・・・！」

一騎は地面に落ちてゐるナイフを手に取り、男に向かってナイフを向けようとした。

「・・・・・・・・これでめえは死ぬ。俺の怒りを出させた代償としてな  
！！」

「待って、もう許し——わああああッ！」

ナイフがこちらに向かってくるのを警戒し、男は瞬時に回避した。  
だが、男は既に

衰弱状態。今のままでは到底動けそうもないだろう。

「・・・・・・・・・・もう逃げ場などない。これであの世に送ってやる  
よおッ！——！」

「いやああああああ！！！」

一騎が男の心臓に向かってナイフを突き刺そうとしたその時・・・

「もうやめてッ!」

「・・・・・・・・・・。み、なみ・・・・・・・・?」

美波が大声で一騎を呼び止めるように叫んだ。

「もういいからそれ以上攻めるのはやめて……。そうしたら、その人……。」

死んでしまうじゃない……!」

「…………でも、コイツは美波を……。美波を傷つけた……!」

すると美波は一騎を押さえつけるように後ろからしがみついていた。

「確かにウチを押し倒したのはその人だけど……、だからと言

って殺す事ないじゃない！」

必死で説得をさせる美波の姿は、既に泣いている状態だった。流石に一騎も、

「どうして・・・？どうしてそこまでコイツを殺したらダメなんだ・・・！？」

「殺したら・・・、一騎は逮捕させて退学になってしまうのよ！？」

怖気づいたような表情になってしまう。すると、彼の中の過去が蘇った。

『・・・この子、睦月小学校の児童だけど。人を殺そうとしたよね?』

『やだ、私の子もあんな感じに育って欲しくないわ』

『確かにまだ5、6年生ぐらいだけどこんな問題児がいるなんて正直いやになるわね』

『おい、何でお前は人殺しをしようとしたんだ？』

『何とか言えよ！殺人鬼！』

『やめろ、コイツに関わると俺達まで移っちゃうかもしれないぞ？』

『そうだな！お前なんかに話しかけると虫唾が走るんだよッ！』

そうだった。俺は、かつてある出来事がきっかけで人を殺そうとした。何の恨みもなしに。

それは罪悪感もなければ尊敬感もない。いや寧ろ、立派な犯罪だなのに……。

俺は大切な人を守る——というよりは助けるだけにこんな騒ぎを引き起こしてるなんてな。

幼い頃、初めて美波に出会って友達になって一緒に遊んだりした。それから日本に帰るとなれば別れの言葉を交わした。またいつか会おうってな・・・。

それから月日が立ち、睦月小学校では明久と瑞希に出会った。同じクラスで。

ある出来事のおかげで俺はこんな悪の道へと進んでしまい、教師達には問題児と呼ばれた。そしてそれが何も爽快しないまま小学校を卒業、そして二人とは違う学校へと進学した。中学に入っても、同じ小学校だった子が皆に俺の噂を流し始め出した。その噂は学校中に広がり、俺は友達すら持つ事が厳しい存在になってしまった。

そして中学でも何も得られないまま卒業し、無事に高校へ進学。そして去年は何とか身内が知らない人ばかりで一安心したものの、またある出来事がおきてしまい、俺は再び同じ過ちを犯してしまう。

そのおかげで最初は仲良く話せたが、度々俺が顔を出すと生徒全員は俺との距離を作った。何もかも俺にとっては絶望的だった。

そんな俺に転機が訪れようとした。それが有名な進学校である文月学園。ここならば誰も妙な噂を流す奴がいらないだろうと安心し、そこへ転校した。だが、転校してから一ヶ月半でまた同じ事をやってしまった。せっかく明久と瑞希に、そして一番の仲良しの美波にも再会したのに……。今この場で人を殺そうとしている。何の躊躇<sup>ちゅう</sup>もなく、何の躊躇<sup>ちゅう</sup>もなく、性懲りもなくまた……。でも、今はこうして美波が泣きながらも俺を止めてくれる。ちょっと嬉しいかも。やっぱり、友達一人を傷つけただけで殺そうとするなんて……。俺はどうかしてる。アルフになんてどやされるかな……。

「…………でも」

「でもない……！お願いだからもう……、やめてえ……」

「

一騎はほんの僅かな時間で全ての事を思い出した。すると抵抗しようとして声を掛け

たが、美波が大粒の涙を流し続けていた。

「ウチのためにこんな事しても……、何も得られないじゃない……。」

「こんな事しても、一騎が……いなくなっちゃう……。」  
「……………」

自分の本心が一瞬失ってしまう一騎。今の彼女の言葉はほんの僅かに一途な表現  
が含まれてるのかもしれない。

「……………本当にこれが最後よ。今すぐやめないのなら……」

「……………」

美波は涙を流しながらも必死で一騎に問いかける。すると彼女はこう答える。

「もう、一騎と一緒に話すのをやめるから。そしてこれからは赤の他人同士のつもりでいるから」

この言葉で彼は、何かを停止させた。

「……………わかったよ」

（アイツ、これで正気に戻ったか……）

アルフも少し安心するかのように一騎と見つめた。すると一騎は、

「……………うせる」

「……………はい？」

男に向かって小声で呟いた。

「……………今すぐ俺と美波の前からうせる。でないと——」

「すいませんでした……。うつつう……。……」

一騎から解放させた男は泣きながら去っていった。

「・・・・・・・・・・はあ。・・・・・・・・・・」

「一騎・・・・・・・・？」

「今は一人にさせてくれ。美波達は先に学校に戻っててくれ」

美波が尋ねると一騎は俯きながら答えた。余程疲れ果てたのだらう。

「うん、一騎も早く戻ってきてね・・・」

頷きながら皆で一緒に帰ろうとする美波。すると、

「アキ、何で一騎はあんな感じになったの？」

「美波は知らないんだっけ……。一騎は、ある出来事がきっかけであんな感じになっただ」

「ある出来事・・・・・・・・？」

明久に一つ聞いてみた。明久が悲しそうに答えると美波は胸を当てるように一騎を心配してしまった。

「……………。俺は、いつ…………どろで…………、何を間違っただ…………？」

一人っきりになった一騎が頭を抱えながら一人で呟いた。



## 第六十六問 互いの事情？

誘拐事件が解決され、学校へと戻ってきた明久達。一騎は自分がやってしまった

事を深く反省しつつ今は一人で座り込んで。相当なショックだ。

「アキ、本当に一騎をそのままにしていいいの・・・？」

「一騎がそう言ってる以上、そうしてあげないと・・・」

胸を当てるように一騎を見つめながら明久に尋ねる美波。するとアルフが

咎めるように話しかけてきた。

「アイツには、何か隠し事でもしてるのだろうか・・・」  
「ウチにもわからないわ。思いやがりではないけど一騎には一体どんな

過去があつたのかしら・・・」

・  
・  
・  
・

益々寂しそうな仕草になってしまふ。先程、明久が言ったある出来事が切っ掛け

で一騎はさっきの連中の男を殺しかけたのだろう。

「存外、今頼りになるのはお前だけだな」

「そっか・・・。今の状態だと、アンタが話しかけても意味はないのね」

「ああ。アイツにはアイツなりの事情があるのだからな」

やはり今のままだと明久や雄二、それにアルフが話しても全く無

意味だ。だから

こそ幼馴染である美波が聞くのが的確で冷静に対応が可能である。

「……………瑞希や木下、あと土屋でも意味はないし」

「奴はそういう人間ではない」

「そうね……………土屋が話してもあまり通用しないし」

。（けどウチが話してもどうやって話しかければいいのかしら……………それじゃあ

態度に怠るし……………）

考えてる内に更にやつれてしまう美波。すると、

「一騎、そろそろ行くぞ」

「……………どこに……………？」

雄二が自分の携帯で時間を確認しながら一騎に話しかけた。

「ババアの所にだ。それと明久も一緒に来い」

「え？僕も……………？」

一瞬ひよんとした顔になる明久。雄二はその内容を説明する。

「実は3回戦でお前らが戦ってる時、ババアと話をした後に『後でまたここに

来な』って言われてな。まだ話が終わってないという事情でな」  
「話ねえ……………」

（……………学園長が俺達に話を……………？）

すると一騎は一度、何かを思い出すような顔で首を傾げた。

「ダメだよ雄二。一応目上の人だし、用事があるならきちんと前もって出向かないと」

明久が水を飲みながら雄二に言う。しかし、

「用事もクソも・・・この妨害の原因がああのババアにあるはずだからな。事情を

説明させないと気が済まん」

雄二が拳を握りながら学園長を蔑む。一応学園長も彼らをなめたのだから。

「ババアに原因が——えええッ!? あ、あのババア!! 僕らに何か隠してた

のか! 何て不名誉なッ!! (ガタッ!)」

ふと気がついた明久は学園長がまるで争いの元凶であるかのように憎み始めた。

「ちよつとアキ! 静かにしなさいよッ!! 一騎が唸ってるじゃないッ!」

「・・・いいんだ美波。これはこれで好都合なのかもしれない」

美波が叱ると一騎は苦笑いしながら弁明する。無邪気な表現をするのも、一騎なりの解釈の仕方だろう。

「そろそろ行くぞ一騎。立てるか？」

「…………大丈夫。これくらい——うわぁッ!？」

「無理しないで。まだ不安定な表情をしてるし」

一騎が立ち上がろうとすると、足がガクツツと挫きそうになった。

美波は一騎を

支えるように手を貸した。

「…………ありがとう、美波」

「いいのよ。アキ、坂本、先に行つて。ウチは一騎を支えながら連れてくから」

「わかった。頼んだぞ、島田」

頷きながら返事をする雄二は明久と一緒に一足先に学園長の元へ向かった。

「俺も行くとするか」

「そうか。アルフも一緒に行つた方が良さそうだな…………」

目を瞑りながら一緒に同行するアルフ。学園長も一応アルフの存在がわかつてる

ので行かなきゃいけないような状況だ。

「あのババアも俺も事は見えてる。だから聞きたい事があるんだ」

「そつか。だったらあんまり味な真似をしないようにな…………」

「早く行きましょう。アキ達を待たせないようにしないとね」

美波に支えながらも、一騎とアルフは学園長の所へ向かった。



「ここで手を離していいよ」

「随分またせたようだな一騎」

数分後、一騎は何とか明久達の所へ辿り着いた。美波とはここで別れ、ようやく

学園長室へ入ろうとする。

「さて、さつさと乗り込むぞ」

「今に見てるよ・・・!」

コンコン・・・

・、  
雄二がドアにノックをし、学園長の指示がくるのを待つ。だが・・

バタッ!!

待つ余地もなかった・・・。

「…………やれやれ。わざわざ合図を待ってたのに、随分とご挨拶だねえ。」

ガキどもが

「来たぞババア」

「出たな！諸悪の根源め！！」

「そろそろ話を聞かせて貰おうか。学園長」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？」

すると学園長が見下すような目で一騎達を見つめる。それに対して雄二は、

「黒幕ではないだろうが、俺達に隠し事してるのは充分な裏切りだと思っがな」

腕を組みながら学園長に軽く説明を済ませる。

「ふむ…………、やれやれ。賢い奴だとは思っていたけど、まさかアタシの

考えに気がつくとは思わなかったよ」

「初めからおかしいとは思ってたんだ。あの話だったら何も俺達に頼む必要はない。」

もつと高得点を叩き出せる優勝候補を使えばいいからな」

更に雄二が事情を告げるように答えてくる。無論、雄二の考えなら見抜くはずだ。

「あ、そういえばそうだよな。学園長が優勝者に後から事情を話して譲ってもらえばいいだけだし」

「気難しい事ではないが、確かにそうだよな……」

言われて見たら細かい事だが、纏めたら案外理解出来る内容である。

「そうだ。わざわざ俺達を擁立するなんて効率が悪過ぎる」

「話を引き受けてきた教頭の手前おおっぴらに出来ないとかは考  
えなかったのかい？」

学園長が追求してくるように雄二に問いかける。やたら気にして  
たのだらう。

「それなら教室の補修を渋ったりはしないはずだ。教育方針なん  
てものの前にまず

生徒の健康状態が重要なはずだからな。教育者側ましてや学園  
の長が反対する

なんてありえない」

「つまり僕らを大会に出場させるためにわざと渋ったって事？」

「そういう事になるな」

（でもそうしなくても色々と対策を練ってるはずだが・・・）

不審な事だと感じた一騎が頭の中で整理をする。それだったら学  
園長は最初から

学校側で教師達に掛け合ってそれから教室を改修を心掛けるはず  
だ。

「ここで俺がババアに一つ提案をしたのを覚えてるか？」

「提案？えーっと」

「科目を決めさせろってヤツかい。なるほどね、アレでアタシを  
試したってワケかい」

学園長が片目を瞑りながら言葉を返してきた。雄二は頷くようにこう答える。

「ああ。めぼしい参加者を全員に同じような提案をしてる可能性を考えてな」

「そうか。俺達がやらなくても他の生徒達ならしてくると思える考えか」

雄二の言った言葉で手をポンツと叩くように一騎が思いつく。一種の閃きである。

「もしそうなら俺達だけが有利になるような話には乗ってこない。だがババアは

提案を呑んだ」

（ということは他の人ではなく、僕らが優勝しないと学園長は困るって事か）

「他にも学園祭の喫茶店ごときで営業妨害が出たり、俺達の対戦相手に作戦を密告

する奴がいたりと色々な。何より姫路達を連れ出したのが決定的だった。ただの

嫌がらせならここまでではない」

雄二は少し内容を厳密にするように説明をした。だが、ここまでFクラスを妨害

しようとするような魂胆は全く得られないが向こうも手段を選ばなかったのだろう。

（確かに、アレは本当に危なかった。ムッツリーニが盗聴器を仕掛けてくれなかった

らどうなってたことやら・・・）

先程の出来事を振り返る一騎。もしムッツリーニが盗聴器を仕掛けてなかった

ら——いや、ムッツリーニがいなかったら本当に危なかったのだろう。

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったか・・・。すまなかったね」

すると学園長は謝罪をするような台詞を告げ、一騎達に謝った。

「アンタらの点数を見て問題ないと最初はかんがえていたんだろうけど、決勝まで

進まれて焦ったんだろうね」

更に詫びの言葉を喋る学園長。年下の彼らにきちんと頭を下げる礼儀をするとは

意外と責任感の強い人なのかもしれない。

「さて、今度はそっちの番だ」

雄二は次に事情を話す権利を学園長に譲った。一応、学園長も何か言いたいのだろう。



## 第六十七問 互いの事情？

「さて、今度はそっちの番だ」

「はあ・・・、アタシの無能を晒すような話だから出来れば伏せておきた

かったんだけどね・・・。アタシの目的はペアチケットなんかじゃないのさ」

溜め息を出しながら学園長が話しをする。そして学園長は重要な事を

説明しようとした。

「アタシには企業の企みなんてどうでもいいんだよ。目的はもう一つの

賞品――」

「確か『白金の腕輪』だろ」

「あ、そういえばさっきその事に関しての紙があっただった」  
「特殊能力があるとか・・・」

明久は自分の上着のポケットから白金の腕輪の能力説明の紙を取り出した。

「実は、元々それは二つある事になってたけど、ある事情で一つにまとめて

しまっただよ」

学園長が説明の紙に指を刺しながら答える。元々白金の腕輪は二種類あり、一つは

点数を二分にして二体の召喚獣を同時に換び出せる同時召喚型。

もう一つは教師

の代わりに召喚フィールドを作る事が出来る代理召喚型で、点数に応じて召喚

可能範囲が異なり召喚の科目はランダムになっているとか。

「なるほど……。こういう能力なんだ」

「それを一つにまとめたというわけだな」

頷き合いながら言葉を紡ぐ明久と一騎。すると学園長は話を続けた。

「そうさ。その腕輪をアンタらに勝ち取って貰いたかったのさ」

「僕らが勝ち取る？回収して欲しいわけじゃなくて？」

明久が問いかけると、

「あのな……。回収だったら俺達に依頼する必要ないだろう？そもそも回収なんて

極力避けたいだろうし。な」

「アンタは本当によく頭が回るねえ……」

雄二が簡単な補足説明を告げた。学園長も流石にこの頭の回転には追いつけないだろう。

「出来れば回収なんて真似はしたくない。新技術は使ってナンボだからね。」

デモンストレーションもなしにしたら、新技術の存在自体を疑われる事になる」

「それで何で手に入れるのが僕らじゃないとダメなんですか？」

手に入れる理由を明久が尋ねる。すると、

「・・・・・・・・欠陥があつたからさ」

「欠陥・・・・ですか・・・・・・・・？」

学園長が欺くように告げた。一騎もそれに対して驚くように答えた。

「その欠陥は俺達なら問題ないのか？」

「そうさ。アンタ達が使うなら暴走せずに済む。不具合は入出力が一定水準を

超えた時だからね。だから他の生徒には頼めなかったのさ」

（つまり、その生徒の点数の限界があるのか。だったら使用出来る人が限られてる

のか・・・・）

一騎が自分なりに推測しながら考える。今の学園長の言葉通り、かなりのデメリットが存在する事になる。

「なるほどな。得点の高い優勝候補を使えないってわけだ」

「えーっと、つまり・・・・？」

「アンタらみたいな『優勝の可能性を持つ低得点者』が一番都合がいいってわけさ」

「よくわからないけどこれって褒められてるのかな？」

「いや、お前らはバカだと言われてるんだ」

二人で相談し合うと明久は不祥事に、

「何だとババアッ！」

と叫んだ。それに対して雄二は「説明されないとわからない時点で否定出来ない」と

思うが・・・」と呟いた。

「召喚フィールド作成はある程度耐えられるんだけどねえ・・・。  
同時召喚では

現状のままだと平均程度で暴走する可能性がある。残念ながら  
白金の腕輪は一つ

しかないからこれを吉井が持つて欲しい」

「雄二、一騎。これは褒められてるんだよね？」

「いや、バカにされてる。物凄い勢いで」

「もはや、あの婆さんは俺達の言葉なんて無視してるよ」

更に話し合っていると明久は、

「何だとババアッ！！」

「いい加減自分で気付け！」

と叫んだ。雄二もツッコみを入れるように叫ぶ。ぶっちゃけ、ただの八つ当たりである。

「そうになると、俺達の邪魔をしてくるのは、学園長の失脚を狙ってる立場の

人間——他校の経営者とその内通者といった所か」

「雄二、そうやって僕を会話から置き去りにするのはやめて欲しいな？」

ヒヨンとした顔で明久が言うと、

「やれやれこのバカが……。俺達の邪魔をするって事は腕輪の暴走を阻止されたら

困るって事だろ？そんな学園の失墜を狙うヤツなんて生徒をうちにとられた他校

の経営者くらいだろうが」

雄二が振り向きながら説明をする。

（ああそういう事か。雄二も意地が悪いなあ。きちんと順を追って話をしてくれないと）

「ご名答。身内の恥を晒すみたいだけど隠しておくわけにもいかないからね。

おそらく、一連の手引きは教頭の竹原によるものだよ。近隣の私立校に出入り

してたって話を聞くし、まず間違いはないさね」

「それじゃ、常夏コンビとか例のチンピラとかは」

「教頭の差し金だろうな協力してる理由はわからんが」

（さっきの連中は、教頭による差し金ではないな……。一体誰がこんな真似

などを……）

学園長が言い終わると、アルフが明らかに変だと感じる。多分さっきの連中達は

誰かの差し金なのだろう。

「うーん……。あのさ、コレって——かなりマズい話じゃない？」

「そうだな。文月学園の存続が懸かってる話になるな」  
「これで、生徒全員——いや、教師達までに知られたらな・  
・・」

相当深刻な状況になってしまふ。すると雄二は、

「あつ、でも最悪優勝者に事情を話して回収したら——残  
念ながら

そうもいかない。決勝戦の相手は・・・」

対戦表の紙を出し、決勝戦の相手を確認する。すると、

「常夏コンビ・・・！！！」

「やはりアイツらか・・・」

案の定、最後の相手は常夏コンビだった。

「そうだ。やつらは教頭側の人間だ。嬉々として観客の前で暴走  
を起こすだろう」

「悪いがアンタ達には何としても優勝してもらうしかないんだ  
よ」

「学園長、質問です」

「なんだい？」

ここで明久が学園長に一つ質問を伺った。

「腕輪の暴走って総合科目で平均点にいかねければ起こらないん  
ですか？」

「そうさ。一つや二つの科目が高得点でも、その程度なら暴走は  
起きないよ」

「そうですか。それは良かった」

明久は安心するようにホツとする。彼が暴走を引き起こしたら洒落にならない。

幸い（？）明久が総合科目で点数が超えない限りは問題ないようだ。

「二人とも。聞きたい事は聞けたし、もう戻ろう」

「そうだな。放課後の売り上げの確認を済ませた後にすぐ撤収する。帰ってやる

事もあるし——明日も早いしな」

「それじゃ、用が済んだらさっさと自分達の教室に戻りな。アンタ達、明日は頼んだよ」

これで、学園長との事情演説が終了した。

そして清涼1日目が幕を下ろし、Fクラスでは売上金を確認する事にした。

「売り上げはどうだ島田？」

直ちに計算を済ませようとする美波に問いかける雄二。すると、

「凄いわ。経費を足し引いても、システムデスクは買えるくらいよ」

美波は喜ぶように皆に告げた。1日で相当稼げたのだろう。

「本当に！？それは凄いよ！」

「・・・何だ？この驚愕の売り上げは・・・？」

雄二が売り上げ金が書かれてるノートを見ながら呟く。その理由は、

「何々？『ムッツリーニ商会豪華写真集Aセット500部完売』」

「・・・・・・清涼祭、限定版」

ムッツリーニが写真を豪華使用にしていたので決行儲けたのだろ  
う。

「ま、とにかく今日は成功したってわけだ」

「確かに、これなら設備を向上出来るな」

「バカなお兄ちゃん凄いですっ！良かったですね！」

「ありがとう葉月ちゃん。これも葉月ちゃんが手伝ってくれたお  
かげだよ」

葉月に褒められ、嬉しい表情になる明久。一応彼女にも礼を言う  
べきだ。

「この売り上げも、吸着力抜群のウェイトレスのおかげだからな」

「坂本・・・ッ！それだけは・・・！」

すると美波が立て箆もるように怖気づいてしまう。その後、「・・・  
・・・一騎に

褒められた方が嬉しいのに・・・」と蚊が鳴くような声で呟いた。

「・・・アンケート、集計出来た」

「やっと結果が出るか・・・」

ムッツリーニはウェイトレス人気アンケートの集計が完了し、発表しようとする。

アルフも楽しみしてるような雰囲気を表してるようだ。

「……………本日の人気ナンバーワンウェイトレスは

」

## 第六十八問

### ウェイトレス人気アンケート結果発表（前書き）

読みたい方から読んでも構いませんのでどの結果が面白いのか自由に比べてみて下さい。

第六十八問

ウェイトレス人気アンケート結果発表

????ルート

『優勝

あきちゃん

(とある客の事欠かない声

援) こんな可愛い娘

いたっけ?』

「「「「「「「「「「「」

「あきちゃんって・・・」

この結果に言葉も出ない皆。一騎は辛うじて言葉を紡いだ。

「・・・私が一番になりたいとは言いませんけど・・・」  
「・・・食膳としないこの気持ちは男にぶつけたらいいの・・・」  
「？」

横では二人揃ってがっかりとした体勢で呟く瑞希と美波の姿が。

「（ポンツ）良かったな、明久。一番じゃないか」  
「嬉しくなーいッ！！」

雄二に励まされたが、全く達成感が得られない明久であった。こ  
うして、清涼祭

1日目が幕を閉じた。





『優勝

姫路瑞希

（とある客の事欠かない声援）

セクシー！』

「——ッ！？本当ですか！？」

結果が出て嬉しそうに反応する瑞希。これは結構効果抜群だったのだろう。

「悔しいけど似合ってたもんね、チャイナドレス」

「綺麗なお姉ちゃん、凄いですっ！」

「やっぱり、俺は瑞希が一番って予想したぐらいだな」

「アルフは相変わらず瑞希の料理が気に入ったぐらいだな」

関心するアルフに便乗するように一騎が励ます。すると明久も瑞希を労うように答える。

「おめでとう、姫路さん。とっても似合ってるよ」

「ありがとうございます、吉井君」

明久が励ますと、につこりと礼を告げる瑞希。相当嬉しい雰囲気なのだろう。

「それで、お願いがあるんですけど・・・」

「？何、お祝い兼ねて何でも聞くよ」

すると瑞希が照れるように頼みを告げる。

「折角だったので、残った食材で私も胡麻団子を作ってみたんですけど。」

良かったら食べて貰いますか？」

（！？すっかり忘れてたッ！）

明久はさっきまでの一騎の言葉を思い出す。これは地獄絵図になりそうだ。

「え・・・、い、いや・・・それは・・・」

「そりゃいい。なんせお祝いだしな！」

「え？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・遠慮なく行け」

「えええッ!？」

雄二とムッツリーニが明久の手を？み、生け贄の裁断を下そうと  
していた。

「何だよ二人とも、折角のお祝いなんだから皆で「食べるよ!」  
むぐううう

ああああ・・・ッ!！」

この後、瑞希の作った胡麻団子はアルフが全て食べつくしたとか。  
こうして、

清涼祭1日目が幕を閉じた。

美波  
ルート

『優勝 島田美波

ぺったんサイコー!』

(とある客の事欠かない声援)

「え！？本当に！？」

結果を見て驚くように言う美波。これは予想外の結果だ。

「おめでとうございます、美波ちゃん」

「すごいですっ！一番ですっ！」

「ありがとう、二人とも」

瑞希と葉月に励まされ、凄く元気になる美波。彼女も最初は恥ずかしがってたけど

今となればそれを忘れてるようだ。

「おめでとう美波」

明久も美波に励ましの言葉を入れる。そして続きの言葉を告げようとした。

「すらっとした脚がチャイナドレスに似合ってるし、更にすらっ

とした胸が

よりチャイナドレスに「そこはすらつとしてなくていいのよ！」  
あああああ！

僕の背負ってしちゃいけない物が妙にすらつとした感触「はあッ！！！」

ああああッ！！（ゴキンッ！！）

所が、それが恐怖のどん底へと変化したのであった。

「まあまあ。それくらいにしてやってよ美波」

「一騎、今ウチにとってのプライドが傷ついたからそれを抹消させるために――」

美波が明久の処刑の続きを開始しようとすると一騎がこう答える。

「俺は、美波のチャイナドレス姿・・・、とっても似合ってると思うけど」

「・・・・・・・・・・！（／＼／＼）ちよつと一騎！？それ本気で・・・！？」

「・・・・・・・・ああ、・・・・・・・・本気だよ？それに、すっかり元気になつたし」

「お前はアイツの事を一途に思い続けてるようだな」

「お前には言われたくない・・・」

顔を赤くしながら答える一騎。さっきの誘拐事件の時にかなりのショックになって

たが、この結果ですっかり元気を取り戻したようだ。アルフも便乗するように尋ねる

と、一騎は明後日の方向を向きながら呟いた。

「あの・・・、一騎。もし良かったら・・・」

「・・・？どうしたの美波」

「いや・・・、何でもないの。とにかくありがとう。ウチも元気が沸いてきたわ」

「うん！俺もそれで嬉しいよ！」

互いに満面の笑みを浮かべながら励ます。どうやら、この二人は結構似合いの

生徒になりそうだ。

「一騎も美波も、嬉しそうな顔してるね」

「そうですねっ！葉月もバカなお兄ちゃんにつこりとしたいですっ！」

「あはは・・・。確かにそうだね葉月ちゃん」

明久も、葉月と話し合いながら笑みを浮かべた。こうして、清涼祭1日目が幕を閉じた。

ルートの2

『優勝  
ぶっちぎり!!』

木下秀吉

（とある客の事欠かない声援）

「『『』……』」

「そういう結果になったのか……」

結果を見た皆が無言になりながら見つめる。アルフも予想外に固まった表情になっ  
ていた。

「流石秀吉だね」

「・・・。演技が認められるのが嬉しいのじゃが・・・、素直に喜べんのう」

明久が褒めると、秀吉は苦笑いしながら答える。すると、

「・・・なんとなく予想はしていたんだけど・・・」

「・・・改めて結果で見せられるとショックです・・・」

瑞希と美波が絶句するかのようにはいた。これは手酷い本音なのだろう。

「あれだけお願いした甲斐があつたわけか・・・」

一騎は左目からしよっぱい物を流しながら苦笑いする。結構予想外な結果だから

それは仕方ないのだろう。

「秀吉！これを気に本格的に喫茶店を経営してゆくゆくは二人で幸せな家庭を」

「・・・じゃからワシは男なのじゃが・・・」

秀吉は困りながら呟くと、アルフも同情するかのようにはいた。

こうして、清涼祭

1日目が幕を閉じた。

第六十九問

清涼祭2日目編

それぞれの準備

清涼祭  
2日目

「アキ、一騎、おはよう」

「おはようございます。吉井君、千藤君」

翌日、一騎と明久が教室に入ると瑞希と美波が挨拶をしてくれた。  
すると二人は、

「あ、二人ともおはよう」

「今日も頑張っついていこうね」

げっそりとした顔で挨拶をした。二人の顔には隅ができてるようだ。

「ちょっと、そんなので決勝戦大丈夫なの？」

「朝一番でテストを受けてたからね」

「だから今はまだ眠いんだ・・・」

欠伸を出しながら答える二人。余程早朝から学校に来たのだろう。

「あゝそうだ。その・・・昨日はぐっすり眠れた？」

「え？ぐつすりでしたけど」

ここで明久が瑞希にいくつか質問を問いかけようとする。瑞希は普通に答えた。

「それじゃ・・・、朝ご飯はきちんと食べた？」

「はい。きちんと食べました」

「えっと、それじゃ変な夢とかは――」

「ふふっ。吉井君、気を遣い過ぎですよ？」

すると瑞希がくすつと笑うように咎めた。

（昨日は災難だったしな。今日はそこまで嫌な事はないだろう）

アルフも心配するように瑞希を見つめる。これほど心配した事もなかったのだろう。

「大丈夫です。昨日は大変でしたけど、不思議なくらい落ち着いていますから」

「そうなの？」

「やつぱり、俺達がアイツらを追い返したおかげかな？」

「結局みんな無事でしたし・・・、それにきつとまた吉井君や千藤君が助けて

くれますから」

「まあ一騎はともかく、アキというよりは坂本と土屋かもしれないけど」

瑞希は嬉しそうに微笑みながら安心する。昨日と同じような事が起きなければ

それはそれで一安心だ。

「元氣そうで良かったよ。それで今朝は特に問題は――」

「・・・・・・・・・・異常なし」

「不審な連中はおらんかったぞ」

「そっか。ありがとう」

秀吉とムツツリー二に現在の状況を聞くと、異常なしと答えた。

（昨日の事もあったし、今日は二人に姫路さんと美波を迎えに行ってもらったんだよね）

「これくらい当然じゃ。特にワシは昨日役に立てなかったしのう・  
・・」

「いや、それは縛られてたんだし仕方ないんじゃない？」

すると秀吉が悲しそうな顔で自分を蔑んだ。どうやら昨日は随分と尻を撫でられてたようだ。

「お、今日は無事だったか二人とも」

「あれ？坂本ももう来てたの？」

ここで雄二が教室に入ってくる。雄二も早朝から早く来たのだろ  
う。

「そういえば決勝戦の相手は3年生らしいじゃない」

「そうみたいだね。それも結構上位の人達みたいだし」

「油断は出来ないけどね、ふあああ・・・」

再び欠伸をしながら答える一騎と明久。すると明久は、

（振る舞いを見る限り、あの二人はかなり頭が悪そうだったんだけどな。

特に坊主の方が）

嫌味つたらしく常夏コンビを侮辱した。

「大丈夫だろ。3年はその分テストも難しいからな。ハンデはない」

「そういう事じゃなくてアンタ達の実力自体を心配してるんだけど・・・」

雄二が眠そうに答えると、美波は少し疎遠するような目で呆れてしまう。

「そんな心配より、店の準備に専念してくれ」

「大分準備が整ってないけどね・・・」

「一騎も緊張感ないわねえ」

更に心配するような表情で怪訝に眉根を寄せる美波。これは相当眠そうな状態だ。

「ちょっと悪いけど寝させてもらっていいかな？昨日とか徹夜でこのままじゃ

決勝戦で集中力がもたないかも」

「決勝戦までちょっと時間あるし、俺も少し仮眠してくるよ」

「仕方ないわね。寝過ぎしても困るから起こしてあげるわ」

明久と一騎がお願い（一騎は若干個人的な目的だが）すると、美波はこれを鵜呑み

にするように答えた。

「ゆつくり休んで下さい」

「そうじゃな。喫茶店の方はワシらに任せるといい」

「・・・・・・・・・・（コクコク）」

瑞希と秀吉も励ますように答えた。ムツツリーニは頷きながら承知した。

「んじゃ、俺も一緒に起こしてくれ。屋上で寝るから」

雄二も頭を掻きながら答える。屋上で寝るようだ。

「それなら僕も屋上にいるからよろしくね」

明久が手を振りながら答えると、

「（ヒソヒソ）やっぱり一緒に寝るんでしょうか・・・・？」

「（ヒソヒソ）間違いないわ。きっと坂本の腕枕で・・・・・・・・」

瑞希と美波がこっそりと明久と嫉妬するように何かを話し合っていた。

（一体何が気に入らないのやら・・・）

するとアルフは呆れながら彼女達を見つめた。彼女達は余程警戒しているのだろう。

「俺は別の所で寝るから」

「何ですか？」

「ちょっと、考え事をするからね」

「何の事なの？」

「それはちょっと・・・」

一騎が苦笑いしながら俯く。こればかりは説明し辛いのだろう。

「それならアンタも一緒に行つてあげればいいんじゃないの？」

「言われなくたって、俺もコイツと考えなければいけない事があるからね」

「わかったわ。そしたらあんまりわかり辛い場所で寝ないようにね」

「了解。アルフ、行くぞ」

「ああ」

そう言い残し、一騎とアルフは教室を後にした。

（誰だろう。俺を呼んでるのは・・・）

「君」

「Z  
Z  
Z  
・  
・  
・」

「君」

「Z  
Z  
Z  
・  
・  
・」

「・・・うう」

「――藤君」

（この声、どこかで・・・？）

「・・・？」

「起きたの？」

「君は、木下さん？」

一騎が寝ていた場所に、秀吉の双子の姉である優子がやってきた。

「どうしてここが・・・？」

「ちよつとFクラスによつてね。それでどこにいったのって聞いてね」

「でも俺はどこで寝てくるかは言っていないはず・・・」

「島田さんが多分噴水近くのベンチ辺りで寝てるんじゃないって言ってたわ」

優子が簡単に説明を済ませる。多分、美波は一騎が気につてる場所  
所は噴水だと

思ってるのだろう。

「それで、俺に何の用なの？」

「言いたい事があってここに来たの」  
「言いたい事？」

一騎は一瞬首を傾げるような反応をとってしまつ。すると優子はこう答える。

「昨日言つた話なんだけど、今ここで告げたいの」  
「別に後の方がいいんじゃないの？」  
「いや、今言いたい。それじゃ、言つね」

優子は大きく深呼吸をしつつ、一騎に告げた。

「アタシと友達になつて欲しいの！」

「・・・・・・・・はい？ どうして？」

「何でつて言われても・・・、昨日アタシが変な男に捕らわれた件だけ。それを

助けてくれたのがあなたなんですよ？」

「え、ま・・・そうだけど・・・・・・・・」

一騎は無意識に平然と答えた。するとアルフは、

「お前はなぜ昨日の男に捕まったってわかった？」  
「ちよっ、アルフ！何をいきなり――」

優子に躊躇なく、質問を伺った。一騎はそれを止めようとするが、

「それは、あの男の行動がバレバレだったからに決まってるでしょ……」

「そうだったんだ」

優子は明後日の方へ振り向くように答えた。

「だから……、その恩返しをしようと思って……今ここで伝えたかったの」

「そうなんだ。だったら君が言いたい事を思う存分言えればいいじゃないか」

（とは言っけど、これだけで友達になって欲しいって言うのは正直苦労しないけどな）

遠慮なく、再び深呼吸をして言葉を告げる優子。

「だから、互いに呼び方を変えようと思ってるけど」

「……！？ちよっとな何を！？」

「今度から、アタシの事は『優子』って呼んでいいから。その代わりにアタシも

あなたの事を『一騎君』って呼ぶから」

「この現象、昨日もあつたような……！！」

昨日の出来事を思い出す一騎。つまりこの現象は本日で2度目になる。

「こここここれには色々と事情があつて！だからこればかりは――」

「これでいい？一騎君」

「……………うん」

優子に聞きつけられ、素直に頷いた。

「それからもう一つは……………」

「何かな？」

「…………少しだけ、一騎君のそばにいていい？」

「ッ！？何ゆえ！？」

更に発する優子の言葉にドン引きしかける一騎。だがアルフは、

「なぜコイツが気になるかは俺にはわからんが、とりあえずはいぞ」

「おいアルフッ！！何を勝手な事を――」

「ふふっ、性格はどうもしくりこないけど見た目は可愛いよね（っんっ）」

「やめろ。俺はシャイな人間だ」

「いつからシャイだったんだよ」

すんなりと許可をとった。すると優子はアルフに顔につんつと指を押し付けた。

性格自体は全く気に食わないが、見た目だけは気に入ったのだらう。

「でも、俺は決勝戦があるからそんなに長くはいられないからね」「わかってる。後で応援しにいくからね」

「アルフ、これでは話が出来ないな」

「そうだな。会場に向かうまでの間しか出来なくなったな」

すると一騎はしよげるような顔でアルフに言う。どうやらアルフも同情してるよ

うだ。こうして、一騎と優子は数分間の間だけ一緒に過ごす事になった。

「さてと。行こうか二人とも」

「後で私達も応援に行きますね」

「アンタ達、良い所を見せなさいよ」

「ここまで来たんじゃないぞ？」

「・・・・・・・・優勝」

そして決勝戦の時間がやってきて、皆に励まされた一騎と明久と雄二。これで準備は万端だ。

「わかってる。試召戦争の時みたいなヘマはしないよ。それじゃ行ってくる」

「やれやれ。耳が痛いな」

「これが、俺達の最後の試合になるな・・・！」

そう言い残し、3人は会場へと向かった。Fクラス3人衆と常夏コンビによる

戦いが今、幕を開けようとしている。

## 第七十問

2—FVS3—A?

「吉井君と坂本君、それに千藤君。入場が始まりますので急いで下さい」

「わかりました。いつでもOKですよ」

会場に到着した3人を促す布施教諭。そして、

『さて皆様、長らくお待ちせ致しましたッ！！これより試験召喚システム  
による召喚大会決勝戦を行います！それでは、出場選手の入場

です！』

司会の合図で3人は全ての準備を整えた。

「さ、入場して下さい」

「ここからはガチで行くぞお前ら」

「わかってる。僕だって本気だからね」

「交代するタイミングは雄二に任せるよ」

3人は意気込みを宣言し、入場を開始する。

『2年Fクラス所属、坂本雄二君と吉井明久君、その補欠の千藤一騎君です！』

皆様拍手でお迎え下さい！』

すると周りの観客全員が、暖かい声援や拍手をおくってくれた。これはかなりの盛り上がりになるだろう。

『最高成績のAクラスを抑えて決勝戦に進んだのはなんと最下級のFクラス』

生徒のコンビです！これはFクラスへの認識を改める必要があるかもしれません！』

「あの司会、嬉しい事を言ってくれるな」

「姫路さんのお父さんに好印象になるね」

「確かに、俺達最下級クラスの間人間がここまでこれたのは奇跡なのかもね」

3人は嬉しそうに話し合う。だがここまで勝ち残ったのは奇跡だとは言い難い。

『そして対する選手は――』

（そろそろくるか……。奴らが……。！！）

一騎は戦う相手を警戒しながら待つ。そう、最後の相手は……。、

『3年Aクラス所属、夏川俊平君と常村勇作君です！皆様、こちらも拍手で

お迎え下さい！』

『やはり、常夏コンビじゃな・・・』

『吉井君・・・』

『一騎・・・』

言うまでもなく常夏コンビだった。すると観客席で見ていた瑞希と美波と秀吉が

硬直状態で止まってしまう。

『出場選手が少ない3年生ですが、きっちり決勝戦に食い込んできました。さて、

最年長の意地を見せる事が出来るでしょうか。それではルールを簡単に説明しま

す。試験召喚獣とは、テストの点数に比例した――』

「ようセンパイ方。もうセコい小細工はネタ切れか？」

「よく決勝までこれたな。お前らが公衆の面前で恥をかかないようにという優しい

配慮だったんだがな。Fクラスのオツムじゃあ理解出来なかつ

たか？もうここま

でもようだな」

夏川が怪訝に眉を寄せるように答えると、

「まだつけてたのー！ーッ！？」

「取れねえんだよ！！」

明久が夏川の頭に指を刺すように叫んだ。そう、この出来事は昨日のAクラスで

起きた事である。つまりまだブラジャーが頭についたままなのだ。

「変体だああああッ！！」

「お前がつけたんだろ！！」

（いや、それは意図的な問題なんだけど・・・）

更に叫ぶ明久にそれに対抗して叫ぶ夏川。これはお互い様である。

「フッ、残念ながらお前らの言葉はAクラス所属でも理解出来ないだろうよ。

まずは日本語を覚えてくるんだな、サル山の坊主大将」

「て、テメエ。先輩に向かって・・・！」

「こんな汚い真似をするお前らを先輩呼ばわりする筋合いはない。呼ぶだけで

時間の無駄だ」

夏川の言葉に便乗する一騎。本来なら一発殴ってた所だ。

「先輩、一つ聞きたい事があります」

「あんだ？」

すると明久が何かを尋ねてきた。夏川は不満げな顔で答える。

「教頭先生に協力している理由は何ですか？」

「ッ！！・・・そうかい、事情は理解してるって事か」

（一体何を言おうとしているんだ、夏川は・・・）

一瞬何かを警戒する一騎。すると夏川は朦朧するような顔で答えた。

「進学だよ。うまくやれば推薦状を書いてくれるらしい。そうすりゃ受験勉強

とはおさらばよ」

「そうですか。そっちの——常村先輩も同じ理由ですか？」

「まあな」

「・・・。。。そうですか」

常村も答えると明久はしょんぼりと頷いた。多分、教頭もそれなりのメリットを与えたくらいなのだろう。

「本当は小細工なんて要らなかったんだよな。そもそもAクラスの俺達とFクラス

のお前らじゃ実力が違い過ぎる」

「それはわざわざご苦労な事だな。そんなに俺達が怖かったのか？」

「ハッ、言ってる！！お前らの勝ち方なんて相手の性格や弱みにつけこんだ騙し討ち

だろぅが！俺達相手じゃ何も出来ないだろッ！！」

「口先だけのお前とは違う。そんな前同情を言うのは俺達に勝つてからにしろ！！」

反論する夏川に対して、一騎が威圧を跳ね返すように叫んだ。そして、

『——ルールは以上になります。それでは試合に入りましょう！』

選手の皆さん、どうぞ！』

「「「「サモン 試獣召喚ッ！！」」」」

互いに自分の召喚獣を喚び出しそれぞれの召喚獣が姿を現した。

「奴らの召喚獣を見るのは初めてだな」

「ああ。油断は禁物って所だな」

アルフも威嚇するような目で常夏コンビを見つめていた。一騎は出番がくるまで

後ろで待機した。そして、互いの召喚獣の点数が順番に表示される。

&

Aクラス

夏川俊平

日本史

197点

「な・・・!?!」  
「英語じゃねえのか!?!」

すると二人は驚くようにモニターを見た。その理由はただ一つ。

『よくやった、ムツリーニ』  
『・・・・・・・・・・・・・・・・これくらい、楽勝』

放送室で対戦科目を変更したのはムツリーニだったのだ。

「雄二・・・」

「散々細工してくれたんだ。これくらいのハンデはいいだろう」  
「よし、うまくいった。流石ムツリーニだ」

一騎はガッツポーズをとりながら喜ぶ。その過程は今から数分前に至る。

「実は、カメラ男に科目の変更を頼みたいんだ」  
「なるほど……。奴らの有利な科目が出たらちよつと勝ち目はなさそうだよな」

「そこでだ。代表にも協力にしてもらいたい」

「雄二に……。？そうか！」

「どうした一騎？」

「雄二。次の対戦科目は？」

「英語だが。何か聞いたのか？」

「そこで、ちよつとムツツリー二に頼みがあつてね。雄二にも手伝つて欲しいんだ」

「・・・・・・。そうか、その手があつたか！ナイスだ一騎！」

「これで俺達の勝利の方程式が全て揃う」

「ああ。今のうちにムツツリー二に報告する。これであのバカも少しは役に立つって

わけだな」

「雄二、少し僕を侮辱してない？」

「気のせいだ。さつさと行くぞ」

「ありがとうなアルフ。これでうまくいくと信じてるよ」

「当然の結果だ。礼に及ばん」

そして今に至る。

（だけど、奴らはAクラスに所属してるだけのことはある。この二人は本当に

勉強が出来てるようだ）

「どうした？俺達の点数を見て腰が引けたか？」

「無理もない。Fクラスじゃお目にかかれないような点数だからな。英語

じゃなくても良かったな」

でも常夏コンビの言動は続く一方。でも、

（けど、こんな点数が取れるならわざわざ他人に頼るより実力で受験勉強を

やったらどうなんだ……。なのに奴らはそれをせずに俺達の

人生――

いや、俺にとっては最初で最後の思い出である文月学園の学園祭を……、

高校2年生の学園祭をぶっ壊そうとしたんだ。――そして、俺のクラス

メイト——いや、俺の大切な人を取り返しのつかない酷い真似をしようと  
目論んでいた……。だが俺以外にも、明久もそう思ってるの  
だろう……。)

一騎はこんな姑息な手を使った常夏コンビを許すわけがなかった。  
もし、別の

場所で同じような真似が起きたら更に許さなかったのだろう。

「ホラ観客の皆様に見せてみるよ。お前らの貧相な点数をよ」

「夏川、あんまり苛めるなよ。どうせすぐに晒されるんだぜ?」

すると明久は、二人にはつきりと言葉を告げた。

「……前に」

「あん?」

「前にクラスの子が言ってたんだ」

「なんだ? 晒し者にされた時の逃げ方か?」

笑い出す二人に明久は再び言葉を紡ぎ出す。

「『好きな人のためなら頑張れる』って」

「ハア? コイツ何言ってたんだか」

「——僕も最近、心からそう思ったんだ」

明久の言葉が言い終わると同時に、明久と雄二の点数が表示される。

F  
ク  
ラ  
ス

吉  
井  
明  
久

日  
本  
史

1  
6  
6  
点

&

F  
ク  
ラ  
ス

坂  
本  
雄  
二

日  
本  
史

2  
1  
5  
点

「「なッ！？」」

二人の点数に思わず驚いてしまう常夏コンビ。これはかなりの実力だ。

「互角に張り合えるな」

「明久も、早朝からのテストを頑張ってたようだな」

一騎とアルフも関心するように頷いた。一方、

『アキはいつも60点くらいなのに！』

『凄いです吉井君！』

『明久もやる時はやりおるのう』

観客席で見っていた瑞希と美波と秀吉も関心していたようだ。

「アンタらは小細工なしの実力でブツ倒してやるッ!」

明久は自分達の実力を証明すべく、何も使わずに勝とうと宣言する。これも

試召戦争での経験を生かしたやり方なのだろう。

「明久。あそこまで俺と一騎に付き合わせたんだ。ここで負けたら承知しねえぞ」

「わかってる。勉強教えてくれてありがとう。雄二もそれなりに頭いいじゃん」

「お前に比べれば、誰もそうだが——行くぞッ!」

そして、本格的な戦いが始まるうとしていた。

## 第七十一問

2 | F V S 3 | A ? (番外編) (前書き)

一旦時間を遡った時の話で、Aクラス視点の話です。

「そろそろ始まっちゃう・・・」

「何をしているのカナ？優子」

一方、Aクラスにいる優子が戸惑うような顔で急いで会場へと向かおうとすると

そこへ同じクラスの愛子がやってきて優子に尋ねてきた。

「どうもこうもないでしょ。もう少しで召喚大会の決勝戦が始まるのよ。」

応援しに行かないで——って何を言ってるのよアタシは

あああッ!？」

「ふうん。もしかして、誰かを応援したいと思ってるのか？」

「誤解よ！別に好きで行きたいと思ってるわけじゃないし・・・」

ヤキモチをやくかのように愛子に弁明する優子。そこへ、

「何をしているの？」

「し、雫!？これはその・・・!」

「私は何も思わないけど・・・」

店の準備を済ませた雫がメニュー表を持ち歩きながらやってきた。

雫は何とも

思っていないようだ。すると、

「油断は禁物ですぞ姉御さん。彼女、何か隠し事してるらしいぜ」

「お前は少し黙ってる。私が話すから余計な真似はするな（ガン

ッ）」

「痛てえ！！すみませんでした姉御さん！」

ルドルフがからかうような目で優子を見つめてきた。だが雫はルドルフの頭を

殴りつけ、ルドルフを大人しくさせた。彼は必死に謝ったが、彼女はそれを無視

して優子に話を聞いてもらう。

「正直に話したら？私が答えてあげるから」

「え？本当に・・・？」

優子が顔を上げると、微笑むように彼女の手を握る雫。優子はこの光景を見て、

「なんだか良い描写みたいだね。女子同士の友情が深まりつつある感じかな？」

と賑やかな表情で頷いた。そして優子は正直な事を雫に話した。

「実は――」

「・・・あなたも彼の事が」

「うん、純粹に言えば一目ぼれかも（／＼／＼）」

事情を話した優子が胸を当てるように答える。最初は冷酷な態度だったが、昨日の

出来事で一変したようだ。

「優子も一騎君の事が気になるのかな？」

「あ、アタシは別にそんなんじゃないのよ！でも……このまま応援しに来たら

緊張して倒れてしまいそうだわ……」

「そうか……。あんまり気を緩めたらいけない」

緊張感を高ぶってしまう優子を心配する雫。今の彼女はただ応援するだけではなさそうだ。

「……………どうしたの優子？」

「だ、代表まで！？」

「どうしたの代表？」

するとさつきまで椅子の整理をしていた翔子がこちらに歩いてきた。優子は驚く

ように反応し、愛子は平然と反応した。

「……………さつきから優子がモヤモヤしてるかのような感じだったからこつち

に来た。もしかして優子達も応援しに行くの？」

翔子が自分の携帯で時間を確認しながら3人に尋ねる。すると雫は、

「代表も応援しに行くの？」

「……………うん。頑張る雄二を応援しに行く」

先に翔子に答えさせた。どうやら翔子も応援するために会場に行くようだ。

「アタシは・・・その・・・」

「一騎君を応援したいそうだって」

「いやあああああああッ!!!」

代わりに答える愛子に悲鳴を上げる優子。誰にも言えない事情があるものだ。

「・・・・・・大丈夫。私は気にしないから」

「と言つても代表は坂本君目当てなんでしょ・・・？」

真つ先に即答する翔子に訝しげに呟く雫は呆れてた。寧ろ翔子にはそれ以外の目的は一切存在しないが。

「まあとにかく決勝戦が始まりそうだからアタシは頑張る所を応援したいって

わけよ」

「・・・・・・愛子と雫はどうするの？」

「ボクはちよつと見に行けないと思うね」

「私は後から行く。少し考える事があつて・・・」

翔子が二人に尋ねると、愛子は不可能で雫は後から行くと答えた。

（まだ解決してない事があるから・・・）

すると雫は腕を組みながら翔子を見つめた。皆には言えない、一騎と雫にしか

わからない内容なのだろう。

「・・・・・・それじゃあ、そろそろ行こう」

「そ、そうね！もう時間がないし早く行きましょう！」

慌てるような雰囲気で翔子の手を引く張る優子は、二人揃って教室を後にした。

「あはは……。今日の優子は随分と暢気だね」

「まああの娘もてんぱってるらしいけどね」

苦笑いする愛子とそれを蔑ろにする雫は自分達の持ち場へと戻った。

「昨日のデータを手しました」

「ご苦労。それで、手駒どもはどうなった？」

「申し訳ありませんが、何者かによって消滅されてしまいました」

「いや、データを集められたのならそれでいい。・・・ただの使い捨てだ」

「では、次の計画へ進むというわけですね」

「・・・ああ。次はある人物達を利用させて貰う。我々の計画の妨げと

ならないようにな・・・。」

「アンタらは、小細工なしの実力でブッ倒してやるッ!!」

いよいよ始まった召喚大会決勝戦。明久は常夏コンビに宣言し、自ら

実力の力で倒そうと告げた。

（そうだ。俺達は散々奴らにバカにされたからな。昨日から今日まで）

後ろで待機している一騎が真剣な目で常夏コンビを見つめた。相本気に

させたのだろう。

「それじゃ————遠慮なく行かせて貰うぜえッ!!」

まずは雄二の召喚獣が特攻する。すると常村が、

「夏川ッ!!こっちは俺が引き受ける!!」

真っ先に雄二の相手をする事にした。自分の召喚獣で足止めをする勢いで飛び込む

と、雄二の召喚獣はあっさりと回避した。

「そうか!だったらまずはアンタから倒させて貰う!」

「うるせえええッ!!」

キンッ！（メリケンと剣がぶつかり合う音）

すると互いに攻撃を仕掛けようとした所に斬り払いが発生した。

「それじゃ、僕の相手は先輩ですね」

「上等じゃねえかッ！！多少ヤマが当たったくらいでいい気になるなよ！」

一方、横では明久が夏川の相手を引き受けている。夏川の召喚獣が先手を取ろうと

最速で攻撃をしようとする、

「先輩、取り乱し過ぎですよ？ただの突撃じゃ避けてくれと言ってるようなもんです」

明久の召喚獣は糸も簡単に攻撃を回避した。これは観察処分者である明久特有の扱いである。

「何っ！？この・・・ッ！」

「ふっ！」

次は相手の懐へ回り、連続で木刀を振り下ろす明久の召喚獣。し

かし後一步の

所で攻撃を防がれた。

「テメエ、試召戦争じゃ60点程度だったくせに………ッ  
！」

「今でもそんなもんですよ。この教科以外はね？」

「野郎………！最初からこの勝負だけに絞ってやがったな・  
…ッ！」

「その通り。よくわかりましたね先輩」

そう言いつつ、再び攻撃の指示を続行する明久。夏川は必死で自  
分の召喚獣に

防御体勢を支持させる。

（何でもかんでも、点数が全てではないな……。幾ら点が取れ  
ても実力に慣れて

なかったら負けてしまう）

何かを心配してしまう一騎。彼は後から起きる何かを予兆して  
るのだらう。

「どうした？青色が悪いぜセンパイ？」

「お前ら、Fクラスのくせに……！」

横で常村の召喚獣を相手している雄二の召喚獣は素早い動きで惑  
わせていた。

雄二は余裕の表情で常村に諭す。相手は多少苦戦気味だ。

「仕方ねえ……。2年生相手に大人気ないが、経験の差ってヤ  
ッを教えてやるよ」

夏川はわざと自分の召喚獣を後ろへ下がらせ、体勢を立て直した。

（アイツ、何をやっているんだ・・・？使役する本人からも距離を取っている。

見辛くなつた分、戦闘がしにくくなるだけだ・・・）

この行動を起こした夏川に疑問を抱く一騎。だが、

「今だぁぁぁぁぁぁッ！！！」

明久の召喚獣はこれを気にせずに特攻を仕掛けようとする。

「——！！マズい、明久ッ！！」

「そら引つかかった」

「え？」

ビュン！（夏川が何かを投げつけた音）

ガンッ！（何かが明久の召喚獣に当たる音）

ザッ・・・（続いて夏川が砂利のような物を明久の目に目掛けて投げる音）

「ッ！！く———そおッ！！」

一騎が必死で声を掛けたが、既に手遅れだった。夏川が最初に投げたのは消しゴム。消しゴムが明久の召喚獣に当たり、その痛みが明久にフィードバックしてしまふ。次は砂利のような何かを投げつけられ、明久の視界が奪われてしまふ。

（アイツ、何て姑息な手を使ってやがるんだ・・・）

一騎に同情するように、アルフが夏川の憎悪を感じつつ警戒を始める。

「これが経験の差ってやつだ」

繰り出された夏川の跳梁に立ち上がれなくなる明久。だが、相手の攻撃はまだまだ続く一方だった。

「ぐううッ！！」

「そーいやお前、観察処分者なんだよな？こいつはさぞかし痛て

えだろうなあ」

大事な事に気がついた夏川は明久の召喚獣を可能な限り攻撃した。

「ぐわあああ!!」

「明久!!」

次々と夏川の召喚獣の攻撃の痛みが返ってくる明久はだんだん意識が朦朧してきた。

（これ、結構マズいかも……。意識が――）

「！？明久ッ！てめえ、根性見せろやッ！！！」

「——ッ！！」

その時、明久の頭の中の何かが浮かんできた。瑞希が転校させられてしまう姿が。

「・・・・・・・・・・！（バシッ！）」

「・・・・・・・・・・。よし、いけるな相棒？」

「・・・・当然ッ！」

（良かった。これで無事になったみたいだ・・・）

疲労状態へと陥ってしまう明久が正気に戻り、何とか胸を撫で下ろした一騎。

「チッ、悪あがきを・・・！」

「すぐに止めをくれてやるッ！！」

意識がはつきりした所を窺い、再び攻撃を仕掛ける常夏コンビ。  
だが、

「————んのおおッ!!」

明久の召喚獣は何とか相手の後ろへ回り、一発攻撃をお見舞いした。

「つとと・・・」

「夏川、大丈夫か!？」

相手の召喚獣の体勢が崩れそうになったが、元に戻ってしまっても、

「雄二ッ!」

「おうッ!」

それでも二人は諦めなかった。雄二は再び常村の相手をする。

「舐めんなッ!」

「もらったあッ!!」

すると雄二の召喚獣は明久の召喚獣が持ってた木刀をブーメラン代わりにし、

相手の攻撃を弾き飛ばした。

「ぐッ!しまっ————」

「吹き飛ばやあッ!……!」(ドッッ!……!)

閉めは一発の拳を常村の召喚獣にぶつけた。

「一騎!!後は任せたッ!」

「ああッ!!」

そして雄二は急いで後ろに待機している一騎にバトンタッチし、一騎は急いで

フィールドへと上ってきた。

『いよいよ一騎の出番じゃ!』

『頑張って一騎ッ!』

観客席で応援する秀吉と美波がエールを送る。すると、

『もう始まったの!?!』

『姉上、どうしてここに?!』

『……雄二は今頑張ってる?』

『霧島も来ておったのか』

少し後に翔子と優子が到着したようだ。

『どうもこうもないでしょ。アタシも応援しようと思って・・・』  
『誰を応援するのよ?』

『!! いや、別に・・・誰だっでもいいでしょッ!?』

『姉上、もしかして一騎の事が・・・』

『五月蠅いわねアンタは!! そんな事より早く見ないと・・・!』

『・・・雄二、いないけど』

『坂本は今一騎と交代したばかりよ』

『・・・そう。なら私は戻る』

『代表っ!?!』

雄二の出番が終了した事にすっかりした翔子は自分のクラスへと戻ってしまった。

「行くぞ、これが俺の戦いだ！試獣<sup>サモン</sup>召喚ッ！！」

一騎は急いで自分の召喚獣を換ひ出し、相手の召喚獣に先制攻撃を仕掛けた。

そして、後から点数が表示される。

Fクラス

千藤一騎

日本史

582点

「お前も、結構勉強したもんだな」

「当たり前だ。これくらい出来なきゃどうかしてる」

アルフが励ましのような言葉を紡ぐと、一騎は鼻を鳴らすように答えた。それと

同時に、アルフは一騎の召喚獣に一時的に憑依した。

「コイツ・・・！俺達より断然に点数が高いぞ！？」

「本当にFクラスなのか！？」

一騎の点数を見て一緒に戦く常夏コンビ。これほど高い点数を取れるのは彼と

瑞希、そして翔子くらいだろう。

「それと、500点超えたら召喚獣に腕輪みたいなのがつくらしいな。これは

ちよつと嬉しいかも」

自分の召喚獣に装備してる腕輪に少し照れる一騎。そして、

「さて、そろそろ行くかアルフ！」

「了解した。思う存分いかせて貰う！」

憑依したアルフが猛スピードで常村の召喚獣に攻撃を仕掛ける。

「くう・・・！テメエ、観察処分者でもないのになぜこんなに使いこなせてやがるツ！？」

もう後がない常村が一騎に発言する。すると一騎はこう答える。

「それは・・・、お前に教える価値はないツ！！」

そう言い放ち、懇親の一撃を常村の召喚獣に放つアルフ。

「野郎ツ！！獲物を手放すなんて上等じゃねえか！」

夏川は自分の召喚獣に再び攻撃命令をする。所が・・・、

「何ツ！？」

横から投げ飛ばされた常村の召喚獣が横切った。その反動で夏川の召喚獣も点数が消費してしまった。

「くらえツ！！（ゴッ！！）」

「今だ明久！」

「待ってました！」

一騎はアルフに木刀を持たせ、明久の召喚獣に渡した。そして明久の召喚獣は

攻撃を溜め始め、一撃を木刀に集中させる。その影響でフィール

ドは割れたような  
ビジョンが浮かび上がってきた。

「くそおおッ！ーお前ら如き3年の俺が――」  
「くたばれええッ！ー！」

「ま、お前にしては上出来だな明久」

飛び掛る明久の召喚獣に対して、階段に上る雄二が呟いた。

「これで・・・、終わりだあッ！ー！」

最後は明久の召喚獣とともに止めを刺したアルフ。

「なん・・・・・・・・だと・・・・・・・・？」

「俺達が・・・・・・・・負けた・・・・・・・・？」

『勝者、坂本・吉井ペアですッ！』

「「いいいよっしやああーッ!」」

最後に勝利雄たけびを互いにあげた明久一騎。そして、

コンッ（3人で拳を当てる音）

最後は一騎、明久、雄二の3人で拳を当てて友情を交わした。こうして、

試験召喚大会決勝戦は彼らの勝利で幕を閉じた。



## 第七十三問 俺と花火と後夜祭？

「お兄ちゃん！！すつつつごく格好良かったよっ！」  
「ぐふッ！！（ドゴッ！！）」

教室に戻ろうとすると、明久の前から葉月がやってきた。すると葉月は突撃

するように明久に抱きついてきた。明久はこの痛みを堪えつつ葉月に話掛ける。

「は、葉月ちゃん。今日も来てくれたんだ……。ありがとうね」  
「はいですっ！今日も沢山お手伝いをしている所ですっ！」

天真爛漫な笑みを浮かべながら額を擦りつける葉月。余程満足したのだろう。

「やったな、一騎、明久」

「うん。これも雄二が何とか相手を足止めしてくれたおかげだよ」

「しかしお前の日本史の点数、尋常じゃねえ程高いな」

「確かに、この点数だと姫路さんと同じくらいの点数だよ」

「俺は何年か前から頭良いから難しい科目は全くないよ」

一緒に歩きながら会話に参加する一騎と雄二。すると、

「3人とも、お疲れ様。凄かったわね」

同時に瑞希と美波ムツリー二が戻ってきた。ちなみに秀吉は一足先に教室に戻ったらしい。

「あはは。そうでもないよ」

「これも全て計算通りだ」

「アンタは黙ってなさい！」

明久が言い終わると、アルフも余裕をかわすような一言を告げた。しかし呆気なく

美波に遮られた。

（確かに、アルフはあまり計画を立ててなかったしな・・・）

「あの、吉井君」

「あ、姫路さん。僕の活躍見てくれた？」

瑞希が明久に声を掛けると、明久は嬉しそうに答えてくれた。すると瑞希は、

「はいっ！とっても素敵でした！今度、土屋君にビデオをコピーしてもらおうと

思っくらい！」

憧れるような勢いで答えた。無論、彼女にとって一番の見所だったのだろう。

「ビデオねえ……。ムッツリーニ、撮影なんかしてたの？」

「はい。ずっと熱心に撮っていましたよね？」

「……………（プイッ）」

明久が訝しげに問いかけると、ムッツリーニは明後日の方へ振り向いた。

（この男・・・、さては試合そっちのけでスカートの観客とか撮影していたな？）

しかし、ムツツリー二もそんな野暮な男ではなかった。

「坂本、試召戦争の時の日本史は散々だったのに今回は随分と良かったわね。」

それに今回の一騎の日本史の点数は本当に凄かったわ」

「まあ一騎には苦手科目は全く存在しないから問題ない。それで、散々だったから

こそ——だ。あれ以来、日本史は重点的にやってきたからな」  
「流石に元神童の名は伊達じゃないってわけか」

腕を組みながら頷き合う一騎と雄二。これも雄二特有の考え方のだろう。

「それであんなに高得点だったの？」

「簡単に言うが大変だったんだぞ」

「特にこの前の例の話をもく久に聞いてからは殆ど毎晩日本史の勉強に付き合わされ

たくらいだし。雄二もそれなりに苦労したよね？」

「当たり前だ。俺もこんな面倒な事に付き合ったのは初めてだ」

溜め息交じりの返事をする雄二は首を振った。勿論、もく久は嚴重に日本史の勉強を

したので今回は勝てたのだ。特に例の話（つまり瑞希の転校）を聞いてからは本気だったらしいが。

「ふうん……。一騎と坂本はともかく、よくアキがそれでだけであんな点数

取れたわね」

「アイツも自分で少しはやってたみだいだからな。あとは虚仮の一念ってヤツだろ？」

正直もの凄い集中力だったぞ」

「転ばぬ先の杖って事だね」

片目を瞑りながら視線を明久に移す一騎。すると、

「おそらく、これで瑞希の父親を説得させれば全てが解決させるかもな」

「まだわからないな……。これでわかってもらえるかの問題だ」

アルフが腕を組むように尋ねてきた。でもこの説得でわからせてもらえるかは瑞希

次第である。

「雄二に明久、それに一騎。悪いのじゃが店を手伝ってくれんかの？」

「え？どうして」

「お主らの優勝のおかげで客が増えて大変なんじゃ」

「俺は元々厨房係りだからいなきやダメだし」

教室から顔を出す秀吉が3人に頼み事をする。どうやら優勝したおかげで客が

いつの間にか急増していたようだ。

「あっそういえばそうだったわね。ほらアキ、きっちり手伝って貰うかわね」

「今まであまり手伝えなかった分頑張るよ」

「やれやれ、かつたるいな」

「坂本も文句言わないの！」

ドヤ顔になる雄二を叱る美波。雄二もこれほど勉強した甲斐があった分、面倒な作業をするのがかつたるいのだろう。

「さて。昨日まともに働けなかった分、おもいつきり働きますか  
！」

教室に入る一騎は気合を入れるように張り切った。

「いらつしゃいませー！って鷺ノ宮さん？」

「ああ……。約束通りここに来たが……」

数十分後、明久が客を招きいれると雫が入ってきた。どうやら昨日の約束を覚えてたようだ。

「さっきのお前達の活躍、格好良かったわ……。まさか3年に勝なんて」

「まあそれは努力の結果だったかな？」

「そうか。早く席を案内して欲しいわ」

「わかったよ」

明久は慎重に客の列を避けるように雫を席に案内させた。

「大変お待たせしました。こちら、胡麻団子とほうじ茶でございます」

「ありがとうございます。この胡麻団子は千藤君が作ったのか？」

「ご名答。来てくれるお客さん達のために真心込めて作ったんだよ」

注文した雫に品を運ぶ一騎。一騎は厨房で調理するだけではなく、待たせてる客

に品を運ぶ仕事もしてるようだ。

「では、いただきます（パクッ）」

遠慮せずに胡麻団子を丸々1個を頬張る雫。じっくり味わいながら食感を感じながら、最後に飲み込む。すると、

「・・・美味しい。外はカリカリしていて、中はモチモチとした食感がする」

「後はあまり甘すぎない味付けにしているから結構病みつきになるらしいよ?」

嬉しそうに美味しいと答えた。続いてほうじ茶も一緒に飲むと、

「これは普通の飲茶とは少し違った味わいだな・・・」

「飲茶は俺とムツツリー二が作ってるからね。つまりこの味はこの中華喫茶で

しか味わえないってわけさ」

「そうか。あまり苦味がないし、これも美味しい・・・」

微かに微笑むように呟いた。どうやら雫はこの味が気に入ったようだ。

「他には―――ってあれ?」

「どうしたの?」

すると一騎が廊下の方へ振り向くと、

「ちよつと愛子!そんなに無理矢理引つ張らないでよ!」

「いいじゃん。ちよつとくらいこの店の味を確かめるだけだし」

後ろから優子と愛子の声が聞こえていた。多分、二人もこの店に

来たみたいだ。

「・・・・・・・・・・来たか、亡霊の塊・・・・・・・・！」

「どうしたのムツリーニ君？そんなえげつない顔して」

「ムツリーニ、愛子は亡霊の塊じゃないから・・・」

「来たよ一騎君。もしかして君が料理してるの力ナ？」

愛子がニヤニヤするような顔で一騎に尋ねる。勿論、ムツリーニも調理してる

ので細かい事情は追求出来ないが。

「それじゃ、鷺ノ宮さんの横の席に座るかい？」

「いいよ！ボクはそれで構わないし」

「アタシもそれでいいわよ・・・。か・・・、一騎君」

「どうしたの？恥ずかしそうな顔して」

すると優子がモジモジと体を動かしながら問いかける。でも一騎は優子のうなじから

全く逸らす事なく普通に答える。

「アタシは後で注文するから今は食べないわ・・・」

「そうか。あんまり無理はしないようにね」

そう答えると、一騎は一旦厨房へと戻った。一方反対側の所では、

「ご注文はお決まりですかぁ？当店は胡麻団子がおすすめですよ」  
瑞希が他の客に注文を尋ねていた。客二人は瑞希の胸部に惑わされて、

「それじゃ・・・・・・肉まんを二つ」

と答えた。そして美波の方は、

「お待たせしました！胡麻団子二皿と烏龍茶二つになります」

注文の品を運びつつ、客に声を掛けた。すると、

「（ジー・・・）」

周りの客がある人物を眺め始めた。美波はこの光景に怒りをぶつけようとしたが、

この光景が気になり始め、そちらへと振り向いた。

「3番テーブルに烏龍茶・・・」

「あの娘、一番カワイクね？」  
「めっちゃタイプだぜ」

案の定、客の殆どが秀吉に心が打たれていた。これは大人の人も絶賛だろう（?）。

「うん、流石秀吉」

明久も関心するように仕事をしていた。そこへ、

「（ててて・・・）」

「僕らの為にありがとうね、葉月ちゃん」

「ううん。葉月も楽しいもん！」

葉月が小走りするようにやってきて、明久が葉月の頭を撫でてあげた。

「それに、お兄ちゃんが『愛してる』って言うてくれたし！」

すると葉月はあらぬ事を発言してきた。これを聞いた女子二人は・  
・、

「」（プチッ）」

「え”」

明久の処刑したのであった。なぜ処刑されたのかは別のお話で。  
彼らの平和な  
学園祭はまだまだ続く。

第七十四問 俺と花火と後夜祭？

「これ美味しいね。なかなか良い食感だよ」

「そうね……。アタシも美味しいと思うわ」

胡麻団子を頬張る優子と愛子は話し合いをしながら時間を確認する。

「そろそろ戻らなきゃいけない時間になったね」

「確かに、あんまり待たせたら代表に怒られるし」

「会計は私が済ませる。二人の分の料金も私が払う」

雫は自分の財布を取り出し、二人を廊下に出させようと促す。

「いいの？そんな事して」

「構わない。私は一応有名会社の娘なんだから」

「つまりお金持ちって事力ナ？」

「お金持ちって程ではないけど結構有名なの」

手を振りながら答えると、そこに明久がやってきた。

「3人とも、美味しかった？」

「吉井君。うん、とても美味しかったわ」

「お会計はその列に並んだらいいよ」

「ありがとう。それじゃ、先に行ってていいよ」

「わかったわ。行こう愛子」

「うん」

明久が会計の場所に指を指すと、雫はその長蛇の列に並んだ。優

子と愛子は先に

Aクラスへと戻り、自分達の仕事へ戻った。

「結構賑やかになったね」

「一騎、4番テーブルのお客さんが注文した品はもう出来た？」

「たった今出来たよ。落とさないように運んでね」

一騎が厨房から覗き見るように明久に注文の品を持たせた。これほど大まかな仕事

をやっているのは結構な作業なのだろう。

『只今の時刻を持って、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに

撤収作業を行って下さい』

「お、終わった・・・」

「さすがに疲れたの・・・」

「・・・・・・・・・・」（コクコク）」

清涼祭の一般公開がようやく終了し、完全に疲れ果ててしまった明久達。次々と

やってくる客相手を案内しつつさばいてさばいて案内しつつもここまでウェ이터が

疲れる仕事だとは到底思わなかったのだろう。

「後は肝心の問題が残ってるようだな」

「ああ。後は瑞希の父親の事だな」

「確かに、姫路さんのお父さんはどうしたんだろう?」

一騎がアルフと話し合う所に便乗するように明久が答える（勿論明久にはアルフの  
声は聞こえていないが）。

「ん？お義父さんが気になるのか？」

「なッ！？べつ別にそういうわけじゃなくて！」

「後夜祭の後で話しに行くと言っておったのう。結論はその時じや」

秀吉が頷きながら説明する。一応大丈夫だとは思うが、少しは不安だ。

「それで、美波達はどうするの？」

「ちよつと売り上げを確認するから少し時間掛かると思っけど」「そつか。少し苦勞するみたいだけど任せるよ」

一騎は調理器具を片付けながら美波に尋ねる。すると美波は、

「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」

と手を振りながら皆にそう告げた。所が・・・、

「ええッ！？どうして!？」

明久が驚くように叫び始めた。これで驚くのも無理はない。

「どうしてって・・・、恥ずかしいからに決まってるでしょ!」「すいません。すぐ戻りますので」

美波は顔を赤くしつつ理由を暴露する。勿論、美波は長年ドイツに滞在していたので

こういう服装にはどうも慣れないみたいだ。

「・・・別に恥ずかしくはないと思うけど・・・（ボソッ）」

「（ノノノ）かつ、一騎！？今なんて言ったのよ！？」

「何でもないって！？ただの独り言だってばああ！！！？？」

一騎の呟きに思わず自爆状態へと変化してしまう美波。これは一騎のほんの些細な

独り言なので彼女には普通に答える事は出来まいだろう。

「待つて！二人とも考え直すんだ！カムバアックー！」

やがて瑞希と美波は教室を後にし、すぐに着替えを続行しようと更衣室へ移動した。

「・・・・・・・・あはは。明久も二人のチャイナドレス姿に釘付けにされたみたいだね」

泣き叫ぶ明久に苦笑いする一騎は机を整理していた。すると、

「ふむ、ならばワシも―――」

「させるかッ！せめて秀吉だけは着替えさせない！（ガバッ！）」  
「なッ！？何をするのじゃ明久！」

着替えに出ようと動き出す秀吉の行く手を阻むように明久が押さえつけた。だが、

「おい明久、遊んでないで学園長室に行くぞ」

そこへ雄二がやってきて明久を促そうとした。明久の囁きに飽き飽きした所で、

「学園長室じゃと？学園長に何か用があるのか？」

「ちよつとした取引の清算だ。店が忙しくて行けなかったからな。遅くなったが今

から行こうと思う」

「ならばその間にワシは着替えを」

秀吉が苦笑いをしながらすませようとする。やはり、

「そうはいかない！秀吉も一緒に連れて行く！」

「・・・・・・」

「あ、ムツツリー二も行くの？」

明久の抵抗は続く一方だった。

「困ったのう。雄二、何とか言ってやってくれんか？」

益々困る秀吉に雄二は、

「んゝ・・・。ま、いいだろう。秀吉とムツツリー二も行こうぜ。

明久を説得する

のも面倒だし」

落ち着くように答えた。念のため、二人を連れてくのも無理はないだろう。

「やれやれ雄二まで・・・。仕方ないのう。着替えは後回しじゃ」

「それでいいの？」

「いいんじゃない。ワシのこんな姿を見ても何の足しにもならんじゃろっくに・・・。」

でもそれはそれで違和感はないと思うが。

「失礼しまーす」

「邪魔するぞ」

「お主らは全く敬意を払っておらん気がするのじゃが・・・」  
「そう？」

一騎達は学園長に優勝報告を告げるために学園長室へやってきた。

「アタシは前に返事を待つようにと言ったはずだがねえ」

いきなり入室してくる3人に対して学園長は呆れてしまう。

「あ、学園長。優勝の報告に来ました」

「言われなくてもわかってるよ。アンタ達に賞状を渡したのは誰だと思ってるんだい」

「すいません。俺達の記憶力不足でして（笑）」

明らかにバカにする言い方で一騎が答える。すると、

「それにしても随分と仲間を引き連れたもんだねえ」

「おい。お前に聞きたい事がある」

アルフが一足先に学園長に尋ねてきた。一騎はアルフに忠告する  
ように、

「おい、今ここで話しちゃダメだ」

と答えた。アルフは「なぜいけない？」と返してきた。

「一応お前の姿が見えてるのは俺と女子——いや、女だけなんだ。他の男子

には見えてないし、声も聞こえない。学園町が独り言を喋ってるように思えるだろ」

「そうか。ならば別の機会にしよう」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アルフが一度一騎の体の中へと戻る姿を学園長が確認する。どうやら、少し不振に思ってしまったようだ。

「こいつらもババアのせいで迷惑を被ったからな。元凶の顔くらい拝んでも罰は

あたらないはずだ」

「ふん……。そうかい。それは悪かったね」

雄二の演説で理解した学園長が謝る。そして、

「それで、白金の腕輪は返却した方がいいんですか？」

明久は副賞の一つである白金の腕輪を手を取った。学園長は明久の質問に答えるように告げる。

「いや、それは後でいいさね。どうせすぐに不具合は直せないんだ」

「明久、不具合とはなんじゃ？」

「あ、そつか。秀吉は知らなかったんだね」

すると秀吉が尋ねるように明久を呼びつけてきた。明久はその理由を説明する。

「この白金の腕輪はちょっと欠陥品でね、高得点の人が使つと暴走しちゃうんだよ」

「そうじゃったのか。・・・む？どうしたのじゃ雄二？」

秀吉が雄二の方へ振り向くと、雄二は何かを呟いてた。

「そういえばなんでアイツらは俺達がババアとつながってると知ってたんだ・・・？」

「だから教室の改修と交換条件で僕らがこれをゲットするっていう取引を学園長と——」

明久が雄二の言葉に答えるように言う。すると・・・、

「待て明久ッ！！その話はマズい！」  
「え？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・盗聴の気配」

「畜生！やられたかッ！！あいつら・・・！追うぞ明久！一騎ツ  
！！」

「チヨ・・・雄二、どういう事！？」

雄二の直感的な行動で明久は多少驚き気味になる。だが・・・、

「盗聴だッ！！あの連中、この部屋に盗聴器を仕掛けてやがったんだ！！」

「・・・！！いつの間にそんな事を・・・ッ！？」

「今の一連の会話をもしも録音なんてされたら、相当マズい事になるッ！！」

「なんだってッ！？」

時は既に遅かった。彼らの最後の試練が始まるうとしていた。

## 第七十五問 俺と花火と後夜祭？

「あの連中、この部屋に盗聴器を仕掛けてやがったんだッ！！」  
「何だつてッ！？」

雄二は廊下を走っていた人物達を目撃し、その人物達が持っていた物を

確認した。これは相当マズい事態だ。

「さっきの会話も聞かれていたはずだ。もし録音なんてされただら  
相当マズい事になる」

（嘘だろ・・・！そんなものが公開されたら今までの努力が全て水の泡だ！

それで学園の信用が失墜して存在自体——いや、学園そのものが

怪しくなったら瑞希どころか俺達全員が転校だ！）

「とにかく急げ！（ダッ）」

すると雄二は一目散にその人物達を追っかけようとした。

「ムツツリーニと秀吉も協力してくれ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「うむ・・・！」

一騎は二人に協力させようと確認する。ムツツリーニは頷き、秀吉は返事を返した。

（早く止めなきゃ大変な事に・・・姫路さんが転校させられて  
たまるか！！）

「雄二！向こうは例の常夏コンビでしょ！」

「そうだ！ちらつと例の髪型が見えたから間違いない！」

急ぎながら雄二が説明する。どうやら真犯人は常夏コンビだったようだ。

「だったらこっちも二手に分かれよう！」

「そやつらの特徴は？」

「坊主頭と小さなモヒカンだよ！見たらすぐにわかる！」

「了解じゃ！ムツツリー二とワシは外を捜す！」

特徴を説明した明久に伴い、秀吉とムツツリー二は外で捜す事にした。すると、

「・・・・・・・・・・明久」

「ん？」

ムツツリー二は明久を呼び止めた。そして明久に何かを渡そうとするムツツリー二

は無言で受け渡した。

「ムツツリー二愛用の双眼鏡？」

「・・・・・・・・・・予備」

ムツツリー二が渡したのは予備の双眼鏡。そもそも予備どころか学校に双眼鏡

は一つもないと思うが・・・。

「サンキュ、ムツツリー二」

「・・・・・・・・・・この学校は気に入ってる」

するとムツツリー二は無愛想に答えを告げた。でも一騎には妄想少年の気持ちは全く理解出来なかった。

「目標を見つけたら携帯に連絡をくれ！」  
「うむ！」

こうして、明久・雄二・一騎は廊下を探索。秀吉とムツツリー二は外を探索する事になった。

「二人とも！まずは放送室を押さえるぞ！」  
「オーケー！」  
「わかった！」

「邪魔するぞ！（バンッ！）」

放送室

まず最初に向かった先は放送室。雄二は突然放送室のドアを開け出した。

「なッ、なんだお前ら!？」

「ちよつとした用事があるんだ」

そして何の挨拶もなく、一騎は中へ入る。すると、

「雄二、ここには隠れて吸ってる生徒と学園祭で密かに取引されていたDVDが

あるくらいだ。ここにあるDVDを全て押収するよ」

「了解。とりあえず全部押収して先を急ぐぞ」

「校則違反だもんね」

「どツ泥棒ー!!」

3人は密かに取引されてるDVDを全て押収し、すぐさま放送室を後にした。

3階新校舎廊下

「あれ？そんなに急いでどうしたの？」

廊下を急いで移動していると、そこに美波と遭遇した。

「ごめん美波。後で話すよ」

「今はその場合じゃないよ」

「あ、待って。何か落としたわよ？」

すると、明久が持つてるDVDの1枚を落としてしまう。美波は拾うなり

そのDVDに手をとろうとする。

ゴォ・・・（美波の怒りの炎が燃え上がる音）

「にッ、逃げよう二人とも！」

「ごめん！これには深い事情が・・・！」

美波に制裁を喰らう前に急いで常夏コンビを追いかける事にした。

2  
A  
教室前

「・・・・・・・・雄二」

「翔子！悪いが今はお前に構ってられない！」

すると次に遭遇したのは翔子だった。雄二は慌てて断るが、

「・・・・・・・・大丈夫。市役所くらい一人で行ける。婚姻届を出すだけだから」

「何を言って————ってちよつと待て！俺は判を押した覚えはないぞ！？」

翔子は婚姻届を雄二に見せて、事情を説明した。だが雄二は違和感がてんこ盛りだ。

「雄二！ここにはいないから先を急ごう！」

「待て明久！こつちはこつちで大変な事になってるんだ！」

「いいから早く急ぐよ！」

「ごめんね。余計な騒ぎに巻き込ませて。それじゃまたね霧島さん」

「待て！頼むから待ってくれ！」

明久は強引に雄二を引っ張り出し、無理矢理急がせた。一方一騎は翔子に手を振る

ように別れの言葉を言った。翔子も一緒に手を振り、教室へと戻ったのであった。

「よし。これで奴らが良い働きをしてくれる事を信じてる・・・。  
全ての

準備は整った・・・。」



第七十六問 俺と花火と後夜祭？（番外編）（前書き）

今回は裏サイドからの視点になります。異常に短めですが普通に読んでも構いません。

第七十六問 俺と花火と後夜祭？（番外編）

「……………データは揃ったようだ」

「次の作戦に実行しますか？」

「ああ。この学園の教頭に助言を携える。後は例の人間達の作戦成功

を勧める」

「では、そろそろ行いますか？」

「勿論だ……。盗聴を設置しているし、この会話を奴らが流せばそれで

完了だ」

「わかりました……。私は先に様子を見てきます」

「頼んだぞ……」

「さて、本題へと移るとしよう。この学園にいるアルフ・フォー  
ドとつるんでいる

人物を見つけたさなければな……。破壊者であるあいつと一  
緒にさせては困る。

そこで、少し小細工を加えよう……。これで余計な手間が省  
けるからな」

ケース1 姿を変えてこの学園の生徒になります

ケース2 クラスは成績の良いクラスに所属する

ケース3 そこで生徒達を騙し続け、最後には破壊者と一緒にいる人物を見つける

ケース4 余談だが、万が一他に霊体がいるクラスに所属する事になれば交渉を心掛ける

ケース5 最終的な目的を実現させるため、自分の力で何とかする

ケース6 この任務を妨害、もしくは関わり（悪い意味で）を入れる者は全て排除する

ケース7 もし協力してくれる人間がいれば遠慮なく歓迎する

ケース8 自分に怠らず、冷静に判断しつつ作戦のプランを作成する

ケース9 煩わしい事態になろうが、この任務を遂行している限りは全て関係ない事とみなす

ケース10 任務が失敗するような行為は決して許されない

「これで作戦項目の定理が完成した。後は我々の雇い主から人物を送ってもらうだけ

だ。全ては世界の破壊者であるアルフ・フォードを抹殺するため……！」



## 第七十七問 俺と花火と後夜祭？

「マズいな……。随分と時間をロスした」

「校舎内にはいないしあいっらは一体どこに——ん？」

学校の外を探索していると、何か丸い物を発見した。

「見つけたか？・・・なんだ、ただの打ち上げ花火じゃないか」

「あ、恒例の締めに使うやつ？へえゝこんなところに保管してたんだ」

「意外に親切だよな」

3人が見つけたのは打ち上げに使用する花火の火薬だった。明久はそれを眺めるように見つめた。

「でも打ち上げ用の大砲みたいなのがないけど？」

「それは打ち上げ場所に設置してあるんだろ？」

「まあ一応花火は火薬の塊だし、寸前まで火の気のない所に保管しておくのが鉄則だろうな」

一騎が軽い補足説明をする。確かに花火は火薬の塊なので迂闊に触れると危険な

目に遭ってしまうのだろう。

「さすが試験校。お金あるね」

「関心してる場合か？そろそろ向こうも何か動き出——」

P r r r r r r ! P r r r r r r !

「もしもし?」

『見つけたぞい。さすがはムッツリーニじゃ。遠くまでよく見て  
おる』

明久が電話に出ると、秀吉の声が聞こえてきた。

「ナイス!それで場所は?」

『新校舎じゃ』

「そんなッ！？僕らが隅々まで――」

『違う、新校舎ではない。新校舎の屋上じゃ！』

「雄二ッ！！新校舎の屋上！」

すると秀吉の通達で、明久は雄二に双眼鏡（予備）を渡した。

「やべえッ！！あいつら、屋上の放送設備を準備してやがる！」

「なんだってッ！？」

「秀吉！今どこ！」

『部室棟じゃ』

雄二が双眼鏡で屋上を見渡すと、既に常夏コンビが放送設備を準備していた。

（部室棟からじゃ走っても5分はかかる・・・！）

「明久！そろそろ放送を始めるみたいだぞ！」

（くそ・・・！ここからでも同じくらいかかるしこのままじゃ絶対間に合わない）

い・・・。この場所から放送を止めるにはどうしたら――

――

万事休すかと確信してしまいそうになる一騎は何かを考えていた。すると、

「・・・・・・・・・・そうか」

「・・・・・・・・・・雄二」

「・・・・・・・・・・やっぱり、お前らも考えたか」

3人の考えが一致した。

「だよね。他に方法はないよね」

「そうだな。他に方法はないな」

「明久、後はよろしく」

了解。――アウェイクン  
起動！」

「夏川、そっちの準備は大丈夫か？」

「大丈夫だ。へへっ、これが流れりや俺達の逆転勝利だな」

「そうだな。これで受験勉強なんかしなくても——」

おッ！？（ガタッ）

「なんだよ常村。何をそんなに驚いて————ゲエッ!? マジかよッ!? (ビクッ)」

「とにかく伏せろおおッ！」

ドオンッ！！  
（花火の弾が爆発する音）

「外したぞ明久！もうちょい下だ！」  
「もうちょい下だね！」

明久は自分の召喚獣に打ち上げ用の大砲を持たせ、そこに火薬を詰め込んだ。

「大砲は急いで持ってきた甲斐があつたな・・・」  
「いけ、点火ッ！」  
「了解ッ！」

ドンッ！！（スピーカーを破壊した音）

「よしッ！スピーカーの破壊を確認ッ！！」

「花火って怖いなあ・・・」

すると明久は怖がるように呟いた。一応花火は遊ぶための道具ではないのだから

これは危険なのだろう。

「まだ放送機材が残ってるぞ！さっきより右にも一撃をくれてやれ！」

「おうッ！」

雄二は双眼鏡で状況を確認しながら明久に指示する。一騎は関心するように、

（明久が使う白金の腕輪。立会人がいなくても召喚獣を出す事が出来るなんて、

早速役に立ったようだ！）

白金の腕輪の能力をわかったようだ。するとアルフが、

「俺も機材の破壊に協力する」

「でもお前その状態では・・・」

「大丈夫だ。霊体状態でもあれを破壊するくらいの力は持ってる。俺に任せろ」

目を覚ますように一騎に尋ねた。一騎は若干不安気味だが、アルフなら何とかなり

そうだ。

「わかった。お前に任せるよ」

「ああ。手荒な真似はしない」

そう言い残し、アルフは今いる位置とは反対側の位置に移動した。

「サンキュ、アルフ」

一騎はアルフに礼を告げ、弾の補充作業に入った。

「次弾用意！」

「わかってる！いくよ雄二！」

「やれッ！」

そして一騎と明久は互いの思いをぶつけるように、

「決して邪魔はさせない！」

「俺達は何としても新しい設備を買わなきゃいけないんだ！」

「姫路さんを！」

「皆————いや、美波までを！」

「転校させるものかああああああああああッ!!!!」  
「

雄たけびを上げ、懇親の一撃を放った。これが、彼らのつたえた  
思いなのだろう。

「うわああああああッ!?!」  
「

ドンッ！（放送機材を破壊した音）

「やった！」

「いいぞ明久！！これで放送機材にも命中だッ！これで向こうは何も出来なくなった

はずだ！」

「後は学校が崩壊しない程度に——」

最後に止めの一発をぶち込もうと火薬を入れようとしたその時、

スッ・・・（火花が大砲に入る音）

ボッ・・・（中で火薬が燃える音）

ドンッ！（弾が勝手に発射される音）

「「うわあああああッ！！！」」

猛烈に弾が飛び上がり、次々と学校が崩壊されていく。

「あ……」

「………やべえ」

「……しまった」

「すまん、調子に乗りすぎた」

全ての元凶はアルフだった。すると、

「………貴様らあ………!!」

「「そこはだめえええええええッ！！！」」

鉄人が忍者のように背後から現れた。こうして鉄人との耐久マラソンが幕を開け、

学園祭の思い出は恐怖と苦痛と筋肉痛で埋め尽くされた。ちなみに途中で悲鳴の

ような声も聞こえてきたが、これはただの聞き間違えだろう。

「痛てて……。随分と殴られたよ……」

「くそッ、鉄人め。あの野郎は手加減を知らないのか」

「俺もこんな悲惨な目にあったのは始めてだよ……」

3人は鉄人に殴られた痕をおさえるように呟く。無論、相手が鉄人だったから

顔の面積が数倍以上になるくらいに殴られたのだから。

「でも、あれだけの騒ぎを起こしたのに嚴重注意ってなんか拍子抜けだね」

「ババアが手を回してくれたんだろっな」

「これで学園長も助かったみたいだし、感謝する気は微塵もなくなつたよ」

一騎が自分を謳歌するように答える。ちなみに早く解放されたのには教頭室の修繕

という名目でガサ入れが始められたのも大いに関係してるのだから。これで学園長も

徹底的に教頭を調べられるようだ。

「む、やっと来たようじゃな。遅かつたのう」

「……………先に始めておいた」

後夜祭が開かれてる場所へ到着すると、そこに秀吉とムッツリー

二が座っていた。

「ああゴメンゴメン。ちょっと鉄人がしつこくてさ」

「お主ら、もはや学園で知らぬ者はおらんほど有名になってしまったからのう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

「・・・・コイツと同じ扱いは不本意だ」

「それは僕の台詞だよ・・・・」

「こうなったのも、どっかの誰かのおかげだ・・・・」

秀吉が蔑む目で3人を見つめると、一騎はアルフの頸動脈をおさえるように呟く。

でもアルフはわざとやったわけではないが、一騎達からしては十分に不本意な真似

だ。こうやって会話をしていると、

「あれだけやっておいて退学どころか停学にすらならないんだもの。妙な噂が流れて

当然でしょ？ウチだって気になるし」

「ん、ありがと」

美波が心配するような顔で3人にジュースを渡した。明久は礼を言いながらジュースを飲みだす。すると、

（このオレンジジュース、ちょっと苦いな……。さては安物を買ってきたな）

少し怪しげな顔でジュースの味を確かめた。美波は一騎の隣に座り、叱るように答える。

「全く、物事には限度というものがあるでしょ」

「悪気はないけど、あいつらを止めるにはそうするしかなかったんだ」

「一騎も言い訳を言わないの。これじゃアキみたいにバカが移っちゃうでしょ？」

「美波……、咄嗟に僕の事を侮辱してなかった……？」

すると妙にバカにされた気がする明久が泣きじゃくっていた。少し間を置き、

「そういえば今日の売り上げはどうだったの？」

2日目の売り上げの確認を美波に尋ねた。

「そうね。凄いつて程じゃなかったけど、たった2日間にしては結構な額になった

んじゃないかしら」

聞かれた美波は売り上げ金額が書かれてるノートを明久に渡す。

「ふむ、どれどれ……？」

一騎と雄二も売り上げ金額を確認する。すると、

「この額だと、机と椅子は苦しいな。畳と卓袱台がせいぜいだ」

「うーん……。やっぱり出だしの妨害が痛かったよね」

「設備を買い換える資金は壊した校舎の弁償で殆ど消えたしな……」

大分苦しい表情でがっかりしてしまった。これほど稼げたが、壊したおかげで

約7割が無くなったのだから仕方ないだろう。

「これじゃまた逆戻り状態になりそうだな・・・」

「本末転倒じゃのう」

「もうどうにもならないね・・・」

夢のシステムデスクを購入する希望を諦めたその時、

「すいません、遅くなりました」

後ろから瑞希が走ってくるように到着した。

「あ、瑞希。どうだった？」

「はいっ、お父さんもわかってくれました！美波ちゃんの協力のおかげです！

それと、さっきお父さんとも話しましたし」

「え？」

「見に来ておったか」

「・・・・・・・・・・絶望的」

瑞希の言葉で一瞬ショックを受けてしまう明久達。すると、

「お父さんが、『ここに通うなら勉強だけじゃなくて体力もつけなきゃダメだぞ』って」

「つまり・・・！」

「それと、『良い友達を持ったな』って！」

瑞希が父親が言っていた言葉を満面の笑みを浮かべながら皆に告げ

た。

「・・・・・・・・・・」

一騎と明久が一旦皆を見つめた後にこう答えた。

「うん、そうだね！」

これは、彼ら二人が思う友達のありがたみなのだろう。平和な後夜祭はまだまだ続く。

第七十八問

清涼祭編エピソード

俺と花火と後夜祭？

瑞希の転校が阻止された事により、益々盛り上がる一騎達。すると瑞希は

明久に一つ尋ね事をした。

「あ、吉井君・・・」

「・・・？」

明久は一度首を傾げながら見つめる。動揺してるような顔をする瑞希は迷わず、

「・・・すいません。飲み物を貰っていいですか？沢山お話したら喉が

渴いちゃって」

「あ、うん。どうぞ」

「ありがとうございます」

飲み物を要求した。平然とジュースを渡す明久に礼を言う瑞希はそのままジュースを飲みだした。すると、

「あ・・・ッー!!」

突然、美波が驚き隠さず瑞希がジュースを飲みだす所に暴発した。

「ん？どうかしたの美波？」

「もしかしてこれ、美波ちゃんでしたか？」

美波の隣に座ってる一騎と、平然と飲んだ瑞希が尋ねる。美波はもったいぶるように、

「そ、そういうわけじゃないけど。その・・・」

言い訳を食口にしてしまう。明久も便乗するように尋ねた。

「美波も飲みたかったとか？」

「飲みたかった・・・？そ、そうね。瑞希、悪いけどウチも一口貰っていい？」

「あ、ごめんなさい。全部飲んじやったんです」

念のため、美波が要求するが既に瑞希が全部飲んでしまったようだ。

「新しいの貰ってきますね」

「・・・・・・・・新しいのじゃ意味ないじゃない（ブツブツ）」

すると、美波は突然何かを呟くような声で悔しがってた。彼女は一体何が気に入らないのやら・・・。

「俺はちよつと、新しいお菓子でも買ってくるよ」

「そうだね。すぐに無くなったら意味ないしね」

一騎は新しいお菓子を購入するため、一旦席を外した。

「それにしても、今日は色々あったな」

「確かにな。お前が無茶してくれるくらいに色々あったな」

少し道を歩いてると、一騎とアルフが今日の事を振り返るように会話していた。

「ぶっちゃけ、召喚大会も無事に勝ち抜けたくらいだ。何かとびつきり良い物」

を買っておこうかな」

「俺は霊体のままでは食べ物を使う事が出来ない。だから時々俺に交代しろ」

「全く、お前は・・・」

呆れながら道中へ出ようとする、

「うわぁッ！（ドンッ）」

「きゃあッ！（ドンッ）」

突然誰かにぶつかってしまった。その主は、

「み、美波・・・？」

「一騎・・・。まだこの距離だったの・・・？」

顔を赤くしている美波だった。二人は慌てて聞いてみるが、どうも落ち着かない

様子の方だった。

「ちょっとアルフと話しをして。それよりどうしたの？」

「実は一騎に伝えたい事があるの・・・」

すると美波が一騎に近づくように言葉を紡いだ。一騎は少し焦ってしまいが、

何とか普通に対処出来る状態になった。

「何が言いたいの？」

「昨日、変な連中から助けってくれた時に一騎が連中の一人をいたぶりつけた事

だけど・・・」

「……………。あれは正直悪かったと思う。でも俺は、ある出来事と同じような

現象を想像してしまったんだ……」

少し沈んだ空気になってしまふ。だが、一騎には自分なりの気持ちを理解してる

はず。でも、

「俺は昔、悲惨な過去を背負ってきたんだ……」

これだけは告げておかなきゃいけない事があつた。美波は悲しむような目で一騎

を見つめてしまふ。

「悲惨な過去……………」

「そう。俺が小学生の時から起きたんだ。ある出来事がきっかけ……………」

「アキから聞いたんだけど、そのある出来事って一体……」

ある出来事に着目した美波が尋ねてみる。しかし、

「……………。そればかりは美波————いや、誰

にも言えない

んだ……………」

「……………。か、一騎……………」

一騎の言葉では到底彼女には告げる事が出来なかったようだ。

「……………。一つ気になるが、お前はそある出来事で昨日のような事をやって

しまつたわけだな？」

「その通りだアルフ……。具体的に言えば昨日のはそれとほぼ同じような事なんだ」

試しにアルフも問いかけていく。一騎は更に暗い表情をとりながら説明を続けた。

「じゃあ話を戻そう……。ある出来事のおかげで、俺は先生達に問題児とみなされ

てしまい、俺のクラスメイト達にも馬鹿にされたんだ。幸い、俺の事を庇ってくれ

たのは明久と瑞希だけだった……」

「じゃあ担任の先生は……」

「担任の先生くらいなら俺の話を聞いてくれたはず……。しかし案の定。先生すら

信用してくれなかったんだ。誰も俺の事を見放すように……」

とても理不尽のような気もするが、一騎が言う限りこれは事実である。つまり今彼が

説明した通り、ある出来事が起きたおかげで教師全員が問題児と断定したのだ。そ

うされた拳句、校長や教頭までもその事を鵜呑みにしたに違いないだろう。

「そんな……。それじゃ、中学の時は？」

「同じような雰囲気だった。小学校を卒業し、明久と瑞希とは違う中学に通う事に

なつたが……。俺と同じ学校の奴らがその噂を広めた……。やがて、俺は

中学でも皆に馬鹿にされっぱなしの毎日だった……」

更に話の内容が貧相的になってしまふ。それは何もかも、絶望的だった。

「嘘でしょ……？まさか一騎にそんな苦しい事があつたなんて……」

「だが、中学を卒業して無事に高校に進学出来た俺はあまり知ってる人のいない

学校にしようと思ったんだ。そしてここにいれば誰も俺を馬鹿にする苛めなんて

やってこないだろうと思った。……けど、それも長くは続かなかった……」

「え……？まさか……」

「そう、そのまさかだよ……。喜怒哀楽な表現が出来なくなるくらいにまた

起きてしまったんだ」

一騎が引きこもるような顔で再度話しを続ける。今の一騎の状态に、美波は悲しみに、

しか感じる事が出来なかった。

「再びある出来事が起きてしまい、俺はまた絶望を味わう羽目になった。別クラス

の人達に噂を広め、もうここで勉強していく気力——いや、もう生きていく

気力すら無くなったんだ……。一時期不登校になってしまった事もあつたが、つい

に自殺を図ってしまおうと考えてしまったんだ。俺はこれ以上この世に生きてたら

また取り返しのつかない過ちを欠かさず犯してしまうっという勢いで自殺を考えた

が、出来なかった。頭を抱え込む俺は一体どうしたらいいのか・・・それは何時

何処で何を考えるべきなのかって・・・」

（そんな・・・。。一騎にそんな辛い過去があつたなんて・・・いつも一緒

にいる一騎とは全く違う印象に思える。ウチはただ一騎の背中を見てるだけでこ

んな思いを背負う羽目になってしまっっていう事・・・？そんなの嫌よ・・・ッ！

それなのに・・・、あの時ウチの事を守るって言ったのに昨日の出来事で

一気に激変して苦しみや凹凸的な態度に変わってしまったというの・・・？ただ

一騎を心配してやろうと必死で考えてたのに・・・、ウチはどうしたら・・・（）

ついにはショックを受けてしまうような感情を抱いてしまった美波。今の一騎には

悲しみや絶望を想像する事しか無理のようだ。すると、

「・・・・・・・・。。ごめん美波、こんな悲惨な事ばかり話して。そろそろ終わりにしようか」

「え？」

いきなり何の前触れもなく、一騎が普通の顔になりながら美波に言葉を紡いだ。

「だって、ずっとこればかりを話してたら美波が悲しむと思っ  
さ」

「それ・・・、自分を甘やかしてる言い方じゃないの・・・？」

「違うよ。甘やかしてるんじゃない。その信念を断ち切ろうと思  
ってるだけさ」

「・・・なるほど。だいたい理解した」

後ろで聞いてたアルフが頷くように答える。自分の信念を断ち切  
ろうと答える一騎

だが、まだ不完全のようだ。でも苦しい過去を背負うのもこれが  
最後なのだろう。

「続きはまた今度にしよう。これ以上話しても意味はない。そろ  
そろ買いに行かなきゃ

いけない。明久達が待ってる」

「そ、そうね。早くしないと心配させられちゃうしね」

「あれ？美波も一緒に行くの？」

「うん。ちよつとね」

二人は夜道を歩きながら会話を続ける。すると美波は、

「（ギュッ）これから、ウチの事を守ってくれる？」

「・・・？それってどういう――」

「それはまた悪い人達が来たらの話。それと、ありがとう」

一騎の手を掴むように礼を告げた。今の彼女はとても嬉しそうな  
状態だ。

「昨日助けた時のお礼？」

「その通り。さ、早くお菓子を買いに行きましょう！」

「ちよつと美波！そんなに手を引つ張らないでよッ！」

こうして、一騎の信念が僅かに断ち切られた。まだ完全に無くなつたわけではない

が、これから先どんな困難が待ってるかはまだわからない。

「おはよう一騎」

「あ、おはよう美波」

翌日、元気よく登校する一騎と美波が朝の挨拶を交わしながら会  
う。

「学園祭はもうあつという間に終わっちゃったね」

「でも楽しい思い出にはなっただと思うわ」

「勿論、瑞希が転校せずに済んだしな」

「アルフも嬉しそうだな。瑞希がいなくならなくて」

「……………。俺はちょっと用事を思い出した。後で学校に行  
く」

するとアルフが若干顔を赤くしながら一騎から離れてしまい、ど  
こかに行ってしまった。

「何よアイツ。急に飛び出しちゃって」

「まあいいじゃないか。どうせすぐに戻ってくるだろうさ」

「余程恥ずかしかったようね…………」

美波は去っていくアルフを疑うような目で眺めた。これはただの  
照れ隠しのつもりだろう。

「あ、そういえば今朝は職員室に呼ばれてたんだった。一騎、悪  
いけど先に行くね」

「美波が呼ばれるなんて珍しいね。俺は先に教室に行ってるからね」

急用を思い出した美波はすぐに一騎と別れ、一足先に学校へと向かった。

「——きよ、一騎」

急いでる途中に聞こえた声は、朝の喧騒で遮られた。

## 第七十八問

### 清涼祭編エピローグ

### 俺と花火と後夜祭？（後書き）

これで清涼祭編は無事に完結です。これからの彼らの活躍に期待して下さい。

さて、これからの予定ですが、しばらくオリ話詰めしようと思います。一部アニメ話も入りますが、なるべくオリジナルを求めます。

それでは、興奮場面や恋愛場面などが非常（とはいいがたいが）に気になるこの作品をこれからもよろしくお願い致します！

## 第七十九問 俺とアルフとある日常？

朝方から本格的な朝へと変わり小鳥達の囀りが聞こえ始めた時、ある少年は

太陽の光により目を覚ました。

「・・・・・・・・。もう朝か・・・」

片目を開きながら時計を見て時間を確認する。すると、

「遅刻だぁぁぁぁぁッ!!」

既に時刻は7時50分を過ぎたところだった。

「・・・何を今朝から騒いでたんだ」

「仕方ないだろ。寝坊してしまっただからな」

彼の名は千藤一騎。今年の春に文月学園に転校してきた少年である。そして彼の

横にるのはアルフ・フォード。別名は世界の破壊者であるが、今はそれぞれの

目的のために一緒にコンビを組んでいる。だが今の彼は破壊する計画すら忘れかけてるらしい。

「学校に遅れるとマズいのか？」

「当たり前だ。遅刻したらたまったもんじゃないからな」

道を歩きながら会話をする二人。アルフはあまり現在の環境を知らないで少しずつ

学んでいるらしいが。

「早くしないと遅れてしまう。そろそろ行かなきゃ」

「全く。無茶をしてくれるな・・・」

一騎は時間を確認しつつ、駆け足で学校へと向かった。

「よし、ギリギリセーフ。それにしても今日も賑やかだなこの教室」

「おはよう一騎。珍しく遅刻寸前だったね」

「明久おはよう。やけに急いでたから朝食は取れなかったよ・・・」

「

そんな一騎に挨拶をしてくれたのは同じクラスメイトの吉井明久。クラスの間では

一番の――いや、もはやこの学校の生徒全員にバカと言われているようでしか

も観察処分者の異名を持ってるようだ。

「僕もほぼ取ってないに等しいよ。塩水を軽く二杯飲んだだけだよ」

「まあ昼休みになつたらまともな食事が出来るさ。だから今は我慢するしかないよ」

「あ、うん・・・」

（まともな食事って言ったら恐らく姫路さんから弁当を食らう羽目に  
てんぱつ

なるかもしれないじゃないか・・・）

卓袱台に横たわりながら恐怖の時間を棄権してしまつそうになる  
明久。すると、

「全く、何を怖がってるのよアキ。またバカをやらかしたんじゃないの？」

「違うんだ美波。そういう美波こそ明らかに言動が綻びれてるんじゃないの？」

「まあいいわ。おはよう一騎」

「おはよう美波」

「って言つた挙句にスルーされたし・・・」

明久の行動に疑問を抱いたが、すぐに無視したのは唯一の女子の一人である

島田美波。ドイツからの帰国子女であり、日本語は全く読めないが数学は得意

である。そして一騎とは幼馴染であり、ポニーテールと綺麗な脚が特徴の女の子だ。

「今日はやけに空腹状態ね」

「寝坊したから朝食は食べてないんだ」

「ったくもうっ、しょうがないわね。そしたらお昼ご飯少し分けてあげる」

一騎の隣の席に座る美波は、教科書を出しながら言葉を紡ぎ出した。

「え？本当にいいの？」

「いいのよ。今日の弁当作りすぎちゃったし」

引き下がるような一言を喋ってしまふ美波。一応、一騎には優しい態度をとってる

のであまり愛情表現がうまくいかないのだろう。

「良かったじゃないか一騎。弁当を分けて貰えるなんてな」

「雄二、何を！？」

すると一騎を褒めるように労ったのはFクラスの代表である坂本雄二だった。雄二が

ニヤニヤするような顔で見つめてくるが、一騎には理解出来なかった。

「ま、お前に幸運が訪れたなって言いたかったただけだ」

「別に幸運つてわけじゃないけど・・・」

「そうよ坂本！ただ一騎がお腹空いたら困るから分けてあげようと思っただけよ！」

「ったく、お前らは余程似合いの——」

「余程何よ」

雄二は何かを当てはめようと言葉を一旦途切れさせる。だが、

「——いや、何でもない。ただのジョークだ」

「あははは・・・わざわざ褒めてくれてありがとう」

「一騎、それ坂本がウチをバカにする事を肯定してる言い方じゃないの？」

「違うよ。これはただのお礼だよ」

美波が卓袱台にヒビを入れるかのように拳を突き出す。だが一騎は普通の表情で

答えた。もし明久だったら八つ裂きにしてたのだろう。

「とりあえず、もうすぐHRが始まるから席についたらいいんじゃないの？」

「そうだな。俺もそろそろ戻るか。また後でな一騎」

時計を確認した一騎が雄二を促した。とりあえずは一騎に何かを与えてやろうとする

美波の気持ちをありがたく一騎は受け取ったようだ。

（俺もしばらくはここにいらとうしょうか・・・）

アルフの場合は暇にならないために一騎のところに滞在し、居眠りをするみたいだ。

「もうお昼か。時間が経つのは早いな」

「俺もそう思う。今の時代は時間が経つのが早く感じる」

昼休み、一騎とアルフが卓袱台に横たわりながら互いに心境を語ってた。すると、

「一騎、一緒に弁当食べない？」

「うん。丁度昨日の作りおきしておきた弁当があるし、屋上で食べよう」

美波が自分の弁当を持ち歩きながらやってきた。一騎も自分の弁当を持ちながら

移動をしようとした。

「一騎、僕も行くよ」

「ワシも一緒に行くとするかのう」

「明久と秀吉も行くの？」

そこへ明久と秀吉が自分達の弁当（明久は塩水が入ったペットボトル）を持ちながら

歩いてくる。多分、彼らも一緒に食べたいようだ。

「雄二とムツツリー二もくるらしいから、皆で食べようよ」

「そうか。皆で食べた方が一番いいか」

「仕方ないわ。今回は皆で食べましょう」

張り切って屋上へと移動を開始しようとする、

「あの、私も一緒にさせていいですか？」

「ひ、姫路さん？」

大きな弁当箱を持ったこのクラスの清涼剤——つまり唯一の女子の一人であ

る姫路瑞希が尋ねてきた。瑞希が持つてゐる弁当箱の大きさからして皆に分けるため

に用意してきたようだ。

「瑞希も一緒に食べたいようだね」

「もう一回あの料理を食べたい」

一騎はともかく、アルフは予想外に嬉しそうな表情になってた。

この前食べた弁当

が余程気に入ったのだろう。

「お前が喜ぶなんて珍しいな」

「五月蠅い。俺だって嬉しい時は笑う」

「アンタは本当に気に入ったようね、瑞希の料理」

「あれはもう、プロを超越するような味だった」

最後にアルフが閉めの言葉を告げた。そして一騎達は昼食を摂取するために、屋上

へと移動した。雄二とムッツリーニは後からくるようで、久しぶりに皆で食事をする事になったようだ。

## 第八十問 俺とアルフとある日常？

「そろそろ食べるとしようか」

「そうだな。こうして皆で食事するのも久しぶりだな」

「そうじゃのう。あれはあれで苦労したからのう」

「……………今日こそは無事でいたい」

「あれ？皆、何が苦労したの？」

一騎が明久達に質問すると慌てるように反応してしまう。

「違うんだよ！こつちの話だよ、ねえ雄二！」

「当たり前だ！大した事は何もねえよ！」

必死に弁明をする明久と雄二。しかし、

（そういえば一騎は姫路さんの料理の味は知らないんだった。ここで巻き添えを

食らわせるわけにもいかないし……）

明久は何かに気づいてしまった。一騎はまだ瑞希の手料理を食べ  
てないので味は  
まだ知らない。

「あの……、そろそろ食べましょうか？」

「あ、うん！そうだね！早く食べようよ！」

「全く、何も弁当を持ってきてないアキはすぐはしゃぐんだから」

「失礼な！僕だってちゃんと塩水はもってきてあるじゃないか！」

弁当というよりはペットボトルを持ってきただけである。

「今日もかなり張り切っちゃいましたので、皆さん沢山食べて下さいね」

「俺も貰っていいかな？」

「はい、どうぞ」

すると一騎はその化学兵器を紙皿に盛り、食べる分だけ盛った。だが瑞希は何も

気にせずに微笑みながら答えた。

「俺も後で食いたい。俺の分も取り分けてくれ」

「言われなくてもわかってるよ」

アルフが獣のような目で見つめると一騎は呆れながらアルフの分も取り分けた。

（どうする雄二・・・？これじゃ死人が増えるだけだ）

（どうだかな・・・？一騎はどうなるか知らないが、一騎と一緒にいるアイツなら

大丈夫だ）

横でアイコンタクトをしてる明久と雄二が何かを伝え合おうとしている。すると、

（そうか！彼なら全てを食べてくれるはずだ！）

（そうだ。アイツなら姫路の料理なんておやつ感覚で食べてくれるに決まってる）

二人は大事な事に気がついた。アルフはかつて、瑞希の弁当を食べたが何も気に

せずに全て平らげた覚えがあるので今回も頼めば全て食べてもらえるはずだが、

「ちなみに、アンタだけ独り占めしたら許さないわよ」

「何を言ってる。誰が俺一人が全て食べると言った？」

現実通りにはいかなかった。このままでは餌食になってしまうのかと断定してしまう

明久達だが、何とかこの状況を粘る事にした。

「一騎、ウチの弁当から先に食べない？」

「そうだな……。まずはそうしようか」

美波が試しに一騎を誘った。すると一騎は嬉しそうな顔で答えてくれた。

「へえ、結構彩ってるね美波の弁当は」

「べ、別にそこまでもないわよ……（／／／）」

一騎の一言で美波はうなじってしまう。寧ろ、褒められて嬉しかったのだろう。

「じゃあ、これ食べる？」

自分の弁当の中から玉子焼きを差し出そうとする美波。他にもハンバーグや焼鮭な

ど色々なおかずを豊富に揃えている。今日の彼女は結構頑張ったのだろう。

「早速頂こうかな？」

「いいわよ。一騎、あーん」

すると美波は一騎にサービスフラグ的な行動をしてきた。これを見た明久は、

「何い！？一騎が、あんな良い思いをされるなんて・・・ッ！？僕もあんな感じに

されたいなあ・・・」

「何を言ってる明久。お前だって姫路にやってもらえばいい話じゃないか」

落ち込んでしまうような表情で一騎を見つめていた。雄二が便乗するように答えて

きたが、明久にとっては地獄のようだ。

「え？」

「どうしたの一騎？食べないの？」

「い、いや食べるよ」

一騎も驚いてしまうような態度になってしまふ。だがここは断るべきではないので

何とか食べるしかないようだ。

「そう。それじゃ、あーん」

「（モグモグ）」

玉子焼きを口にした一騎がじつくりと味わいながら玉子焼きを頬張った。

「どう？美味しい？」

「美味い！こんな美味しい玉子焼き食べるのは滅多にないよ！」  
「本当？良かった・・・」

すると一騎は凄く嬉しそうに答えた。美味いと答えてくれた一騎に美波はホツツと  
するように微笑んだ。

「・・・もう我慢出来ん」

「待てよアルフ。一体何をするんだ」

「いや、お前の体を借りるのも時間の問題だ」

アルフがもう我慢の限界になり、一騎から一目散に離れていった。  
すると、

「やむをえない。コイツの体を使うか」

「・・・！」

明久の体の中へと入ってしまった。そしてそのまま明久の意識が無くなってしまう。

「明久！？」

「悪いな。俺は腹が空きすぎて我慢の限界だ。さっさと飯を食う」

雄二が慌てて明久を呼ぶが、既に意識はアルフが洗脳していた。

「アルフ、お前また・・・」

「いいだろ。何も食わなければ俺は成仏してしまう」

「あの、明久君は大丈夫ですか？」

明久に乗り移り、化学兵器を口にしようとする瑞希が心配して

しまつように尋ねた。

「大丈夫だ。ただ眠ってるだけだ。そこまで心配する必要はない」  
「そうですか……。それならいいですけど」  
「では、早速頂こうか」

ようやく食事を取る事が出来たアルフは早速、化学兵器おにぎりを頼張つた。

すると、

「今日の米は美味しいな」  
「そうか。瑞希も料理が上手だな」  
「ありがとうございます。まだ沢山ありますのでどんどん食べて下さい」

普通に一個丸ごと平らげた。アルフは遠慮えずにどんどん化学兵器おかも食べ、  
お茶も一杯飲み干した。

「お前の料理を食べてると元気が沸いてくる。あとこれも美味しいぞ」

「所で今思ったけど、お前が食べてると明久にも満腹感を得られるのか？」

「おそらく、そのようだな」

一騎が試しに問いかけるとアルフは唐揚げとミニトマトとポテトサラダを纏めて食べ

ながら答えた。こうすれば栄養が足りない明久にとって救い手になるはずなのだが、

「おい、それが本当なら明久がこれを食べてるって事になるぞ・  
・？」

「確かにそうじゃのう。明久が食べてるって事になるようじゃな・  
・」

「・・・・・色んな意味で最強になれると思う（コク  
コク）」

雄二と秀吉とムツツリー二が身振いをしながら推測をし始めた。

「いいじゃない。アキが瑞希の料理を食べてるって事になるから  
一石二鳥でしょ」

「アルフも良い事考えるじゃないか」

「俺はそのつもりではなかったんだがな・・・」

だがアルフはそのつもりではなかったらしい。すると一騎は自分の弁当を取り出した。

「さて、俺も自分の弁当を食べるとするか」

「へえ〜。一騎も彩りいいじゃない」

「いや、それほどでもないさ」

美波に褒められ、一瞬蹲ってしまふ一騎。でも平然と保ちながら弁当を食べ出した。

「幾ら作りおきでも味は結構良いな」

「あのさ一騎。今度ウチに弁当を作ってくれない？」

「どうしたの美波。急に顔が赤くなったりして」

すると何の前触れもなく美波が尋ねてきた。尺ではあるがここは思った事を言うべきだ。

「何でもないわよ・・・」

「？別にいいけど」

「本当？ありがとう。その代わり、ウチも今度一騎のために弁当を作ってあげるから」

「良かったな一騎。島田に作ってもらえるなんてな」

「何だか照れ臭いな・・・」

更には雄二にも褒められ、益々緊張気味になってしまっ一騎。すると、

「ッ！アルフ、お前今俺の分の紙皿を持ってた拳句に全部食ったろー！」

「悪いな。美味すぎて美味すぎてつい」

「ついじゃないだろッ！！折角俺も瑞希の弁当を食べれると思ってたのに！」

極めつけにはアルフが一騎の分の化学兵器を全て平らげた。こうして、楽しい(?)

昼食タイムが終わり皆が満足したようだ。ちなみに残った化学兵器はアルフが全て

食べつくしたのは一目瞭然である。

## 第八十一問 俺とアルフとある日常？

「さっきのお前の行動、結構えげつなかったぞ」

「悪く思うな」

そしてあつという間に放課後を向かえ、一騎とアルフは愚痴りながら廊下

を歩いていた。

「一騎、今から帰る所なの？」

「え？そうだけど・・・」

すると教室の方から美波が歩いてきて、一騎に尋ねてきた。一騎は少し迷ってしまう。

「あれ？美波も一騎と帰りたいの？」

「もしかしてアキも・・・？」

「・・・？これって」

同じく教室から出てくる明久が美波に尋ねてきた。どうやら目的が同じようだ。

「一騎はアキと一緒に帰ろうとしたの？」

「いや、俺と明久だけではなかったけど。それとも美波も一緒に帰りたいの？」

「ウチはそういうわけじゃないけど・・・。ただ一騎が教室から出てったから」

つきり一人で帰ろうとするのかなって思って」

「要するにお前はコイツの事が気になるだろ？」

「アンタは黙ってなさいよッ!!」

しかめっ面で答えてくるアルフに怒鳴りつける美波。多分、言われたくない事情があるのだろう。

「じゃあ今日は僕と一騎と美波で帰らない？」

「何を言ってるのよアンタはッ!？」

明久が平然と提案するが、美波は焦ってしまうように混乱してしまふ。

「別にいいじゃないか。たまにはこういう事を望もうよ」

「もういいわ。ウチも一緒に帰る」

「落ち込んだじゃダメだよ。僕がまるで全ての元凶かのように思われちゃうから」

しかし現実には甘くなかったが、明久と一騎は何とか美波を誘う事に成功したようだ。

「それじゃ、僕はこっちの道だからまた明日ね」

「うん、明日また会おうね」

「さよならアキ」

途中の交差点辺りで明久と別れた一騎と美波は別に道を歩いていた。

「ところで、お前何か反省するべき事はないのか」

「なぜ俺がお前に謝らなければいけない？」

「どうするもこうするも、さっきの昼食でお前が俺の分のおかずを根こそぎ食った」

のが何よりの証拠だ。どうしてくれる、折角瑞希が作ってくれ

た料理が食べれると  
思ってたのに」

すると一騎はアルフにさっきの昼食の事について反省会らしき発言を口にする。でも

アルフは無関心になっていた。

「許してやりましょうよ一騎。コイツも瑞希の料理が美味しかったみたいだし」

「美波、あまりコイツを甘やかさない方がいいよ。すぐ調子に乗るから」

「一騎も疑いすぎ。たまにはコイツに免じて許してあげましょ」

今にも恨みをぶつけようとする一騎を軽く叱る美波。一応病み付きになってしまった

ような雰囲気なのでそこは仕方ないだろう。

「・・・俺には愛情表現が到底理解出来ん・・・」

「何か言ったか」

「・・・・・・・・何も言っていない」

蚊が鳴くような声で呟くアルフが気になった一騎が話しかけるが、すぐに後ろを振り

向いてしまったようだ。

「そろそろウチも帰るね」

「その道を通つ直ぐに進むの？」

「うん。一騎もなるべく疑わないようにね」

次の交差点辺りで別れようとする美波が、片目を瞑りながら一騎

を労った。

「あ……。うん」

「そこは頷くのか……」

「じゃあ、また明日ね。さよなら一騎」

そして美波は何も違和感を覚えず一目散に帰ってしまった。

「さて、俺達も帰るか」

「とりあえず、礼くらいは言わせておこう」

「お前が礼を言うなんて珍しいな」

「そういう時もある。これからよろしくな」

「それ、前にも言っただけだったか？」

「改めてという意味だ。文句あるのか？」

「全く、お前はな……」

右の道に曲がりながら一騎が呆れてしまう。こうして、一騎とアルフのとある1日が終了した。

「ではこれより、我々の重要計画を実行する。諸君、準備はいいか？」

「『了解しました、上司』」  
マスター



## 第八十二問 THE MUJUN

「千藤、ちよつといいか」

「なんですか西村先生？」

ある日、一騎は休み時間の間に鉄人が職員室に来るようになつてきた。

「実はこの間のお前の日本史の点数だが・・・」

「はい、それがどうしたんですか？」

鉄人は俯きながら考え始める。だがこの前の日本史の点数は結構高かつた筈

なので特に問題はないと思うが。

「ちよつと訂正部分があつたんだ。本来なら少し点数が低いはずだ」

「それはどういう意味ですか？全く検討もつかないんですが・・・」

「斬新な態度で問いかけてくる鉄人に首を傾げてしまふ一騎。なぜなら・・・、

「この問題の答えだが、『西岡新太郎』って書いてあつたが」

「それで正解じゃないですか？」

「いや、一部不正解だ。本当の答えは『中岡新太郎』だ。これは坂本竜馬とともに

暗殺された人物の名を答えよっていう問題だな。お前も少しは勘違いしてたようだな」

一部の問題が不正解だった事だ。どうやら一騎もミスを犯してしまったようだ。

「まあたった一問間違っても大して点数も変わってないようだ。

Fクラス男子唯一の

真面者だな」

「俺はそんなに真面目者ではないですけど・・・」

「存外、誰にも喜ばれるくらいの知名度はまだまだのようだな」

「お前は黙ってる」

鉄人に珍しく（↑ここ重要）褒められた一騎。アルフは特に关心もしなかったようだ。

「さてと、今日はどうしようか」

「どうするもこうするも、そろそろ時間がなくなるぞ」

昼休み、一騎とアルフは新校舎側の廊下を歩きながら会話をしていた。するとそこへ、

「どうしたの一騎君？どこに行こうとしていたのカナ？」

「あ、愛子？」

Aクラスの工藤愛子と遭遇し、チラ見されるような目で見つめられる。

「いや、ちょっと暇だったからここを歩いてただけで」

「もしかして、ボクのスカートの中を見たいと思ってたりして」

「待つんだ愛子！俺はそんな変態な趣味など————ってそおいッ！？」

いきなり自分のスカートを捲り始める愛子に驚く一騎は鼻血を放

出してしまった。

「大丈夫だよ。ボクは普段スパッツ履いてるから」

「君は一体何を言いたいんだ・・・」

倒れてしまった一騎に笑いながら弁明する愛子。更にそこへ、

「か、一騎君！？大丈夫なの！？」

「・・・大丈夫さ、これくらい」

秀吉の双子の姉である木下優子がやってきた。一騎が噴出した鼻血に戸惑い

ながら優子が心配する。

「ちよつと愛子！一騎君に何をしたの！？」

「ボクは別に何もしてないけどね」

「今おもいつきスカートを捲ろうとしただろ」

「アルフ、お前も何か言ってくれるのか？」

アルフも愛子に対抗するように問いかけてきた。すると愛子は悪戯をするような態度で、

「キミもボクのスカートを见たいのカナ？」

「お前スカートには興味ない。それより俺達はそんなに構ってあげる余裕などない」

「アルフ少し言いすぎだぞ」

「一騎君も大分賸けをしてるみたいだね。いつも一緒にいるからという理由カナ？」

「ちよつと愛子！？俺はアルフを賸けた覚えは何もないから！？」

更に混乱状態へと陥ってしまう一騎。アルフも呆れながら首を振っていた。

「愛子からかい過ぎよ。唐突だけどあまりそんな発言したら周りに迷惑かけちゃうわよ」

「わかってるよ」

「ところでどうして一騎君は鼻血を出したのかしら？」

「え・・・ッ！？そ、それは・・・」

優子が一騎の鼻を見つめながら尋ねてくる。すると一騎は必死で目を逸らそうとする。

「ひょっとして、何か嫌らしい事を考えたんじゃないでしょうね・・・ッ！」

「先程コイツは奴のスカートを捲ろうとした時に噴出した鼻血なんだ」

「おいアルフ！何を勝手に・・・!!」

「なるほど・・・。よくわかったわ」

ところが、アルフが説明をすると優子は殺人的な笑顔で一騎を見つめてきた。

「一騎君」

「ゆ、優子・・・？もしもし？」

「一騎君」

「どうしたの？そんなに俺に近づいて」

「一騎君」

「ねえ、お願いだから俺の話を聞いてよ。これじゃあ俺が致命的な痛みがくるんだよ？」

「一騎君」

「・・・・・・はい」

「・・・・・・こっちに来て」

一騎は天真爛漫な笑みを浮かべる優子に攀られ、お仕置きされたのはもはや言うまでもなかった。

「今日は矛盾ばかりな1日だったよ・・・」  
「俺もここまで面倒になるとは思わなかった」

帰りのHRが終わり、ようやく解放された気分になった一騎とアルフ。

「明日は学校がないからのんびり寝る事が出来る」  
「それが、そううまくいかないんだな」  
「そういう意味だ？」

アルフが首で黒板に示した。一騎は黒板に書かれてる文字を確認した。

『明日は補習授業』

「とことん矛盾してらああああああッ！！？？」

どうやら一騎には幸運が訪れなかったようだ。

## 第八十三問 必殺、須川バリアー！

今日は土曜日だが、補習授業を受ける羽目になってしまったFクラス一同。

鉄人が黒板に説明を書きながら読み上げている姿に退屈な人物がいた。

「おい吉井、お前もここから脱走する気はないのか？」

「そういう須川君も結構怖気づいたような顔をしてるよ」

明久に小声で話しかけたのは須川亮だった。須川は卓袱台に横たわりながら

尋ねるが、鉄人が今授業してるので迂闊に行動は出来まいだろう。

「そもそも須川、授業を抜け出す事自体どうかと思うぞ。お前には面倒という

言葉しか存在しないのか」

「千藤に言われると否定出来ないな・・・」

一騎が訝しげに須川を見ながら説教らしき事を言う。すると、

「貴様らッ！何をこそこそと話してる！」

「な、何でもないです！」

鉄人が一喝を入れて叱ると、一騎が代わりに謝った。どうやら他人のためならこれ

くらいの事はお安い御用だ。

「全く、と言いたいがな。もう授業が終わる。今日のところをし

っかり頭に叩き込め

よ。それじゃ、余計に寄り道なんかしないように真っ直ぐ帰れよ」

すると鉄人がそのような事を告げながら教室を後にした。

「これでやつと終わったか」

「今日の須川君、随分とめんどくさそうな様子だったね」

「俺もこういう時にはなるさ。真面目にやれる千藤とは大違いだ」  
「だが、そんなに弱音を吐いてちゃダメだ」

再び須川に説教をする一騎。須川もそこまで野暮な人間ではないが、流石にここ

まできたらどうにかするしかないようだ。

「一騎よ。今日はどうするのじゃ？」

「あ、秀吉。今日はどうしようか……。大した予定もないし」

「秀吉、それなら僕と一緒に――」

「待て明久よ。そうやってまたワシを女として扱おうと思っていなかるうか？」

ここで秀吉が一騎に尋ねると、明久が再び秀吉を女として扱おうとする発言を

言おうとした。でも秀吉が一足先に遮った。

「そんなわけじゃないか。今よりずっと乱暴な美波とは裏腹に、秀吉の方が

人一倍に僕の膝間接が分離してしまう程痛い痛い痛いッ！  
！」

「誰が今よりずっと乱暴よこのバカッ！！」

颯爽と現れた美波に間接を極められる明久。一騎も必死で美波を押さえ、明久を解放させた。

「冗談だよ美波。許してよ」

「アンタの言葉なんて信用出来ないわ。どうせウチをバカにしようと言っただけでしょ」

「吉井はあまり悪気はないぞ。少しそついう事を控える」

「須川がそんな事言うなんて珍しいわね。仕方ないわ、ここは――」

美波が須川の言葉に免じて何かを言おうとすると、

「お姉さまぁぁぁぁッ!」

「ちよっ、美春!?!どうしてここにッ!?!」

突然次元の狭間から現れたかのようにDクラスの清水美春が美波に抱きついてきた。

「決まってるじゃないですか。今日はお姉さまと一緒に禁断の果実に染め上げる約束

です！美春は今日こそお姉さまと幸せな1日を過ごそうと思つてましたっ！」

「誰がアンタと一緒に染め上げるもんですかッ！！ウチは純粹に男子が好きなのよ！」

「いや、それは嘘です！お姉さまは美春の事を愛してるはずですよ！」

次第にエスカレートしていく二人の争い。すると、

「ちょっと待ちなよ清水さん。美波が嫌がつてるじゃないか」

「久しぶりだな美春。随分と元気だな」

「・・・！その声は・・・」

一騎とアルフが美春を止めるために声を掛けた。

「そうだ、俺だ」

「・・・？アルフさん・・・ですよね？」

「本来の俺はこの姿だ。気に入ってくれるかどうかは美春次第だ」

アルフが堂々と美春に霊体状態の姿を見せた。

（おい！これじゃマズいじゃないのか！？アルフの考えが心底わからない・・・）

「か・・・」

「か・・・？」

美春はアルフの姿を見て一瞬言葉を失うが・・・、

「可愛いですうううッ！！！（ギュッ！）」  
「離せ。息苦しくなる」

アルフの姿が気に入り、即座に抱きついてきた。

「ちよつと美春！？アンタこんな奴が可愛いと思ってるの！？」  
「何を言ってるのですかお姉さま！？この姿のアルフさんは凄く可愛いですよ！？」

お姉さまと同じくらいに！」

「ウチとコイツを一緒にしないで！！！」  
「そろそろアルフを離してあげなよ。苦しがつてるよ」

一騎がアルフに指摘すると、美春はすぐに離してあげた。そして、

「アルフ、大丈夫か？」  
「これくらい平気だ。お前に心配される程野暮ではない」  
「もしかして・・・（ジー・・・）」  
「・・・？どうして俺を見るの？」

美春は一瞬疑うような目で一騎を見つめ始めた。一騎は言葉が出ない程戸惑ってる  
ようだ。

「貴方、アルフさんとお知り合いですか？」

「知り合いって言うよりは相棒的な存在かもね・・・」

「俺とコイツは一応コンビだ。何かあったら俺達で何とかする」

「というよりは殆どお前が余計なヘマをしてくれてるがな・・・」

蔑むように一騎が呟く。すると明久は、

「ねえ美波。清水さんは何を言ってるの？」

「アキはわからなくていいわ。一騎とアイツの事で話してるのよ」  
「・・・？」

この会話に関して疑問に思ったが、美波は冷酷な態度で明久を黙らせた。

「それだったら・・・」

「どうしたの・・・？」

「美春とお友達になってくれませんか・・・？」

「・・・？ 彘？」

そしてまた、このような事が一騎に訪れたのであった。

「あの、お名前は？」

「千藤一騎だけど・・・」

「じゃあ・・・、早速名前で呼んでいいですか一騎君？」

「ちよつと待つんだ。幾ら何でもそれは早過ぎる。アルフが気に入ったのはわかるけど

これは流石に――」

一騎は焦りながら必死で弁明する。すると、

「美春、それはやりすぎじゃないの？ウチはちょっと一騎が可哀想に思えてくるわ」

「美波・・・？」

「お姉さまがそこまで望むのなら美春と早速保健室へ——」  
「須川バリアーツ！！」

飛び掛る美春から逃れるために、須川を盾にした美波。

「島田！俺はなぜ・・・」

「どきなさいこの不潔で貧乏臭い豚野郎！！」

「ぎゃああああッ！！」

そして須川は美春にボコボコにされ、美波の礎となったのであった。

「安らかに眠れ、須川・・・」

「須川君、君の事は忘れないよ・・・」

「お主らはそれで良いかのう・・・？」

そして横では一騎と明久が敬礼しながら須川を見送った。秀吉の  
場合は呆れる

事しか出来なかった。

「使えるわコレ・・・（ニヤリッ）」

もはや美波はこれが気に入ったらしい。

「ねえ清水さん・・・、俺はどう返事したら・・・」  
「今度からは『美春』って呼んで下さい」

「つて話を聞いてよ!」

「美春はアルフさんという貴方が羨ましくてたまらないです。これからは互いに

良いお友達でいきましょう!」

「無論、俺は大歓迎だ」

「アルフさん・・・」

アルフの言葉で美春は頬を赤らめた。余程好きになったのだらう。

「一騎君、お礼が言いたいです」

「今度は何を――」

「(チュッ)」

すると、一騎の頬から何か柔らかい感触が伝わった。そう、これは・・・、

「・・・・・・・・・・。今、何をした・・・・・・・・?」

「ちよつ、美春・・・?」

「決まってるじゃないですか。これは美春なりの軽い愛情表現です」  
す

これはまぎれのなく、美春からのキスだった。一騎と美波が固まった顔で美春を戦慄してしまう。

「あ、そろそろ行かなきゃいけませんね」  
「どこに？」

「それは言えません。折角お姉さまと一緒にいられると思ってましたけど、今日は

これで帰らせて貰います」

「一騎・・・？大丈夫・・・？」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

明久が恐る恐る問いかけてみるが、一騎は一向に固まった状態になつてた。

「それではまた会いましょう、美春の王子様♪」

そう言い残し、美春はFクラスから出てった。

「美波、これは違うんだ・・・」

「いいのよ一騎。美春はあくまでコイツの事が気に入りつつ一騎が気に入ったのよ」

「色々な意味で疲れたよ・・・」

一騎の疲労な日々はまだまだ続く余地はまだまだあった。

## 第八十四問 予期せぬ来客

「え？この学校にまた転校生が来るの？」

週明け月曜日。一騎が咀嚼するような反応で答えてくる。雄二は腕を組み

ながら説明をする。

「そうだ。Bクラスに一人、Cクラスに一人、そしてEクラスに一人来る

みたいだ。それと別の学年にも一人くるらしい」

「一体どんな人達でしょうか？」

雄二の説明に上を向きながら呟く瑞希。すると明久と秀吉が教室に戻ってきた。

「雄二、向こうに転校生達が廊下を歩いてるみたいだよ」

「ワシも少し拝見してみたが、大方怪しい様子ではなかったようじゃ」

「それで、どんな人達だった？」

一騎が立ち上がりながら明久に尋ねる。もしもの事があれば前もって情報を

得るのが常識かつ瞬時に対応が可能である。

「えっと・・・、ちょっと静かな人と少し恐そうな人と普通に真面目な人と最後は

結構可愛い人だったよ――」

「・・・・・・・・・・アキ。それは本当かしら・・・・・・・・・・？」

「い、痛いよ美波……。僕のファニーボーンが砕けそうだよ・・・？」

明久のファニーボーン（というよりはファニーボーンとそれ以外の脊髄色々だ）を

砕く勢いで握り締める美波が著しく問いかけてきた。寧ろそれをやったら痛いどころ

では済まされまいだろう。

「つまり結構可愛い人という事は女子が一人っというわけか。それで残りは男子か」

「それを聞く限りでは怪しい気配はしないようだな」

アルフは一騎の言葉を聞いて何かを推測した。どうやら転校生達から憎悪を感じる

のではないかと推測してるようだ。

「……明久君がそこまで可愛い女子と仲良くなりたいたいという欲望が凄く

わかります……。ここは私達が天罰を与えるべきですよね……。？」

「そのようね瑞希……。このわからずやにはたつぷりと遊んであげるわ……。？」

そして瑞希も明久の処刑幫助に介入していた。もはや今の彼女らはヤンデレの

オーラしか感じられない。

「さて、俺もちょっと確認しようかな？」

「一騎、俺もついでに行く」

「雄二も気になるの？」

「とりあえず、どんな奴らかを確認したい。それが最優先だ」

一騎と雄二はどんな人達なのか、それを確かめるために一度教室を後にした。

「ねえ、もしかして転校生だよね？」  
「どこから来たんだ？」

一方、新校舎側の廊下では他の生徒達が転校生達に質問攻めをしてるようだ。

「悪いな、今は構ってる暇はないんだ」  
「オラッチもちよっと忙しいんだ」  
「……………ごめんなさい。後でまたお話ししよう」

「あ、いたいた」  
「どうやらコイツらが転校生みたいだな」

数分後に到着した一騎と雄二は、早速転校生達の顔を拝める。すると、

「おや、君達は一体……？」  
「見かけねえ顔だな」  
「……………誰なの？」

転校生達は首を傾げるように問いかけてきた。一騎と雄二はそれ

ぞれ自己紹介をしていく。

「俺は千藤一騎」

「坂本雄二だ。よろしくな」

「僕は悠木明日香だ。よろしく」

「オラツチは伊達祐吉だ。よろしくな！」

「……………私はアンジェリーナ・レイス。『アリス』って呼んでね」

続いて自分達も自己紹介していく転校生達（以後は個人の名前で表記する）。

一騎は最初にどのクラス所属なのかを尋ねてみた。

「君達はどのクラス所属なの？」

「僕はCクラスだよ」

「オラツチはEクラスだ」

「……………私はBクラス」

明日香と祐吉とアリスはそれぞれで答えた。雄二は頷きながら何かを考えてた。

「どうしたの雄二？」

「いや、何でもない。こっちの事だ」

（あの女子が根本のいるクラスに所属するのか……。だが根本はどんな姑息な手を

使ってもおかしくはないだろうな……）

「済まない、そろそろ僕達は自分達の教室に戻るよ」

すると明日香が自分の時計で時間を確認しながら答えた。何かが  
気になった一騎は  
ある事を尋ねる。

「そういえば3年の方でも転校生は来てるの？」

「勿論さ。名前は聞いてなかったけどね」

「そうなんだ・・・。そこまでは聞けなかったんだね」

「別にいいんだよ。また会えば聞けるから」

一騎が言い終えると、3人は自分達の教室へと戻った。

「一騎、俺達も戻るぞ」

「あ、うん」

雄二に促され、一騎も教室に戻る事にした。

「それで、転校生達に会えたの？」

「会えたよ。結構優しい人達だったよ」

教室に戻ると、明久が最初に尋ねてきた。一騎は平然と返答すると、そこに邪悪な

気配が漂ってきた。

「……………さて。それじゃ瑞希、このヴァカに厳しいお仕置きをさせておかなきゃ

ね……………」

「……………そうですね美波ちゃん。きっちりいたぶってあげますから……………」

「・・・・・・・・・・HAI?」

既に時は遅かったのであった。

「ちょっと姫路さん・・・?美波・・・?僕が一体何をしたって  
言うのさ・・・・・・・・?」

ねえ聞いてる?お願いだから僕の話—— いやああああ  
ああああ・・・・・・・・」

こうして、吉井明久は不祥事かつ無条件で女子二人に天罰を喰ら  
ったのであった。

この後生き残れたかどうかは不明である。

「ふふふ．．．。そろそろ作戦を実行させるタイミングだな。これで奴は死ぬ。」

我々の妨げとなるアイツは何れ死ぬ・・・」！

## 第八十五問

バカテストの解答詰め合わせ？

### 【問題 英語】

『問 次の英文を読み、以下の問に答えなさい』

andy I'm sorry about being  
late.

mary Was there anything?

andy I guided the man.

mary Was there a steady child?

andy No. There was an old man  
who had come to this town

for the first time.

mary I see.

「この時、なぜandyは待ち合わせに遅れたのか答えなさい」

【千藤一騎・姫路瑞希の答え】

「お爺さんが道に迷っていたのを案内してたから」

【教師のコメント】

「そうですね。andyはこの町に初めて来て道に迷っていたお爺さんを案内していた

為に遅刻したと言っていますね。皆さんにも、是非このように困っている人達がいたら

助けてあげられるような人になってもらいたいと思います。千

藤君、姫路さん、大変

よく出来ました」

【土屋康太の答え】

「産気づいてる妊婦を助けてあげたいから」

【教師のコメント】

「残念ながら妊婦という単語は一度も出てきていませんね」

【吉井明久の答え】

「産気づいたお爺さんを助けてあげたいから」

【教師のコメント】

「だからといって無理矢理出てきた単語を入れられても困ります」

【工藤愛子の答え】

「妊婦さんに（ピー）をしていたから」

【教師のコメント】

「andyがそんな事されたら凄く困りますのでそういう答えは

出来るだけ控えて下さい」

【島田美波の答え】

「書きたくありません」

【教師のコメント】

「おや？どうしたのですか？少し期待をしていた先生をかなりがっかりさせる言葉

を言うなんて。正直島田さんは真面目で育んでる姿が結構猛々しいと思ってたの

に凄くショックです。今後またこのゆな言葉を発言してしまえばいずれは社会的

に大きな支障を―――」

【アルフ・フォードの答え】

「お爺さんが産気づいた妊婦に胸がないだと蔑んだ」

【教師のコメント】

「前言撤回。すいませんでした、島田さん」

## 第八十六問 俺と気持ちと新たな帰国子女

現在は昼休み。一騎は昼食をとらずに廊下を出ようとした。

「どこに行く?」

「ちよつと転校生の・・・、えーっと確か名前は・・・」

少しだけ考え込む一騎。その内の一人の名前が思い浮かび、それを口にした。

「アンジェリーナさんだっけ・・・?」

「ああ。確かあの女はアリスって呼んでって言うてたな」

アルフが頷きながら閃いた。一騎もポンツと手を叩くように言った。すると、

「どこに行くの一騎?」

「あ、美波どうしたの?」

美波がピコピコとポニーテールを揺らしながら一騎に尋ねてきた。普通なら恨む

ように聞くんが、一騎が相手なのでここは冷静に対処してきたようだ。

「どうしたも何もどこに行こうとしてるのよ」

「ちよつと転校生達の所へまた行こうとしたけど悪かったかな?」

「ウチもちよつと気になってたけど、今日は別に行くつもりはないわ」

ところが、美波は気になってたけど行くつもりはないようだ。

「そうなんだ。それじゃ、俺はもう行くからね」

「うん。あまり遅くならないようにね」

一騎とアルフは教室を後にし、廊下へ出て移動した。

「あ、いたいた」

「・・・・・・・・私に何の用事なの？」

一騎はBクラスから出てくるアリスを発見し、歩きで近づいてきた。

「実は君だけでもいいから質問をしたくて。時間があればいいからちよつといいかな？」

「・・・・・・・・いいわよ。二人が忙しそうなら私だけでも答えてあげる」

「ありがとう」

アリスは微笑むように一騎の質問を鵜呑みにした。一騎は一つ目の質問を問いだした。

「君は外国育ちなの？」

「・・・・・・・・それは中学を卒業した頃まで。元々私は日本生まれで日本育ちな」

「つまりどういう事？」

「・・・・・・・・私の両親は外国人で昔に日本に暮らし始めてその数年後に私が生まれた。

私が幼稚園の頃まで日本に滞在して、それから外国に戻って元の生活にまた戻り始めた」

アリスの答えに頷く一騎。彼女の両親は都合により、日本に滞在

していたようだ。

「それから外国の学校に通うようになったの？」

「……うん。友達も沢山出来ていつも楽しい毎日だったの。それから月日が経って

今年の4月に日本にまたやってきた」

「つまり君って……」

「……私は外国人の名前だけど帰国子女って事になるわ。そもそも外国の人が

そう言われるのは滅多にないと思うけど」

思わぬ言葉で一騎は言葉を失ってしまう。勿論、一騎は彼女の言葉を理解したつもりだ。

「どうして君の両親は日本に憧れてたの？」

「……それは色々あってね。話したら長くなるけどそれでもいい？」

「……別にいいけど」

少し戸惑った顔になってしまふ一騎だが、彼女の話しを聞く事にした。

「……私の両親が元々住んでた国の政治や国会の議論と社会ルールに

怒りにきてまともに生活を送る事が出来なかったの。貧しい生活でもいいか

ら日本ならば何もならず済むと思ってたわ。日本以外の国は差別や残虐行

為などがあまりにも傲慢で苛立ちに思えると核心したのが私の父親。もはや

本能的に否定している状態なの。国の大統領の減らず口にもついていけない

と言ってそれから日本に暮らし始めたの。母親も同じ気持ちだった。私が幼

稚園の頃まで日本にいたけど、次は元いた国とは別の国に移籍する事になっ

てね。ここでも日本と同じ平和な政治なのだろうと父親が思い込みそこに滞

在したのが新たな始まりなの」

「ねえ、どうして君の両親は日本以外の国にまた滞在する事になったの？」

「・・・・・・・・それは父親が働いてる会社の経営者が別の国でも一つ会社を経

営してたのがきっかけでそこでも働くようになったわけ。母親もそこで働く

事になり、その代わり私はちょっと寂しい気分になってきたの。両親が仕事

で全く食事を取る事が出来なく、いつも私独りぼっちでご飯を食べる毎日だったわ」

「今の俺も同じだな・・・」

「・・・・・・・・え？あなたも・・・？」

アリスの言葉に便乗するように一騎が告げる。そして深呼吸しつつ、一騎は答える。

「具体的に言えば両親の仕事と言うよりは・・・、本当に俺一人だけなんだ。

数年前に両親は不慮の事故で死んでしまったんだ。何も別れの言葉を言わ

ずに・・・」

「……………あなたは一人でも大丈夫なの？」

「一人だとつらい事もあると思う。けど、今の俺には友達がいる。友達と一緒に

ご飯を食べると、人一倍美味しい。それに嬉しい気分にもなる。それに一緒に

遊んだり勉強をしたりと色々あるんだよ。あとは大切な人とも一緒に過ごす時

間も掛け替えない温もりだと俺は思う」

「……………そうなんだ。私の場合はちよつと苦しい思いをしていただけど、何

となく理解出来た。それじゃ続きを話すよ。中学に入った時、その会社は世界

的に有名になり年収1億5千万にも及んだの。だけどある事件でその会社は倒

産してしまい、私が高校に入る時に再び日本に戻ってきたの。そして私の両親

は日本でも働く会社を失い、また貧しい人生を送る羽目になってしまったわ

……………それから私の両親は何も言わずに私から見放してしまい、結局残され

たのは私と生活費と家にある両親の形見だけ」  
「何て可哀想なんだ」

「仕方なかったの。両親は自分達の事しか考えてなかったの」

アリスが説明を続けると、

「あ、もうそろそろ午後の授業が始まりそうだ」

「……………本当だ。いつの間に時間が経ってたんだ」  
「俺はもう教室に戻るからね」

「……………うん。私に質問してくれてありがとう」

一騎は自分の時計を見て時間を確認した。するともう時期午後の授業が始まりそんな時刻だった。一騎はアリスと別れ、Fクラスへと戻っていったのだった。

「そういえば結局他の二人に話しかけられなかったな」

「仕方あるまい。都合が悪かったただけだ」

放課後になった頃、座りながらアルフと会話をする一騎。すると、

「ところでお前はどこへ行ってた？」

「少し散歩していた。ちょっと初対面の人物と顔を会わせるのは尺ではないと思ってな」

一騎がアルフの頭を掴みながら尋ねてきた。アルフも少し動揺していたようだ。

「さて、そろそろ帰るか」

「今日は何もやる事もないようだな」

立ち上がる一騎とアルフが背伸びをしながら答えた。どうやらまともに転校生の一人

であるアリスと会話を出来たようだ。

「．．．．．本当にここに世界の破壊者はあるのかしら．．．．．」



## 第八十七問 可愛いは正義 by 明久

ある日の昼休み。秀吉は自分の鞆の中から飲み物を取り出そうと探っていた。

「・・・むむむ」

「どうしたの秀吉？」

「それが・・・、飲み物を忘れてしまったようでの・・・」

疑問に思った明久が秀吉に尋ねてみた。すると明久は、

「なら、これを飲みなよ秀吉。炭酸で良ければ」

「それは構わぬが・・・、良いのか明久よ？」

自分の飲み物を代わりに差し上げた。秀吉は少し聞いてみるけど、

「勿論、秀吉のためなら何だってするよ！」

「明久・・・」

明久が嬉しそうに秀吉を敬った。無論、友人のためなら何でもするみたいだ。

「で・・・では、遠慮なく頂こうかの」

「うん（ニヤリ）」

秀吉は遠慮なく明久から貰った飲み物を開けようとした。すると、

ボンッ！（空き缶ごと破裂する音）

「わっ、わわっ！！」

突然、空き缶ごと破裂してしまった。それと同時に飲み物が全て秀吉にかかってしまった。

「・・・うぐ。すまぬ明久。折角お主の好意を無駄に・・・」

濡れてしまった秀吉に驚いてしまう明久と横に座っていたムッツリーニ。これは結構ヤバいのかもしれない。

「・・・明久？」

「・・・！！（ゴパッ！）」

「ムッツリーニ！」

瞬間、ムツツリーニの鼻から大量の鼻血が噴射してしまった。明  
久は直ちに

応急処置にかかろうとするが、

「大丈夫かつ！すぐに手当てを・・・、ムツツリーニ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・我が人生に・・・・・・・・」

「！喋っちゃダメだ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・悔いなし（ガクッ）」

「！！ムツツリーニイッ！！！」

既に手遅れだった。この後、ムツツリーニはどうなったか不明で  
ある。

「・・・で、なぜワシがこのような女子おなこの格好をせねばならん  
じゃ」

「濡れた服着てたら風邪ひくよ」

「ウチの洋服だけど木下なら何とか着られるでしょ」

「幸い、今はこれで凌いだ方が良さそうだし・・・」

数分後、秀吉は美波の私服を借りつつ着用している。しかし秀吉  
はどうも納得いか

ない様子ようすのようだ。だけど明久と美波は頷くように答えたが、一  
騎は若干緊張気味

な反応で答えてしまった。

「そつ、そういう事ではなく！」

「まあまあ。もう着ちゃったんだしいんじゃない」

「そうよそうよ。似合ってるわよ木下」

（でも俺はちょっと秀吉が可哀想に思えてくるけど・・・）

微笑ましい顔で秀吉を褒める明久と美波の気持ちが理解出来ない一騎。すると、

「・・・あれ？でも少しサイズが大きいかな？」

明久はある事に気がついた。チラチラと秀吉の方へ振り向きながら確認すると、

「だばだばの服もまた・・・、ひつ、秀吉・・・ッ」  
「お・・・おい！」

突然襲い掛かるような体勢へと変更した。つまり秀吉が着てると（美波の私服）  
少しだばだばになっていたという事だ。

「・・・アキ（ざわっ・・・）」

「・・・何でしょうか美波さん・・・？」

「ウチが太ってるって言いたいのか!?」

「い、いや・・・」

「そうなの!? そうよね!? そうなんだ!!」

その時、美波が物凄い勢いで明久に怒鳴りつけてきた。朦朧してしまう程に

怒鳴りつけた後に、

「木下もッ!!」

「なっ!?!」

「え！？秀吉にも追求するの美波！？」

秀吉にも威嚇するように聞きつけてきた。一騎はどこにツッコみ  
入れればいいのか  
わからなかった。

「仕方ないな。俺の私服だったら何とかなるはずだよな」

「一騎の普段着ってどんなの？」

「いたって普通だけど・・・」

それから秀吉は一騎の私服を借りて着用するために今は留守にしている。

「うち、一騎の私服姿ってあれ以来一度も見えないわ」

「僕は何度か見てるけどいたって普通だったけど」

美波は考え込むように秀吉の帰りを待つ。すると、

「すまぬ、待たせてしまったようじゃ」

「おかえり秀吉。って・・・」

秀吉が恥ずかしそうな顔で帰ってきた。なぜならば、

「秀吉！どうしてそんなに愛しい姿なんだ！」

「何を言っておるのじゃ明久は！？一騎の普段着ってこんなに大きいとは思わな

かっただけなのじゃ！」

「ごめん秀吉。それ、秀吉には大きかったかな？」

「そうじゃのう。一騎の服は大方Yシャツみたくボタンがついておつての。胸元を

開けるのは少し分が悪いのじゃ」

一騎の普段着がYシャツ姿に少し広めのジーンズなので秀吉には少し大きかったのだ。

「か、一騎！どうして秀吉にこういう服装にさせるんだ！？今す

ぐ――」

「だったら他の服ならあるよ？」

「本当か！？」

「多分、秀吉に似合うかどうか分からないけど一応貸してあげるよ」

「・・・助かった」

すると一騎は他の服装を貸してあげようと、秀吉に告げた。秀吉は嬉しそうに微笑んだ。

そして待つ事5分後

「なっ　な　な　何じゃこれはっ！」

「ごめんね。これしかなかったんだ。少し我慢して」

ところが、秀吉が驚愕するような発言で一騎の肩を掴みつつ叫んだ。今の秀吉の

服装はよくある真っ黒で全身を覆う服である。

「いつ、嫌じゃ！！何でっこんなッ！！」

「大丈夫、秀吉なら何を着ても可愛いよ！」

（・・・秀吉（木下）、ごめん）

彼らの愉快的な生活はまだまだ続く。

## 第八十八問      バカと勉強と日常茶飯事

「よし、やるぞー！」

ある日の放課後、明久は張り切った様子で勉強に育もうとした。

「どうしたんですか明久君？」

「やけに張り切ってるけどどうしたの？」

反応した一騎と瑞希が明久に尋ねてきた。すると明久は鉛筆を片手に持ち

ながら説明をする。

「いやー次の試召戦争に向けて僕も少しは勉強しようかと思ってるさ」

「偉いです明久君。良かったらお手伝いしましょうか？」

「俺も暇だから手伝うよ」

「ほんと？助かるよ」

（そもそも勉強なんかしたって何の意味があるんだ・・・）

一騎と瑞希が手伝いを求めると、明久は喜んで承諾した。しかし目の前で見てた

アルフには到底理解出来なかった。

「どこがわからないんですか？」

「いやー、それが何がわからないかがわからなくて――」

「それは要するに何もわからないと言ってると一緒だね・・・」

白紙のノートに文字を適当に書きながら答える明久。まあ彼の事だからどこを聞いてもわからないだろうけど、一応勉強する熱心は携えてるよ。うだ。

（つまらない。少し散歩でもしてくるか）

完全に下らないと断定したアルフは廊下へと出て行ってしまった。

（な・・・何よ瑞希ってば。抜け駆けしちやって・・・）

すると廊下からこつそりと覗き込んでいる美波が緊張するように見つめていた。

（一騎はともかく・・・、瑞希ばかり目立つなんて何か悔しいわ。・・・、

こうなったら。ウチだって、数学なら少しは自信あるんだから）  
妙に落ち着かない雰囲気的美波は思い切って教室に入ろうとした。

（よし、それじゃ行くわよ）

すると・・・、

「何してんだ島田」

「ッ！な、何でもないわよ！（そそくさっ）」

「そっか・・・？」

偶然的に遭遇した雄二に話しかけられ、急いで引き返してしまっ  
た。

「そこで何をしてる？」

「なっ！どうしてアンタがここにいるのよ・・・！」

「何をしようが俺の勝手だ。それよりなぜ教室に入ろうとしない  
？」

同じタイミングでアルフとも遭遇してしまうが、美波はしけた顔  
で恨みを晴らす

ようにアルフの頭を掴んで来た。

「そ、それはちよつと・・・」

「もしかして一騎の事が気になるのか？」

「バカ！今はそんな場合じゃないわよ！今は勉強をやるうとして  
るアキを手伝おう

かと思ってるだけで・・・。それがどうするか迷ってるのよ」

アルフを解放させ、若干蹲ってしまう美波。人には言えない本音  
があるものだ。

「だったらより自然な振りをすればいいんじゃないか？」

「自然な振り・・・？そうね。その方が勉強を教える事が簡単にな  
るみたいね」

「勉強がわからない明久に打ってつけの勉学をするべきだな」  
「まあね。とりあえずウチ、やってみる——」

アルフの言葉を鵜呑みしつつ、美波が気を引き締めて教室に入ろうとすると、

「どうしたのじゃ？」

「ッ!!き、木下……」

「ん？明久と一騎と姫路がどうかしたのかの？」

ここで秀吉にも遭遇してしまう羽目に。すると秀吉は一騎達を眺めるように美波の事情を理解した。

「おーいお主ら。島田が何か用があるようじゃぞ」  
「ち、ちよつとッ！」

「「「え？」「」」

気になったようなので早速一騎達を呼び出す秀吉。ところが、美波は緊張感を高ぶるように近づいてしまう。

「美波、どうかした？」

「え……あ……」。その——」

疑問に思った明久が美波に尋ねてきた。すると美波は深呼吸するように答えを告げた。

「べ・・・、別にアキと一緒に勉強したいなんて思っ  
てないんだからね!!」

「吉井~~~~」

「何でまたお前だけー!」

「判決!有罪!!死刑!!!!」

「ま、待つて!!僕が一体何を・・・・・・うわああ~~~~  
!!!!」

しかし、呆気なく異端審問会の餌食となつてしまつたようだ。

「明久君~~~~・・・」

「お前らはなぜ明久が有罪になるのかを傲慢に思えなんだッ!?  
何かごめん・・・」

後ろで見ていた一同は何も成すすべがなかつた。

「どうやらまともに勉強を教える事が出来なかったようだな・・・

」

廊下で見ていたアルフが首を横に振りながら呆れていた。



第八十九問 たったひとつの勲章と冴えたやり方

「いやああああああああああッ!!!!」

ある少女は叫んでしまう。そう、その原因はただ一つだった。

「まさか・・・、太・・・ッた・・・!!?」

これは今朝に起きた譲れない出来事であった。

（朝ご飯抜いたし、大丈夫よね・・・？）

空腹の状態を必死で保ちながら登校する島田美波は今朝の事を気にしながら我慢していた。  
すると後ろからダツシュしてくるようになんかがやってきた。

「おっはようございますうお姉さまぁー!!」  
「ぐッ!!」

美波に体当たりするように抱きついてきたのはDクラスの清水美春だった。勿論

彼女はその衝撃で受けた腹痛を堪えながらも起き上がった。

「ちょッ・・・美春！？急に抱きつかないでよ!!」

「・・・お姉さま」

突然無言になるように黙る美春は一旦言葉をとぎりつつ、

「太りましたね!？」

「なあッ!？」

と叫んだ。美波は明後日の方へ振り向くように、

「ききき気のせいじゃない・・・？」

と誤魔化しながら答えた。ところが美春には通用しなかった。

「ウソです!美春にはまるっとお見通しです!」

「何でそう言い切れるのかしら・・・？」

「だってホラ——（スッ）」

すると美春は美波のお腹をなぞるように触れ、極めつけにはこう答えた。

「波うってますわ・・・。お姉さまのおなか」

「そこは責めて凹凸があると言ってえええ!!」

泣きじゃくってしまう美波を気にする事なく美春は嬉しいがる。

（確かに最近ちょっと・・・。つい食べ過ぎたりしてたかも・・・

）

「美春、ホントはスレンダーな方が好みなんですけどオ、でもお姉さまがこうなる

って言うのなら・・・」

(こうなったら・・・)

結構ヤバそうな顔をしてしまふ美波はようやく、

「やってやるーじゃない！！痩せて痩せて痩せまくる地獄のダイエット作戦開始よ！！」

ようやくダイエットして痩せる事を宣言した。これこそが彼女が求める理想な体形なのだろう。

「美春はそのままのお姉さまでも愛しますわ！！」

ここで美春が余計な事を発言しようとする、

「・・・」

「あッ！！いやそうですね。痩せた方がいいですよ。美春もそ  
ちの方が好き

です。うん！頑張れ！お姉さま！！」

美波は固まるように振り向いた。すると美春はマズいと思い、必  
死に弁明した。

———こうして、島田美波の地獄のダイエット作戦は始まったのであった！

それはさながら脂肪と筋肉の電撃戦！その戦いは熾烈を極めたのだ！！

だが……、

「……全然減ってない……。何で……」

本人とて全く体重が減ってなかったのだった。

「どうしたの美波？顔が真っ青だよ？」

ここで偶然通りかかった明久が心配してくれた。すると、

ゴッ！（ストレートに明久の顔面を殴る音）

「ごめんアキ。ついうっかり」

「ついうっかり人を殴る！？そんな発想が・・・」

美波は不祥事に明久の顔面を殴ってしまった。ついうっかりやってしまった美波は、

「一体どういう教育を・・・」

「あッ！！減ってる・・・」

手に持つてるカロリー計を見て気分が爽快したような綻びで嬉しかった。

「減る！？何！？胸の話！？」

ガシッ（明久の身体を掴む音）

ゴッ！（そのまま地面に叩きつけた音）

「減ってる・・・!!」

再び明久を痛みつけたら、また喜ぶ美波。どうやら痩せる術はこれだったのだろう。

「何だよ！酷いじゃないか！！美波の事を心配して言ったのに！

！」

「そつか……。ごめんね……」

「意外に素直な反応！？あ、いやいいんだもう！」

しかし明久にはとてもえげつない行動だったようだ。

「僕に出来る事があつたら言つてよ」

「ホント！？」

彼女の悩みを解決したいようなので、明久が素直に答えてくれた。  
すると、

「ありがとうアキ！……じゃあ、聞いてもらえる？（ギュッ）」

「え！？僕そーゆー肉体言語はちよつと……」

美波は嬉しそうな状態で拳を握り締め、明久に近づいた。

——その後、

「やったわ！ダイエット成功よアキ！」

美波の地獄のダイエット作戦はこうして幕を閉じたのであった。

「全く、それならそうと最初からそういつてくれれば……。特別に僕のダイエット

方法を教えてあげたのに」

「それ単に食べないって事よね……。？」

それはただの塩と水で過ごす生活の事である。ここで女子を巻き込むわけには  
いかないようだ。

「・・・ホント、アキってば乙女心つてものが・・・」  
「（ぐううううう・・・）」

すると明久のお腹から音が聞こえてきた。それを聞いた美波はこんな事を言った。

「・・・ふふっ、じゃあ今日お礼にパフェでも奢ってあげるわよ」  
「ほ、本当に!?!マジッスか?!」  
「と言ってもまあ、ウチが食べたいってのもあるんだけどね・・・」  
ダイエット記念  
ってヤツ?

美波が発言した言葉の内の一つを聞いた明久はある事を想像してしまう。そして、

「か、勘弁して下さい・・・」

と土下座をしながら美波の誘いを断ったのだった。これこそ、たったひとつの  
勲章と冴えたやり方なのだろう。

## 第九十問 嘆きの恋心？

一騎がこの文月学園に転校してからもう1ヶ月半が経過した。だけれど一騎は

ウチの事を大切に思ってるらしく、アキや瑞希達も大切な友達と思ってるみたいだ。

約12年ぶりに再会したウチと一騎だけど、その幼い頃の気持ちはまだ残ってる

みたいで、いつまでも見守ってるばかりではないと確信したと思われる。ただ、ウチ

が気になっていそうなのはまた別の事だった。そう、また別の事が……。。。

「さて、今日は何をしようかな？」

「相変わらず暇人だな」

ある日の放課後、一騎は卓袱台に顔をついて寝ていながら呟いてた。ただどアルフ

が惨たらしく蔑んできた。

「一騎、放課後どうするの？」

「まだ考え中なんだ。美波も暇なの？」

すると美波がポニーテールを馬の尻尾のように振らせながら尋ねてきた。そこへ、

「邪魔するわ」

「あ、どうしたの優子？」

「ちよっと一騎君に用があつて来たの。少しいかしら」

「別にいいけど・・・。ごめんね美波、ちよっと留守にするよ」

Aクラスの木下優子が訪問しに来た。優子は一騎を呼び出し、一騎を促した。

「あ．．．、そう．．．」  
「．．．．．？」

突然美波がしゅんとした顔になる姿に首を傾げてしまふ一騎だが、心配をしながらも教室を後にした。

「．．．．．」  
「美波ちゃん、どうしたんですか？」  
「何か元気がないようだけど．．．」  
「．．．．．何でもない。少し一人にさせて」

美波の急な表情変化が心配になった明久と瑞希が尋ねてきた。だが美波は後ろを振り向きながら座り込んでしまった。

「．．．．．はあ。良いタイミングで一騎とまともに話せなかった．．．．．」

なぜかウチが一騎に話しかけようとすると他の誰かが割り込んでくる。これって

ウチが不幸だと告げてゐる事なのかもしれない。幾らはつきり話そ

うとするとまた誰か

が話題を変えてくる。無論、これは悪い意味ではない。ちゃんと良い意味の事だ。

だけど一騎はいざという時に限って全然ウチを意識してない時もある。罪悪感はない

けどちょっと寂しい。何だか結構心の傷を負った気分になりそう  
だわ・・・・・・・・。

「ただいまー。以外と早く済まされたよ」

「で、何を言われたの？」

「世界史の参考書を貸して欲しいって言われたけど」

数分後、一騎が教室に戻ってくると美波がすぐさま立ち上がり一騎の元へ近づいた。

「そうなんだ。それじゃ、今日はどうするの？」

「そうだな……。皆でどこかに行こうよ」

「面白そうだな。一騎の提案に乗ってやるよ」

「雄二はそう思うんだ」

一騎が答えると、雄二が腕を組みながら頷いてきた。多分こういう提案も良いと思うようだ。

「僕もそれで良いと思うよ」

「ワシも同行しても良いかのう」

「……面白そう」

ここで明久と秀吉、それにムツツリー二までもが一緒に頷いてきた。すると、

「一騎、ウチはちょっと……」

「？美波は行かないの？」

「い、いや！何でもないわよ！」

「では、私もご一緒していいですか？」

美波が蹲った感じで言葉を紡ごうとした。しかし一騎の反応で何も言えなかった。

そして益々盛り上がってきた所で瑞希も話に入ってきた。

「勿論いいよ。でも先生があまり寄り道しないようにって言うてたし、時間は

限られるけどそれでもいい？」

「いいよ別に。僕らはいつでも助け合う仲間じゃないか」

「そうだな。俺も鼻が高いと充分に——って翔子ッ！？いつの間に！？」

雄二が関心していると、背後から翔子がやって来た。

「……………雄二、今日は私と帰る約束をしたはず。それなのに……………」

「ちよつと待て！！俺はお前と帰る約束なんかした覚えはないぞ！？とにかく早く一人

で——ぎゃあああああッ！！」

「……………浮気は、許さない……………！！」

雄二に喋らせる間を与えずに翔子がスタンガンで雄二を気絶させ、魔王のように

雄二を連れ去りつつ教室から出てった。

「雄二も懲りないよね。霧島さんが怒ってるというのに」

「明久、それはもう雄二はいなくていいっていうフラグなんだけど……………」

「アンタ達、早くしないと日が暮れるから外に出るわよッ!」

「ちよつと美波! ? 急に僕の手を引つ張らないでよ!」

「・・・何だか美波の様子が変だな・・・」

明久の手から強引に引つ張る美波の姿を見た一騎が顎を当てながら呟いた。

．．．そうやって人の事を気にしないで話を進めて．．．  
一騎のバカ。

第九十一問 番外編 勝利の栄光は誰の手に!?(前書き)

少し本編を休載して番外編をやります。

第九十一問 番外編 勝利の栄光は誰の手に!?

|   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「 | 「 | 「 | 「 | 「 | 「 | 「 |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |
| ! | ! | ! | ! | ! | ! | ! |

「『そのアンパンは俺（僕）（ワシ）（私）（ウチ）のものだ  
（じゃ）（です）（よ）！』」

なぜこつなつたかというと、時は数分前に遡る・・・。

「ねえ雄二、一緒に購買に行かない？」

「そうだな。丁度込み合ってる頃になりそうだな」

「ワシも一緒するかろう」

「・・・・・・お腹が空いた」

「俺も久しぶりに購買の食べ物を買うとするか」

「でしたら私達も一緒に来ていいですか？」

「ウチも丁度購買に行こうと思ってたけど皆が行くなら一緒に行くわ」

昼休みになり、一騎達は皆で購買に行く話しをしていた。すると、

「その購買とやらは人が集まるのか？」

「それはそうさ。何せ学校で開いてる店だから」

「なるほど。食べ物や飲み物が売ってる所なら集まるわけか」

昼寝を終えたアルフが一騎に尋ねた。勿論、理解出来るように説明したのでアルフ

の頭に記憶したのだろう。

「そうと決めれば早速行こうか！」

「そうね。もたもたしてたら日が暮れるから早く行きましょ！」

「お主ら二人は張り切っておるのう」

「一騎と島田は案外良い——友達だろうな」

「坂本君、どうして言葉をとぎったんですか？」

「何でもない。思い込みが激しかっただけだ」

一足先に教室を飛び出した一騎と美波の姿を見た雄二が無邪気な顔で感心し

がちの反応をとった。雄二が想像する二人の姿は目に見えたのだろう。

「じゃ、僕らも行こうか」

「そうですね」

続いて明久達も続いて教室を後にして、購買へ移動した。

「結構人が並んでるな」

「ちよつと時間がかかりそうですね」

「僕もお腹ペコペコでまともに食事をとってなかったから倒れそうだよ」

購買へ到着した一騎達は人が並んでる列に並びながらカウンターを見渡した。

「これだけの人数ならだいぶ時間がかかるな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・待つしかない」

雄二とムツツリー二も退屈そうに列を眺めながら並び始めた。どうやら時間が

限られるまでの辛抱になりそうだ。

そして並び始めてから8分後

「やっと開いてきたか。というよりはそんなに時間かからなかったな」

「よし、早速何か選ばうか」

そしていよいよ一騎達の出番が入ってきて、それぞれ食べたいものに手を出した。すると、

ガシッ（皆が何かを手にした音）

「・・・・・・・・・・・・・・・・ねえ、手を離してもらえないかな？」

「それは無理だな。それに最初に手を触れたのは俺だからな」

「雄二も意地っ張りだね。僕なんか姫路さんと美波の手の力の餌食になってるというのに」

皆が一斉にあるものに触れ出したのだった。それは・・・、

「アキ、早くその手を離しなさい？折角アンパンが丁度あったのにどうして手を

離さないのかしら・・・・・・・・？」

「そうですね。僕だってアンパンを食べたかったのに」

「すまぬが、ワシも相伴したいと思つての」

「・・・・・・・・・・・・・・・・俺が先着」

たった一つのアンパンだった。皆は恨むように見つめ合いながら（ちなみに明久と



そして今に至る……。

「さあ、このアンパン争奪を賭けた戦いをしようではないか」

「よく言うよ雄二は。僕みたいに単純で純粋な考えではないようだね」

「よし、ここは純粋にジャンケンで行こう!!」

すると一騎が指を上を目掛けて指しながら発言した。こういう事なら素直に

ジャンケンした方が苦勞はしない。

「だよな。そうした方が速攻で決着がつくからな」

「いいとも!」

「わかりました!それなら手段は選びません!」

「容赦はせぬ！」

「ウチだって本気を出すからね！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・勝つのは俺だ！」

「行くぞ！せえの——」

皆が一斉に手を指し伸ばしたその時、

「じゃあ、これ一つ貰うよ」

スッ（アンパンを持ってった音）

既にアンパンが持ってかれた。そう、その本人は・・・、

「ば・・・」

「ば？」

「くくくあのかされババアああああああッ！！！！」

しわの多い老婆こと学園長だった。一騎と明久と雄二がアンパンを食べながら通り

過ぎる学園長に怒り狂いながら号泣してしまう。

「・・・・・・・・ダメだな、こいつらは・・・・・・・・」

後ろで見ていたアルフが頭を振りながら呆れていた。これは、ほんの些細な出来事であった。

## 第九十二問　嘆きの恋心？

どうして一騎はウチの気持ちを理解出来ないのだろう・・・。そのまま話を進めて

しまうし、ウチの事を心配してくれないし・・・。一体ウチはどうしたらいいのかしら・・・。

「明久君、最初はあそこに行きませんか？」

「僕はゲームセンターくらいの所なら大丈夫だけど、こういうアミューズメントパーク

はちよつと入りづらいかも・・・」

「・・・。いけなかったですか・・・？」

「あ、いや別に大丈夫だよ！ね、一騎！」

「うん、問題ないよ」

一騎達が寄り道したのは近くのアミューズメントパーク。瑞希はいかにも子供が遊ぶ

ようなゲームに指を刺し、明久を促す。すると明久が乗る気にならないような反応を

とってしまう。瑞希は寂しそうな感じの雰囲気になってしまいが、

明久は何とか弁明した。

「ここって随分人が来ているな」

「ここは結構人気のある所なんですよ」

一騎が周りを見渡しながら思った事を口にした。勿論、立ち寄っ

た所が人気だつたり  
する事もあるのは序の口だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（ブシャアアッ！！）」  
「ムツツリーニ！？」

するとムツツリーニが突然鼻血を噴射してしまう。明久は慌てて  
駆け寄ったが、

「ブルアアッ！！（ブシャアアッ！！）」

明久も鼻血を迸ってしまった。二人が見た光景は女性のパンチラ  
だった。

「お主らはいつもいつも・・・」

横で見ていた秀吉が呆れながら呟いていた。すると後ろに立って  
いる美波が、

「・・・ちよつと飲み物でも買ってくるね」  
「そうですか？お願いしますね美波ちゃん」

しゅんとした表情でそう言い残し、その場を離れた。

「美波・・・・・・・・・・？」

通りすがれて行く美波の姿を見つめる一騎が心配してしまうよう  
な雰囲気呟いた。

「はあ………。一騎って本当はウチの事どうでもいいのか  
な……」

自販機で飲み物を買った美波が他の所を周りながら呟く。感

情的な意味では

何もわかってあげられない状態に陥ってしまう彼女にはとても心の傷を負ってしまう。

「いや、元々はウチの責任よ。一騎の誘いを断ろうと思ったけど何も言えなくて

そのまま行く事になったのが原因じゃない……。でも断るのも何だか悪い気がする。

する。潔く一騎に謝らなくちゃ……。！」

その時、美波の中の何かが浮かび上がってきた。

ウチが最近気になってたのは、一騎の感情表現。悪い意味ではない。ちゃんと

した事だ。他人の思いやりをいかに増幅させるかの感情表現。それにより、皆が

欲求不満だった事がすっかりなくなってしまう。一騎がいるから皆が変わってき

たと思う。それはつまり一騎が見せる笑顔や優しさの事だ。一騎がドイツに滞在

していた幼い頃も、ウチが悲しい時に声をかけてくれた。本当は嬉しい気持ちだ

った。一騎なら誰でも接してくれるはず。

それは、綻びと明るさを表情を露にした心の温もりなのだろう。

「早く、戻らなきゃ……………」

「そういえば今思ったが、アミューズメントパークとは何だ」

「簡単に言えば家族と一緒に行くゲーム場だよ」

「ではこの土台は何だ」

「これはクレイニングゲームと言って――」

一方、一騎はアルフと一緒にアミューズメントパークを周りながら会話をしていた。

明久達とは一旦別行動してるようだ。

「んでこつちは――あ、おかえり美波。明久達なら今は――」

「一騎、ちょっと話したい事があるの。少しいいかしら」

「別にいいけど・・・」

すると美波が戻ってきて、一騎に告げて外まで連れ出した。

（一体何を話したがってるんだろう・・・？）

美波の手に握られながら歩く一騎が首を傾げながら思った。

## 第九十三問　　ウチと一騎と変わらない気持ち

美波に呼ばれて店の外へ出た一騎は何かに気がついた。

「美波、どうかしたの？何だか暗い表情してるけど」

「何でもない。ただ、あれだけは言っておきたいから」

（？あれだけはって一体なんだろう・・・？）

首を傾げつつ話を聞く姿勢に入る一騎。美波は深呼吸しながらも一騎に一言告げた。

「一騎、・・・・・・・・ごめん！」

「何が？」

「本当は・・・、一騎の誘いを断ろうと思ってたけど・・・。断つたら何か言われそう

で迷惑をかけてしまうと迷っちゃって・・・・・・・・」

「・・・要するに自分の気持ちをはっきりと伝える事が出来なかったんじゃないかな？」

「どういう事なの？」

美波の言葉で突然何かを語り始める一騎。彼女は逆に聞く側の立場になって

しまうように体制を立て直してしまう。

「俺が思うのは自分自身の気持ちを理解する事かもしれない。もし俺が美波に何か

を言う時に何も言わずにそのまま流れに沿って行動するというのはただ単に自意

識過剰な道に進んでしまうという咀嚼だと感じるんだ。あ、これは頼む時の話だよ」

「……………自分自身の気持ち」

「でもこれは例え話だから本当はどうなるのかはまだわからないけどね」

すると美波は頭の中で何かを思い出した。

（何だかちょっと悪い気がした……。一騎はただ皆でどこかに行こうと言っていた

けど、無意識で一騎を蔑んでしまった……。）

それと同時に、あの時の一騎の言葉も思い出した。

『誰かを思い続けるという気持ちを持って欲しい』

つまりウチを裏切らないというのが一騎の気持ち。それを巡回しつつ自分なりの立場

になるうとしてるのかもしれない。正直に事前に話せば一騎もわかってくれる筈だし、

何より友達思いのかつ元気で明るい男の子のような気がする。

そう、ウチにとって一騎は――

「だからと言って何も言わずにいたらダメだよ？ 今後、社会に出たらそういうのは通用

しないからね?」

「か・・・、一騎・・・」

軽く叱るように言葉を紡ぐ一騎に思わず頬を染めてしまう美波。それだけではなく

鼓動すらも早まってしまつように見つめてしまふ。

「勿論、頼りにするのは俺だけではなく皆で平等だよ——  
つて美波・・・?」

「(クスクス)」

すると美波は嬉しい仕草になりながらクスツツと笑った。何やら喜んでるようだ。

「一騎つて、色々単純よね。昔っから変わってないから」

「そ・・・、そうかな?」

「だって、一騎が迷子になった時だって皆で一騎の事を探してたんだからね。結構

苦労したのよ。見つけた後には泣いていたし」

「それだけは言わないで欲しいよ!? 恥ずかしいじゃにゃいか!」  
「?」

「今、言葉が変になってたわよ?」

恥ずかしい話を暴露された一騎が焦ってしまうように動揺してしまふ。

「あの時は本当に恥ずかしかったよ・・・」

「ウチはありのままの自分でいられる一騎が一番良いと思うわ。人に嘘をつかないし」

「今の俺にはアルフもいるし。な?」

「・・・相棒を失ったたまつたもんじゃないからな」

話を促す一騎に同情するように答えるアルフ。二人はここでも互いの気持ちを理解してるようだ。

「それに、俺はお前ら自身の気持ちをよくわかり合う必要があると思う」

「珍しいわね。アンタがそんな事を言うなんて」

アドバイスのな事をアルフが言うと、美波がにやけるように見めてきた。普段は毒舌するような発言しかないアルフがここまで接してくれるのは存外珍しい事だ。

「俺と美波自身の気持ちをわかり合う、か」

「・・・ちよつと緊張してしまうような感じかも」

そして互いに見詰め合う一騎と美波。前にもこのような事をしてきた二人ならわかりきった出来事かもしれない。

「そろそろ皆の所へ戻ろうか」

「うん、そうよね」

「結局、言いたい事は謝る事だけじゃなかったのか」

「無慈悲なアンタにはわからないでしょうけどね」

何かを思い出したアルフが口にとすると美波がさりげなく発言する事を否定した。

これは彼女だけの気持ちなのだろう。

「（ボソツ）．．．．．バーカ」

「何か言った美波？」

「いや、何でもない」

嬉しそうに何かを呟いた美波が気になった一騎は上を見上げてしまった。再び、

それぞれの気持ちをわかり合う日が来るのだろうと彼女の心に留めておいた。

そう、ウチにとつての一騎は……、誰にも負けないヒーローなんだから。

いつまでも前を向き続ける一騎が大好き……♪

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4395r/>

---

バカと破壊者と召喚獣

2011年12月17日12時53分発行